

SD

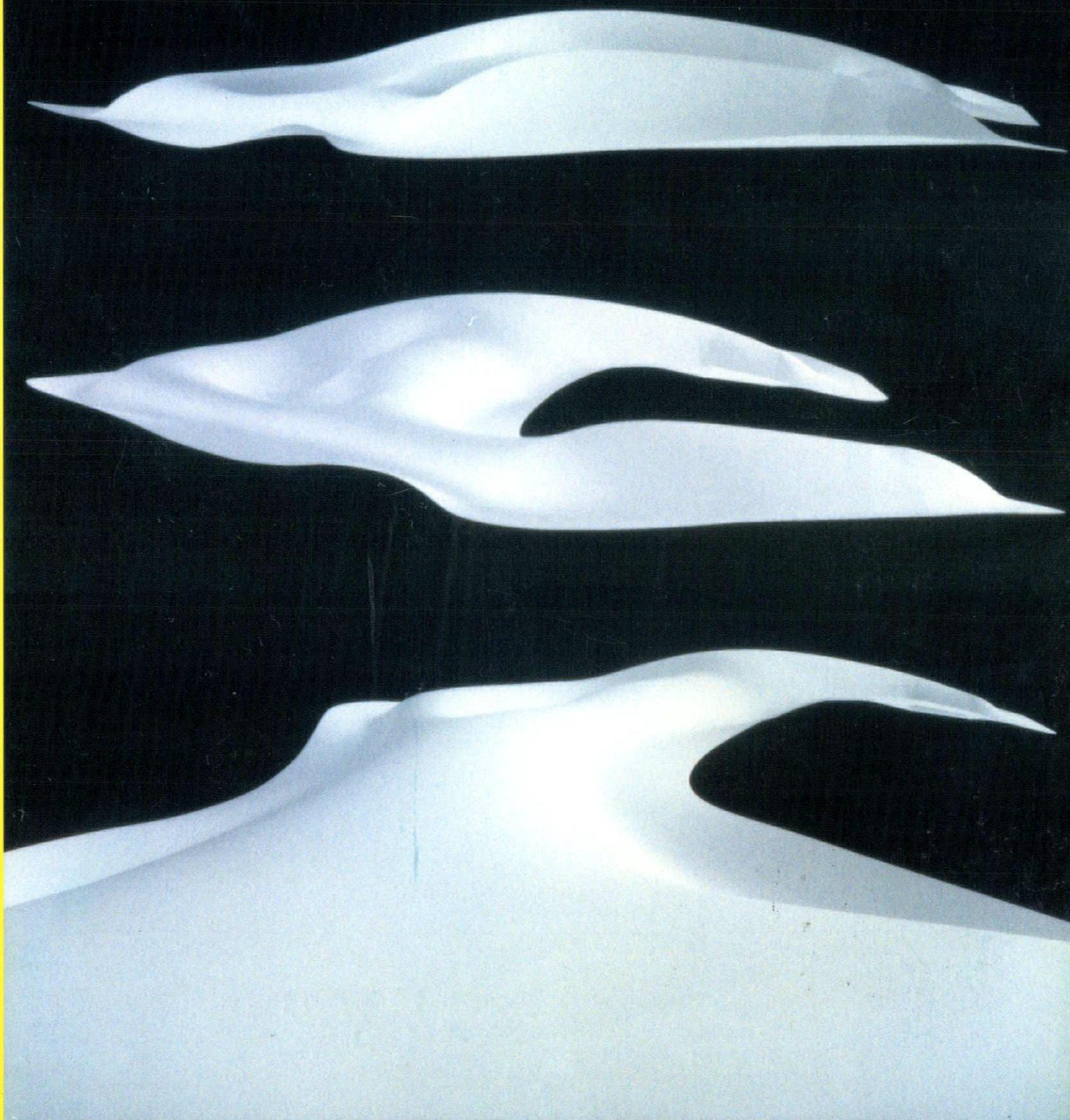
9701 | Space
Design

スペースデザイン ISSN 0563-0991
第388号1997年1月1日発行
毎月1回1日発行
昭和40年2月5日第三種郵便物許可

葉祥栄：カリステニクス

柔らかい建築のための12の柔軟体操

Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture



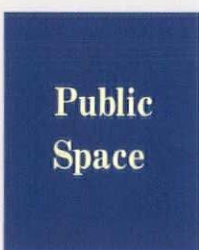
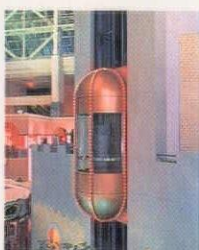
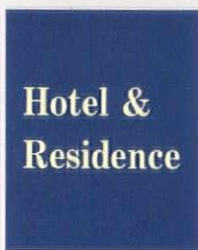
Monthly Journal of Art and Architecture

HITACHI

広がる生活空間を、
やさしく、
速やかに結びます。

日立エレベーター・エスカレーター

地上数百メートルの超高層ビルから一戸建ての住宅まで。日立は、ますます多層化する暮らしを、より快適にするエレベーター・エスカレーターの研究・開発を続けています。たとえば、定格速度810m/分の「超高速エレベーター」や、身近な暮らしの中で利用される「車いす用ステップ付きエスカレーター」や、「ホームエレベーター」など、施設に応じた設備で、誰もが住みやすい街づくりをサポートします。



Office Building



Shopping Center

超高速エレベーターから、ホームエレベーターまで。



株式会社 日立製作所

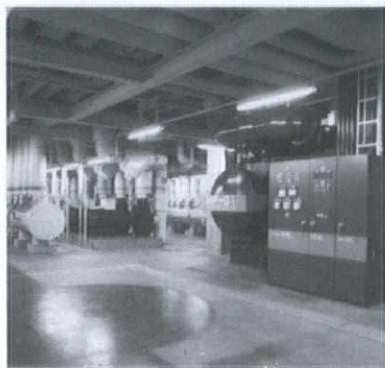
お問い合わせは＝電機システム事業本部 昇降機事業部/電機システム統括営業本部 〒101-10 東京都千代田区神田駿河台四丁目6番地
電話/(03)3258-1111(大代)または最寄りの支社へ 北海道(011)261-3131・東北(022)223-0121・横浜(045)451-5000
北陸(0764)33-8511・中部(052)243-3111・関西(06)616-1111・中国(082)223-4111・四国(0878)31-2111・九州(092)852-1111

KANDENKO



快適な環境をお届けするのも ——関電工の技術です。

個別のビル・工場・住宅の空調から地域冷暖房まで



生活の場、生産の場、ビジネスの場、憩いの場…
…。人々の営みの場で、いま求められているのが、
省エネルギー、省資源を追求した快適環境です。
その施設の構築とメンテナンスで関電工の技術が
活躍しています。割安な夜間電力や都市廃熱・河
川水等を利用した「蓄熱式ヒートポンプシステム」、
発電の際に発生するエネルギーを有効利用する
「コージェネレーションシステム」、複数の建物のエ
ネルギーを集中的に取り扱う「地域冷暖房システ
ム」などの技術で、関電工はお客様に経済的で快
適な環境の場をお届けしています。

≡ 関電工

お問い合わせは/環境設備部

本社：〒108 東京都港区芝浦4丁目8番33号

☎：NTT 03(5476)2111 TNet (4431)2111

National/Panasonic

私たちは快適をシステムにしてお届けします。

松下電器産業の建設エレクトロニクス技術は人に優しい環境創造を目指してシステム開発に取り組んでいます。そこには人と人・情報・空間をコンセプトに、明日の夢を描くまちづくりの思いがあります。



建築物付帯設備事業 エレベーター

空調設備事業 空調、換気、消火設備

電気設備事業 中央監視設備、受配電、

水回り設備事業 水回り設備等の

情報システム設備事業 コンピューター、PBX、電話等の提案、設計、施工、メンテナンス

映像・音響設備事業 映像、音響システムの提案、設計、施工、メンテナンス

まちづくり事業 都市再開発、施設開発、環境創造の提案、設計

の提案、設計、施工、メンテナンス

等の提案、設計、施工、メンテナンス

蓄電池等の提案、設計、施工、メンテナンス

提案、設計、施工、メンテナンス

FLAPS、羽ばたくという意味をもつ新キーワード「AV & CC FLAPS」は映像・音響・情報通信システム・食品流通・照明・空調・水管理・搬送とさまざまな設備システムの融合により真の快適環境を求め夢の実現へと願いをこめて事業展開を進めています。



松下電器産業株式会社

建設システム営業本部 ☎03-5500-7504

北海道支店 ☎011-207-7722

東北支店 ☎022-711-3551

新潟支店 ☎025-246-1031

関東支店 ☎0286-37-2241

神奈川支店 ☎045-651-5051

建設システム営業本部中部支店 ☎052-951-6010

長野支店 ☎0262-26-3990

北陸支店 ☎0762-23-1121

静岡支店 ☎054-247-5155

建設システム営業本部関西支店 ☎06-949-2111

中国支店 ☎082-247-5272

四国支店 ☎0878-26-1711

九州支店 ☎092-431-1100

沖縄支店 ☎098-869-2926

AV & CC FLAPS

AUDIO VISUAL COMMUNICATION COMPUTER FOOD LIGHT AIR&AQUA PASSAGE SOFTWARE&SYSTEM

日本アス仕様

それぞれの味を生かし

防水仕様をすべて濃縮!!

メルタン21

カスタムEE

NPシート

ベストロン

NS防水

カナート



総合防水メーカー

日新工業株式会社

営業本部 ■103/東京都中央区日本橋久松町9-2 ☎03(5644)7211(代表)

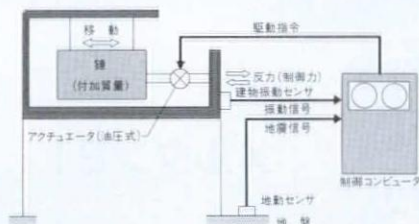
東京 ☎03(5644)7221 (代表)	福岡 ☎092(451)1095 (代表)
千葉 ☎043(245)0201 (代表)	札幌 ☎011(281)6328 (代表)
横浜 ☎045(316)7885 (代表)	仙台 ☎022(263)0315 (代表)
大阪 ☎048(642)5811 (代表)	広島 ☎082(294)6006 (代表)
名古屋 ☎06 (533)3191 (代表)	高松 ☎0878(34)0336 (代表)
	金沢 ☎0762(22)3321 (代表)

広告についてのお問合せの際は<<SDを見て>>と御明記願います

世界初のアクティブ制震システム。

AMD【エー・エム・ディ】

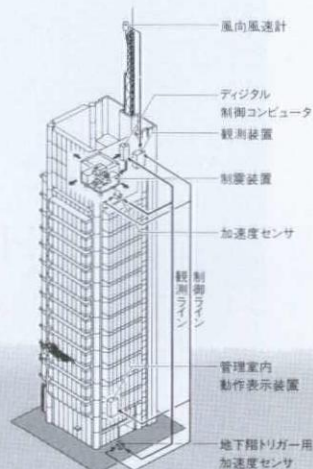
カジマが世界で初めて実用化したアクティブ制震システム。建物荷重の約1%の錘を屋上に設置。コンピュータ制御で錘を駆動して揺れを制御。地震や強風時にビル内では全く揺れを感じさせない優れた制震効果を発揮します。高層、超高層、超々高層ビルなどに。



優れた頭脳とバランス感覚をもった新しい制震システム。

DUOX【デュオックス】

AMDをさらに進化させた複合型アクティブ制震システム。高度な技術力により省エネ化、小型化を図りながら、制震効果は大型装置と同等以上の優れた性能を実現。高層、超々高層ビルはもちろん、リニューアルでの既存のビルへの設置と適用範囲を大きく広げた新しい制震システムです。

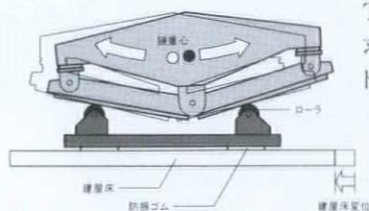


小さな装置で大きな制震効果を発揮。

TRIGON【トリゴン】

振り運動を行う錘をアクティブに駆動するハイブリッド制震システム。コンパクトな装置でイニシャルコスト、ランニングコストともにわずか。地震や強風による揺れも1/2以下に制御。

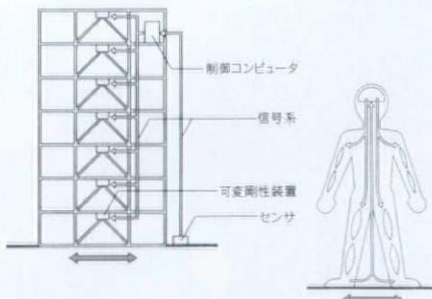
TRIGONは居住性と快適性が求められる超高層インテリジェントビルに採用されています。



建物の剛性を変えて揺れをかわす。

AVS【エー・ブイ・エス】

走る電車の中に立っている人が身体のバランスを保つように、ブレースに接続された可変剛性装置が瞬時にブレースの「有効」<「無効」を切替え、揺れをかわします。中小地震から大地震まで効率よく対応し、大地震にともなう停電時にも確実に作動。シンプルで確実なアクティブ制震装置です。



地震から交通振動まで、あらゆる振動をカット。

免震防振構法

建物をまるごと積層ゴムで支え、大地震から交通振動まで、あらゆる振動をカットします。交通振動などの細かな振動から建物を守り、静かな室内環境を確保。道路や線路に隣接した建物に優れた効果を発揮します。

安全で快適な環境を創造するカジマの高度な制震技術。

快適をより確かなものに。

ビルを連結して揺れを抑える。

JDS 【ジェー・ディ・エス】

360度あらゆる方向の揺れに対応する制震システム。高さの違う建物(=振動周期の異なる建物)を特殊ダンパで連結し、双方の揺れを相殺します。シンプルな構造のダンパは素材・製造・設置コストも少なく、構造体コストの低減を実現します。

高性能オイルダンパが振動を吸収。

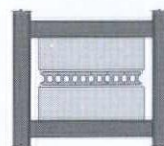
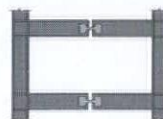
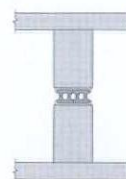
HiDAM 【ハイダム】

建物の骨組みと一体化されたオイルダンパが地震や強風による振動を吸収します。優れた振動減衰性能により建物の軽量化が可能となり、構造体コストを低減。建物耐用年数より長い耐久性が自慢です。

壁や梁が振動を吸収。

HDS 【エイチ・ディ・エス】

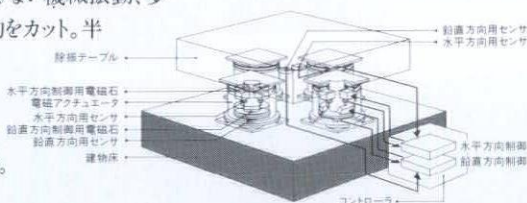
壁や梁など構造体そのものにハチの巣型のダンパ等を組込み、振動エネルギーを吸収させます。特に震度5以上の大地震に大きな効果を発揮。中高層から超高層に至るまで幅広く対応。低コストで設置でき、柱や梁などを軽減しても快適さは変わりません。



精密機器を磁気で浮上させる
次世代の除振装置。

MLIS 【エムリス】

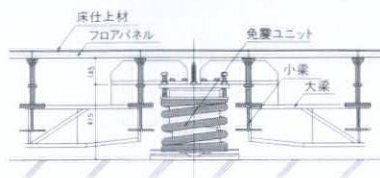
完全非接触型の理想的な除振を実現した磁気浮上式除振装置です。建物レベルの振動対策ではカバーできない機械振動、歩行振動などの微細な振動をカット。半導体をはじめ、先端テクノロジーの分野でこれから、ますます求められる次世代のシステムです。



コンピュータを地震から守る
免震床システム。

KIFS 【ケー・アイ・エフ・エス】

コンピュータなど精密機器を載せた床を建物本体から分離して振動を遮断。必要なフロアだけを免震構造にすることができ、地震の規模を問わず優れた効果を発揮します。コンピュータセンターや医療施設、精密機器生産施設、美術館など振動を嫌う設備機器のある建物に最適です。



in 鹿島

KAJIMA CORPORATION

本社：〒107 東京都港区元赤坂1-2-7

お問い合わせは

技術営業部 03(3404)2011

四季宴会

KARUIZAWA
MEETING
& PARTY

軽井沢
 **ホテル 鹿島ノ森**
ホテルオークラチェーン

ご予約・お問い合わせ：
ホテル 鹿島ノ森 予約係
☎ 03(3478)6220
現地 ☎ 0267(42)3535(代)
FAX: 0267(42)5335



Classical Elegance in Tokyo

19世紀初頭のヨーロッパ様式で統一された本格的都市型ホテル。

すべてのファシリティに調度品に、そしてきめ細やかなおもてなしに漂う欧州の美意識。
ドアマンに迎えられホテルに一步脚を踏み込めば、あなたの新しい物語がはじまります。

■ 特別な華やきに満ちた“わたしだけの日”。■ アニバーサリー宿泊プラン

■ 期間 1997年3月31日まで

※ただし12月21日～24日、12月31日～1月2日を除く。 ※ご予約は2日前までをお願いいたします。

バースデーや結婚記念、入学祝い…大切な記念日を、シェフ自慢の特選ディナーと
まごころ込めたおもてなしで優雅に演出いたします。

お一人様料金

1室2名様利用(ツイン).....	¥20,500
1室3名様利用(トリプル).....	¥19,000

※1泊夕食付・装花・サービス料込み、税別。
※ご夕食はハーモニーの特別ディナー、グラススパークリングワイン、
グラス白または赤ワイン付。



株式会社 鹿島ホテルエンタプライズ
KAJIMA HOTEL ENTERPRISES, LTD.

ホテル イースト21東京

〒135 東京都江東区東陽6-3-3 TEL 03(5683)5683(代) FAX 03(5683)5775
地下鉄東西線「東陽町駅」より徒歩7分。東陽町駅～ホテル間、ホテル専用シャトルバス運行。

大興物産の海外建材シリーズ

No.5 ツーバイフォー



新検見川マンション販売事務所

大興物産は、米国ツーバイフォーシステム用各種部材をパッケージ輸入しており、企画段階から調達・施工段階までトータルなコーディネーションを致します。

お問い合わせは、大興物産株式会社・海外調達部まで。

〒107 東京都港区元赤坂1-5-31(新井ビル) TEL03-5474-6054 FAX03-5474-6386

建設資機材の総合商社

鹿島グループ

大興物産株式会社

本店 〒107 東京都港区元赤坂1-6-4 安全ビル

本店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)5474-6076
東京支店 ☎(03)3423-2511 FAX(03)3423-1915
横浜支店 ☎(045)212-3925 FAX(045)212-3996
名古屋支店 ☎(052)961-6171 FAX(052)961-6179
大阪支店 ☎(06) 762-5661 FAX(06) 762-1074

札幌営業所 ☎(011)231-6841 FAX(011)222-4074
東北営業所 ☎(022)219-6861 FAX(022)219-6867
関東営業所 ☎(03)5632-6717 FAX(03)5632-6719
北陸営業所 ☎(025)247-2286 FAX(025)243-5248
広島営業所 ☎(082)249-9221 FAX(082)249-9270

四国営業所 ☎(0878)39-3191 FAX(0878)35-4722
九州営業所 ☎(092)441-2624 FAX(092)471-7996
シンガポール
オフィス ☎65-3440590 FAX65-3446714

あなたのそばに、
私はいます。

HUMAN ELECTRIC ENGINEERING NAKADATE

Type of Operations

●General Electrical Work ●Internal / External Wiring for Lighting & Power ●Electrical Work
for Power Stations & Substations ●Design, Execution & Management of Telecommunication Work

テクノロジー&システム



中立電気株式会社

〒160 東京都新宿区新宿1丁目13番12号 電話 (03) 3356-2511 代

網のないすぐれた透明性

ワイヤレス防火ガラス

パイロクリア PYROCLEAR

防火戸用 耐熱強化ガラス

特 徴

- ワイヤレス
網のないクリアな視界がえられます。
- 使いやすい色調
通常のフロート板ガラスと同じ色調ですので、周辺のガラスとの色合わせが容易です。
- 安全ガラス
万一破損した場合でも、小さな破片になる安全ガラスなので、火災時のみでなく、日常の人体衝突や地震の際の安全性も有しています。
- 高強度ガラス
超強化処理によって、強度は同じ厚さのフロート板ガラスの6倍以上、強化ガラスの約2倍もあります。
- 耐熱強化ガラス
乙種防火戸用ガラス
通則認定第2号「アルミニウム製乙種防火戸」の主構成材料として認定されています。年間百数十万窓採用されている通則認定サッシと組合わせて幅広く使用できます。その他のサッシの場合は、個別認定の取得によってご使用が可能です。

仕様	呼び厚さ(ミリ)	6.5、8	寸法(mm)	最大寸法 1200×2400 (6.5ミリ 1100×2200) 最小寸法 200×300
----	----------	-------	--------	---

※最大寸法を超える場合にはご相談ください。

パイロクリア PYROCLEAR

◎日本板硝子株式会社

カタログは最寄りの各支店までご請求ください。

札幌支店 011-241-7171 仙台支店 022-235-6085 東京支店 03-5443-0127 名古屋支店 052-562-5455
大阪支店 06-222-7534 広島支店 082-263-3571 福岡支店 092-451-5594 高松営業所 0878-79-1641

建築設備の一役を担う

電気設備工事

最新の技術と信頼される施工

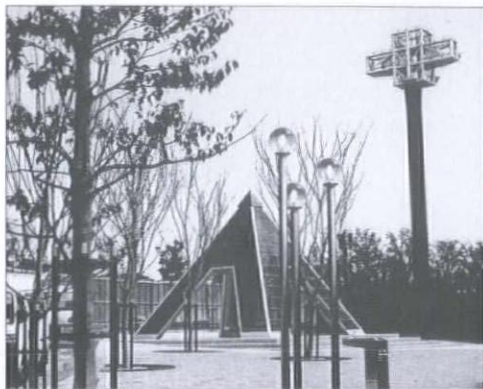


大栄電気株式会社

代表取締役社長 伊藤 赳

本 社 東京都中央区銀座3-7-10 TEL 03(3562)0311(大代表)

支店営業所 大阪、名古屋、北海道、東北、北関東、東関東、神奈川、
浜松、神戸、四国、中国、九州、沖縄



カラー 照明灯（ユニバ世界大会）（福岡市）H7.4月

株中桐設計研究所



藤山町役場「マリーの 和」（福岡県藤山町）H2.4月

株中桐設計研究所

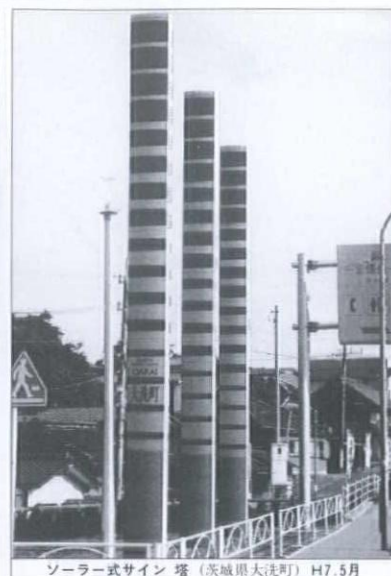


巨大な天蓋「グラスステーション」（熊本県小国町）H5.7月

株葉デザイン事務所



◀「日本一のガラス噴水」
大分香りの森に誕生。H8.7月
株環ウィートム設計事務所



ソーラー式サイン 塔（茨城県大洗町）H7.5月

株GK設計事務所

大型のガラスモニュメント・大板ガラス工事を主体として、特殊工事を引受けます。
関東地区へも進出中です。どんな難しい事でも、お気軽にご相談ください。

設計・施工 **株藤島ガラスハウス** 施 工 **株式会社 エアーズ**

本社 大分市大字片島1111番地の1
TEL 0975-69-3145 FAX 0975-69-3143

福岡店 TEL 092-441-1910 ショールーム 博多駅新三井ビル地下2階

福岡市東区名島5丁目1-22
TEL 092-682-4345
FAX 092-682-4347

自然より自然に、
あなたを包みたい。



あなたの、いちばん心地良い場所はどこですか。

きっと、多くの方が、

大自然の中をイメージされることでしょう。

私たちは、そんな快適さをあらゆる建物の内に

創造していきたいと考えています。

人間は、あくまでも自然の一部。その事実を大切に、

新しい最適環境を創造していきたい。

もっとナチュラルに、

いつもあなたのそばに、ダイダンです。

Always With You.



「僕のうちにも、もうすぐCATV。」

■情報通信メディアの明日を創る——「ここにも、きんでん」
光通信やCATV、携帯電話……これらは情報通信の総合設備にも
先進の技術力が光っています。

きんでんは情報・エネルギー・環境の各分野にわたって、
人と技術の調和を目指した総合設備エンジニアリング事業を展開。
社会と暮らしのさまざまな場面に、きんでんの先進技術が活かされています。

あつ、きんでんだ。

「人にも地球にも
大切なエネルギーだから。」

■安全に安定してエネルギーを供給する
設備とシステムづくり——「ここにも、きんでん」
地球環境に優しく、経済的なエネルギーの開発と
有効利用の実現に向けて、日夜取り組んでいます。

「良くなるね。街も人も。」

■ビルでオフィスで地域社会で、より快適な環境を創る
——「ここにも、きんでん」
地域冷暖房プラントなどの環境設備。オフィス空間の機能性・快適性を提案する内装設備。
これらの多面的で総合的な設備事業を展開しています。

「海の向こうでも
活躍してるんだって。」

■地球上の各地域におよぶ海外工事の実績
——「ここにも、きんでん」
1950年代に始まるきんでんの海外経験。
習慣や国民性の異なる世界各地でも、
キメ細かな活動を続けています。

「システムインテグレーションで、人に優しい。」

■繊細に感性豊かにシステムを制御する
——「ここにも、きんでん」
多様なオフィスビルや工場・環境と生産体制に対応した、
人間中心のシステムづくりを開発・提案しています。

「マルチメディアは簡単になるんだ。」

■情報化社会を全方位でサポートする——「ここにも、きんでん」
これまで個別だった音声・データ・映像の配線を統合したり、
光ファイバ融着技術等の新工法に取り組みなど、
多面的なネットワーク環境を構築しています。

株式会社 **きんでん**

本店 〒531 大阪市北区本庄東2丁目3番41号
東京本社 〒141 東京都品川区東五反田5丁目25番12号
国内事業所 15カ所 / 海外事務所 12カ所 / 国内関係会社 19社 /
海外関係会社 4社 / 海外合弁会社 6社

SD

バックナンバー

鹿島出版会

東京都港区赤坂6-5-13
電話:03-5561-2111 (代)
振替:00160-2-180883
Home Page Address:
http://www.kajima.co.jp/kajima_mall/publish/index.htm
年間定期購読料
25,000円 (特別定価号+送料込み)

SDバックナンバー常備店
[東京]
八重洲ブックセンター
03-3281-8203
三省堂本店(神田)
03-3233-3314
書泉ブックマート
03-3294-0011
紀伊国屋本店 03-3354-0131
大盛堂書店 03-3463-0511
[大阪]
旭屋書店本店

柳々堂 06-443-0167
[札幌]
旭屋書店 011-241-3007
[横浜]
有隣堂本店 045-261-1231
[京都]
大福堂書店 075-231-3036
[大学生協内書店]
東北工業大学 東京工業大学
法政大学工学部 早稲田大学
理工学部 関東学院大学

9501 山本理顕

3000円

作品:緑園都市、岩出山町立統合中学校、痴呆性老人デイケアセンター、保田窪第一団地、他。写真:北嶋俊治、大野繁。論文:山本理顕、宇野求、T.ヘネガン。鼎談:横文彦+植田実+山本理顕

9502 南イタリアのバロック建築

1950円

地中海の島シチリアとプリア地方サレント半島のレッツェを中心に、南部イタリアのバロック建築を紹介。掲載都市:パレルモ、シクリ、他。写真:小野一郎。文:竹山博英、長谷川正允、岡田哲史

9503 集合住宅の現風景

1950円

近年、集合住宅を多く手掛けてきた建築家たちの代表作・近作を紹介する。文:作品:荒木正彦、遠藤剛生、大野秀敏、富永謙、松永安光、元倉真琴。座談会:植田実+室伏次郎+松隈洋

9504 テクノスケープ

3000円

テクノロジーが作り上げた造形や景観を通して、建築・都市デザインへの新たな視線を提示する。文:宇野求、岡河貢、永瀬唯、A.ロジェ、他。座談会:中村良夫+三谷徹+宇野求。東京湾岸マップ

9505 メガ・アーキテクチャ

1950円

巨大建築を多く手掛けたポール・アンドルーの新作紹介。シャルルド・ゴール空港、TGV-REX駅、他。対談:安藤忠雄+P.アンドルー。[神戸外国人居留地の形成とその展開] 文+構成:坂本勝比古

9506 デジタル・アーキテクチャの可能性

1950円

インタビュー:原広司、伊東豊雄、N.M.ディナーリ、他。CAD研究室将来の可能性:植田研究室、両角・位寄研究室、他。[自然と共存する家具] 写真:浅川敏

9507 柳澤孝彦/美術館の空間とディテール

2700円

作品:東京都現代美術館、富岡市立美術館、郡山市立美術館、他。文:鈴木博之、内藤廣、青木淳、大野秀敏。座談会:宇佐美圭司+柏木博+柳澤孝彦。写真:村井修

9508 まちのパブリックスペース

1950円

人々の日常生活と密着した公共施設である交番・公衆トイレ・駐車場・橋・公園などを、アトリ作家の近作からみる。作品21点。文:中川理、仙田満。オンライン座談会:青木淳+中川理+花田佳明

9509 丹下健三

3800円

最新作シンガポールの超高層ビル(UOBプラザ)、新宿の新たなスカイラインを構成する「新宿パークタワー」を中心に、東南アジア、ヨーロッパ、国内のプロジェクトを通して丹下健三の現在を紹介。

9510 環境に呼応する建築:シーザー・ペリの最新作

1950円

近年、海外での活躍が目されるペリの最新作を紹介。[ランドマーク・グラフィティ——「タワー・アート in 通天閣」:ヴァネキユルな電脳都市展」より]

9511 長谷川逸子:1985-95

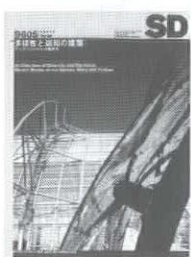
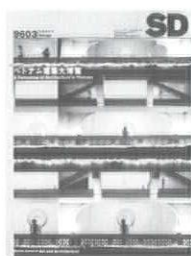
3000円

過去10年に渡る主要作品を網羅し、長谷川逸子の現在を紹介。作品:山梨県フルーツミュージアム、新潟市民文化会館他、全30作品。論文:ピーター・ワック、他。対談:多木浩二×長谷川逸子

9512 SDレビュー1995

1950円

第14回SDレビュー誌上発表。由田徹+岡本美樹、李鐵男、トム・ヘネガン+アーキテクチャ・ファクトリー [Villa Romana: ローマのウィラと庭園] [水戸岡鋭治のトランスポート・デザイン]



9601

都市づくりを仕掛ける
建築家たちの実践

地方自治体主体のまちづくりプロジェクトを紹介。事例:くまもとアートポリス、クリエイティブTOWN岡山、長崎アーバン・ネットワーク、白石メディア・ポリス

2800円

9602

建築のメモリア:イタリアの
合理主義の流れ

イタリア建築の基調として流れている合理主義の現在を考察。6人の建築家の作品を紹介する。アントニオ・モネステローリ、フランコ・ステラ、他。

1950円

9603

アジア同時代シリーズ2
ベトナム建築大博覧

ベトナムの都市と建築:ハノイ、フエ、ホイアン、チャンパ遺跡、ホーチミン。ベトナムの工業団地、ベトナム現代建築事情、他。文=重枝豊、中沢信一郎、村松伸、他

2500円

9604

大地と光の変様
オーストラリア建築1788-

1788年入植以来のオーストラリア建築の変遷を追う。[ネクストジェネレーション in New York: スミス=ミラー+ホーキンソンとジョエル・サンダース]

1950円

9605

多様性と調和の建築
ゲルカン+マルクの最新作

コンペの秀作で知られる大規模設計事務所の'90年代の新作を紹介。[海と建築——鈴木二の最新作] 物質試行:佐木島プロジェクト、佐木島の住宅

1950円

9606

建築家の椅子111脚

19世紀後半から現在に至るまでの建築家がデザインした椅子を111脚紹介。C.R.マッキントッシュ、A.ガウディ、O.ワグナー、ル・コルビュジエ、M.van D.ローエ、C.イムズ、A.ロッシ、他

3000円



9607

再考 建築家土浦竜城

戦前、戦後の作品を紹介しながら、昭和初期モダニズムにおける土浦の再評価を試みる。作品:土浦邸(第1、2) [スタジオ建築計画の集住考] 最新作 FH・HOYA-IIを取りあげながら彼らの設計思想を紹介

1950円

9608

マイケル・ホプキンス

「構造上の表現がクリアな」主要作品を紹介。ホプキンス自邸、イギリス国税局新庁舎、ブラック・ハウス、他 [光と空間の夢を訪ねて:ドナルド・ジャッドとウォルター・デマリア] 文:南條史生

2400円

9609

デンマーク・モダンハウスの
最盛期

デンマークの50-60年代の住宅を紹介。キンゴール・ハウス、ヨーン・ウツフォン、他 [山上の都市と塔の家——イェメン:都市と住居の形態学] 文+写真:芦川研究室

1950円

9610

中世の光と空間:フランス中
南部のロマネスク建築

ル・トロネ修道院、他。写真:堀内広治。文:羽生修二。他 [ふたつの都市考「近代都市と芸術展」(未来都市の考古学展)] [97の椅子プロジェクト]

1950円

9611

栗生明

彼のみごとなディレクションに裏付けられた、コラボレーションの結晶を紹介。岡崎市美術館、植村直巳冒険館、カーニバル・ショーケース、他。[田窪恭治のサン・ヴィゴールドミューラ拝堂プロジェクト]

2500円

9612 SDレビュー1996

第15回SDレビュー誌上発表。ユスト・ビザール+ペーター・ルーゲ (Pysall Ruge Architekten)、高橋昌巳 (シティ環境建築設計)、城戸崎和佐建築設計事務所

[伊丹潤の近作より:石彩の教会、木の教会、土の教会]

1950円



アルヴァ・アアルト

巨匠A.アアルトの全主要作品を掲載した総特集。A.アアルトのデザイン・ヴォキャブラリー：武蔵 章、アアルトの年表1899-1976、アアルト建築所在一覧。

3090円



菊竹清訓

メタボリスト菊竹清訓の初期から1980年までの作品集。第三世代の建築/とりかえ論1950-1960年/方法論の時代1960年-1970年/私の中の菊竹清訓の作品：内井昭蔵、他/作品データ・主要作品分布図。年表、他。

3090円



白井晟一

孤高の建築家・白井晟一の珠玉の作品集。懐賢館、ノアビル、聖アキラ館、昨雪軒、尻別山寮、虚白庵、他。論文=磯崎新、針生一郎、浅野敏一郎、白井晟磨。座談=大江宏+藤井正一郎+宮内嘉久。作品文献年表1935-1975年。

3605円



象設計集団

独自の造形理念により常に新鮮な作品を生み出し続ける象設計集団の初めての作品集。そのユニークな建築群の生々しい姿を捉える。安佐町農協市民センター、名護市庁舎、宮代町立笠原小学校、進修館、他。論文=荒保宏、宇佐美圭司、他。

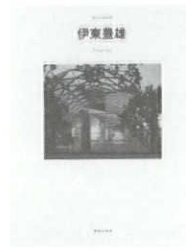
4000円



横文彦②

横文彦の80年代の活動を知る第2作品集。そこには増々精緻さと多彩さを加えた作品群が見て取れる。スパイラル、藤沢市秋葉台文化体育館、前沢ガーデンハウス、慶應義塾日吉図書館、電通大阪支社、京都国立近代美術館、他全21作品。

4326円



伊東豊雄

風のように、光のように変化する建築。独自の感性で貫かれた作品群、その初期から1986年までの軌跡。中野本町の家、シルバー・ハット、レストラン・ノマド、馬込沢の家、風の塔、東京遊牧少女の家具、ホンダクリオショールーム他。

3914円



高松 伸

88年度建築学会賞受賞作のキリンプラザ大阪を中心とし、1988年までの全主要作品を一挙掲載。精緻なる細部と大胆な素材の扱い、独特な造形により、磁き澄まされた独自の作品を創り続ける高松伸の世界を紹介する。織陣Ⅰ、Ⅲ、他。

3800円



早川邦彦

プロジェクト、商業施設、都市型複合建築、集合住宅、住宅、コンペ案まで、初期の作品から1988年までの全主要作品を一挙に紹介した早川邦彦の初作品集。SKY VILLAGE、ラビリス、成城交差点の家、アトリウム、他。

4300円



ドイツ表現主義の建築

1920年代のドイツを席捲した表現主義の嵐。そこにはレンガとガラスを素材とした自由奔放な造形と多様な表情をもった建築が生まれた。近代建築誕生の母体となり、現代にも影響を与える表現主義建築の全容を紹介。B.タウト、他。

3300円



続・木造建築の現在

海外61作品、国内13作品の木造建築を紹介。豊かで暖か味のある空間を生み、またあらゆる空間構造に対応できる木構造を再評価する。インタビュー：坪井善勝、杉山英男、内田祥哉。対談：今川憲英 X 安村基。

3708円



ブルーノ・タウト

1933-36年滞日期間の活動を中心に、没後40年を記念した特集。作品=熱海の家、ポスボラス海峽に臨む自邸、ヴァイネルト通りの集合住宅、グレル通りの集合住宅、他。タウトの工芸品と著書、他。

2575円



ボザール：その栄光と歴史

ボザールの全貌を紹介。アカデミーの功罪：高橋秀爾、ボザールその歴史と思想：三宅理一編、ボザールの成立とネオ・グレコの形成、折衷主義の世界、近代の憂愁、戦後のボザール、バリ・オペラ座の図面と写真、他。

2575円



横事務所のディテール/TEPIA

機械産業情報会館 (TEPIA) というハイテクの殿堂にふさわしいデザインを支える、精密かつダイナミックなディテールの仕組みを写真とドローイングの構成で解剖する。横文彦のディテールとしては初の作品集。

6800円



磯崎新③ 1985-1991 part 1

キーワードを軸に自らの作品をいくつかの流れに分けて、つくばセンタービル以来、1985-1991年の作品群を紹介。水戸芸術館、サンジヨルディパレス、お茶の水スクエア、他。

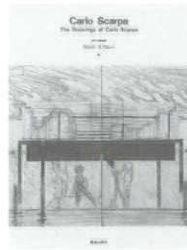
4800円



磯崎新④ 1985-1991 part 2

part 1同様、自らの「自註」と共に作品を紹介してゆく。ティーム・デイズニービルディング、北九州国際会議場、シュトゥットガルト現代美術館、パラディウム、[蝶々夫人] 舞台美術、他。

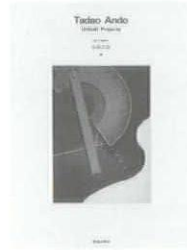
4500円



カルロ・スカルパ図面集

プリオン家墓地进行と主要作品のドローイング約150点を収蔵。プリオン・ヴェガ墓地、フェルトレの遺跡博物館、ヴェネツィア大学文学・哲学部校舎増改築、他。文：豊田博之、カルロ・スカルパ、他。

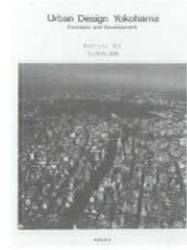
3500円



安藤忠雄⑦アンビト・プロジェクト

70年代からの見逃せないアンビルト作品29点を紹介。JR京都駅改築設計競技案、岡本ハウジング、I計画、伊豆プロジェクト、水の劇場、中之島プロジェクトⅡ、Iギャラリー、大淀の茶室、他。

3800円



都市デザイン | 横浜

横浜市の20年にわたる都市デザイン活動の足跡を辿り、これからのアーバンデザインの課題と展望を探る。座談会：都市づくりの新局面へ向けて、横文彦×長原敬×小澤恵一、他。

5000円

葉祥栄：カリステニクス

柔らかい建築のための12の柔軟体操

編集長：相川幸二
編集スタッフ：
寺田真理子 高木伸哉
山田良 大野由美
飯塚りえ
アドバイザー：伊藤公文

発行人：河相全次郎
編集人：長谷川愛子

発行所：鹿島出版会
〒107 東京都港区
赤坂6丁目5番13号
電話：
(03) 5561-2551 営業
(03) 5561-2555 編集
FAX：
(03) 5561-2561 営業
(03) 5561-2565 編集
TELEX：
02422467 KAJIMA J
HomePage：
http://www.kajima.co.jp/
kajima-mall/publish/
index.htm
振替00160-2-180883番

印刷・製本：
凸版印刷株式会社
〒174 東京都板橋区
志村1丁目11番1号
電話：
(03) 3968-5111 案内

取次店：トーハン・日販・
大阪屋・大洋社・
栗田出版販売・誠光堂・
鈴木書店・西村書店・中央社

特別定価：3,000円
[本体2,913円]

年間直接購読料：25,000円
特別定価号+送料込み

表紙：
筑穂町高齢者生活福祉センター
及び内野児童館屋根面CG
表紙デザイン：小泉均

6	現象の建築	葉 祥 栄
11	自然から新たな生の躍動へ、葉祥栄の軌跡	グレッグ・リン 訳=松畑 強
16	1：応答する ふるさとパレス ギャラクシー富山 0°90° 小田原市総合体育館 プロポーザル 水の建築展 WXYZチェアー	
30	2：かぶせるかひっぱる 内住コミュニティセンター グラスステーション	
40	3：溶解して曲がりくねる 筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館	
48	4：身構える 金田町ふれあい塾 三角港フェリーターミナル 海のピラミッド 小国町隣保館 '89海と島の博覧会広島 メインステージ 筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館 内住コミュニティセンター 飯倉タクシーステーション 西部ガスミュージアム 自然現象美術館 ふるさとパレス ギャラクシー富山 原田ビルディング	
58	5：歪める 老人保健施設サンダイヤル ミスレイコTOKYO 筑穂町福祉総合エリア	
68	6：浮遊して滑空する コーヒーション インゴット 木下クリニック 野外コンサート場 アスペクタ 小国町交通センター 太閤山ランド展望塔 プロスベクタ ニューロビン カルチャーセンター 風格子の家 日時計の家 光十字の家 光格子の家 光の中の6つのキューブ ミュージックアトリエ シルバービルディング 海と空の間のガラスの家 金田町ふれあい塾 三角港フェリーターミナル 海のピラミッド	
84	7：揺らす 海と空の間のガラスの家 ワキタハイテク本社事務所 西部ガスミュージアム 自然現象美術館 松下クリニック	
96	8：上下動と旋回 三角港フェリーターミナル 海のピラミッド 太閤山ランド展望塔 プロスベクタ ラフォーレミュージアム赤坂 ラフォーレ原宿小倉店 岩田屋本部	
107	9：潤わせる 太閤山ランド展望塔 プロスベクタ 嵐山ゴルフ倶楽部 '89海と島の博覧会広島 ランドスケーピング基本計画 唐津ゴルフ倶楽部 アクト6	
118	10：軽くする 明るくする 日時計の家 光格子の家 光の中の6つのキューブ 光十字の家 江上クリニック アクト6 パビリオン 旭印刷 ジーエータップ ワイヤレスランプ ミスレイコ銀座店 カフェソラー コーネリア ジョリ ヘル かねしげビル マルタ号 ホテルグランドパレス徳島 小浜観光ホテル 浮城産科クリニック 見えぬ家 阿蘇やまなみリゾートホテル	
142	11：緩衝する 小国町民体育館 小国町交通センター コーヒーション インゴット	
150	12：逆立ちする 大黒ビニシティ 横浜アーバンリング展プロポーザル 福岡県県庁跡地 アジアパシフィックゲートウェイプラザプロポーザル 六本木6丁目地区再開発計画プロポーザル 同潤会青山アパート再開発計画プロポーザル 博多港ポートルネッサンス21 中央埠頭地区計画プロポーザル 宗像市総合福祉センタープロポーザル 岩田屋計画	
164	葉祥栄にとってのリアリティ	土居義岳
166	光の恐怖	飯島洋一
168	建築のリアリティ	松畑 強
170	作品リスト	
174	連載：apple tomology トムの時空形象学 16	戸村 浩
177	ニュース： 上海からのメッセージ——「上海国際住宅会議2000」に参加して	上野 武
178	照明探偵団： 連続実践講座レポート 10 景色を創る?——照明デザインってなんだろう	葛西玲子/LPA
181	連載：サイバートーク 電子メディアのフロンティア 1. 創造環境としてのデジタル・スタジオ	渡邊朗子
187	展覧会レポート： アンドロジナスはメディチ家の夢を見るか——ピエンナーレ・ディ・フィレンツェ	韓 亜由美
188	書評	
192	新刊紹介	
193	海外建築情報リミックス：12Architects 1. OMA	
199	お知らせ	

Special Feature:

Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture

Chief Editor: Koji Aikawa
Associate Editors:
Mariko Terada
Shinya Takagi
Ryo Yamada
Yumi Ohno
Rie Iizuka
Adviser: Kobun Ito

Publisher: Zenjiro Kawai
Executive Director:
Aiko Hasegawa

Published by
Kajima Institute Publishing
Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka,
Minato-ku, Tokyo 107,
Japan
TEL:
03.5561.2551 [Management]
03.5561.2555 [Editing]
FAX:
03.5561.2561 [Management]
03.5561.2565 [Editing]
TELEX:
02422467 KAJIMA J
HomePage:
<http://www.kajima.co.jp/kajima-mail/publish/index.htm>

Printed in Japan

This Copy: ¥3,000
¥30,000 a year
¥50,000 two years

Order Form: Page 208

Cover: Uchino Community Center for Seniors and Children
Cover Design:
Hitoshi Koizumi/NID

6	Architecture in Motion	Shoei Yoh
11	Shoei Yoh's Movement From Nature to a New Vitalism	Greg Lynn
16	1: Responding Galaxy Toyama, Gymnasium 0'-90' Odawara Municipal Sports Complex Proposal Aquarchitecture, Exhibition WXYZ chair	
30	2: Wrapping or Stretching Naiju Community Center and Nursery School Glass Station	
40	3: Melting and Meandering Uchino Community Center for Seniors and Children	
48	4: Stiffening Canada Children Training House Sea & Islands Expo, Hiroshima 1989, Mermaid Bowl Ikura Taxi Station Harada Bldg. Pyramid of Sea, Ferry Terminal Uchino Community Center for Seniors and Children Saibu Gas Museum for Natural Phenomenart Oguni Community Center, Parasol Center Naiju Community Center and Nursery School Galaxy Toyama, Gymnasium 1992	
58	5: Distorting Sundial, Welfare Facility for Seniors Ms. Reiko Tokyo General Welfare Center of Chikuhō-cho, Fukuoka	
68	6: Levitating and Soaring Coffee Shop Ingot Oguni Bus Terminal, U-Station Glass House with Breathing Grating Another Glass House between Sea and Sky Kinoshita Clinic Prospecta Toyama '92 6 Cubes in Light Kanada Children Training House Aspecta, Out Door Theater in Volcano Aso NRCC Music Atelier Pyramid of Sea, Ferry Terminal	
84	7: Shaking Another Glass House between Sea and Sky Matsushita Clinic Wakita Hitecs, Office Saibu Gas Museum for Natural Phenomenart	
96	8: Up down + Rotating Pyramid of Sea, Ferry Terminal Laforet Harajuku, Kokura Prospecta Toyama '92, Observatory Tower for Natural Phenomena Iwataya Office Laforet Museum, Akasaka	
107	9: Moisturizing Prospecta Toyama '92, Observatory Tower for Natural Phenomena Karatsu Golf Club Arashiyama Golf Club Act 6 Sea & Islands Expo, Hiroshima 1989, Landscape Design	
118	10: Lightning and Lightning House of Sundial House with a Cross of Light Pavilion Wireless Lamps Marutago Invisible House Stainless Steel House with Light Lattice Egami Clinic Asahi Printing Company Ms. Reiko Ginza Gland Palace Tokushima Aso Yamanami Resort Hotel 6 Cubes in Light Act 6 GA-TAP Kaneshige Bldg Obama Kanko Hotel Silver Bldg.	
142	11: Cushioning Oguni Gymnasium, Oguni Dome Oguni Bus Terminal, U-Station Coffee Shop Ingot	
150	12: Standing on Head Yokohama Urban Ring Exhibition Proposal Dojunkai Project Proposal Iwataya Department Store Project Asian Pacific Gateway Plaza Proposal Port Hakata Central Pier Project Proposal Roppongi 66 Project Proposal Munakata Welfare Center Proposal	
164	Reality in the Eyes of Shoei Yoh	Yoshitake Doi
166	The Threat of Light	Youichi Iijima
168	The Reality of Architecture	Tsuyoshi Matsuhata
170	List of works	
174	Series: apple tomatology 16 STAIR CUBE & CROSS CUBE	Hiroshi Tomura
177	News: Message from the "Shanghai Residential Design 2000" Cofarence	Takeshi Ueno
178	Symposia on Illumination: 10. Inducing Illumination	Reiko Kasai, LPA
181	Cybertalk: Reports from the Frontiers of Electronic Media 1. The Digital Studio as Creative Environment: Explorations at Columbia University	Akiko Watanabe
187	From the Exhibitions: Will the Androgenous Realize the Medici Dream?: Florence Biennale	Ayumi Han
188	Book Review	
192	Book Information	
193	Eminent Works Abroad: 12 Architects 1. OMA	
199	Announcements	

特集

葉 祥栄: カリステニクス

柔らかい建築のための12の柔軟体操

Special Feature

Shoei Yoh: 12 Calisthenics for Architecture

プロセスプログラミング

一見カオティックに見える再現性のない状況が続いている現代において、間欠的に押し寄せる時代の波、地球的規模の秩序の再編など、時間と空間を超越する情報にふさわしい環境がもし実現したとしても、どんなに理想的に見えてもプログラムの妥当性はある一定期間しか有効ではない。たとえどんなに快適なイスであっても、一定時間を過ぎたら苦痛でしなくなるように、変化は変数としてプログラムされていなければならない。センサーによって反応するファジーコンピュータの学習能力を考えてみると、私達はコンピュータの手応え、コンピュータの人格ともいべきレスポンスにインタラクティブなモーションを、もっと極論すればエモーショナルな価値観、世界観や歴史観ですらそこに感じることができ。コンピュータやゲームにのめり込み、サーフィンしたり応答するうちに相互に生まれる連帯感の恐ろしさは、自然現象の神秘性に、自然の摂理や神の存在を信じなくなる人間性とどれほど異なるものなのか、おそらく知的アニミズムがサブリミナルなサイバースペースを神殿とする危険を予感させなくもない。

〈ギャラクシー富山〉において、応力解析プログラムに一定の変数をかけたことからコンピュータが応答し始め、二度三度押し問答して、水勾配や熱応力などの変数を増やしたりして到達した安定状態を受け容れた所へもってきて、XとYそして水平のグリッドに拘泥して水平線を基準としていたことが重なって、インタラクティブな「対話」は一挙に収束してしまった。

しかしその後、水平という基準線を消失させた〈小田原市総合体育館〉のケースではさらに変数を増やし、1期2期という時間軸を導入して、そのプログラムは応答を繰り返して複雑化していった。一見オートマティックに見えても、このようにインタラクティブであることで形状決定メカニズムはプロセスをプログラムしていることになる。

応答するコンピュータと対話することによって形態は次々に形を変え、自然現象のもたらす最適形状は刺激によって流動し始める。時間を止めることができないように、一切の

現象を止めることはできない。

変形する建築

内外の応力に対して応答し続けながら到達する一種の安定状態は、決してスタティックではなく、ダイナミックなムーブメントを内蔵したままである。それは隠されたエネルギーであり、応力は反力として温存される。もし安易に変形を受け入れるようなことがあれば、それは混乱を招いて収拾がつかなくなる。変形は設計上も施工上も桁違いの作業量を要求する。単なるバレルヴォールトで計画していた木造の〈小国町民体育館〉を、照明、採光計画の必要から大きく折り曲げたことによって、桁外れの困難が生じた。変形が設計、施工上与える負担がいくら大きくても完成後その事実はすっかり忘れ去られる。しかしその「変形」こそが「存在」を確かなものになっているのではないだろうか。そこでは偶発的な恣意性が「明確な意思」を持ち始めるからである。

単純に割り切れない多様で複合的な社会のアナロジーをそこに見ることができる。四角い均質なグリッドに始まる近代は、今やデジタルに変換されて双方向の応答のプロセスはまるで予測がつかない流体のように見え、多様で複雑な三次曲面を立体的に表現し、実現する時代へ進化した。直線的平面的そして無機幾何学的単純さから離脱して、凹凸のある有機的多様性、そして化学的(ケミカル)、生物学(バイオロジカル)的複雑さを許容する時代へ進んでいる。それは柔らかな建築の出現を意味している。

私達にとって1990年富山県で始めた不定形の建築は、〈小田原市総合体育館〉のプロジェクトを経て、福岡県筑穂町で自然現象としての自由な形態に、そして1996年久留米市では社会環境の外力に反応し始めた。「変形」操作によって建築は生命あるものにのみ見られる生体反応や化学反応とは全く異なるが、応力というストレスに反応する建築へ進化したように見え始める。変形しつづけるが内外に発生する応力に反応するソフトなエンバイラメントとしての建築概念でもある。言い換えれば、自然現象としての重力、地震、積雪、風圧、熱などの外部応力が一次的に形態を規

定する「自然現象の建築」に対して、音響、熱、光などの視覚的であるよりも肉体的心理的に作用する内部応力が二次の、そして、社会的要求が三次の変形を促す。そのような「変形する建築」は全体としての予定調和なしには成立しないように思われる。というのはシミュレーションの数値によってガタガタになった形状をスムーズな流体に置換しなければならないからである。しかし多角形の多面体であった方が好都合である。「将来の変形」に対応するためにはある単位が必要だし、魚の鱗のように柔らかく緊結されて変形を許容する追随性が必要だからである。〈コーヒーション インゴット〉のガラスは、シリコンゴムによって柔らかくスムーズでフラッシュな角柱を形成し、変形に追従したり、熱割れを避けたものだった。そこでは硬いガラスとゴムのジョイントというインターフェイスの重要性が指摘されねばならない。

内外の応力によって変形させられて一時的な安定を得たとしても、更に変形を受け容れ、そうして原型に復することがメカニズムとして組み入れられなければ、ただひたすら時間と共に変形しつづけることになる。そのようなエイジング(加齢現象)が成長、成熟、そして老成して、消滅する過程を辿ることであるとすれば、加齢によって適応能力を失い存在価値を失う代わりに「変形」することによって対応する可能性が残される。たとえば、ニューヨークのグランドセントラルステーションや、パリのオルセー美術館のように変身しながら永遠の命を得る奇蹟を見ることもできる。ところがこの柔らかな「変形」は建築にとって目的ではなく内外の変化や他からの応力に対して生き延びて行くための方策である。

応答する事は環境に適応することにもなるし、そのことは進化のプロセスとして見ることもできる。エレベーターが垂直性を建築に与え、自動車や地下鉄というモビリティが都市にインパクトを与え変えてきたように、コンピュータと環境制御技術が建築や都市を変え始めている。

自然現象としての建築

カルテジアン幾何学からの離脱には、コンピ

ュータが不可欠である。私たちの〈ギャラクシー富山〉、〈小田原市総合体育館〉のコンペ案も、不定形の形状決定をコンピュータによって半ばオートマティックに行っている。

筑穂町の〈内住コミュニティセンター〉の場合には、正方形グリッドを変形させずに、しわを構造的にも積極的に生かしている。コンピュータの応力解析の結果を実現する形状決定のための竹の格子は、コンクリート打設中は引っ張りに耐え、コンクリートの硬化後、圧縮を負担していた仮設の柱を撤去して緊張していた竹の格子を解放するというプロセスを経て、竹は内装材として残されている。

一方〈筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館〉では、竹の格子は、正方形グリッドを変形させながら三次曲面の形状を形成し、型枠として耐えた後、内装材として、同じように残されている。あくまでもバリアフリーの平らな床の平面と対照的に、その空間に必要な広さと高さを対応させたのが、この計画である。外周の相対する柱間の距離が大きければ高く、小さければ低く、一定の割合で天井高(屋根高)が変化する。その軌跡がこの屋根形状である。不定形を、恣意的に決定しているわけではなく、機能上、構造上論理的に決定している。

これはともに筑穂町のアイデンティティとしての認識を意図したものである。木材や竹など、繊維を持った直交異方性材の長さを生かす試みでもあり、その温かく有機的なぬくもりや、やさしさも目的のひとつであった。小さく柔らかい子供たちの手も、深く刻まれたしわだらけの手も一緒に包み込む包容力のある空間を意図していたからである。四角四面を見慣れた目には四隅がなく延々と連続する屋根、しかも、柱以外は解放されて、出入りが自由にできるために、視覚的にも物理的にも、内外が連続している。その縁側空間が計画上、構造上重要な役割を果たしている。

西欧のドームやヴォールトの閉鎖性はここにはなく、柱間の梁もなく、外周の縁側の庇は、タイパーの代りに水平力を抑えており、雨水を処理するためにひらひらと、サインカーブを描いている。麦わら帽子のつばのようでもある。構造的にも機能的にも必然性を持ったこの不定形は、コンピュータによる自然

現象であると言ってもよい。

トポロジカルな不定形、不整形の形態は、「自然」においてのみ合理的であり、恣意性を排除しない限り、現実的ではなくなる。

パフォーミング・アーキテクチャとプログラム

直方体のモノリス、二重螺旋の円錐形、吊り下げられた正方形の螺旋動線、そうして立方体格子、私が作ってきた4つのパフォーミングスペースは、建築というよりも地上に配置された一種の空間発生装置である。人それぞれに自然を楽しむためにその存在がある。

視覚的な対象としてよりも自然との対応を体感するためにつくられた。自然と人間とを結び付ける媒体(メディア)としての装置(インターフェイス、アンビエント・インсталレーション)として考えられる。

光と風、海と空、雲と雪、自然現象と人間の相互関係が、ある装置を媒体として成立するのは、素手や裸でむきだしの人間が生きていけないことを意味している。

私たちは水平線や垂直線を手がかりに不定形を認識し、鳥のように空高く舞い上がれない代わりに展望塔に登り、茫漠とした広がりをつらぬいて狭めて認知したり、スケールのパラメーターとしてグリッドの補助線を必要とするのである。

自然の中で自らを失わないため、そうして知覚するための手立て、道具としての空間装置は、どちらかと言えば、建築というよりも、庭園におけるガゼボやベルベデーレのようなものであろう。

不思議なことに私たちの認識する図形や色、空間や時間などは、まったく主観的であるだけでなく、個人差も大きく、当てにならないことがよくある。それらの認識は都合良く適当に解釈されていたり、立場や、視点次第で伸縮自在のもので、事実から隔たっていることもよく経験する。

パラメーターのような比較するものがなければ大きさもわからず、暗闇であったりすれば方向感覚を失い、直線的に進むことすら不可能である。そのような自然に向き合うことの少ない現代人が失った直感を取り戻すこと、あるいは直感を失ったことを自覚することが、

今求められている。

教育によって得た知識によって失った直感的な閃きや、本能的、反射的な行動など、平和で安全であればなおさらのこと、麻痺してきていると言ってもよいだろう。

それにしても空間や時間そして「力」の流れなどに対する直感的知覚を狂わせるさまざまな人工的な環境に対して、私たちはもっと厳格でなければならないのではないだろうか。

冬のイチゴもそうならば、木造まがいの鉄骨造、木軸組や組積造風の目地切りをしたコンクリート造、印刷され表層に凹凸があつて木や石そっくりの建材、私たちに欺くための仕掛けは無数にある。不自然さを忌避し、自然に親しみ、畏敬の念を抱くことがなければ、繰り返して連鎖して継続してきた人類の歴史を欺くことになりはしないだろうか。

一方で迷信扱いしてきた針、灸、指圧をはじめ、臨死体験に共通する現象、笑いのもたらす自然治癒力などの先人が言い伝えてきた知恵が、科学が進むほどに、少しずつ証明されてきている。

木構造の安全を証明できないからといって伝統的木構造を禁止してきたが、安全性を科学的に証明できる時期がようやく来つつある。

ゆらぎながら止まることなく千変万化する自然と、自然現象を体感し一体感を得ることは、自らを自然の一部として認識することになる。霧や雲、水の流れなどを見ているうちに、いつのまにか時の経つのを忘れてしまうことがある。ゆらぎの中に自らのゆらぎが重なり合う忘我の境地は精神的な充足感を与える。霧のパフォーマンスを初めて体験したとき、自然との一体感がこれらのパフォーミング・アーキテクチャに共通する目的であったことが確認された。

〈野外コンサート場 アスペクタ〉のトワイライトパフォーマンスは、環境音楽家のビル・フォントナ氏と照明の海藤春樹氏によるものであり、〈西部ガスミュージアム〉のメディアスペースパフォーマンスは富田勲氏の音、海藤氏の光によるものであった。

展望塔の設備として霧と虹の発生装置に息を吹き込むパフォーマンスは、霧の彫刻家である中谷芙二子氏、光の二瓶マサオ氏、そして音については森千二氏とのコラボレーション

Architecture in Motion

Shoei Yoh

ンによって実現した。

博覧会を契機に恒久施設を設計する際、一過性でない構築物の将来を考えるとコンピュータ制御のパフォーマンスをプログラミングしておくこともひとつの方法ではないかと考える。つまり装置としてよりもパフォーマンス・アーキテクチャとして当初から予定して、音と光、また霧や虹を発生させるプログラムと設備を組み込むことによって、一過性のイベントとしての博覧会における大量動員を可能にしているのである。

建築の、社会における有用性をそのような時間軸に載せることは、凍れる交響曲としての建築をプログラムつき楽器にまで辱しめるのではなく、かえって建築に生命を与えることになりはしないだろうか。

パフォーマンス・アーキテクチャは、プログラムされた建築と言ってもよい。当初の建設時点からパフォーマンスという「動き」がプログラムされているという点で、フォロマーノやルクソール神殿、ピラミッドなどの遺跡を、夏の夜蘇らせている *Son et Lumière* とはまったく異なった概念である。しかし何れもプログラムそのものの改変によって生き続ける点では同じだとも言えるし、もし電源がなければ、映写スクリーンやモニターテレビと同じ物質的存在に過ぎないとも言えるだろう。

●よう・しょうえい／建築家、慶應義塾大学大学院教授

Surviving in an Explosive-Chaotic City

The explosion of population is going to be observed in the Asian cities at the end and beginning of the century. Living and working in the highly densified cities seems almost to be a chaos, however, it is not avoidable, without a choice.

Here I urgently would like to make a surviving proposal how to live and work in a densified city without a compromise, enjoying high culture and efficient convenience only a city can afford us as well as the affluent solar light for babies and olds.

It is an alternative utopia of co-existing in highly mixed-use city with a plenty of open space like the Central Park in NY.

I've reached to the idea through a careful study of the building shadows, especially the multiple ones in a re-developing area in Toranomon and Azabudai area Minato Ward in Tokyo.

On the northern hemisphere, I propose to spare the south side of a high rise building for living and the north for working.

A living unit is hardly deeper than 12m due to natural daylight and air, on the other hand, an office can be 20~30m deep with an ideal constant climate of air conditioning and artificial lighting. Office is normally used only 8 hours $\times$ 5 days a week and is vacant for the rest of a day and the weekend.

There would be no disadvantage to live in south 24 hours 365 days and to work in north 8 hours 200 days. It is a sharing.

A city is basically a space for citizens to share "commons benefit". To get together from all over the countryside means sharing with the others the time, space, sunshine, daylight, energy and even communication.

It is now realized in my high rise. Strict separation of time and space in a city has been an agenda for city planning prevailing all over.

In the millennium, a pair of Chop-sticks (HASHI) and a rotating round table to share meals may take over a set of Knife fork and spoon.

Living together in a highly densified city, we are to share the diversity of all kinds such as ethnics, religions, values as being a part of whole. It has been a surprise for me to find no other preceding examples based on this idea in the best of my knowledge.

(PAT)

Since an elevator as a vertical transportation was introduced at the beginning of the 20th century all the cities started to raise buildings higher and higher, allowing higher density in limited space in a city just like in NY, sacrificing natural climate benefit especially the "SUN" for the olds and babies to live in a city. Provided the high rise is inevitable for high densified city more than 500%, we are supposed to raise a building double so that we would obtain double ground space around it, as well as "sun", "air" and "green" for us to walk and to enjoy flowers.

Thus the ground level is liberated for pedestrians.

Our high rise is for us to enjoy a vast open space around it. The open space would be dedicated to the traditional city life without traffic signs in 19th century before the elevator and automobile occupied the cities.

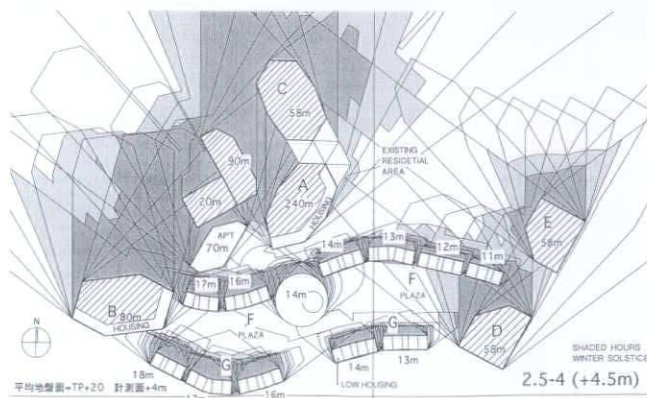
Under ground is for servant space.

Old ancient market street life? Fine.

Full of flowers? Of course. Siesta under a tree? Why not?

Only one condition for it is to live in south and work in north on a high rise or two high rises back to back away from all the others.

If we are able to raise the vehicle traffic in the air as high as the middle of high rise



虎ノ門麻布台地区再開発計画
日影図

buildings as I proposed for the city Yokohama in 1992. It's perfect. The conjunction of both vertical traffic and horizontal traffic will become a "node" with a market place or an atrium lobby in the middle height of a high rise tower. It will reduce the number of elevators and will generate a communicating transit plaza - a city in the air. It would be more attractive if we could have a void open space as tall as 3 ~ 4 - story to give a bird's eye view to see the active market place where we go around with escalators to go up and down for shopping or eating. This aerial city has not been realized yet either again. (PAT)

Surviving in a chaotic high density city would have to introduce for sure such an aerial city of high - rises with a vast free open space around.

Is it too optimistic?

Levitating and Anchored Architecture

In 1977, I designed a coffee shop (4×4×22 P.70) called Ingot, a monolith of black shiny metallic glass, placed on a slope in woods at 40°.

17 years later I designed 4 wooden prisms (6×6×24...) sticking out 12m away from hill.

All of the sudden I found my buildings with geometrical forms I designed look some how levitating in a sense.

The relationship between the site and the building is supposed to generate a magnetic field. If there is a black hole everything will be absorbed like + and -. In these cases of + and +, - and -, my geometrical-self completed form architecture seems to me levitating in the air, as a visual effect of repulsion.

Unstable and uncertain lightness of buildings has a contrast against the heavy weight of the site with historical and cultural context. It's intended to be that way, like a portable tent of nomad it's just there for a while.

Based on the oriental thoughts of our temporary dwelling in universe, I have been trying to respect the significant site.

Being a part of nature, blown in the air, burned by the Sun, we are always rebelling the gravity in some way such as cantilever, suspension or lifting up by piloti. That's why some of my buildings do not seem heavy enough to stay at certain sites as they are empty inside the geometrical forms of enclosure. Teleportation may be considered

as they do not belong to any specific sites.

Those geometrical forms also lose our sense of scale no matter how huge or tiny, they can exist lacking the sense of scale. In other words, the purity in form is tended to be looked as an object rather than a building belonging to a specific site.

Neutrality is now emphasized in the relationship between the nature landscaping and the object. It displays a "Space and time" as a neutral effect.

In some day, the levitating architecture may fly away, therefore we need some time an anchor intentionally.

In case of the "Glass Station" (P.34) of concrete and 3-D glass membrane run and owned by the concrete cube office located in front, both are anchored firmly at the "gate" of the forestry town in a valley along a river in the middle.

The forestry town of Oguni is well known in this country for its biggest wooden gymnasium which I designed 10 years ago.

In this town, usage of wood is a must for an architect.

However, I designed both buildings in concrete which can not be substituted with any other materials, as they live on concrete. It's a mutual relationship of + and -, the buildings and the sites. Both are connected so tightly. The buildings composing a gate are now anchored in this way.

Phenomenological Architecture

My liberation from the ancient geometrical approach of architecture has been examined through my works starting from 1990 in Toyama Prefecture.

When the heavy snow load started bending the roof and deformed it as the computer simulated, we had used to stiffen the structure by using heavier steel section and never thought of changing the depth of truss.

In the case of Toyama Galaxy 92 (P.18), I was suddenly inspired to change the depth of truss responding to bending moment until it became stiff enough. As shown in our computer simulated drawing. (PAT.)

Surprisingly, this automatic deformation made by snow load shows us an unusual irregular form, which snow load decided itself automatically. Deformation of a conventional flat truss roof structure tells us what to do next, such as water flow pitch on roof.

In this way I relocated some supporting columns and I changed the proportion above and below the horizontal center line.

It's a fluid and open system of structure far away from the rigid geometries.

Responding the natural phenomena, we are able to deform the geometry or to reach the optimum form, which is even economical and efficient in the age of high industrial technology. The optimum form is natural, rational and economical. It minimizes the volume of steel to be consumed for sustainable community design, reducing CO².

It is just a beginning of Phenomenological Architecture, giving a form looks like a cloud in the sky or galaxy in the universe.

In our next project of Odawara Sports Complex (P.22), we employed external forces of snow and wind load as well as a few more disparate requirements of acoustic, lighting and programmatic altogether, one by one.

The discontinuity between part and whole, external forces and internal requirements gives us the most Complex and Compliant character in the smooth fluidity system.

As Greg Lynn points out, "This aqueous paradigm seems to indicate the development of a more supple, pliant, open, involved and intense alternative to the familiar practices of formal conflict, violence and contradiction in architecture." *

Our third trial was the "Glass Station" with 3 dimensional minimum surface membrane glass canopy for a gas station. (PAT.)

It's a glass bubble with prestressed steel wire net resisting the snow load and wind load. Four concrete arches along the streets were derived automatically and the glass bubble inside the four arches was also computer programmed and simulated, after the examination of a wind tunnel.

The movement against wind and snow load is extremely limited comparing with 2 dimensional flat glass screen with stressed steel wire of the same kind like the atrium of an airport hotel in Munich by Helmut Jahn which moves more than 1m against wind.

Our fourth trial was a square bamboo net hung on a temporary central post. The gravity decides the form with a lot of gathering drape after stretched and anchored to the foundation on ground. Square of bamboo grid was kept thoroughly even

when the whole shape deformed.

Firstly it is a tensile bamboo structure bearing a load of wet concrete. Three weeks later, it becomes a concrete compressive shell dome stiffened by drapes after removal of the central post.

This free form of a giant bamboo handkerchief in square with drapes is another example of natural phenomena responding architecture.

It seems very primitive in a way as it is far away from geometrical approach which is supposed to be scientific and civilized.

However, this was made possible only through the computer analysis. Gathering drapes are more than effective structurally and useful as the openings and also as the alcoves and niches to give comfortable feature for kids and olds. Acoustic effect like a human ear is also attained in these alcoves.

Bamboo net is left after its usage for the memory of those who helped making it as the members of the community of Naiju (P. 32). They are all the graduates of the primary school which was originally located at this site for almost 100 years.

The fifth trial was Uchino Community Center (P.42) also for kids and olds who are all welcome in a soft embracing space made of bamboo net which grid is no more right angle for curved concrete vault and dome shell deforming all squares for 3 dimensional form without sag, unlike Naiju. It is a shell with a brim around to give the roof stiffness, just like the tie bars of old ancient vault buildings, and also to give a roofed space around the building for entering in-out and for shading.

The plan is no longer on a grid but just free with continuous supporting line of columns keeping glass sliding doors' openings in between the columns all the way around for people to go out and in anytime anywhere.

The form of roof was given automatically by the plan, wider the room inside higher the roof and ceiling. The soft edge, like a brim of hat, is swaying up to stop rain and down for drainage. This free open plan under a shell is similar to the wood lattice shell of Frei Otto's Manheim, however, the fluttering edge stiffer cantilevered out side of supporting line is our own unique idea as far as I know. (PAT.)

All of these parameters based on natural phenomena to make these forms of architecture is now reorganized following the hierarchy I build up. It is based on an intentional order of my own judgment.

The optimum form or solution does not provide always an alternative choice, however, arbitrariness seems to me still left unlimited even if the optimum solution excludes it.

Here are the possible unlimited varieties

of my thoughts which Jeffrey Kipnis would not have been optimistic to admit.*

This kind of Phenomenological architecture could be much more flexible like the roll of rectangular free size KIMONO textile covering any shape of bodies as well as the square textile of FUROSHIKI wraps anything in any shape providing the foldings, over wrapping plait or gather. It is without doubt rational.

On the other hand the square or rectangular shape can be easily deformed by changing angles from 90° to any other differential degrees rather than rigid triangle which never deforms itself, which may be taken to be more or less western principles like a hard and clear crystal comparing with the flexible, uncertain, ambiguous and amorphous eastern thoughts like liquid.

Chaotic dynamism in East which is again Phenomenatic, rather than static geometry, generates internal forces as the time passing.

The essence of JUDOH is how to utilize the overwhelming power of the competitor or external force as a counter power to beat or to react in turn. It is corresponding external force and internal force.

These oriental thoughts may be reflected and found in my Phenomenological Architecture responding to natural phenomena which is in a deforming process and always temporary in a process, constantly changing and never be static as time introduces tremendous diversity. In the process, nothing is permanent or eternal in our oriental thoughts.

The dynamic deformation of architecture is inevitable soon or later due to physical and social changes. One of my intentions is to absorb the shock of changes or the stress which deform the architecture, which may be called "Soft Environment" or "Architecture in Motion".

Any architecture would not be the same as it was yesterday.

It would be in a process of aging, restoring hopefully, and preserving exceptionally, as a part of natural phenomena. So am I.

Architecture in Motion

In a decade of 1960, the walking city of Archigram, the aircraft career of Hans Hollein and the continuous monuments of Super Studio were unconventional shocking presentations which affected the architectural scenes. Recently, 30 years later, I have been recalling those days as I've found no constant and stable existence of architecture as time passes. They predicted right.

As well as the oriental thoughts tell us the similar. The former may be dynamic and the latter static though.

In any cases, there had been always a premise in our mind of "constant stability" to start with, however, I hardly see the beginning nor the end but just a "process"

of existence.

Sometimes an evolution maybe seen like a living creature but only aging most of the cases.

In a process of birth and death, it is living for a while. So is the architecture. In order to survive long, I believe it would better be supply physically and meta physically.

"Architecture in Motion" finds itself now phenomenologically levitating, breathing, stretching, distorting, swaying and meandering just like my 25 years of works proving.

"Architecture in Motion" is always in a process of charging and discharging the energy to live on. Restoration, alteration, adaptation, and programming-disprogramming may revitalize an architecture.

All of these motions could be brought through my "calisthenics for architecture" as I introduce here now.

Practice and exercise to keep up a shape is supposed to be required as it is easy to deform and collapse as a square does distort easily unless stiffening the joints. We are tended to misunderstand a square in a stable condition sitting on ground.

A triangle never deforms, on the contrary, a square is always in motion, keeping energy time to time. Stiffening to obtain rigidity from swaying and changing angles at the corners all the time takes lots of effort.

Just like traditional Japanese architecture, the heavy weight of roof helps it some time. It's an analogy of oriental society in a chaotic high dense city, keeping the individual members free by changing relationship.

A soft and supple mutual relationship between the others would well preserve individual originality of an architecture in a society which rigidity or stiffness may not respond well to the functional and social changes.

The interface such as the scale of fish enclosing soft body or the silicone joints for the hard glass pane on hard steel structure show what I've been intending.

No matter how solid, hard and rigid an architecture is, it would better be in motion to survive.

Both internal forces and external forces are constantly and inevitably deforming and distorting architecture until its collapse. The life depends on its fluidity to catch up and to respond to the phenomenological changes.

●Shoei Yoh / Architect, Professor of Architecture and Urban Design at the Graduate School of Keio University

* Architectural Design No.63 "Folding in Architecture"

自然から新たな生の躍動へ、 葉祥栄の軌跡

グレッグ・リン／訳＝松畑 強

葉祥栄は、建築構造を通して自然の力や効果を一貫して捉え、再現しようとしてきたと言える。建築が自然を模すのに、二つの可能性がある。ひとつは古典的な伝統で、これは基本的な類型に還元することで自然の本質を捉えるというものである。そしてもう一つは還元ではなく、複合によって捉えるという伝統である。つまり複雑な形態が可能となるよう相互的なシステムを組み合わせ、形態化の方法を探索するものだ。後者はまた生態学的なものである。というのも、生態学が構成要素の集成的な動きや規則を示すように、これは複合的な方法を仕掛けるからである。古典的な伝統が自然形態の本質化を根拠としているなら、複合的な伝統は形態化の方法に依拠しているわけだ。葉祥栄の作品はこの二つの傾向を示している。つまり、有機的な形態を古典的に表す方法と、多様な要素を通して

つと躍動的な形態を構築することである。古典的なものから複合的なものへと単純に変容したわけではないが、還元的なデカルト主義から現在のさらに複合的で地勢的な方法へと着実に進化してきたとは言えるだろう。1970年代中期と後期の彼の初期の作品は、後期モダニズムが引き継いでいた古典的な仮説が持つ限界に強い疑問を提示している。こうした後期モダンの仮説は葉自身も引き継いでいたものだが、これは言うなればまず第一に、基本的な形態であり、第二に観念的な地面のことである。モダニズムの教条、とりわけコルビュジエふうのピュリスムに対する葉の疑問は、彼の初期の作品におけるハイモダン建築の教義に対する反発として読めるだろう。またあとで論ずることだが、彼の軌跡は洗練や還元といった古典的伝統の観念的な形態や地面や方位から解放され、実験的なものへ向かう展開を示してきているのだ。とはいえ1970年代の彼の同世代の建築家と同様、彼の初期の作品は後期モダニズム内部に留まりながら、批判的に反発していると理解せねばならない。これもまたあとで論ずることだが、葉は最近になって、古典的なまっ平な地表とデカルト立体の限界から逃れ、地勢的な屋根の形態や風景に合わせた輪郭へと到っている。だが彼

の作品についてこれらの議論を始める前に、後期モダニズムの古典的欲求に対する反発とは何だったのかをみきわめておく必要がある。

この反発について論ずる前に、まず当時の建築の全体的な文脈をおさえておく必要がある。先行する後期モダニズムに対して反発していたのはもちろん、葉だけではなく、ほかにもモダンの伝統を新しい線に沿って拡張していた新しい展開もあった。たとえば球や立方体や四面体をぶつかけたり重ね合わせたり…といった戦略は、コーリン・ロウやロバート・スラツキーによって1960年代中期に徹底して展開され、これはまたニューヨーク・ファイヴに受け継がれていったことである。同じころ、日本で最初のアヴァンギャルド運動であるメタボリズムは、チーム10の多くの戦略を新しい形態生成に応用していた。両者ともにコルビュジエ風の伝統の趨勢とはまだつながりを保ちながら、ロウにおいては形式主義として、メタボリズムにおいては都市的スーパー・ストラクチャーとして、それぞれ高度に発展させていったと言えるだろう。葉の作品とメタボリズムやファイヴの作品には確かに親近性があるが、ここで議論したいのはしかし、後二者のモダンとつながった感性と、い

Shoei Yoh's Movement From Nature to A New Vitalism

Greg Lynn

Throughout his career, Shoei Yoh has continuously been attempting to capture and reproduce natural effects and forces through architectural constructions. There are two possible trajectories for an architecture which models itself on nature. The first is a classical tradition that essentializes nature through processes of reduction to primitive object types. The second tradition is not classical but combinatorial. It looks to processes of formalization that combine multiple interacting systems, from which complex forms arise. These methods are ecological in the sense that complex processes are set into motion that behave like an ecology of components that exhibit collective behavior and regulation. Where the classical tradition is dependent on the existence of forms of nature the combinatorial tradition is dependent on processes of formalization. Shoei Yoh's work exhibits both tendencies of classical embodiment of organic forms and of a more vital construction of form through multiple factors.

Although there is not a linear trajectory from the classical to the combinatorial, there has been a progressive development from reductive Cartesianism toward more complex and topological methods of design at the present time. His early work, of the mid to late 1970's, exhibits an intense frustration with the limits of two classical assumptions inherent to Late Modernism. These classical assumptions of the Late Modern tradition that Yoh inherited are, what will be referred to as, first; primitive forms and second; essential ground. Yoh's frustration with the dogma of Modernism, even more so, of Corbusian Purism, demands that his early work be read as a reaction to the classical tenants of High Modern architecture. It will be argued later, that his work developed along a more experimental trajectory that breaks away from both the groundedness or orientation and the formal ideality of the classical tradition of refinement and reduction. Like many of his peers during the 1970's, his early work, however, must be understood within the logic of Late Modernism as a critical reaction. Later in this text, it will be argued that Yoh has recently exceeded these classical limits of ground plane and Cartesian volume by developing a vocabulary of topological roof forms and landscaped berms. But before launching these arguments about his work it

is necessary to start by identifying his reaction to the classical impulses of Late Modernism.

Before discussing this reaction, it is necessary to understand the broad architectural context for this work. Yoh was not only responding to the dominant Late Modern architecture that preceded him but also more recent developments that extended the Modern tradition along new lines. Strategies of colliding, superimposing and eroding of spheres, cubes, pyramids, etc... had been exhaustively described by Colin Rowe and Robert Slutzky in the mid-1960's and these strategies had been developed by the New York Five among others. At the same time the Metabolists, the first avant-grade movement in Japanese architecture, were combining many of the Team 10 urban strategies with new formal morphologies. In both cases there was both a continuity with a predominantly Corbusian tradition along with a kind of hyper-development of, in the case of the Rowe; formalism and in the case of the Metabolists; urban super-structures. While certain aesthetic affinities can be found between Yoh's work and both the Metabolists and the Five, it is most interesting to only argue in very broad terms that there was both a sensibility of continuation of the Modern Project and some kind of mutation or hyper-development of Modern-

くばくかの変容や新しい線に沿ってモダニズムを高度に発展させる感性についてである。つまり結局のところ、多くの点で革新的だったにもかかわらず、こうしたものにはまだ近代建築の最も古典的で保守的なものがはっきり残っていたということである。つまり観念的な形態であり、まったくいらない地面が、それだ。

葉の新しい純粋立体への探求は、まず古い形態をいかに支え、ずらすかの探求として始まっている。円筒や直方体や四面体や球といった基本的な形態を回転させたり、貫通させたり、地面の中に、下に、あるいは上に吊り下げたり置いたりすることで、まったくいらない地面というものを批判するのである。これは純粋形態の新しい言語を展開するだけでなく、これら立体を空間中にまったく新しいやり方で配置することをも探求することだ。こうした新しい形と地面に対する新しい配置の組み合わせは、存在的なプラトン立体や、それがそこで構成されるまっ平な地にきわめて複合的に関わることを示している。つまり、基本形態とそれを支えたり配置したりすることが、初期の葉によって批判されたことなのだった。この批判ののちにデカルト幾何学を放棄させ、完結した立体になじむ地勢的表面的

採用することを予告するものでもあろう。彼の作品の地形のようにうねった表面は、日本や世界において先駆的なものだということは強調しておかねばなるまい。これが彼の初期の作品が批判していた限界に対する回答だということも。これはコルビュジエ主義を「逸脱」して読むことにあるが、「逸脱」という言葉は表現主義のようなよい形から外れた「逸脱」を意味しているのではなく、文字どおりに、構造的に、いくばくか中心を外れていることを意味するものだ。多くの計画ではこの逸脱性はデカルト立体をずらしたり、地面に対して斜めにしたり、45度に傾けたりすることであろう。

たとえば1979年の〈木下クリニック〉は球体ではなく、長円形をした楕円体がひざのお皿をひっくりかえたように地表でかすかに支えられている。楕円体なら最低四つの焦点があるが、この扁平な楕円体は一つも中心を持たず、また地面に少し触れるだけで支えられているのだ（実際には建物下面はフラットで、高低差のついた敷地にコンクリート柱で宙に持ち上げられたり、基礎で接地されている…訳者注）。つまりこの建物は基礎を持たず、地表に固着することなく、あたかも地表と一致する、あるいは地表と表面を共有する卵の

ように地表をかすっているのである。同様にして〈コーヒーショップ インゴット〉は直方体が40度回転させられ、その縁で支えられている。ミース・ファン・デル・ローエやフィリップ・ジョンソン（や、ヌーヴェルやヘルツォークをはじめ、それらのマンネリ化した最近の雨後の筍のような模倣者）のグラスハウスと違って、葉は斜めに置くことを選んだのだ。ジョンソンなら基壇、ミースならすかさずのまったくいらない床下を作っただろうところを、である。

ほかの計画では支持や基礎の問題ではなく、プラトン形態や還元形態を使わずにいかに一体的な形態をなすかという探求に向かっている。これは有機的形態や物理的な方法で自然を観念化する葉の傾向を示している。彼の擬・自然的な形態は、数学や幾何学より自然的・有機的メタファーによって本質的な原型をはっきりさせようとする点で、ライトやガフの構造と近いものだ。だが自然的な類型はそれにもかかわらず、デカルト立体的な方法から導かれている。そしてこうした自然的な形態の限界は、それが真似たり代わりを果たしている自然の形態を典型的に本質化してしまうことにある。葉の作品ではこうした例は限定的に使われており、葉がカニにたと

ism along alternative lines. What can be shown quite conclusively, is that despite the innovations in many regards, there was a definitive maintenance of the most classical and conservative aspects of Modern Architecture, a datum of ideal forms on a horizontal ground.

His initial research into alternative pure object types was linked to a research into alternative strategies for support and movement within those forms. The manner in which the primary of cylinders, cubes, pyramids and spheres are rotated, sliced and suspended under, in and above the ground indicates a criticism of the horizontal grounding. His work did not only develop a new language of pure forms but it also developed new techniques for arranging those volumes unconventionally in space. This combination of new object types and an unconventional placement of those pure forms on the ground points to the complex dependency between essential Platonic solids and a horizontal tableau upon which they are composed. This collusion between primitive forms and their support and placement was criticized by Yoh's early work. This criticism was a premonition of his later departure from Cartesian geometries and his adoption of topological surfaces in favor of closed volumes. It must be said that his work with topological

surfaces is among the first in Japan or elsewhere and they are the consequence of many of the limits discovered in his early work. This work takes on an 'eccentric' reading of Corbusianism. The term 'eccentric' is meant not as a deviant form of expressionism outside the boundaries of good form, but more literally and structurally, as an orientation that is more or less off center. In numerous projects, eccentricities can be located in both the use of Cartesian volumes which are not centered and in the relationship of these volumes to the ground in a sloped or diagonal manner.

For example, the Kinoshita Clinic of 1979 is not a sphere but an oblong ovoid which is only tentatively supported on the surface of the earth like an inverted meniscus. Here the volume of the project is an attenuated sphere without a single center, as ovoids have at least four centers, and the grounding of this volume is on a tangent to its surface. It is not embedded in the ground as its envelope does not engage any foundations, instead it slips across the surface like an egg in a manner which is coincident or co-planar with the earth's surface. Similarly, the Ingot Coffee Shop is a single cubical volume rotated 45 degrees so that it rests on its edge. Unlike the glass houses of Mies van der Rohe and Philip Johnson (not to mention the recent spate of mannered imitators such as Nouvel

and Herzog) Yoh chose to situate the space obliquely rather than on a positive or negative plinth as did Johnson and Mies respectively.

Other projects, which do not rethink the problem of support and ground, focus instead on a research into volumes which are monolithic without being reducible or Platonic. This points to the tendency in Yoh's work to idealize nature through both organic forms and physical processes. His interest in quasi-naturalistic forms have an affinity with the structures of Wright and Goff in that they attempt to articulate essential formal types through natural or organic metaphors rather than through mathematical or geometrical statements. These naturalistic object types are geometrically derived nonetheless, through Cartesian volumetric means. The limit of these more organic forms is both that they are as essentialized as the object types they replace and that they mimic natural forms. These examples are more limited in Yoh's work and include both the long span project for the Oguni Dome, which Yoh described as a crustacean, the Misumi Kumamoto Ferry Terminal, which uses a three dimensional spiral for its organization, and finally the ziggurat form of the Egami Clinic. Yoh has consistently been involved in the expression of natural forces and forms in his

える〈小国町民体育館〉や、三次元的な螺旋をもった〈海のピラミッド〉、シグラッド型をした〈江上クリニック〉などがこうした例にあげられる。葉はたえず自然力の表現に心を砕いてきた。初期の作品で有機体の観点からプラトン形態を拒否したことは、有機主義と近いものである。こうしたことはほんの一例だが、だが有機的になるにつれ、一方では保守的に地面に置かれるようにもなった。初期の作品では地面に対して反発するように逸脱的に立体が置かれていたが、有機的なものは地面に対してそうした批評性を失い、地面に対して水平的に置かれているからである。

この点に関していうなら、批評性は自然形態そのもののさらに微妙な関係を発展させることで補足されたと言える。葉の作品における古典的伝統との決別は、彼の柔軟な表面の用い方とともに始まっている。地勢的計画では、形態と形態化の双方で風景が建物に取り込まれるが、このことは形態生成と全体の形式の関係において重要なものだ。というのも屋根の断面形はそれぞれ別個の多様な要求の相互作用から生まれ、それゆえ波うつような有機的な方法で輪郭を明らかにしているからである。こうして計画は自然に見えるようになり、それもそれぞれ別個でありながら

連続し、決して単一の輪郭をなぞることなく、にもかかわらず同一性を保持しているのだ。これは計画を自然的にはしないが、だが建築として自然主義的な読解を誘う形態ではあろう。自然的に見せたり、自然を模するこうした特質はあきらかに葉の手つきにおいて主要な役割を果たしていよう。形態がどれだけ風景的になったかという度合いは、地面と建物の関係という初期の葉の問題を思い起こさせ、この問題についてはすでに二つの論文で述べた ("Architectural Curvilinearity: the Folded, the Pliant and the Supple," in *Folding in Architecture: Architectural Design Profile* no.102 (London: Academy Group Ltd., 1993), "Blob Tectonics or Why Tectonics is Square and Topology is Groovy" in *Tectonics Unbound: ANY* (New York: Any Group Ltd., 1993)) が、またこうした計画のすべてが一般的な問題をそれぞれ示しているのである。たとえば〈小田原市総合体育館〉を例にとるなら、プログラムや構造に対し複雑で差別的な関係を展開しているが、これは鑑賞の対象というより周辺環境としての周囲の山々との関係から屋根の形態を生み出すものだ。〈小田原市総合体育館〉やくふるさとパレス ギャラクシー富山〉、〈ガラスステーション〉、〈筑穂町高齢者生活福祉センター〉、〈内住コミュニティセンター〉ではみな、屋根の形態が高度に差異化され、特異な曲面をしている。こうした計画全てにわたって、標準的な組立てラインの建設形態の経済や技術から特異な単位をつなげるという組立てラインへの変容への応答が見られよう。これらの計画は包括的な建設システムと少しずつ部材を変えていくやり方を組み合わせ、標準化と繰り返しの手法をはっきりさせている。これはそれぞれの部材が独自性を保ちながら、なおかつ全部材がある程度そろっている歴史的な職人術の名残でもあろう。いくつかの計画では機械的な組立て技術とともに比較的安価な職人術や技術が採用されている。竹の形態を使った建設方法はそうした例だ。これらの計画のほとんどは、工場生産された鉄の規格品とともに現場生産される竹やコンクリートが用いられているが、手仕事と工業生産を組み合わせることで「注文組立生産」と経済的に呼ばれるものが利用されているわけだ。葉の最近の作品にあきらかな空間的テーマとは、多様なグループやプログラムを一つの屋根の下にまとめるということなのである。こうしたやり方はこれまでは全体に適用できるよう屋根高を平均化したり、極限まで高くすることだっ

work. The rejection of Platonic forms in his early work in favor of organization more affiliated with organicism is just one example. Yet this work, as it became more organic, became more conventionally oriented and sited. Where in the early projects there was an oppositional strategy of placing volumes in an oblique or eccentric relationship to the ground, the more organic object types lost that critical grounding and sat in a horizontal relationship to the ground.

The critical edge in this regard was recovered at the same time that the projects developed a more subtle relationship with landforms themselves. The major break in Yoh's work, away from the classical tradition, occurred with his use of flexible to topological surfaces. In the topological projects, the buildings themselves take on landscape like characteristics in both their forms and their formation. This is the important relationship between formalization and formation, where the roof profiles were generated out of the interaction of multiple independent requirements and therefore manifest their contours in an undulating organic manner. In this way the projects appear natural in that they are a heterogeneous yet continuous surface that never duplicates a single contour yet retains a degree of repetition nonetheless. This does

not make the projects natural, yet their forms invite naturalistic readings at the aesthetic level. The ability for these projects to appear natural or to mimic nature, no doubt played a major role in their use by Yoh. The degree to which these projects became like landscape forms would raise the earlier questions of Yoh's as to the buildings relationship to the ground. I two other texts I have discussed these projects in greater detail [FOOTNOTE 1: "Architectural Curvilinearity: the Folded, the Pliant and the Supple" in *Folding in Architecture: Architectural Design Profile* no. 102 (London: Academy Group Ltd., 1993)] [FOOTNOTE 2: "Blob Tectonics or Why Tectonics is Square and Topology is Groovy" in *Tectonics Unbound: ANY Magazine* no. 7 (New York: Any Corp., 1996)] , but their general implications can be summarized through a description of any one of the projects. To take the Odawara Sports Complex as an example, it develops an intricate and differential relationship to both program and structure in order to generate a roof form which has a relationship to the surrounding mountainous landscape that is more of a landform than a discrete object. In the Odawara Sports Complex, the Galaxy Toyama Gymnasium, the Glass Station, the Naiju Community Center and Nursery School and the Uchino Community Center

the roof form of the projects can be characterized as having a highly differentiated globular singularity. In all of these projects there is a response to the shifts in the economies and techniques of construction from one of assembly line production of a standard to the assembly line production of a series of singular units. These projects articulate an approach to standardization and repetition that combines a generic system of construction with slight variations of each member. This attribute is reminiscent of historic methods of craftsmanship where every element could be generic in some regard while given a distinct identity at each instance. In some of the projects, inexpensive craftsmanship and indigenous techniques were employed in favor of mechanical fabrication techniques. Methods of bamboo form work construction is one such example. Most of these projects make use of both prefabricated steel components and site-fabricated bamboo and concrete. Through both manual construction and industrial fabrication, the economies of what is often referred to as "custom assembly-line production" is exploited. The spatial theme evident in all of Yoh's recent work is the enclosure of a diverse group of programs under a single roof. The conventional approach to this problem would be to identify either a maximum or an average

たが、ここではそうではなく、屋根構造を同一のものが反復できるように理想的モジュールにまで簡素化するとともに、それぞれのプログラムの特異性に注意を払いながら、濡れた布のように違った高さをすべてなめらかに結びつけることなのである。このシステムの構造部材は似ているが、同じではない。この戦略は包括性と特殊性をともに用いるものだ。それぞれ異なっているが、しかしそれぞれは均質的な表面のかすかな揺らぎや差異としてあろう。これら微細な差異の多様性を集めても単一の単純な全体構造を形成するわけでもなく、むしろその表面における特異的なめらかな揺らぎとしてあるのだ。葉祥栄のこれらの計画は世界的システムと地域的単位、全体構造と特異な差異、工業的な組立てと地域的な建設のあいだにある違いを微妙に複雑化する。その形と建設において連続的でも断続的でもあるからだ。微細な異質性と差異性を大きな連続性や湾曲を組み合わせることが、その見かけを風景や自然のように見せているものなのである。

これらの計画は葉や、デカルト的立体より地勢的表面を使うほかの建築家たちの新しい方向性を示している。これら表面は内部と外部、地と図、表面と容積、複製と差異の複雑

な関係のひとそろいを提起しよう。これまでこうした組織形態の探求は大スパン屋根構造に限られており、これらの屋根形態と地面の関係を分析しようとすれば天井から壁へ、風景へ、といった連続的な推移に限定されてしまい、その結果は不満足にならざるをえない。〈グラスステーション〉のサーリネンふうの柱は地面から屋根へのつなぎにすぎず、〈ふるさとパレス ギャラクシー富山〉の屋根はこの地勢的デザインが地面に対して持っている潜在性をほとんど引き出してないだろう。組織や構造の新しい形態を真に活用するには、葉はその戦略を屋根だけに限定してはならない。デカルト立体において新しい手つきで空間を新しく使い、構造化したように、これら地勢的デザインにおいてもまた空間を囲うものとして新しい戦略を示せるかもしれないからである。

後期モダンの類型やその地面に対する関係を批判した初期の作品から、地勢的表面といういまだかつてない領域に葉は踏み込んだと言える。自然の力や形態のメタファーから、葉は複雑な形態化の方法を発展させてきた。これは有機的であるとともに多様な相互作用的な要因を組み合わせるものでもある。二つの点で、彼の最近の作品は目下のところ

いまだかつてないものであり、単なるモダンな表皮であることをなんとか免れていよう。これはいまのところ英雄的な業績であり、その草創からおよそ一世紀たつたいまも近代運動がまだ可能性を残していることでもある。多くの建築家はミースやコルビュジェの美的言語を洗練させることで実験的だと称しているが、葉はこうした先例を1970年代初頭で自家葉籠中のものとし、その後それを徹底させ、そしていまや構造や建設や形態の新しい領域へと踏み込んできたのだ。地勢的で柔軟な表皮がそれである。彼は、いまや萎えてしまった近代運動などよりもっと時宜にかなない、躍動に満ちた実験という新しい問題を選びとり、はっきりさせた数少ない建築家の一人なのである。

●グレッグ・リン／コロンビア大学助教授

span for a roof height that could then be used for the entire structure. Rather than simplify the roof structure to an ideal module that would be repeated identically, Yoh respected the specificity of each program and developed a surface that would continuously connect across all of these heights like a wet cloth. The structural members of this system are similar but not identical. This strategy uses both a generic and particular approach simultaneously. There is repetition, but with each repetition of a homogeneous surface there is a slight fluctuation or differentiation. This multiplicity of minor variations does not add up to a single, simple global structure but instead manifests a singularity which constantly fluctuates across its surface locally. These projects of Shoei Yoh subtly complicate the distinctions between a global system and local components, between the general structure and particular variations and even between industrialized fabrication techniques and indigenous construction. The variations in the global form are the result of local variations in the program, and these variations are taken up in a repetitive construction technique where every elements is slightly differentiated within a more or less continuous system. They are both continuous and heterogeneous in their shape and construction. This

combination of micro-heterogeneity and differentiation with macro-continuity and inflection leads to their appearance as landscapes or natural formations. These projects mark a new direction for Yoh's and others work in their use of topological surfaces rather than Cartesian volumes. These surfaces raise a series of complex relationships of interior and exterior, of ground and figure, of surface and volume, and of repetition and differentiation. Until this moment, the research into these forms of organization has been limited to long span roof structures. In order to analyses the relationships of these roof forms to the ground one is limited to the transition from ceiling to wall to landscape and in the end these readings are inevitably unsatisfying. The way that the Saarinen like piers of the Glass Station provide a transition from ground to roof, or the diagonal walls of the Galaxy Toyama Gymnasium seem to barely scratch the surface of the potentials for new relationships of these topologies to the earth. In order to truly exploit the possibilities of these new forms of organization and support Yoh must not limit the strategies to roofs only. In the same way that Cartesian volumes were reoriented and used to structure space in an unconventional manner, so too might these topologies suggest new strategies for spatial enclosure.

From the early criticism of Late Modern object types and their relation to the ground, Yoh has moved into the uncharted territory of topological surfaces. From the metaphors of natural forms and forces Yoh has developed a method of complex formation that is organic in its combination of multiple interacting constraints. In both regards, his recent work is presently unprecedented and has managed to escape the envelope of the merely Modern. This is a heroic feat at this time, as almost a century after its inception, the Modern Movement still has currency as a mode of inquiry. Many architects would claim to be doing experimental work by refining the aesthetic language of Mies or Corbusier. Yoh grappled with those precedents in the early 1970's and after having exhausted those strategies he moved into new territories of structure, construction, function and form based on topology and flexible surfaces. He is one of the few architects that has chosen and defined a new set of issues to experiment with that are more relevant and vital than those of the now tired Modern Movement.

●Adjunct Assistant Professor of Architecture at Columbia University G.S.A.P.

建築を柔らかくすることは目的ではなく、建築を生き延びさせるための方法である。建築に限らず、あらゆる生物も又「重力」に逆らって生きていかなければならない。動かないと信じられていた建築をおびやかす風も吹けば、大地を引き裂く地震も来るし、数メートルの雪が積もることもある。

私たちは揺らぎながら、つんのめったり、吊革にぶら下がったり、両足でふんばって立っている。木も草もそうであるように、建築も同じことである。

建築には敷地条件、都市計画上の法規制、隣地からのクレーム、音や光そうして熱の集中と拡散、時代の波、人の流れ、空気の流れ、そうして淀み。あらゆる応力が発生し渦巻いて襲いかかってくる。応力に抵抗しながら受け入れ、そうして、受け流すには、柔らかくなければならない。

「柔よく剛を制す」という言葉がある。

あらゆる応力の変化に対応能力を備えることは必要条件であって十分ではない。いつまでも美しく魅力的で、生き生きと息づく柔らかさを保持するためには、柔軟体操が効果的である。

いつの時代でも柔軟な発想が期待されるのは、硬直した閉塞状況からの離脱が目的だからである。それは、若さの特権であり、老化することは柔らかさを失うことでもある。しかし、切れ味鋭い鋼鉄にも脆弱さがあり、柔らかい木材はいかにも頼りなく、軟弱と呼ばれる。だから柔らかさを求めるといっても「硬軟」「柔剛」の関係はどちらかを否定するわけではない。

アキレス腱のように、熱強化ガラスや高張力鋼もちぎれる時大きい音を立てる。蓄積して閉じ込められていたエネルギーが瞬間に解放されるからであろう。柔らかさは、そのようなエネルギーを温存することにこそその目的がある。

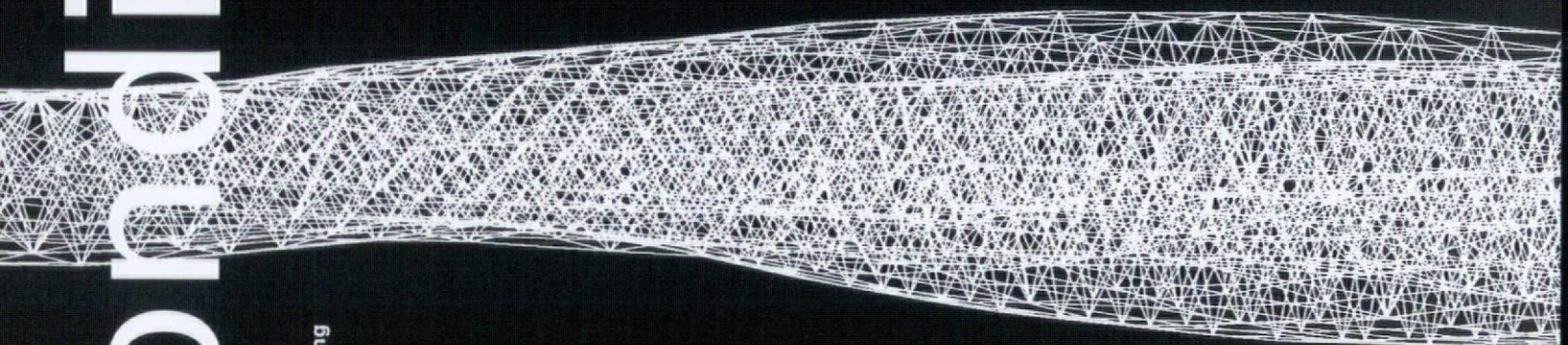
磁力のような潜在的エネルギー、放電能力のような生命力を建築が涵養し、蓄積することができるかもしれないという幻想が消滅することのないよう、カリステニクスを続けることにしよう。

(葉 祥栄)

1. 応答する

responding

Uniform snow load distorts a roof which bends.
Being given the roof differential depths responding
bending force becomes more stiffe. PAT.



常に重力が垂直に地球の中心に向かっているのに対して、様々の方向からの応力が働く時、それぞれに応じて答えることができれば不安定になり、倒壊したり、崩壊する。

雪の重さが屋根を壊そうとする応力、つまり曲げモーメントが発生することから、通常は一定の長さの部材の断面性能を上げて、その応力に対応している。それを逆転して梁成（ライズ）に対応させたのが〈ギャラクシー

富山〉である。松井先生の光弾性実験と全く同次の干渉縞を、模型の影に発見できる。

今から見れば、いっそ禁欲的にすら見える未成熟な工業化社会の産物である平版トラスは、硬直的であり、不自然に見えてくることに比して、富山では最も自然な最適形状である三次曲面が、コンピュータ・シミュレーションによって自動的に得られている。自然現象に応答し、変形を先取りした不定形が、最

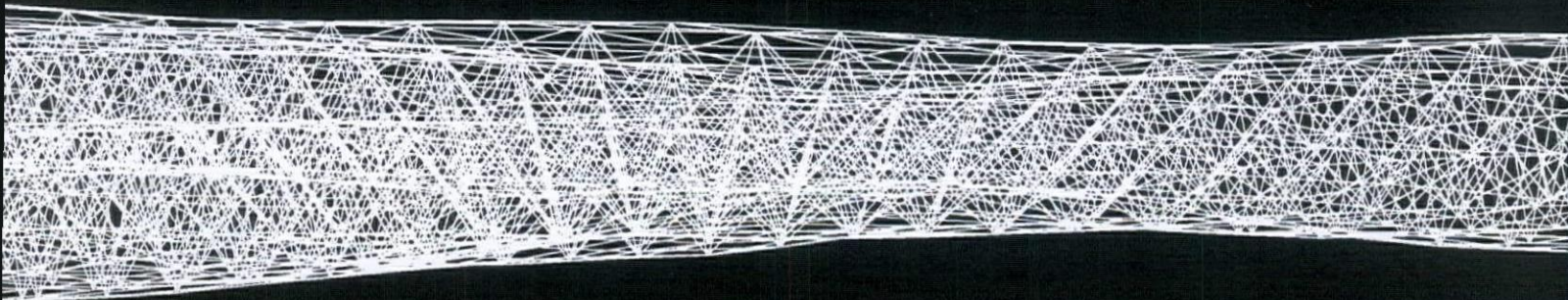
も自然環境に適応していることになる。全ての部材の長さや角度の異なる複雑さは、以前ならば経済的に不可能だったかもしれないが、コンピュータ制御技術が、少量多品種の工業製品を可能にした経済性の高さが特長である。〈ギャラクシー富山〉(P.18)

ペンタグラフのようにフラフラと変形する四辺形を、スプリング・ダンパーによって拘束することで座る人の体重と姿勢に応答し、

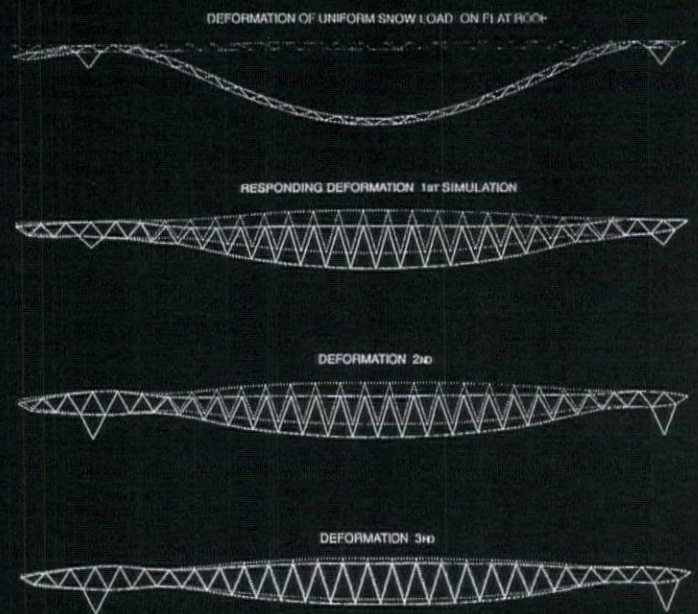
ふるさとパレス ギャラクシー富山

Galaxy Toyama, Gymnasium, 1992





roof CG



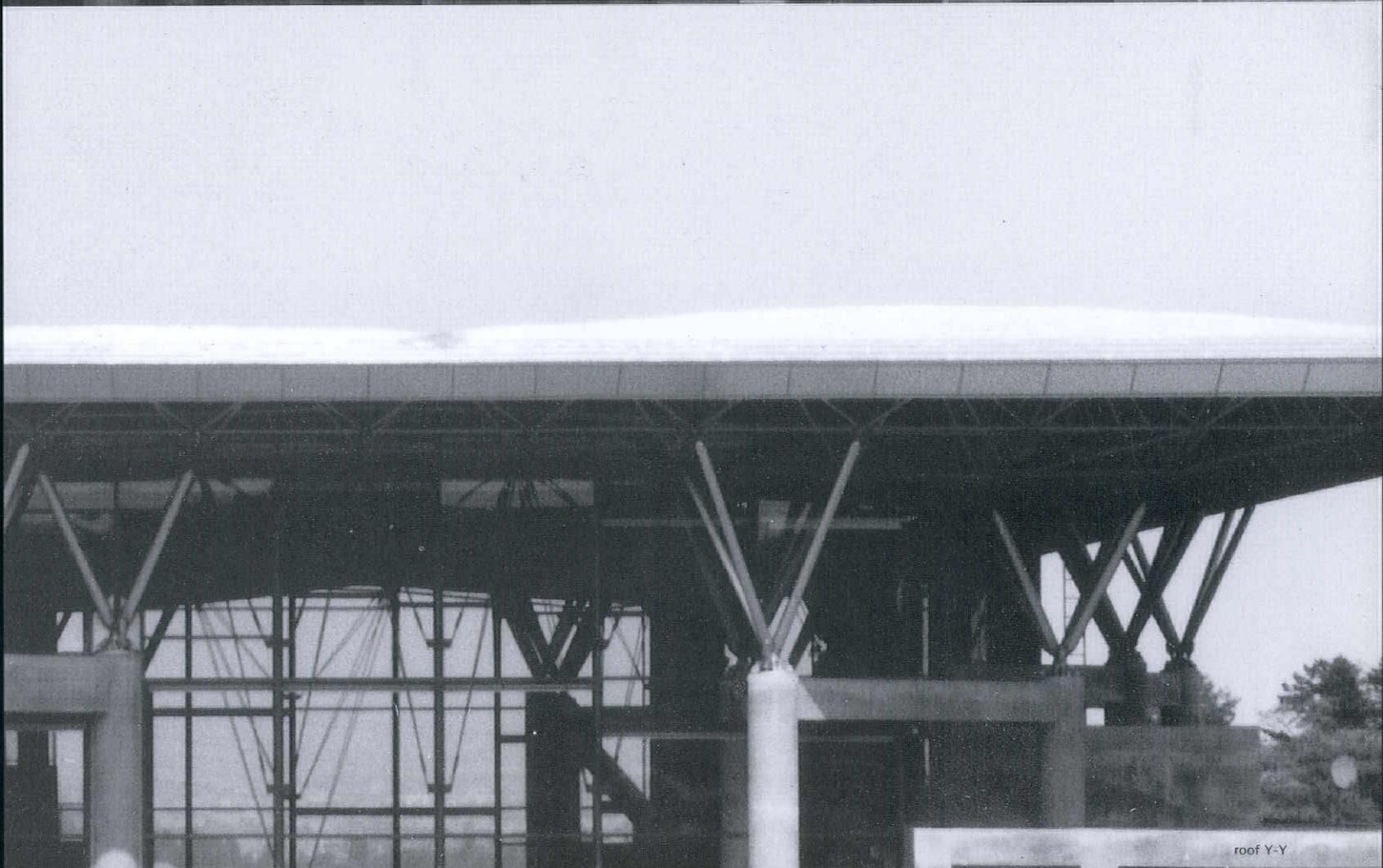
roof CG distortion and response

〈ふるさとパレス ギャラクシー富山〉(1992)

起き上がる時にダンパーが加勢して楽に立ち
上がることができる椅子。変形可能な四角形
と、破壊するまでは全く動かない三角形に、
東洋と西洋の文化の違いを見ることができる。
融通無碍な四辺形の柔らかさには、時間や空
間の伸縮性が秘められている。斜材を入れて
固めてしまわずに、接点を剛にした柔らかい
ラーメン構造に日本の木造建築の真髄がある。
〈0°—90°〉(P.27)



roof X-X



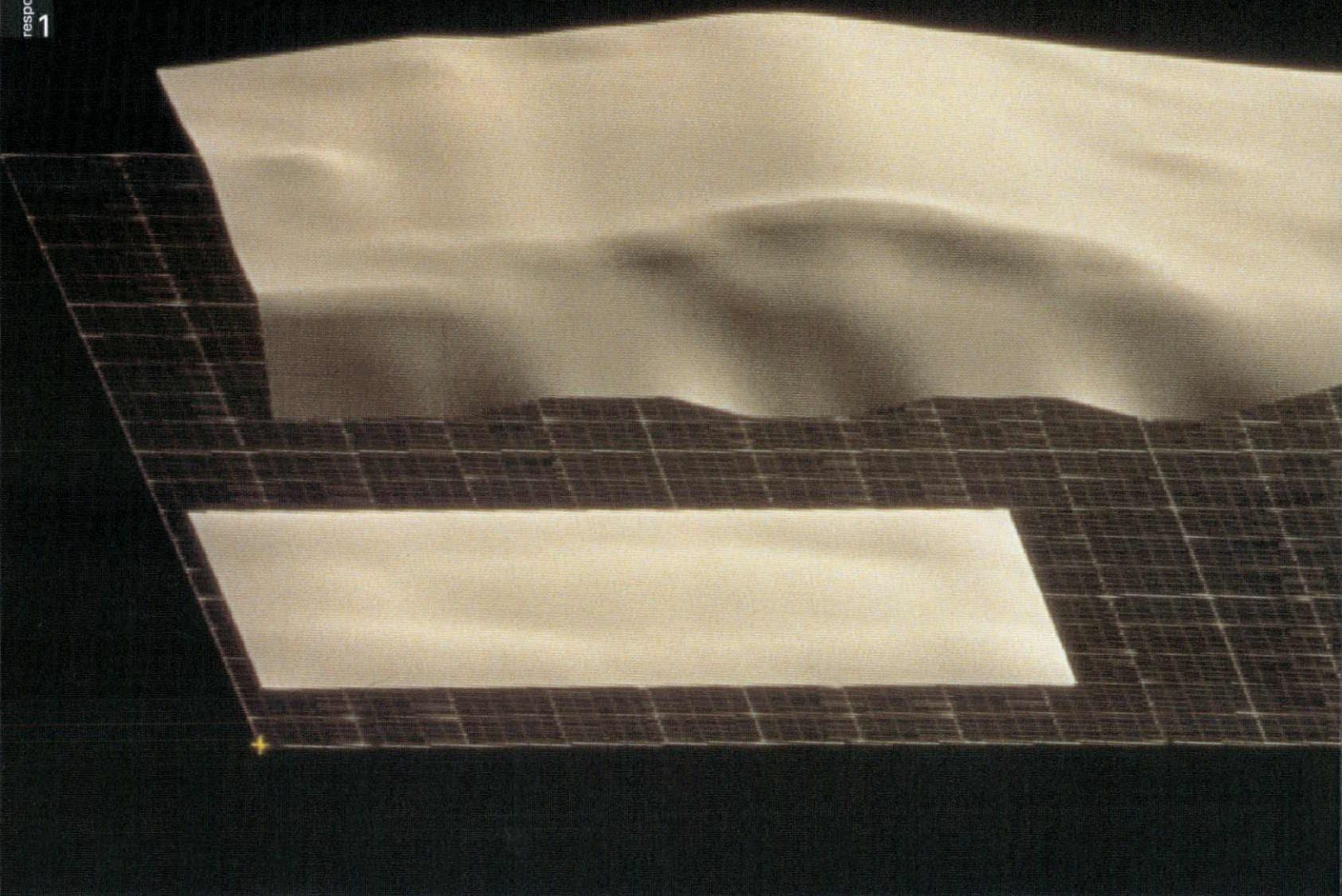
roof Y-Y





under construction

interior ceiling



Odawara Municipal Sports Complex CG
Galaxy Toyama, Gymnasium CG

Complexity and Compliancy: The Aqueous Space of Shoei Yoh's Odawara Gymnasium

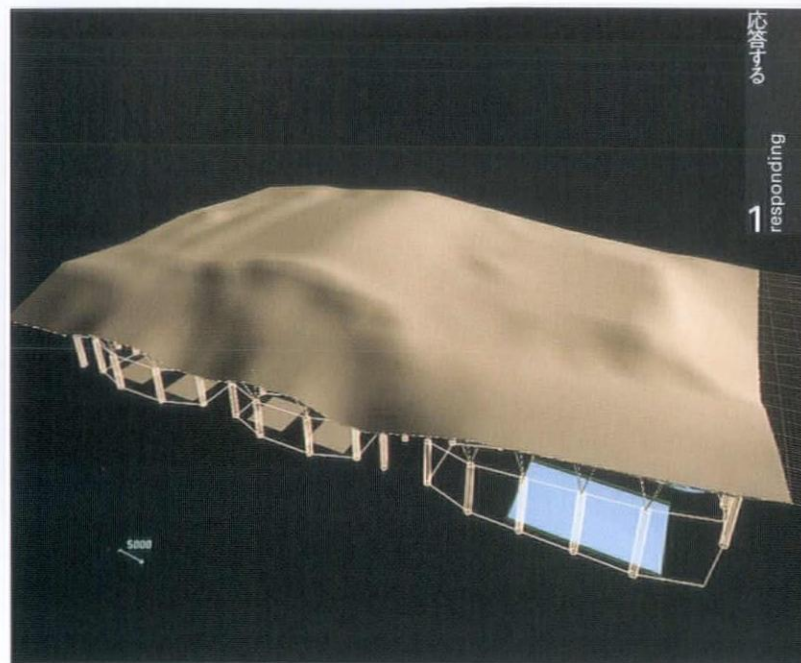
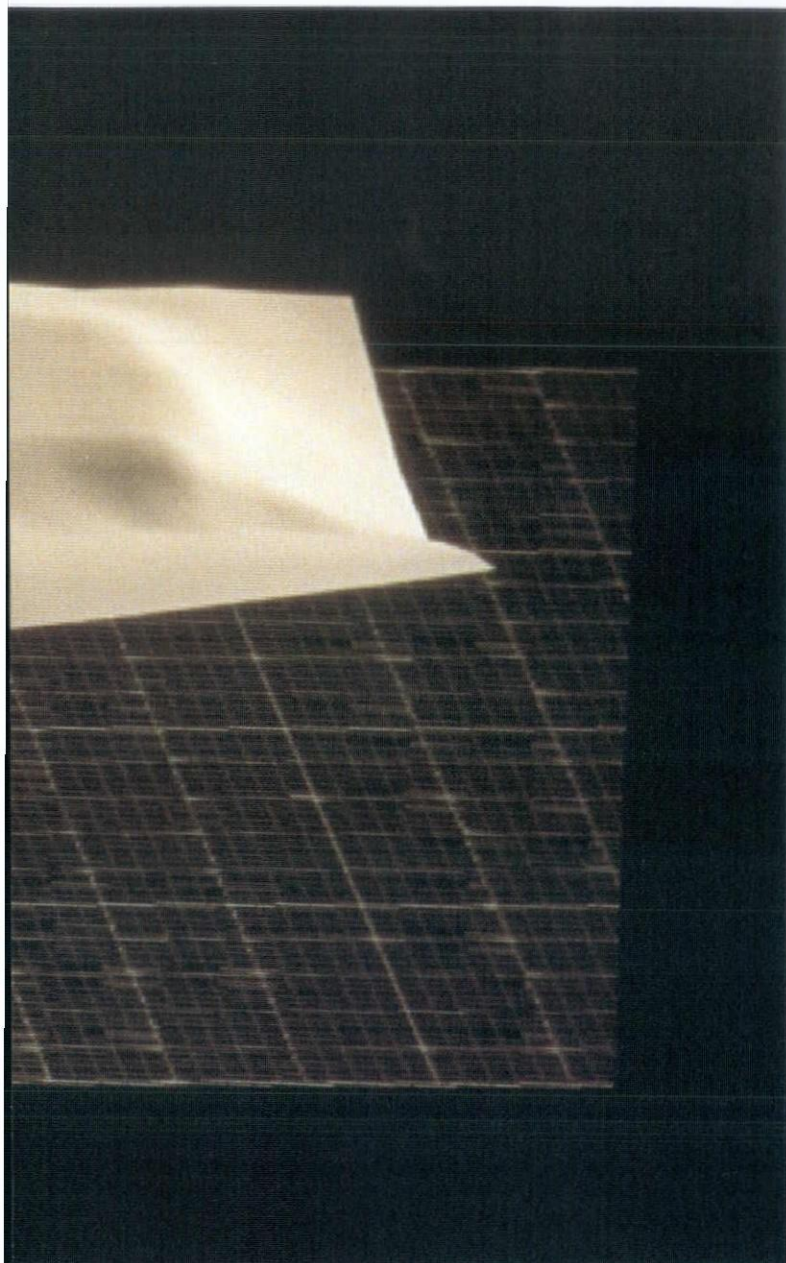
Greg Lynn

Shoei Yoh describes his Odawara Sports Complex and Gymnasium as an example of aquatic architecture. Yoh's aqueous paradigm contributes to formulation of more open and fluid systems of urban space being developed in Japan, Europe and United States. Like the symbiotic logic of the Japanese architect Kisho Kurokawa, Yoh proposes unpredicted participations of architectural form with external forces. The Odawara project participates in an emerging tensibility of *Complexity and Compliancy in Architecture*, where heretofore external contingencies become intensely involved with questions of form and space. This involvement is intensive in that it allies form with

programmatic structural, and cultural forces. Unlike the now familiar appeal of architecture to *Contradictions*, superpositions or accidental collisions, compliant systems are capable of engendering unpredicted connections by viscissitude. This logic of *viscosity* develops stability from differential and fluctuating forces. The plexing relations of viscous spaces such as these are extremely complex, rigorous and precise, yet they are not reducible to any single or holistic organization. This complex resistance to reduction to either unity or contradiction distinguishes a pliant sensibility form either the universal spaces of Modernism or the arted formal conflicts of Deconstructivism. This irreducible complexity is engendered by the supple anexact yet rigorous geometries of smooth transformational system(s).

The structural members cannot be reduced to any single uniform dimension. Their particular

lengths and differentiated contours present and image which is seemingly between geometric exactitude and arbitrary figuration. The simultaneity of both figure and structure differs from the more familiar contradictions between decoration and structure curiously present in both the blinding forms of Deconstructivism and the Post-Modern disjunction of Venturi's decorated sheds. The roof of Yoh's Odawara project employs a particularized, diffeomorphic and supple topological surface capable of fluid transformations. The rooves of Rem Koolhaas's Tokyo Bay competition entry and the main hall of his Rotterdam Kunsthall should be compared with Yoh's project. Especially in regard to the precision and clarity of the continuous yet heterogeneous roof systems in distinction to the reducible homogeneity of Modernist projects, such as Mies van der Rohe's Berlin National Gallery. Moreover, Yoh's project is not by mere structural necessity but becomes



Odawara Municipal Sports Complex CG

intensively involved with a multiplicity of particular subsystems including acoustics, program, economics and aesthetics. The roof structure employs affiliations between disparate programmatic, structural and mechanical systems; supple rather than rigid geometries which are capable of sustaining the differences which result from unpredicted connections; and finally a resistance to arresting these complex relations in either fixed points of resolution or contradiction. Although Koolhaas and Yoh, along with several other architects', could be inscribed within an expressionist style of curved forms, their specific and specialized roof structures suggest a shared *logic of curvilinearity* (a concept developed by Liebniz) which is capable of smoothly and incorporating outside forces. The differentiated smoothness, which begins to emerge in Yoh's project, results from an adherence to the pragmatic contingencies of

structure, program and cost.

Surprisingly, the plexing roof form spans a more or less straight forward grid of program. The athletic fields determine specific span lengths and ceiling heights. A uniform snow load establishes the variable beam depths and roof heights. Finally, the internal surface is adjusted for acoustical concerns. Rather than averaging these requirements within a single mean dimension, their differences put the form and structure of the roof into motion. Disparate forces become involved with a flexible and compliant system without revision to the global organization. The savings on material costs, through this sustained precision and particularization, outweighed the fabrication cost of the various structural members. These developments are now possible given the new technologies which can sustain multiplicity and complexity through the computerization of the

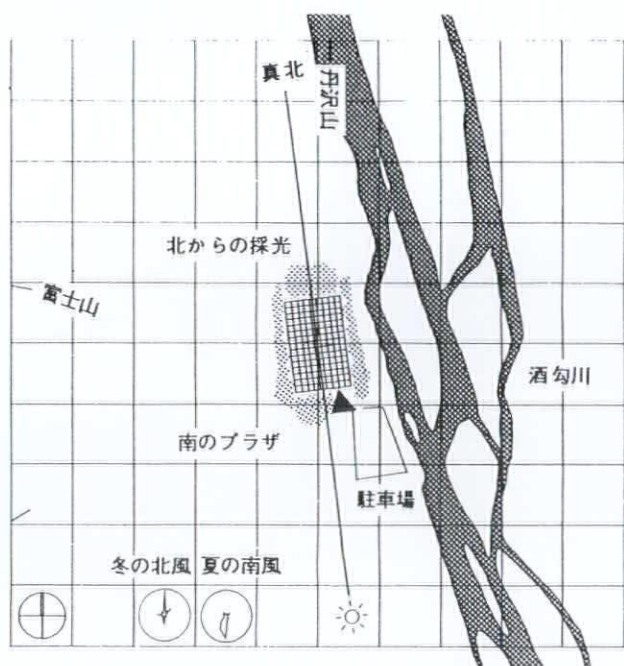
design.

It is the discontinuity between part and whole and the smooth fluidity with which external forces are involved with internal requirements which gives Yoh's project its *Complex and Compliant* character. Both the structure and figure of the roof are generated through the connections between a multiplicity of plexing and pliant subsystems. In this sense, the form of the roof is unpredicted and occurs by viscissitude. Yoh's project suggests the possibility for a plexing architecture of surface and field relations. This aqueous paradigm seems to indicate the development of a more supple, pliant, open, involved and intense alternative to the familiar practices of formal conflict, violence and contradiction in architecture.

(Oct. 1992)

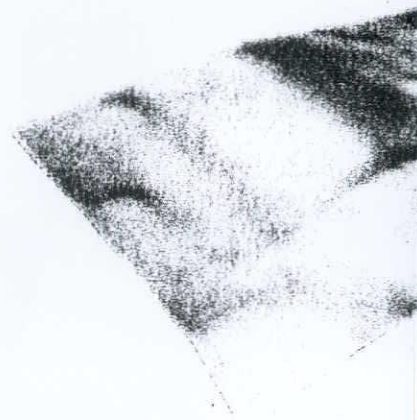
小田原市総合体育館 プロポーザル

Odawara Municipal Sports Complex Proposal, 1991

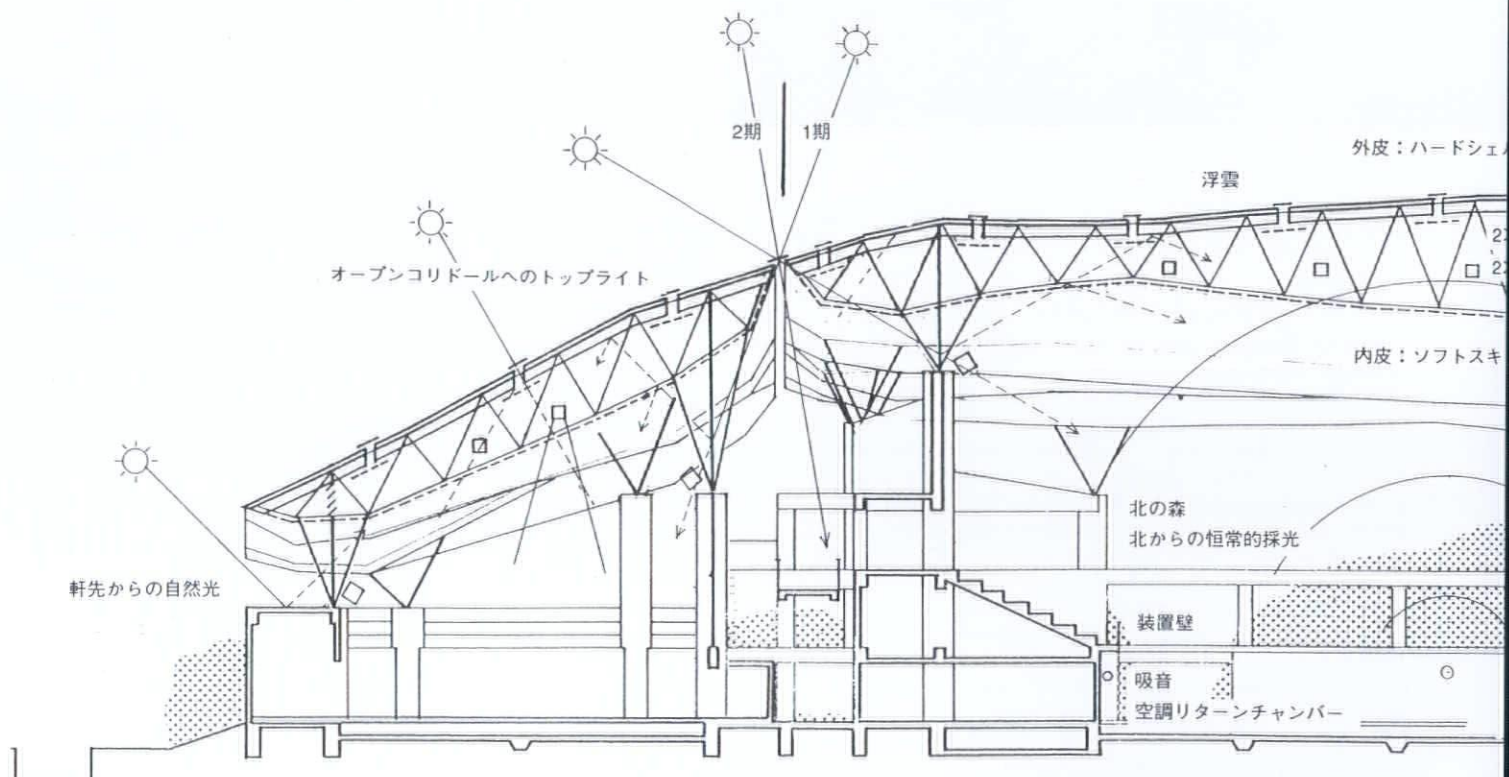
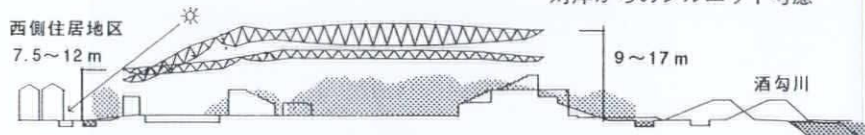


- 環境
- ・森に囲まれ、酒匂川の川辺に漂う浮雲
 - ・真北に振られた軸線
 - ・北側からの恒常的採光
 - ・北の森への視覚的連続のもたらす開放性
 - ・南のプラザの底下のメインアプローチ
 - ・冬の北風を防ぎ、夏の南風を受け入れる
 - ・浮雲の下オープンコリドール
 - ・北西の山並を望む展望ラウンジ

浮雲の生成 ・合目的に形成される構造体



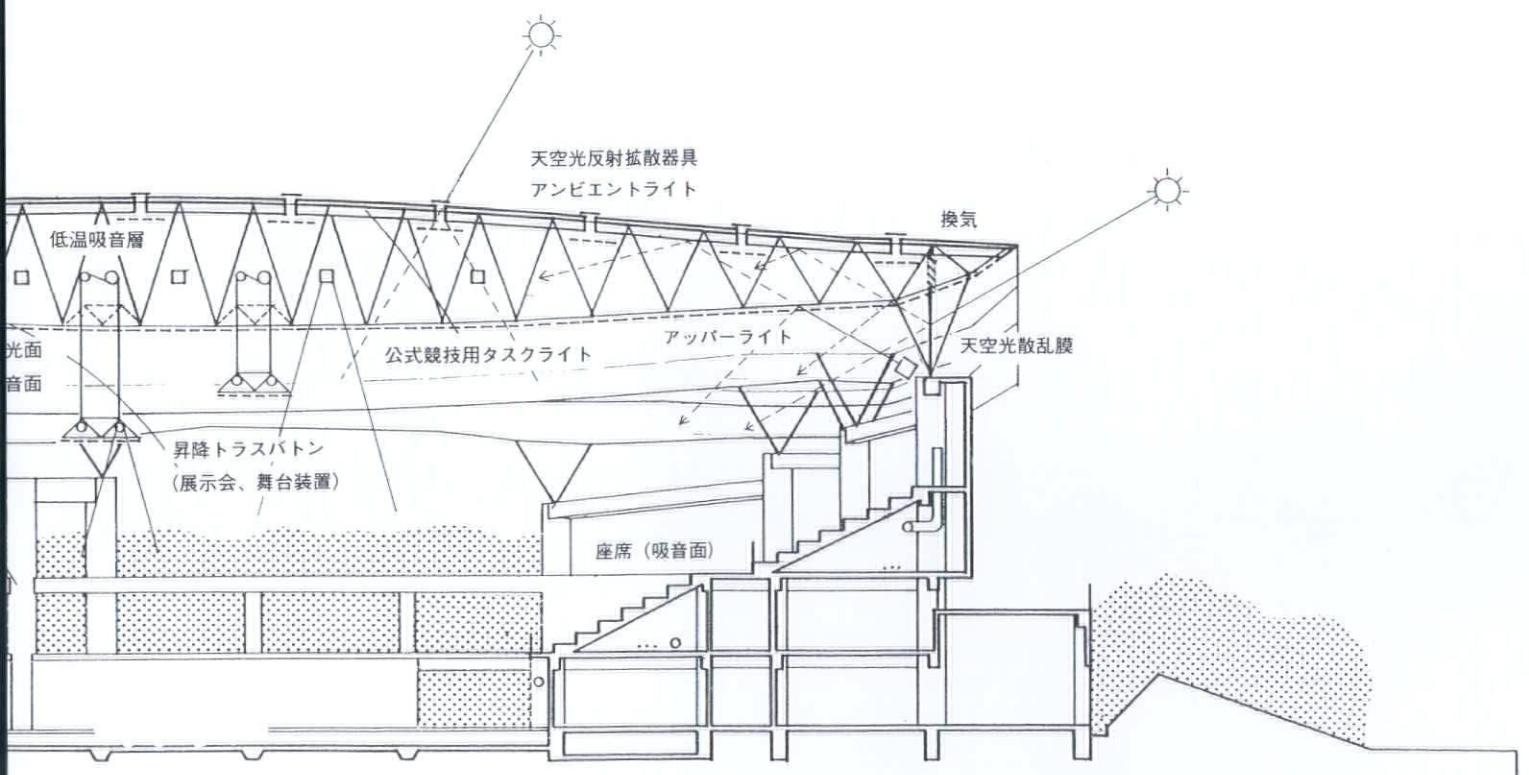
非対称連続的变化 ・西側住居地区の日照確保
・対岸からのシルエット考慮



ハンカチーフのような浮雲外観

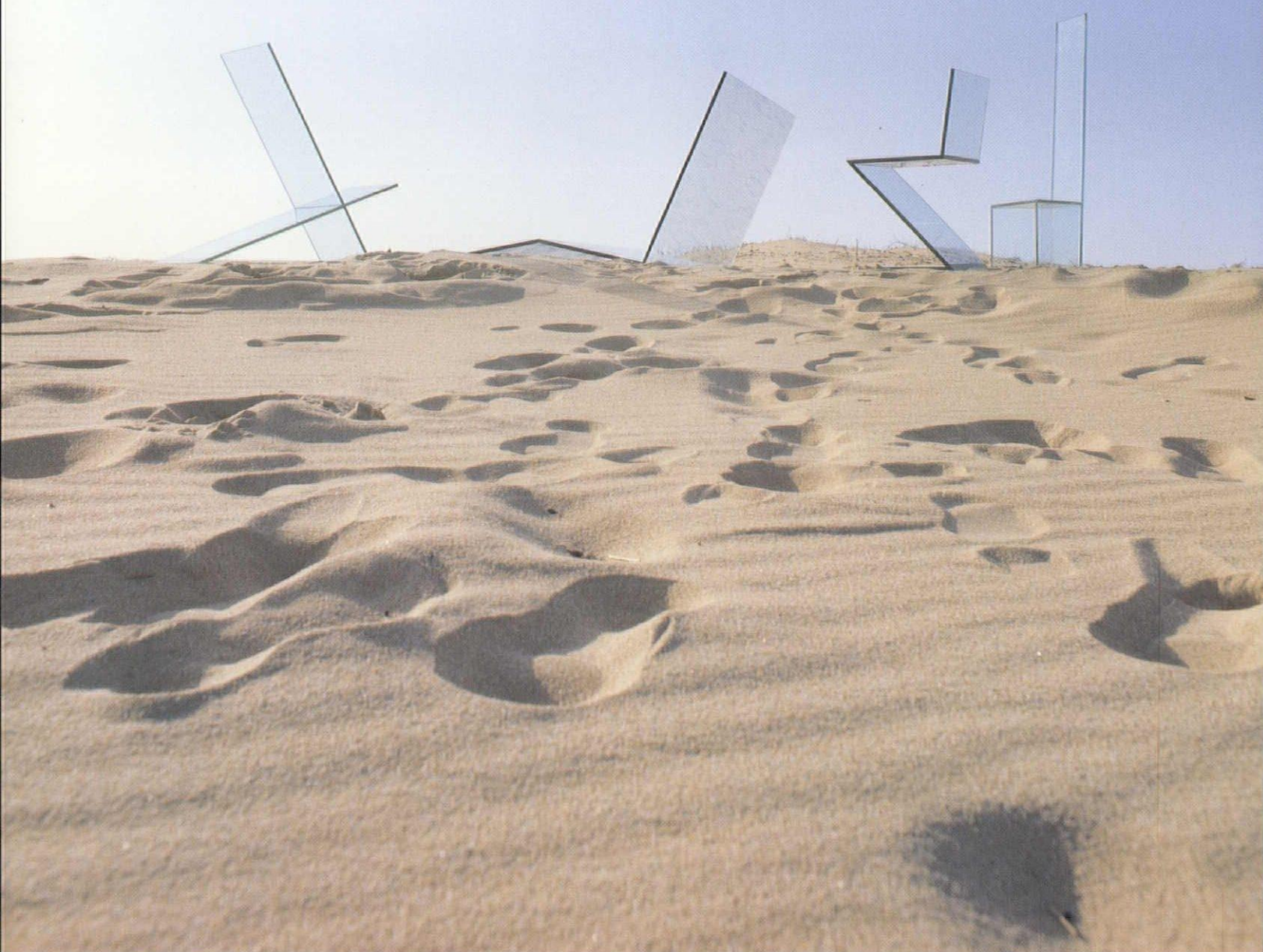
- ・様々なボリュームを持つ競技空間への対応
- ・平面及び立面の支持点位置の決定

- ・自重+積載荷重による応力解析
- ・各部トラス成の再編成と軸力の均一化
- ・有機的形狀を持つ屋根の基本形状（1991年）



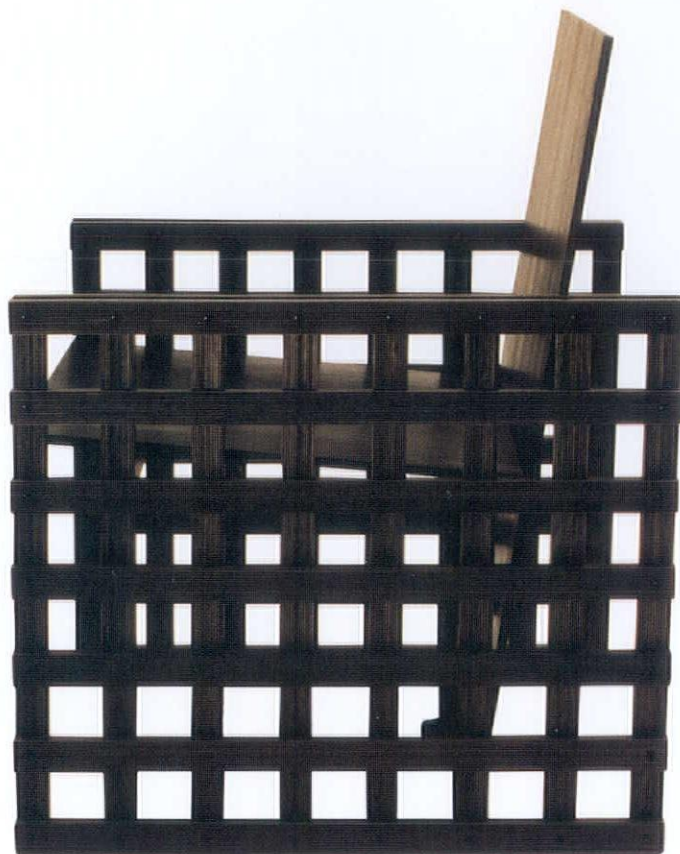
WXYZチェアー

WXYZ chair, 1976

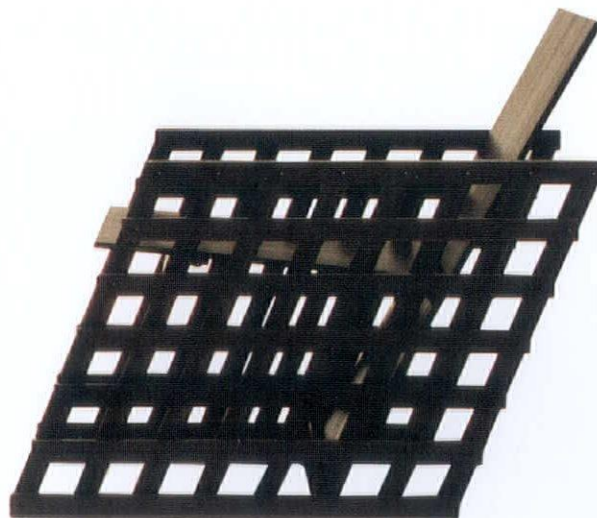


〈WXYZチェアー〉 (1976)

0°—90°
0°-90°, 1988



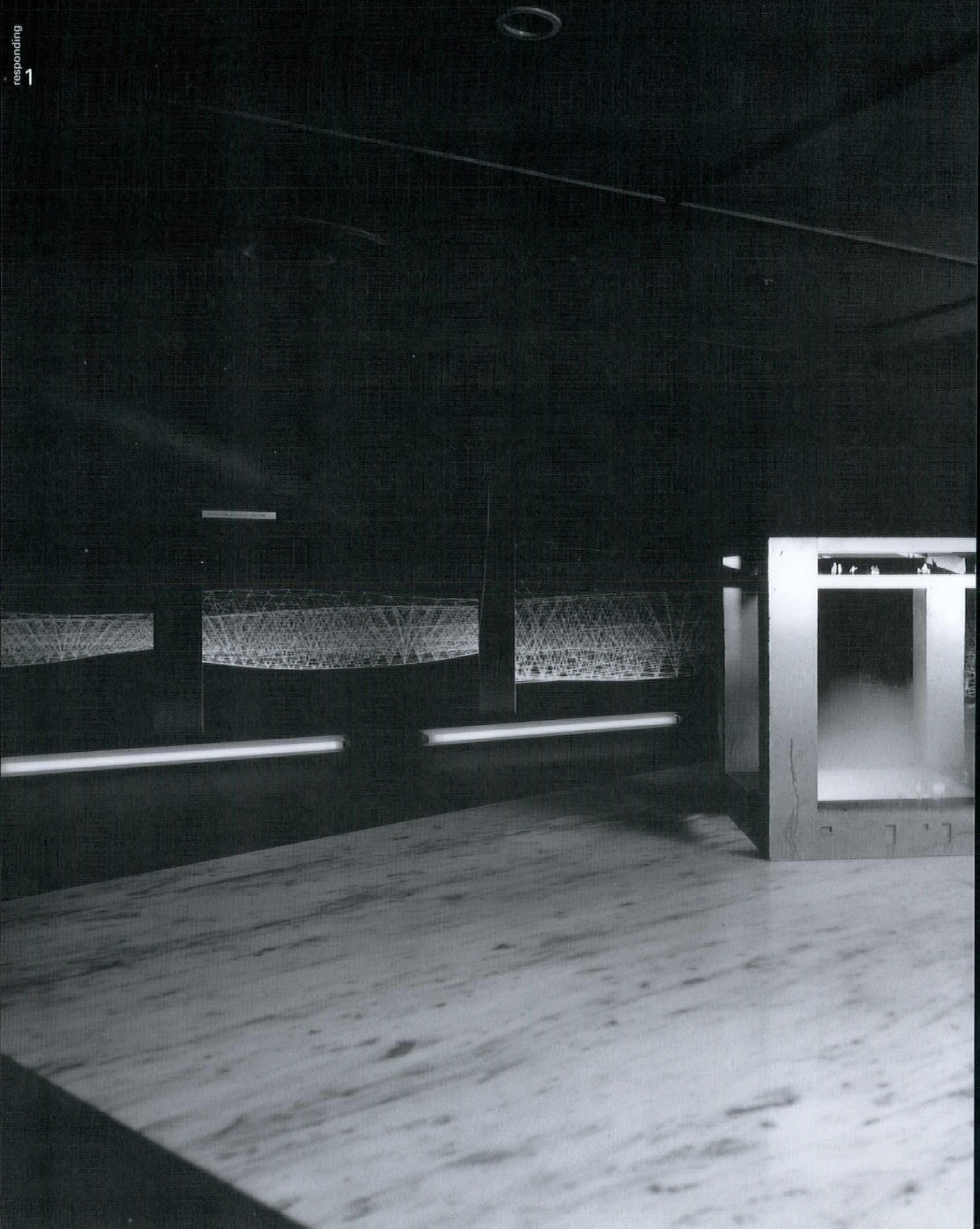
Hard and fragile glass chairs - WXYZ chair
VS
Continuously deforming process chair - 0°— 90°

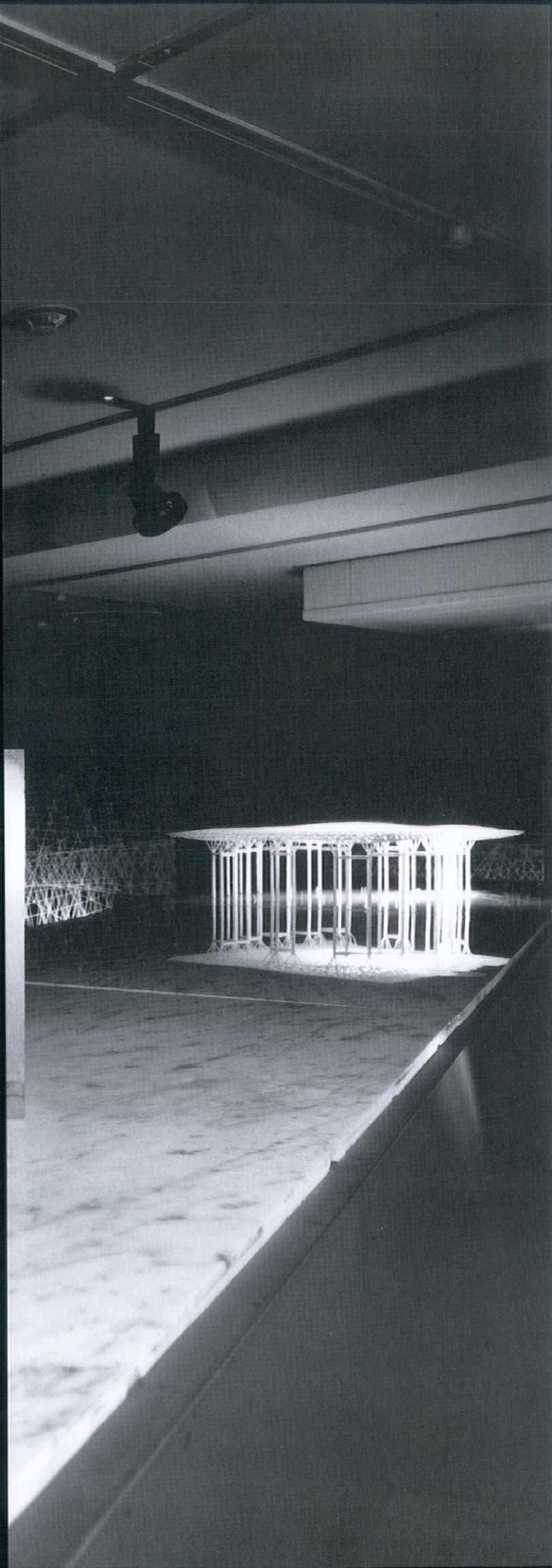
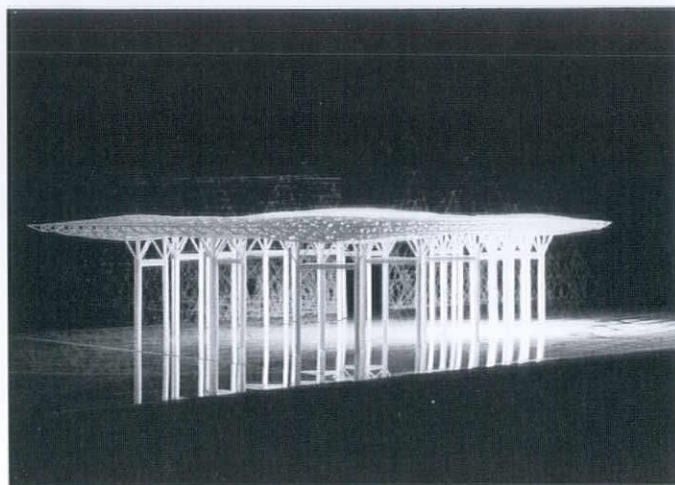


〈0°—90°〉 (1988)

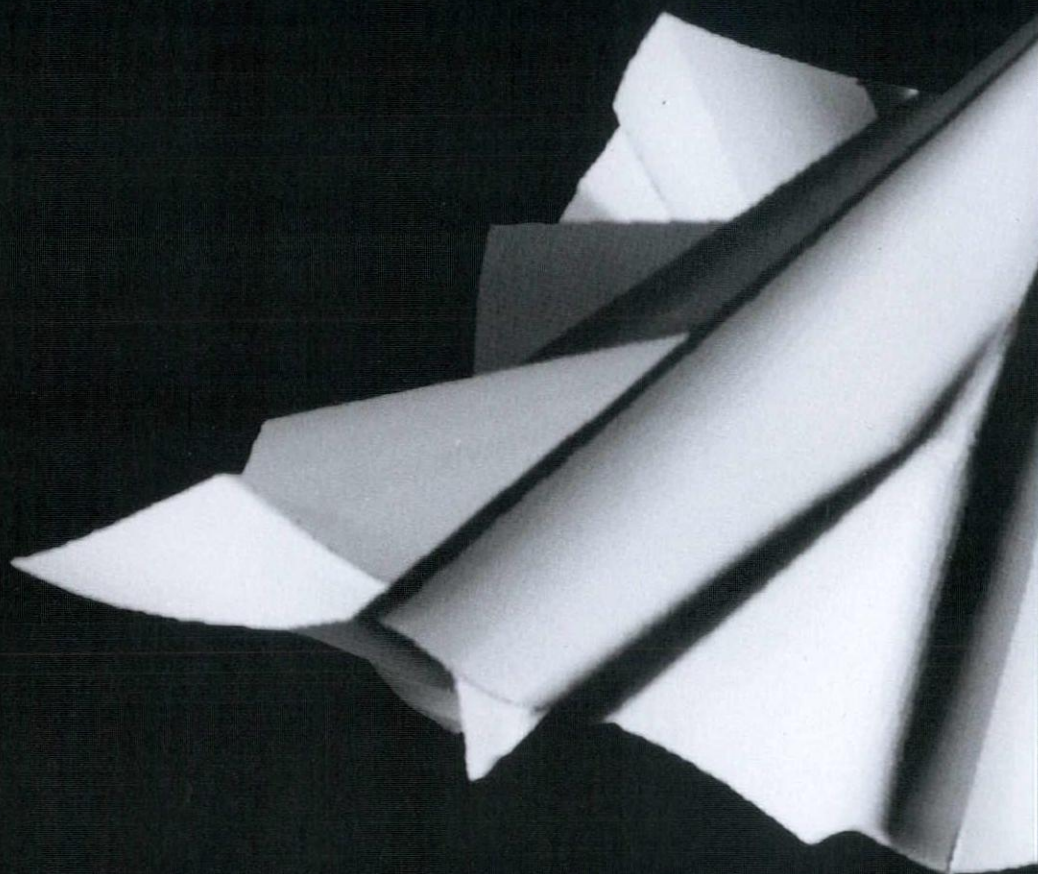
水の建築展

Aquarchitecture, Exhibition, 1991





wrapping or stretching

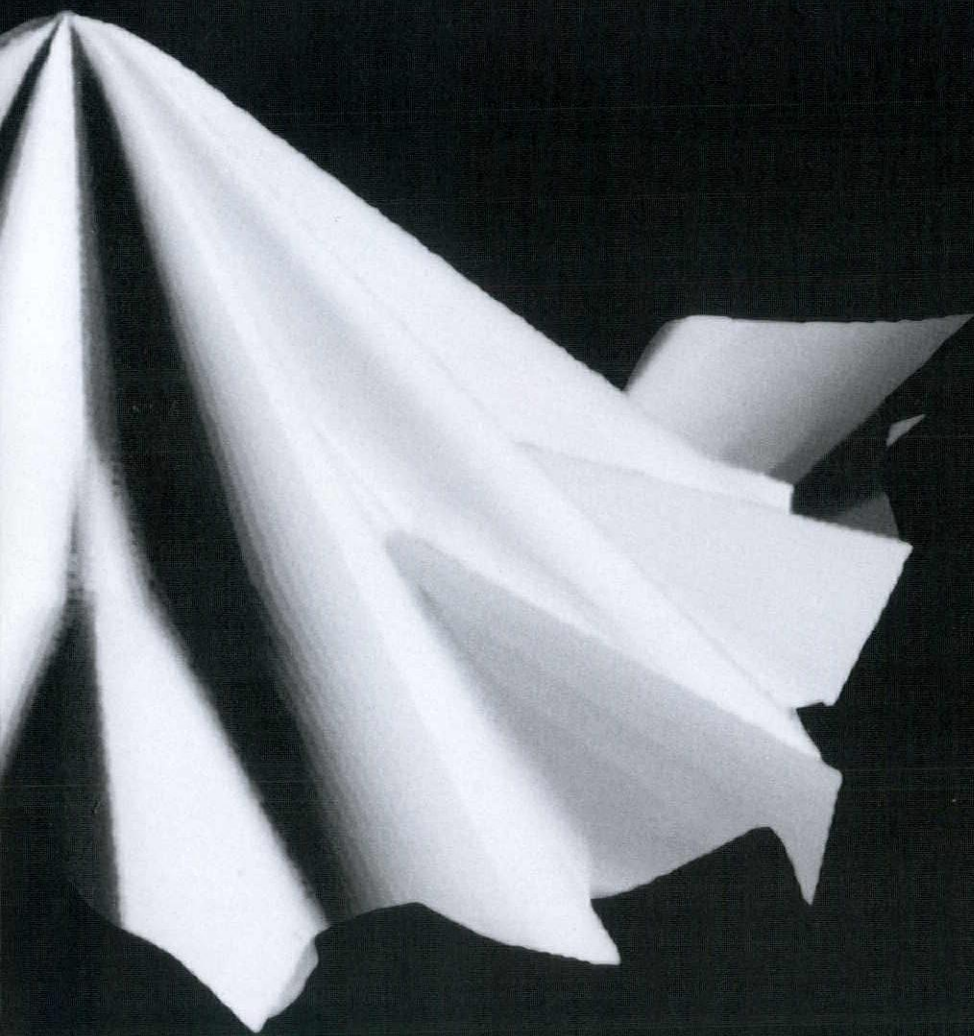


膜面を引っ張って緊張させるか、逆にひらりとかぶせるかで空間は柔らかくも固くもなる。境界の形がどうあれ、コンピュータで膜面を張ればシャボン玉のような極小曲面膜ができる。しかしそのままでは風や雪で変形してしまう。そこで、テニスのラケットのガットのようにならば張力を与えることで変形を止めることができる。引っ張ることによって柔軟性を保持しながら抵抗力（反撥力）を与える。緊張することは外周・境界に強度があつて初めて可能になる。風も吹かず、雪も積もらない時期も、その緊張は継続されエネルギーは

温存されている。ガラスによる極小曲面の等張力膜は、コンピュータと風洞実験によって作られた。〈グラスステーション〉(P.34)

一方、年とった小学校の同級生たちが集まって、運動場で竹の格子の網を作って仮の柱にかぶせたのが〈内住コミュニティセンター〉である。大地の基礎にむけて八方に引っ張って固定し、余ったネットのひだを、ふくらませたり、へこまして動かないように固定、人が乗っても動かない状態で上からコンクリートを打設、コンクリートが固まった時、それ迄頑張っていた竹の役割は終わって中心の仮

設の柱を取り除く。まるで世代交代のように、緊張していた空間はコンクリートのドームシェルとして、押し潰されないようガッチリした空間にとって代られた。ガウディのサクラダファミリア、フライオットーのマンハイムも、模型は逆さ吊りの懸垂曲線(カテナリー)を得るために作られ、逆に持ち上げて組積造のドームとシェルに変換している。その点では全く同じだが懸垂曲線でないばかりか可展開の正方形平面はだぶだぶにひだがあつたり、ヒラヒラと跳ね出した端部などは一見構造的に無駄に見える。しかし、その無駄に見える

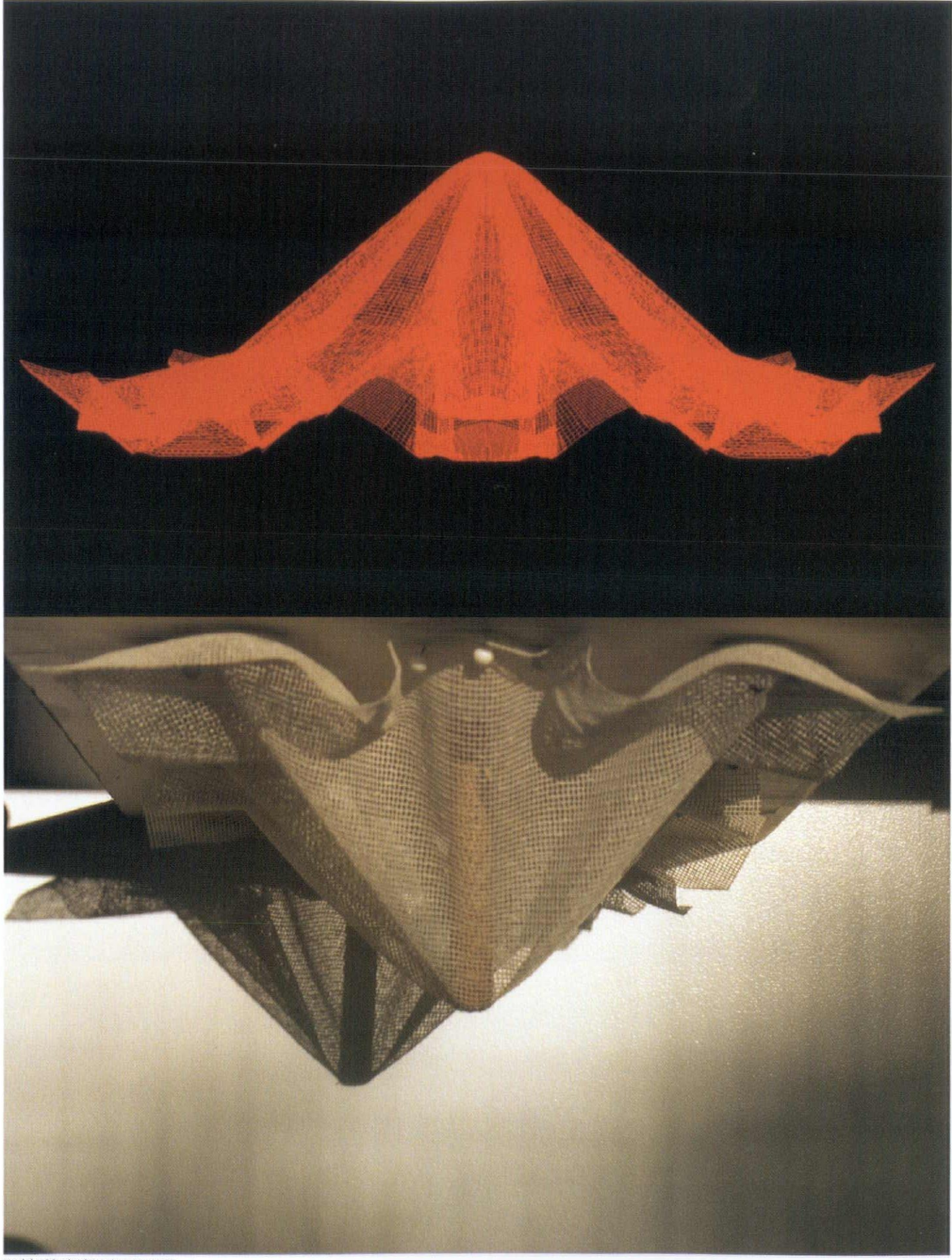


〈内住コミュニティセンター〉(1994)

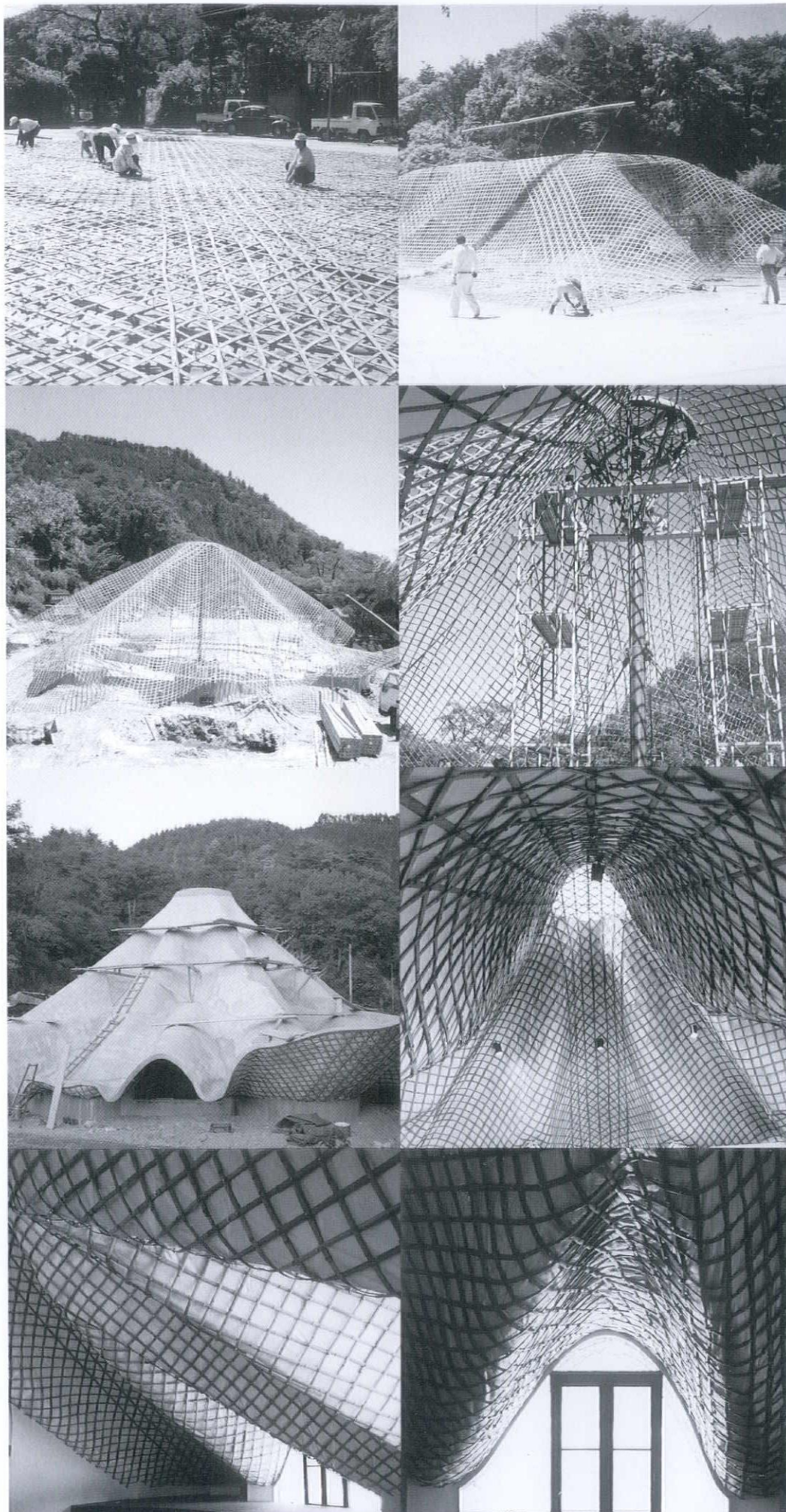
余剰部分の効用は、無駄を省いた美しさの緊張感とまるで反対の「存在感」にあり、小さな子供たちの遊び場になっている。〈内住コミュニティセンター〉(P.32)

緊張したガラスの極小曲面等張力膜とたるんで皺のよった竹のネットを型枠としたコンクリートの構築物の、極端な対比がここにはある。

内住コミュニティセンター
Naiju Community Center and Nursery School, 1994



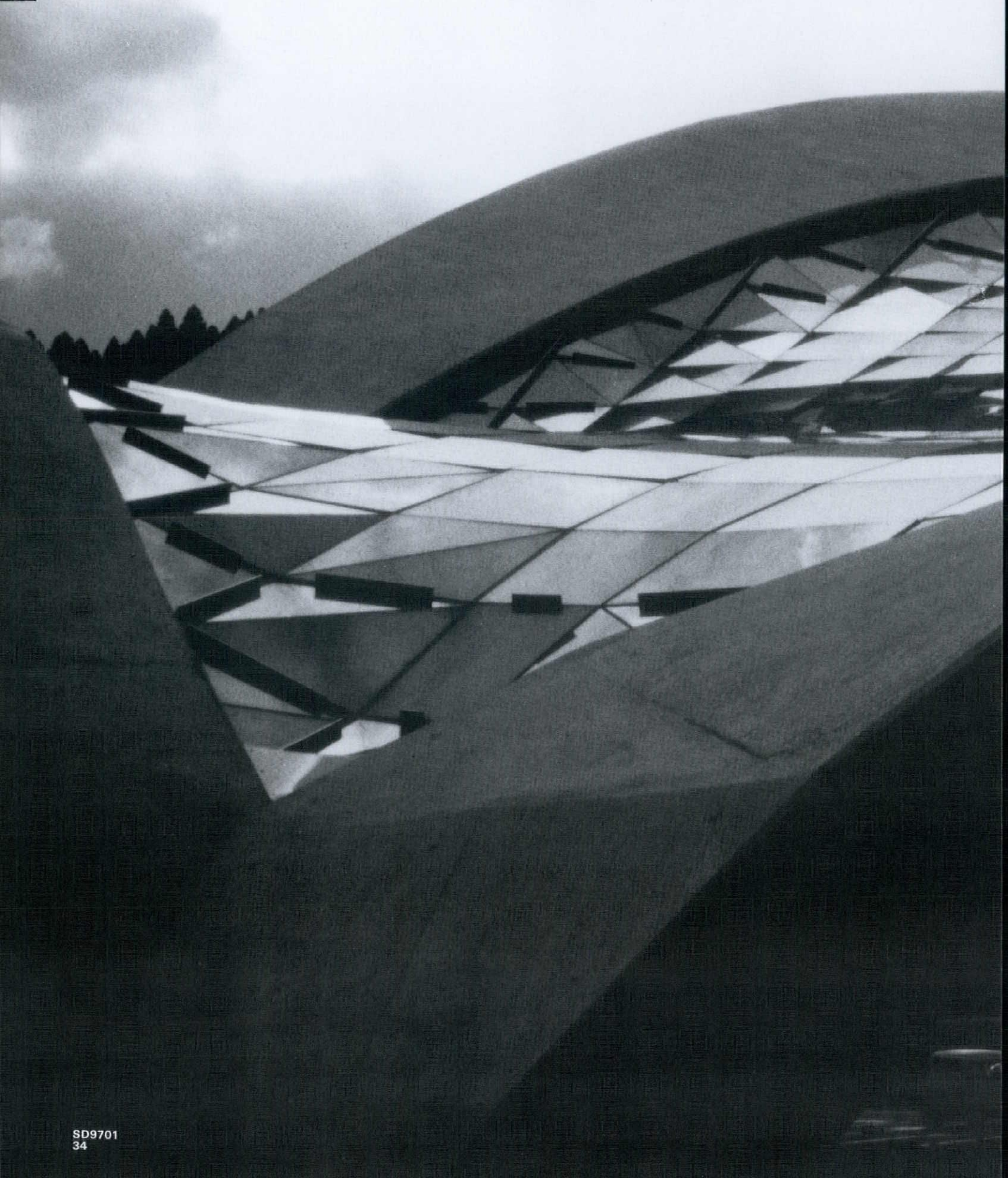
model with shadow showing post



construction with bamboo

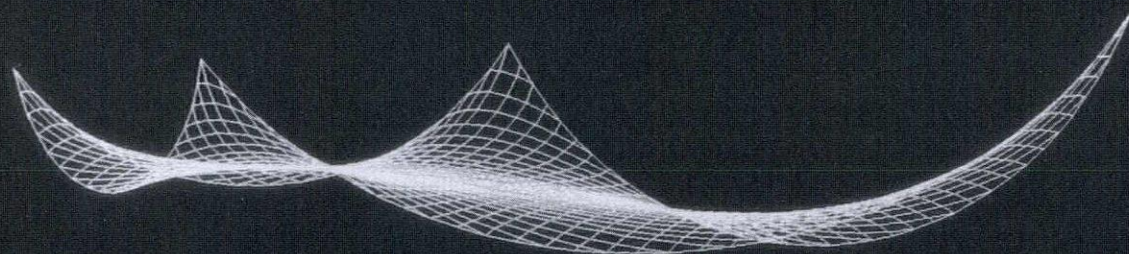
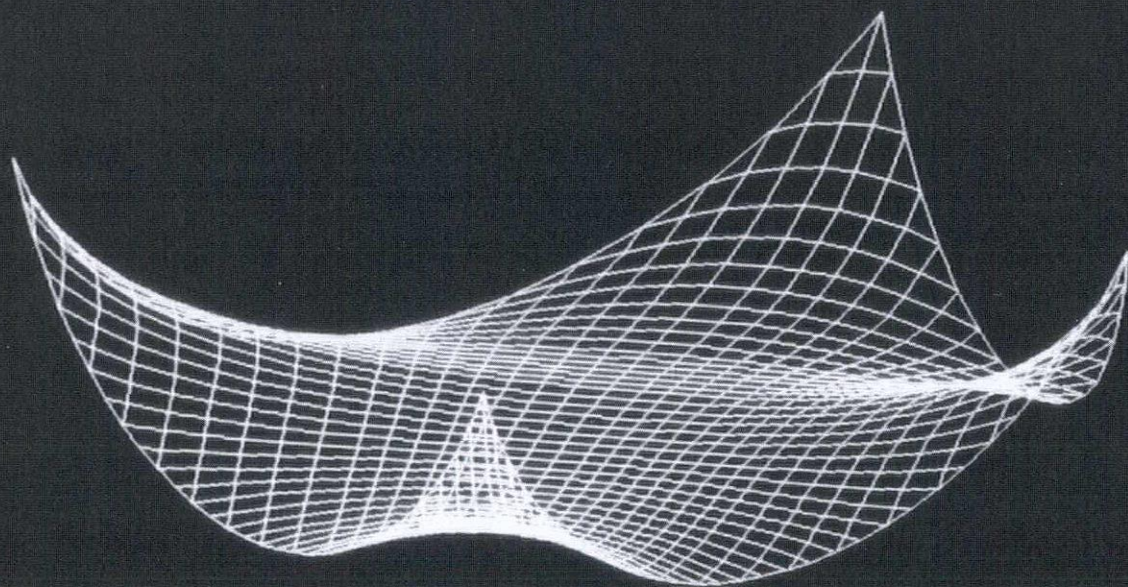
グラスステーション

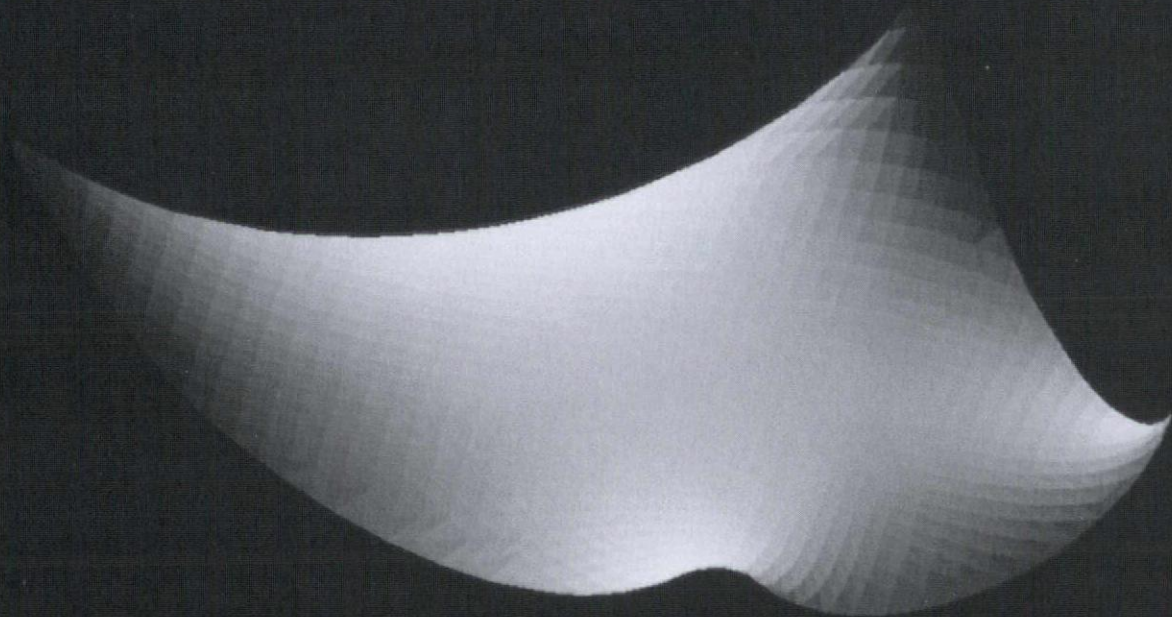
Glass Station, 1993





Glass canopy with pre-stressed steel net 3-D glass bubble stiffened considerably enough to stop deforming against wind and snow load. PAT.







melting and meandering

四辺形の直交グリッドからどのくらい逸脱できるものか、フリーハンドの概念図、関係図から面積を一定にして次第に平面形を象づかっていくプロセスにカルテジアン幾何学はまるで無縁であって、ただ溶け出した不定形の空間がつながっているだけである。

外周に一定のピッチで柱を立て、対面する柱までの距離に応じて屋根の高さを求めている。広さと高さに対応しているのは、機能的にも理に適っている。まるで溶解して流れ出し、曲がりくねった平面形(X,Y)に高さ(Z)が与えられて3次元になった空間。それまでに

見たこともないが懐かしいやまなみのようなふくらみ、その内部では、形は分らないが、包まれるような落ち着きが生まれた。薄肉コンクリートのドームシェルの型枠は竹を編んだネットであり、内住と異なって正方形グリッドは菱形に千変万化して皺や襷のない立体を象づくっている。広さも高さも自由でありながら、コンピュータ・シミュレーションによって経済性の高い自然の最適形状を得ている。〈筑穂町高齢者生活福祉センター〉(P.42)

従来の直交グリッドや直線から逸脱して、自由な曲線、曲面が可能になった時点で見え

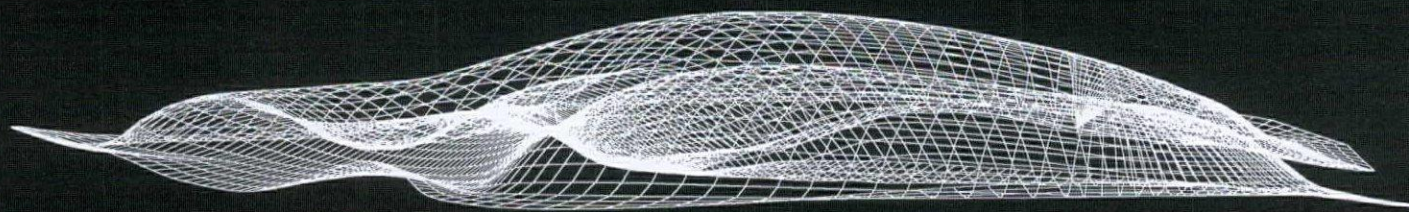
てくるのは、高次の工業化社会とプリミティブな原始社会の唐突な融合である。私達は回帰線に到達して反転し始めている。

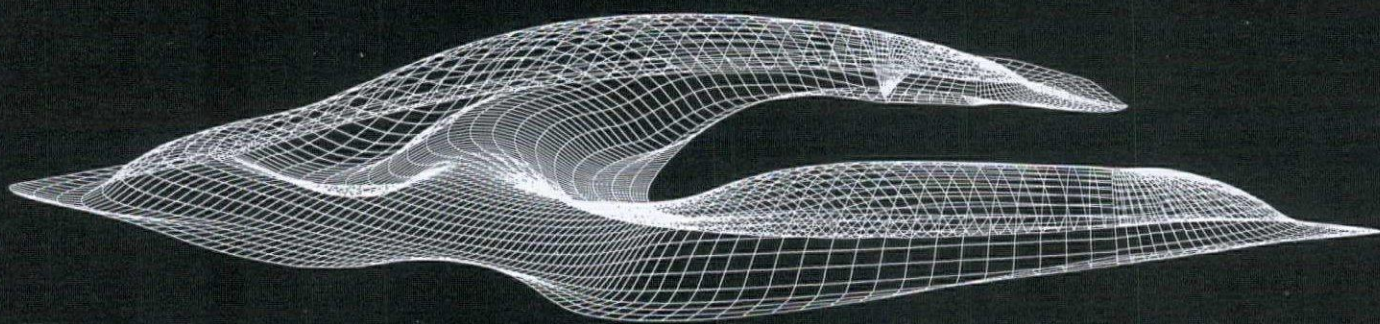
フライオットーのマンハイムと同様に見えるが、最適形状はオートマティックに行われ、境界外部で水平力を拘束しているヒラヒラの庇は前例がない。



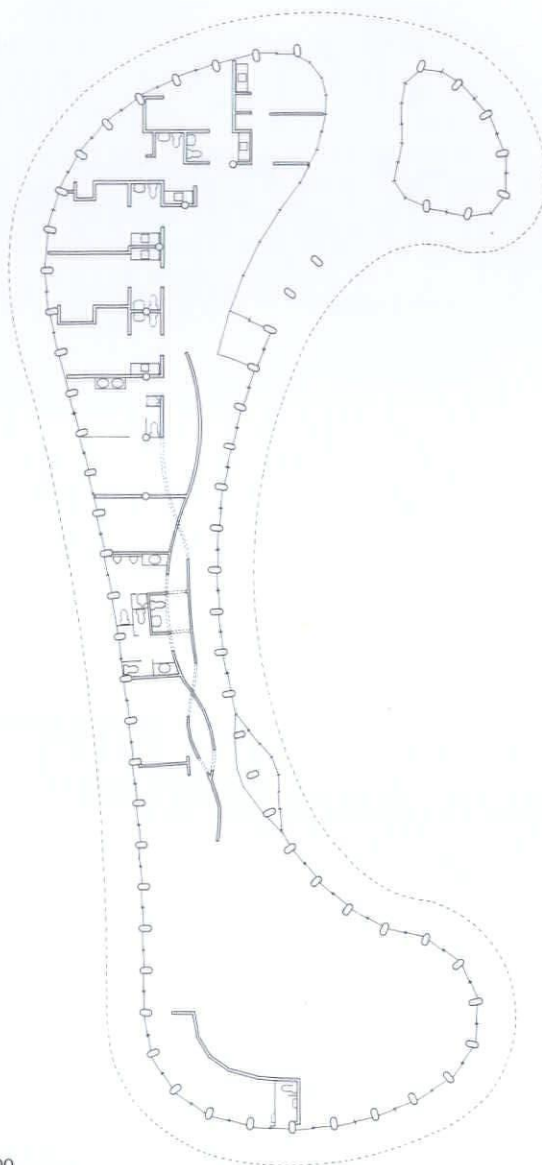
〈筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館〉(1995) roof CG

筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館
Uchino Community Center for Seniors and Children, 1995

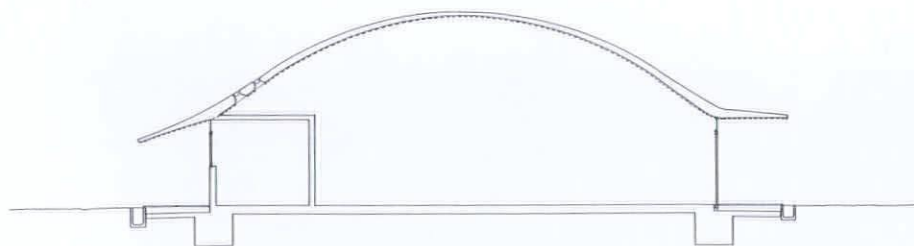






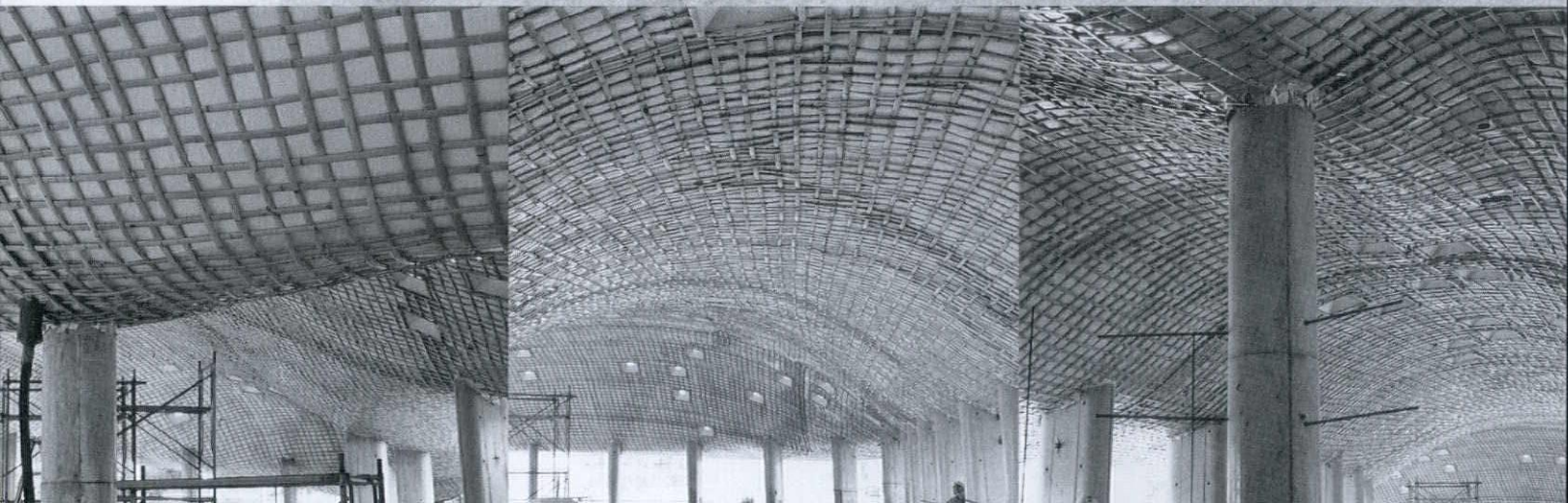
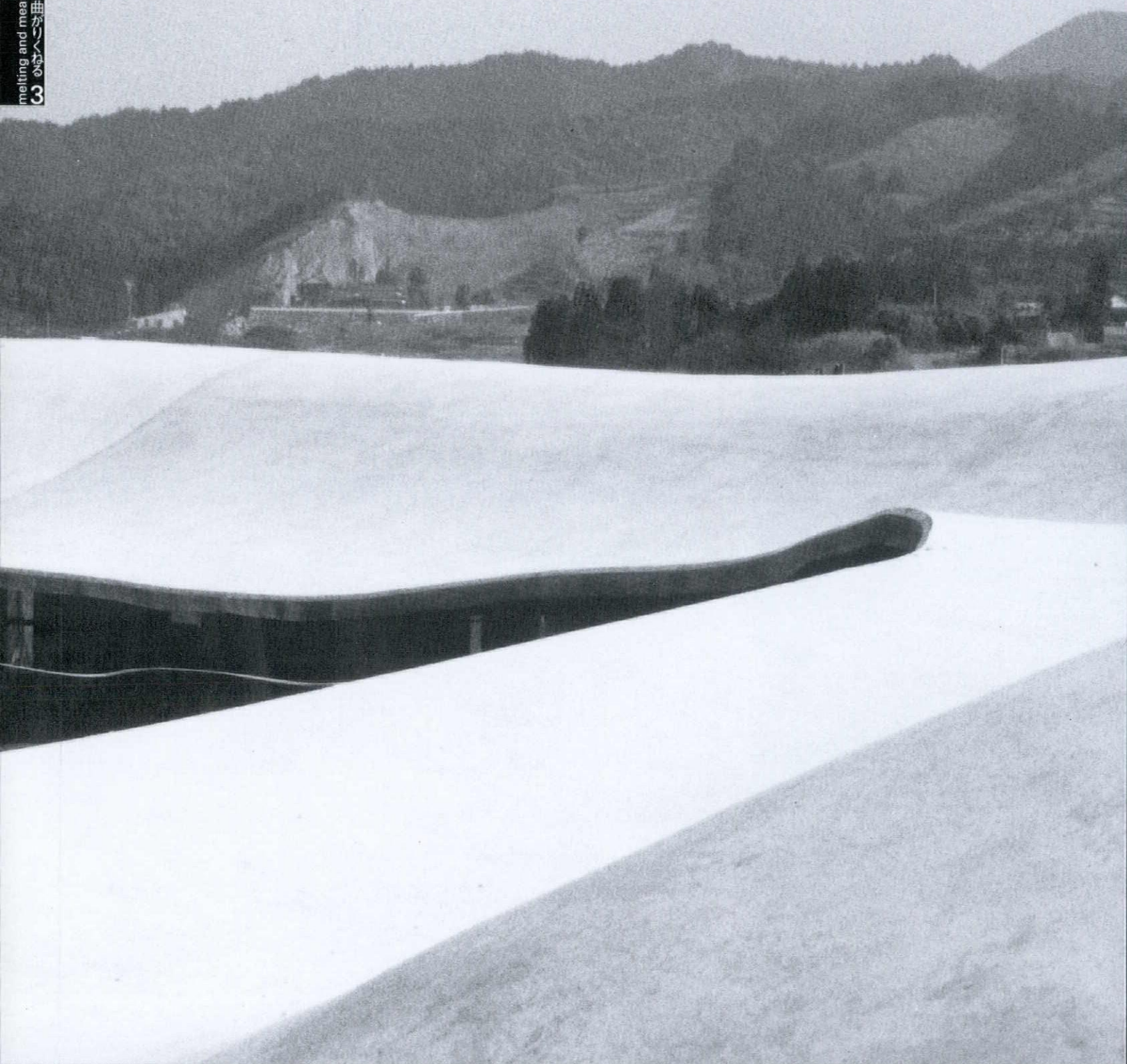


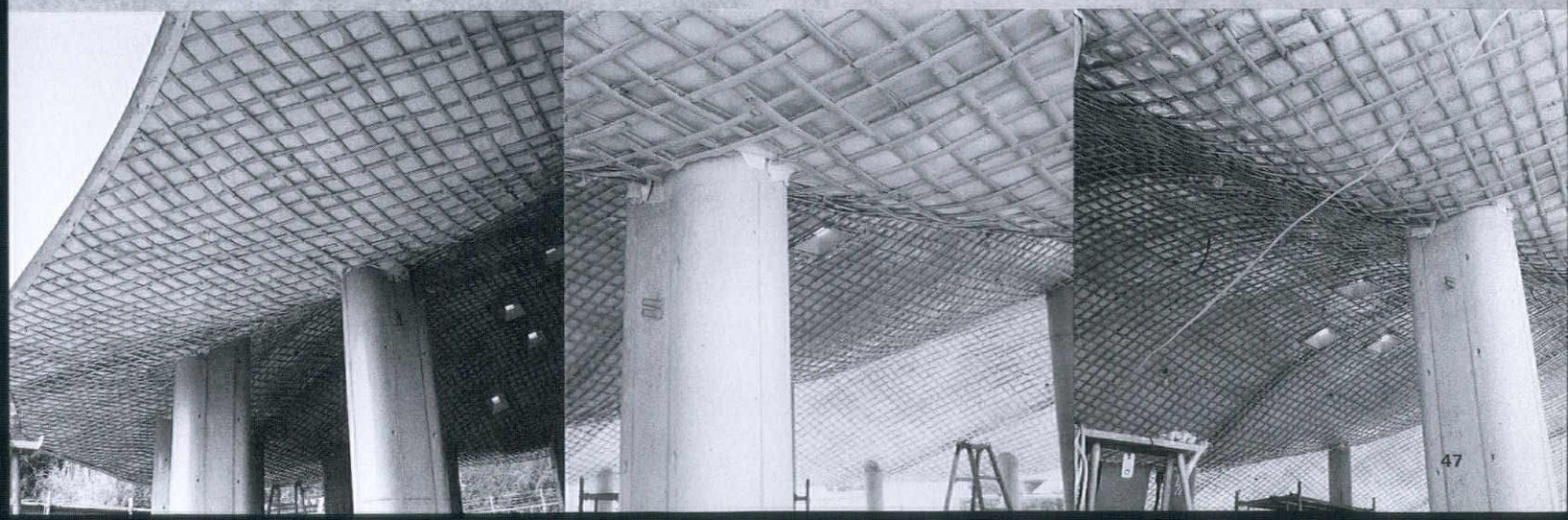
1階平面図 S=1:400



断面図 S=1:200

Free 3-D curved vault shell formed with bamboo net without a tie-bar, straight line except vertical lines and floor line, and right angle.





stiffening



重力に逆らって、自分自身が大地に立っているだけでも一仕事だが、横なぐりの雨風、揺れる大地に耐えねばならないとなると、足をふんばったり、木や岩に掴まったり、倒されまいと身構えることになる。つかい棒やワイヤで引っ張ってとめることもできるが、形態的に水平力に抵抗することもできる。例えば、〈海のピラミッド〉は内外の二重螺旋が桶のたがのようになっているし。(P.52) 〈筑穂町高齢者生活福祉センター〉ではドームシェ

ルの支点の外周部2m幅の庇が全周を取り巻くことでタイバーの代わりに水平力を抑えている(P.56)。〈小国町隣保館〉では木造シェルのバウンダリー(境界)を薄いシェルの面内に収めることができています(P.54)。〈金田町ふれあい塾〉では、12mもオーバーハングした木造のプリズムに構造用合板を張りつけて下がないようにしている(P.50)。

自然現象のように、歪んだり、倒れたり、壊れたり重力と時間が作用する以前に身構え

る必要がある。跳び出す前に身を縮めるように、水平の梁にキャンバーをつけてむくらせたり、変形の方と逆向きにする場合もあれば、変形を先取りしたり、プレストレスを入れてエネルギーを温存することもできる。

風圧で最も大きく変形するガラス面の中心部分を二方向のテンションロッドで固定する方法、視線の邪魔にならないよう上部に吊り上げる場合支点上部に方立(マリオン)が圧縮材として必要になる。引っ張り材は常に圧



〈金田町ふれあい塾〉(1994)

縮材とベアにして閉じなければならないが、より大きな変形に抵抗するためにプレストレスを入れておく時は、その分圧縮力が余計に必要な。変形を小さくするために固くしたとしても、相変わらず変形はなくなるわけではない。

窓のサッシュなどの1/150から構造体の1/600という変形量によって、硬くするにしても弾性体の塑性範囲で決定される。衝撃に強く変形能力の大きい割れにくい強化ガラスと、割

れやすいが割れても安全な網入りガラスの使い分けも必要だが、強化合せガラスにできれば硬さと強度の点で申し分ない。衝撃吸収には、部分的な柔らかさが必要だが、固くすることによって変形に抵抗する場合は全体で受けることになる。肉を切らせて骨を切る剣の極意は、車のクラッシュゾーンと同じである。固いスチールのボルトと柔らかい木材の破壊試験で、安全率の違いからいつも真先に壊れるスチールは同時に破壊に到るべきではない

だろうか。

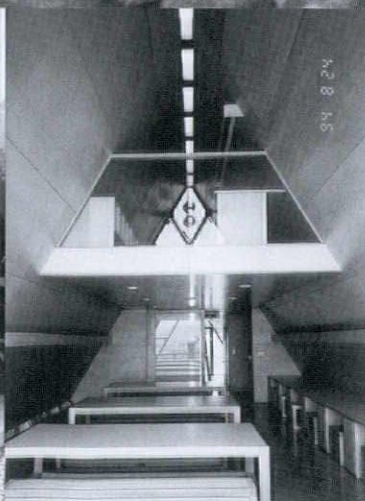
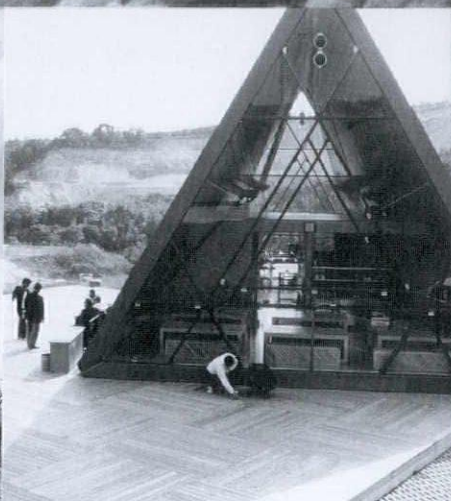
破壊のプロセスを逆廻しすることによって見えてくる剛性と柔軟性の組み合わせは、物理的な事象に限らない。企業のような組織や都市も同様ではないだろうか。内部に柔らかな自己変革能力を持たない組織は、目に見えない部分から硬直し始める。モザイク状に自己増殖自己治癒力を持つ柔らかな都市が、将来に向けて生き延びることができる。

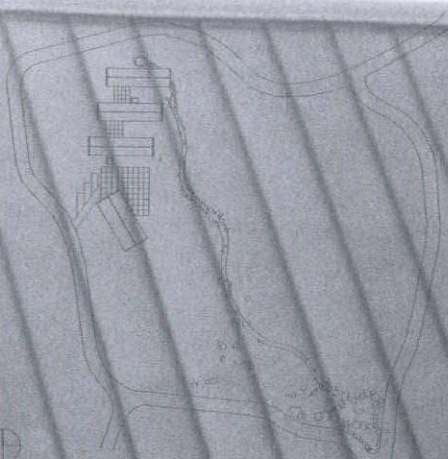
金田町ふれあい塾

Kanada Children Training House, 1994

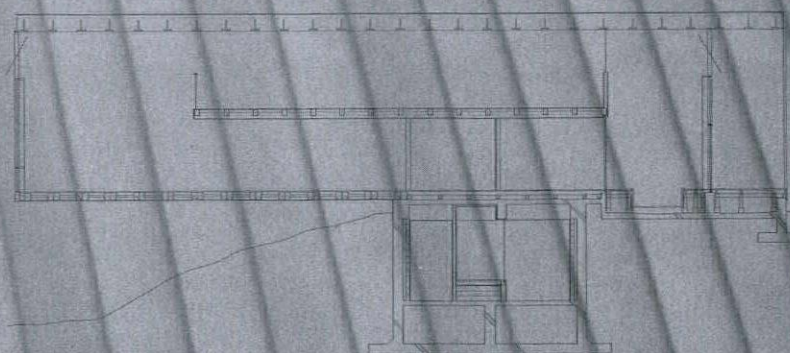


no truss, but plywood stiffens the structure, 12m cantilever in wood.

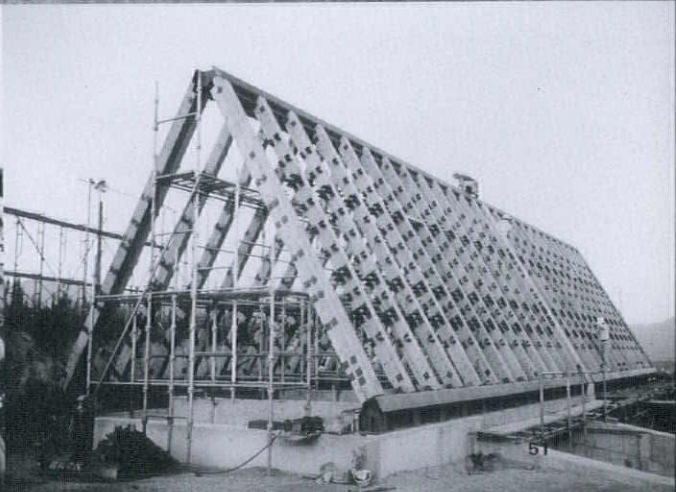
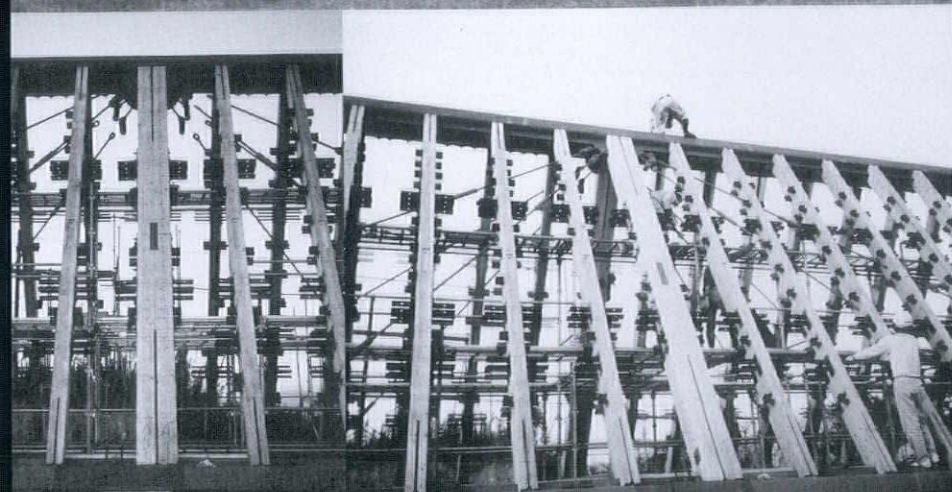




配置図 S=1 : 2500

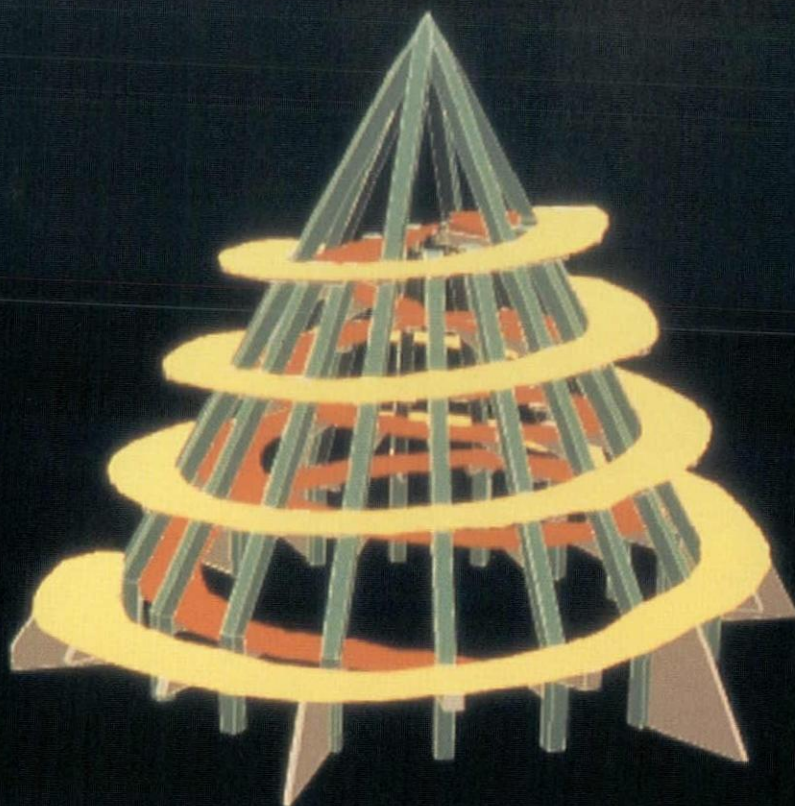


断面詳細図 S=1 : 200

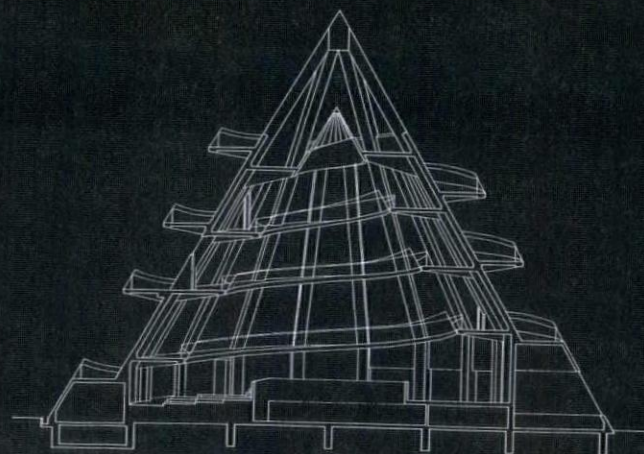


三角港フェリーターミナル 海のピラミッド
Pyramid of Sea, Ferry Terminal, 1990





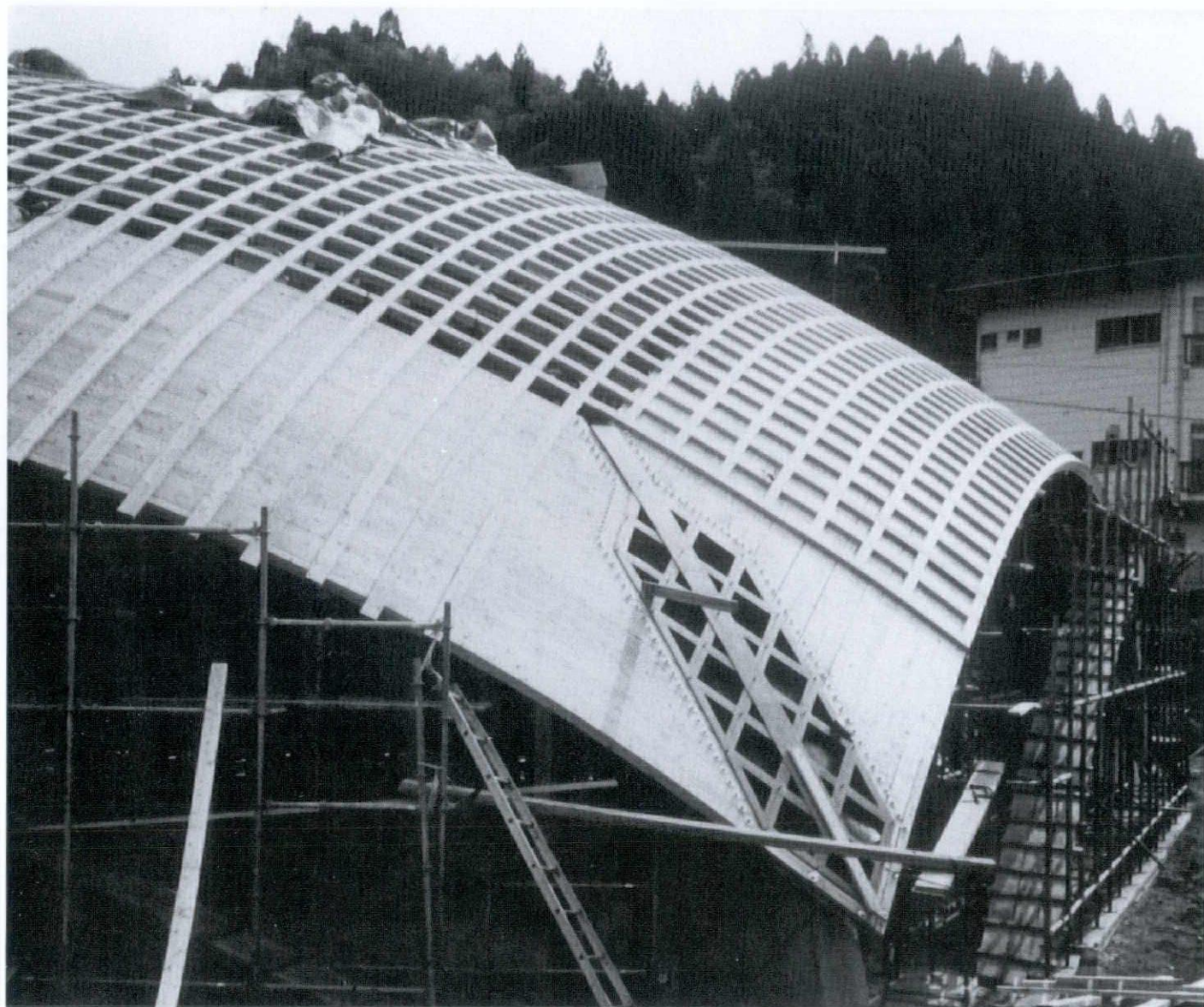
Double spirals in opposite direction stiffen the cone.



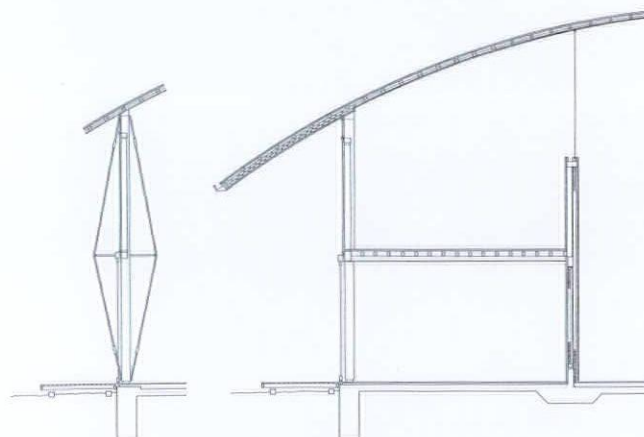
断面図 S=1 : 450

小国町隣保館

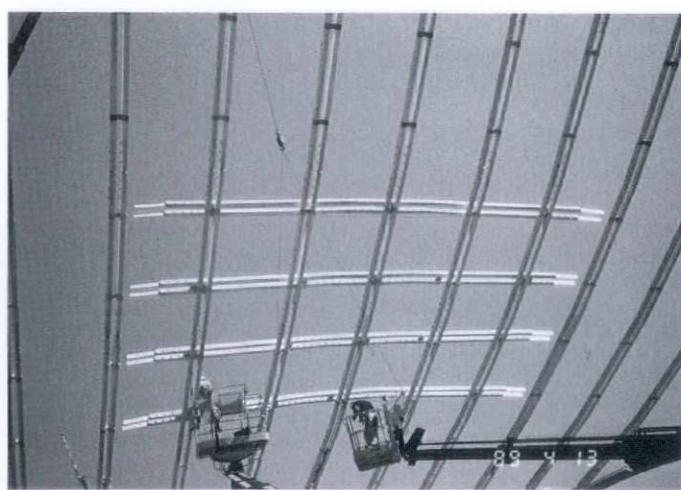
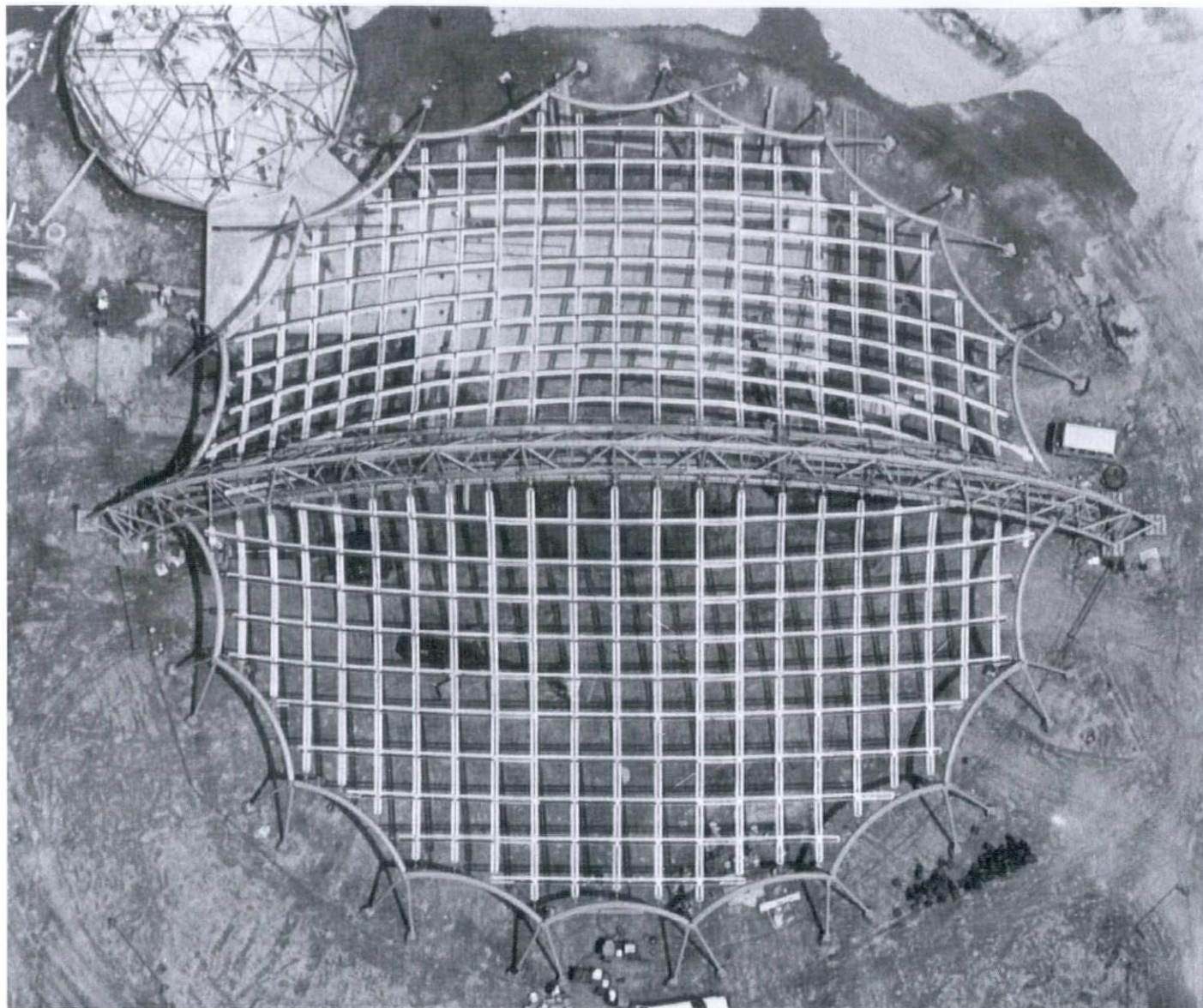
Oguni Community Center, Parasol Center, 1995



3-D shell of wood lattice with plywoods without obvious boundary owing to plywood stiffened 4 side edges.

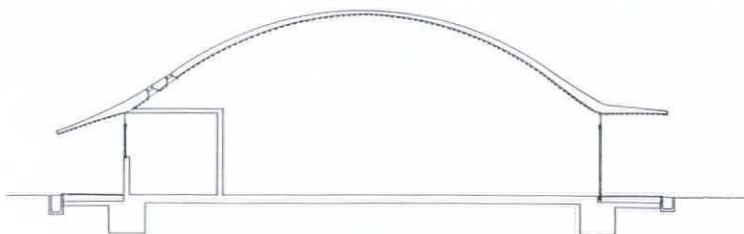


断面詳細図 S=1:200

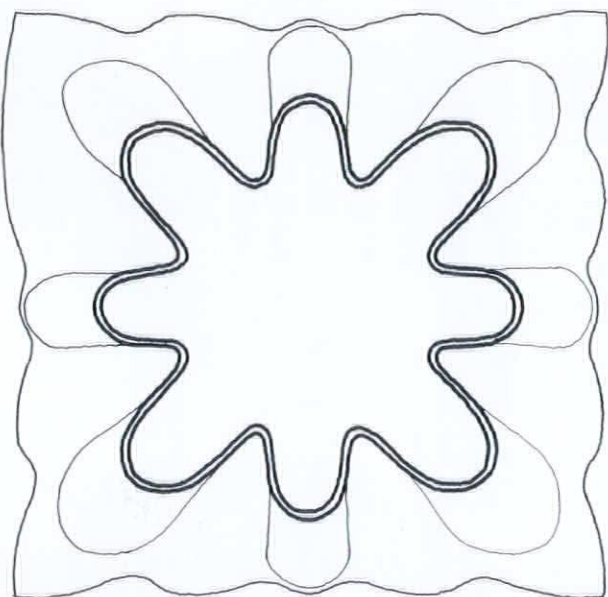
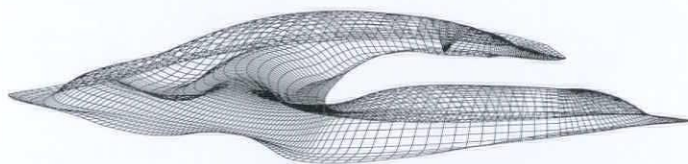


3-D wood lattice, tensile membrane in 2-way stiffness of HP form.

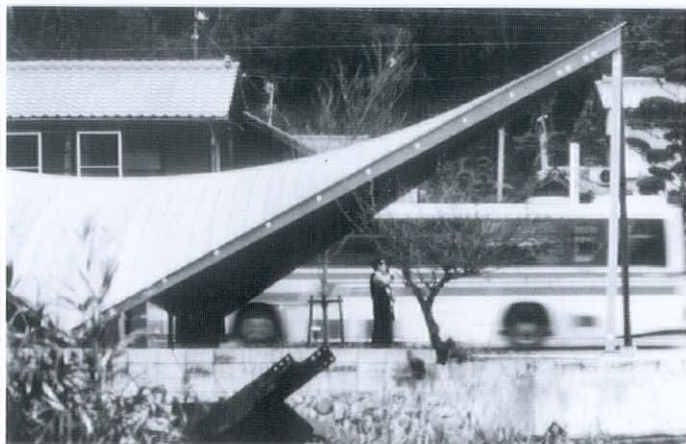
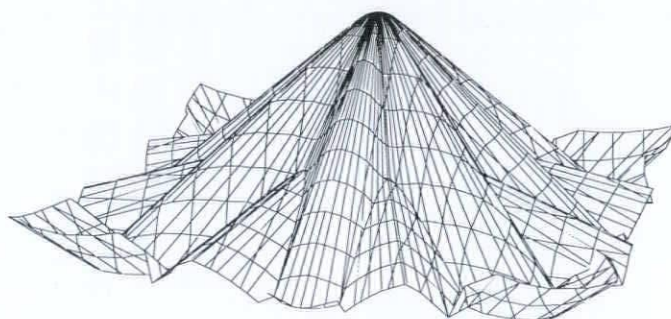
自重+荷重を受けるハンギング材の懸垂曲線に直交して、負圧・正圧に対してバタつきを止めるブレース材。
柔らかく見える硬い三次曲面。



〈筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館〉(1995)
つぶれて拡がろうとするボールドを拘束するひらひらのつば。
麦わら帽のつば。



〈内住コミュニティセンター〉(1994)
柔らかくフニャフニャの形でも、柱を中心にして緊張すれば固くなり重いコンクリートが圧縮力を負担すれば、柱は要らなくなる。
ひだをつける。



〈飯倉タクシーステーション〉(1987)
四角い平面を大きく折り曲げたら、剛性が生まれる。HPシェル。
折り曲げる。





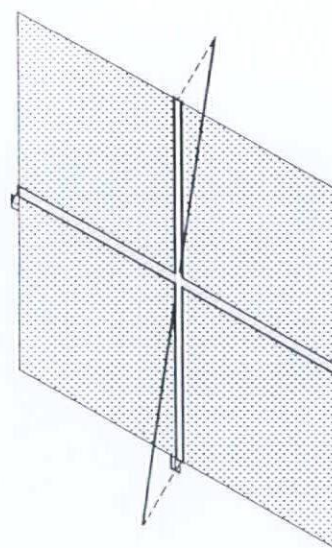
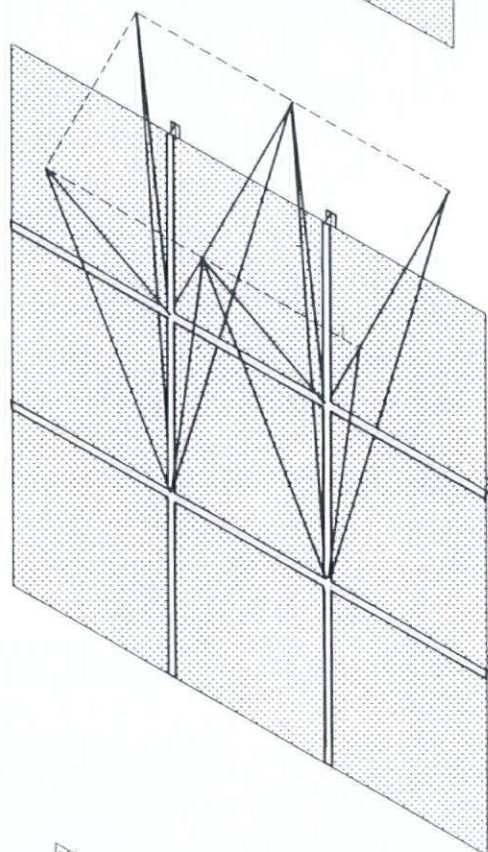
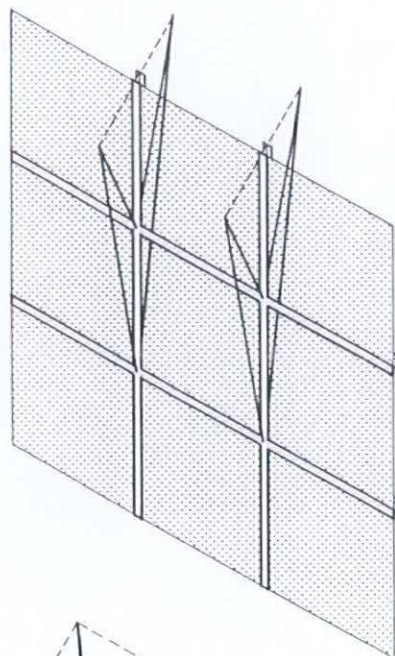
〈西部ガスミュージアム 自然現象美術館〉(1989)
カーテンウォール。マリオン上の変形の大きい中心を内外で拘束する。



〈ふるさとバレス ギャラクシー富山〉(1992)
10mの高さに対して通常のマリオンの見込みを1/4以下にするテンションロッド。床面での視野は開放される。

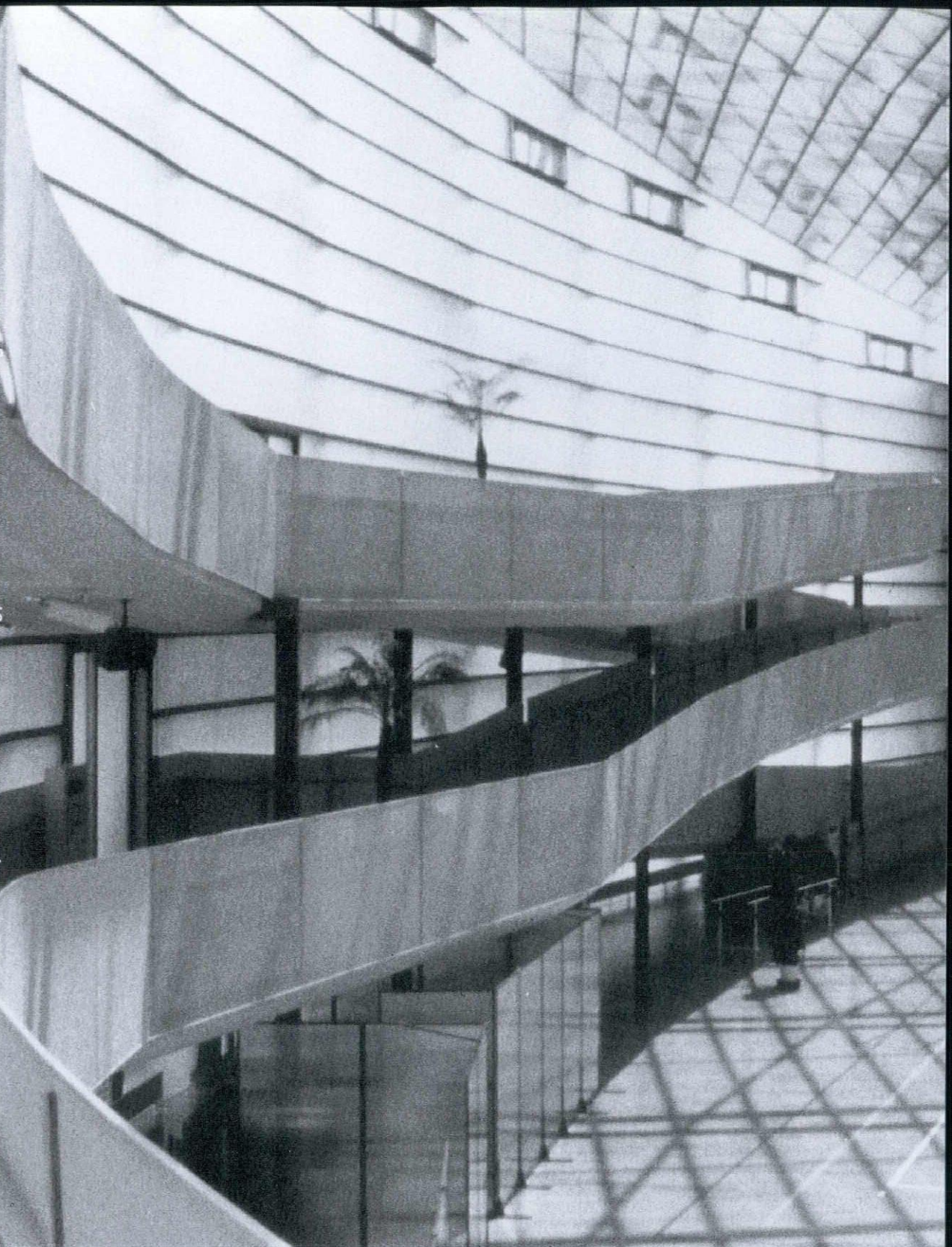


〈原田ビルディング〉(1993)
視野を妨げるマリオンを最小にするテンションロッド。



distorting

Distortion from a static order generates power to recover in time and space. Between solidity and elasticity there is potential movement and energy to retain or to maintain the logistics.



カルテジアン幾何学に基づく秩序が原型としてあるために、それが歪んだり変形したりすれば混乱を招き、破滅的状況に陥ることになる。敢えて、意図的に歪めたり、変形することの犠牲は少なくない。共感したり、納得することが困難だからである。しかし、どうしてもやむを得ぬ事情があって内・外部の応力に変形をもたらすことがある。自然現象に回答して変形しながら最適形状が決定される、私のいう「自然現象の建築」と異なり、敷地形状のもとらす軸線のずれと歪みに対応する

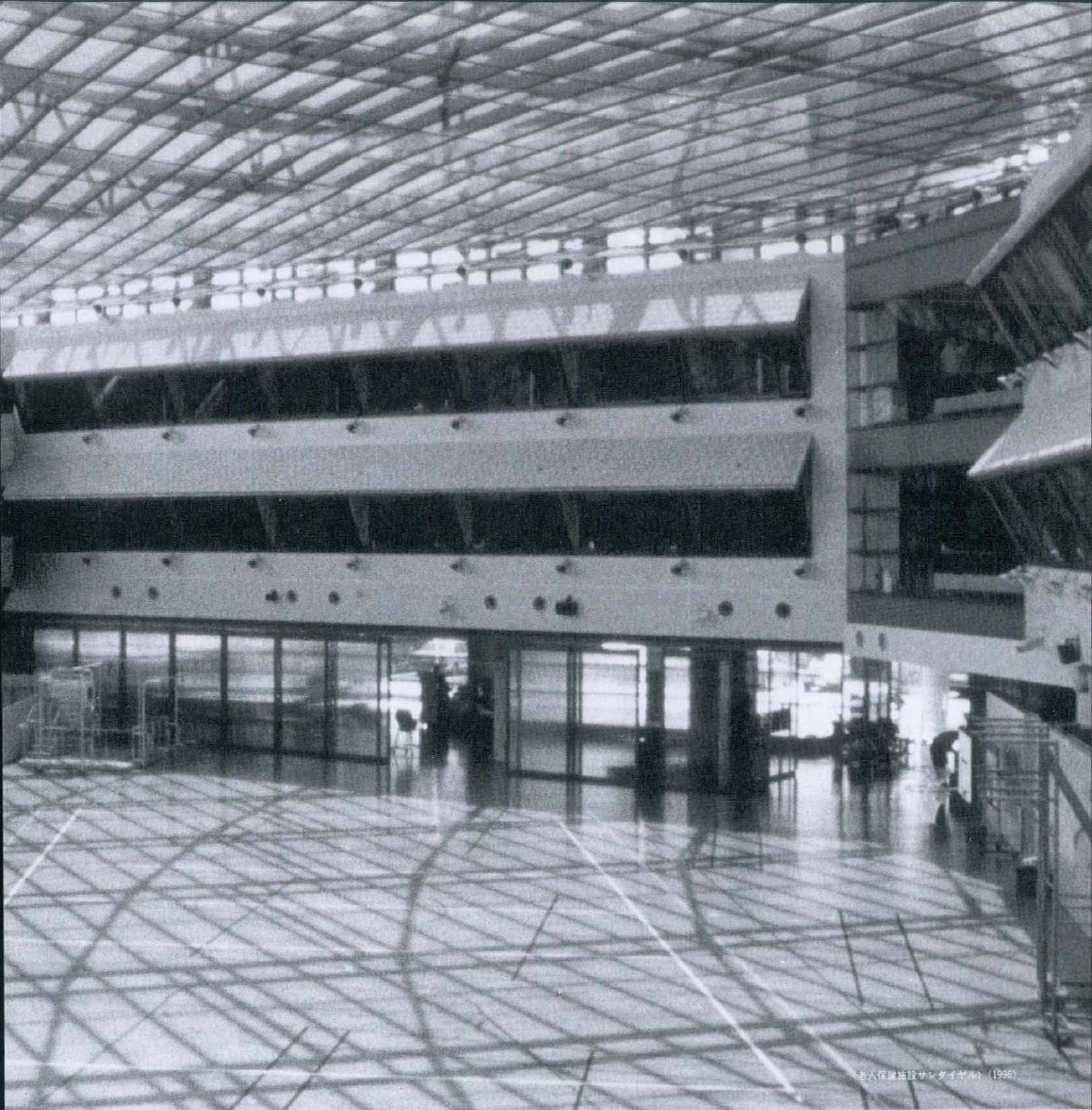
形で、あらゆる部分が変形を始めたのが、〈老人保健施設サンダイヤル〉である (P.60)。

10数年前の〈時計の家〉で、太陽に向かって回転し始めた動きが加速されたように見える。アトリウム内部では音響・熱環境が、そうして屋根の水勾配、複数のスロープなどがアトリウムの内部形状に複合的な変形を要求し始めたのである。敷地条件という「社会的要求」「音・熱などの室内気候の要求」が応力として作用した結果、平面を保った床以外は、音響のために二次曲面へ、さらに焦点を

消失するために三次曲面へ変形を余儀なくされている。

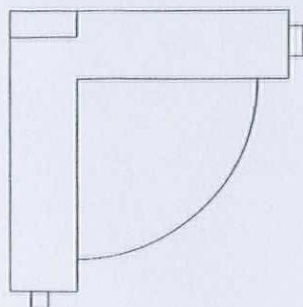
〈筑穂町福祉総合エリア〉(1998)のホールでは、同じ理由で壁・天井は多面体の三次曲面であり、垂直性もなくなっている (P.66)。

〈ミズレイコTOKYO〉(1997)では、道路・日影斜線・高度制限・異なる用途地域が一次的に外形を規制し、既存樹木を避けたり、北側隣地の要求で、冬至の太陽角度に併せて斜めに歪められている。二次的な変形である (P.64)。

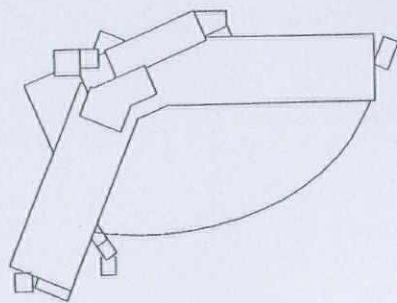


「老人保健施設サンダイヤル」(1996)

見慣れた幾何学形態からかけ離れてしまった見慣れぬ形態は、決着を見ているわけではなく、未だ変形のプロセスにあると考えるべきではないだろうか？既に加えられた様々な応力と新たな変化の圧力を跳ね返すエネルギーを蓄えておかねばならない。

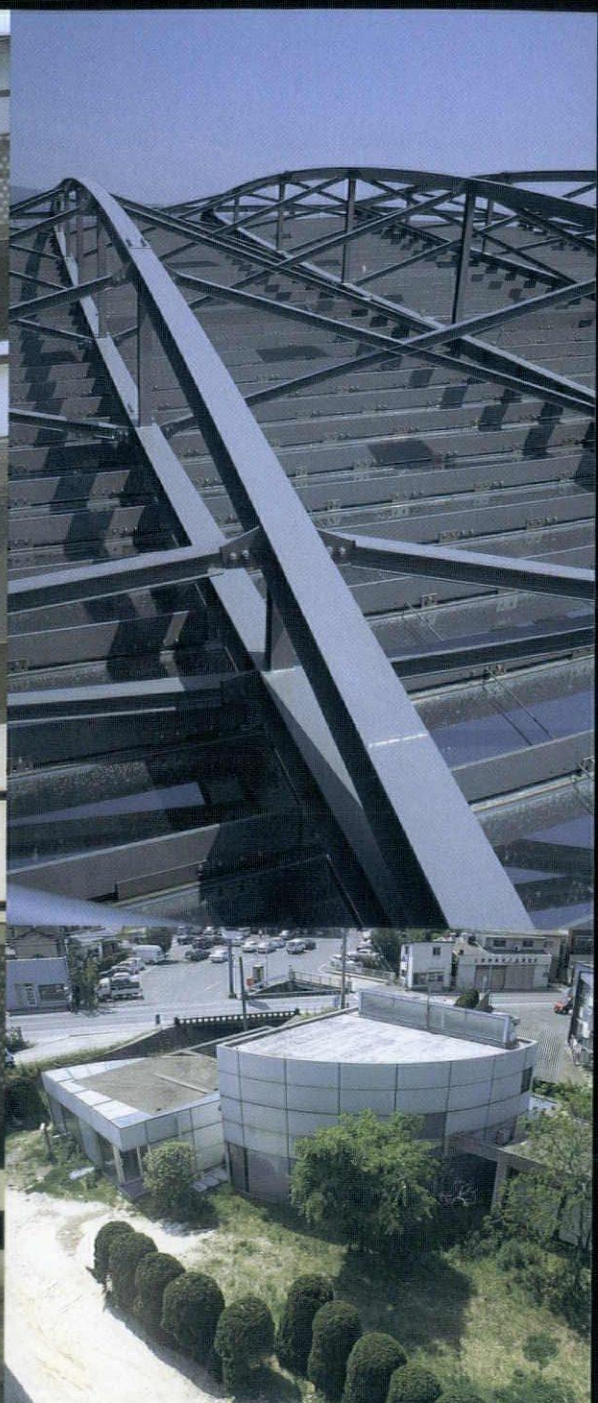
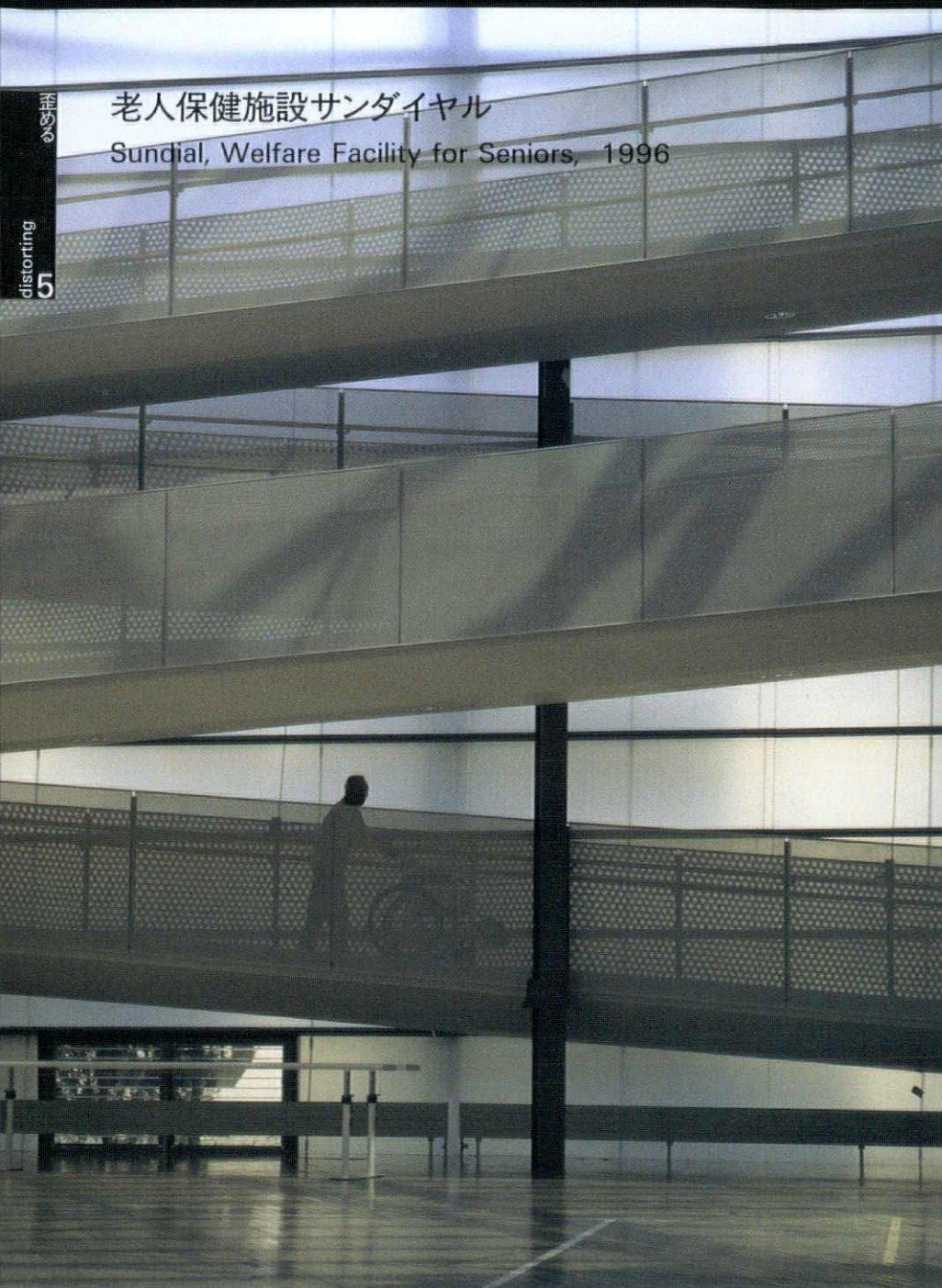


Distortion by social stress

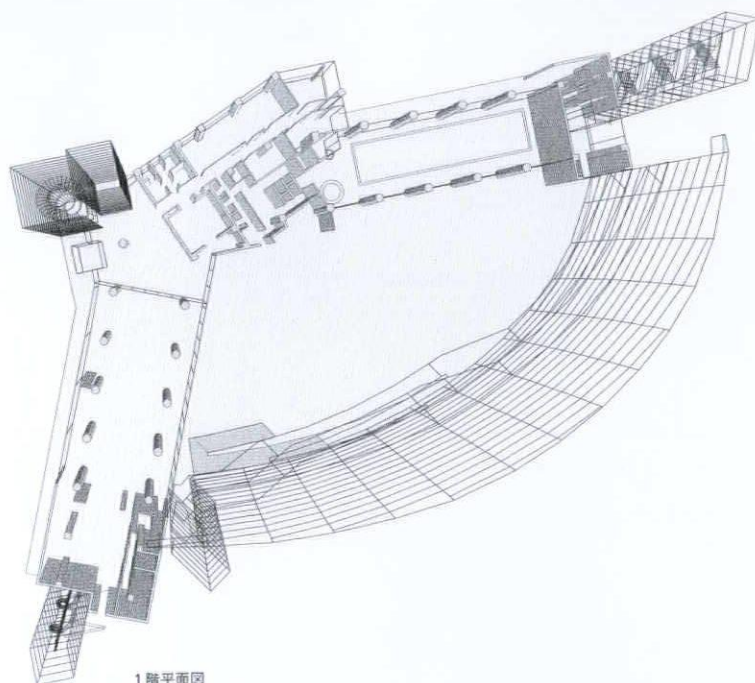


老人保健施設サンダイヤル

Sundial, Welfare Facility for Seniors, 1996

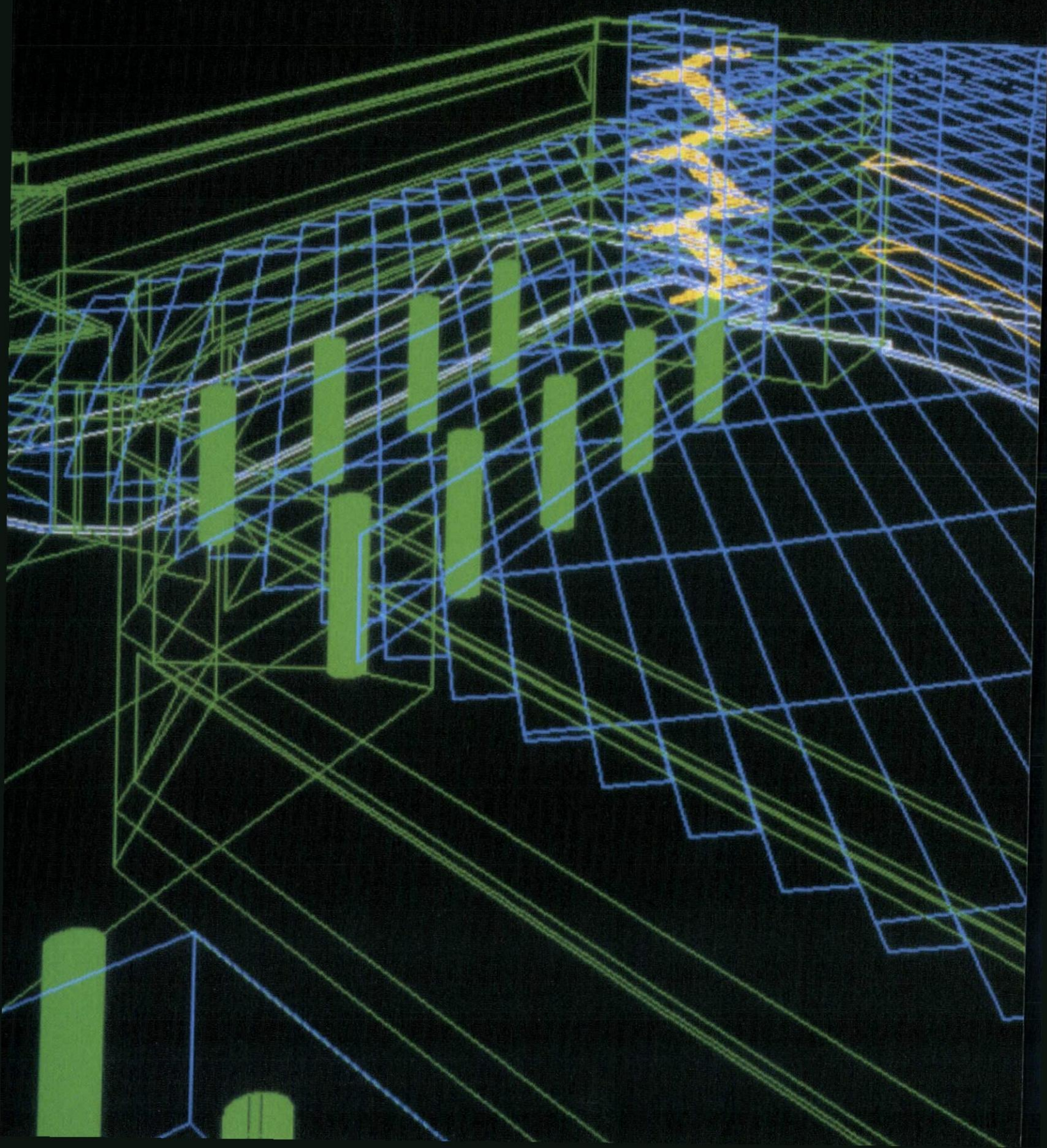


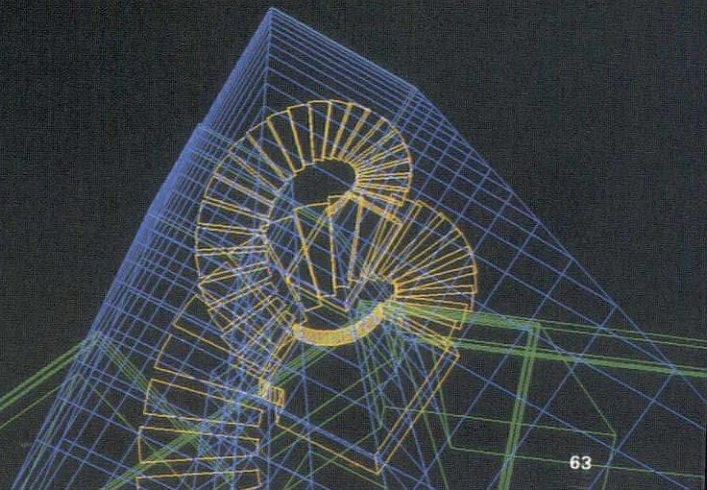
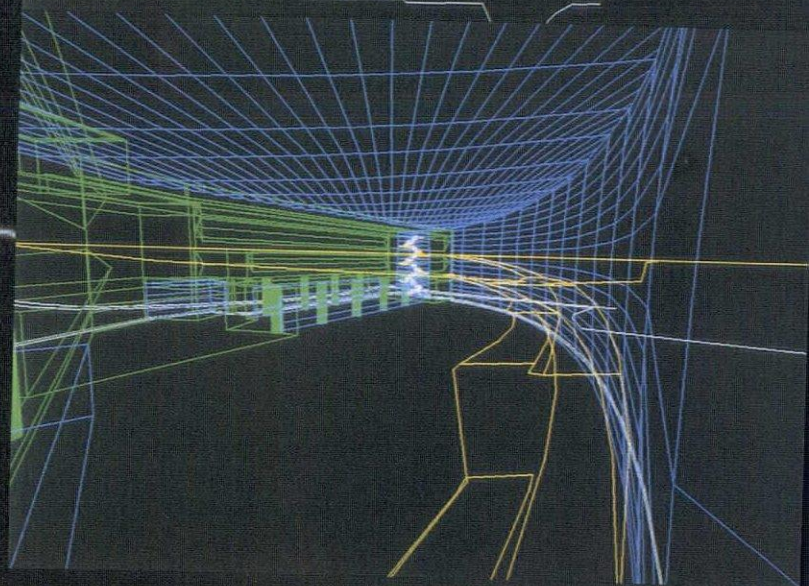
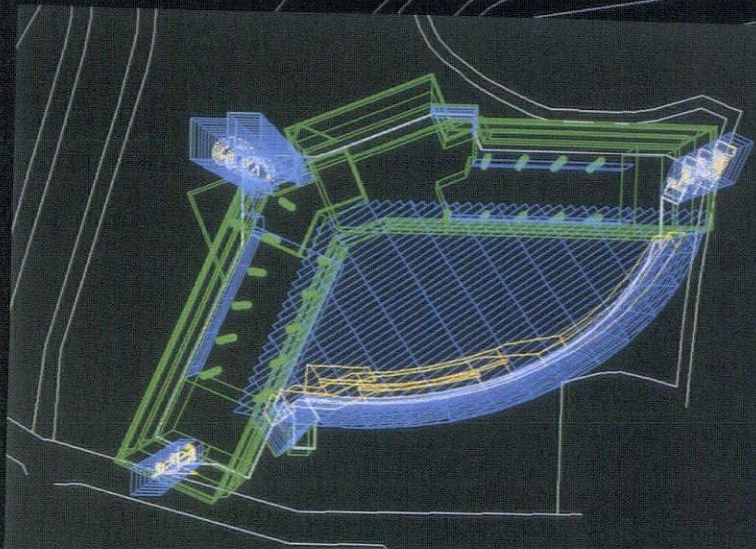
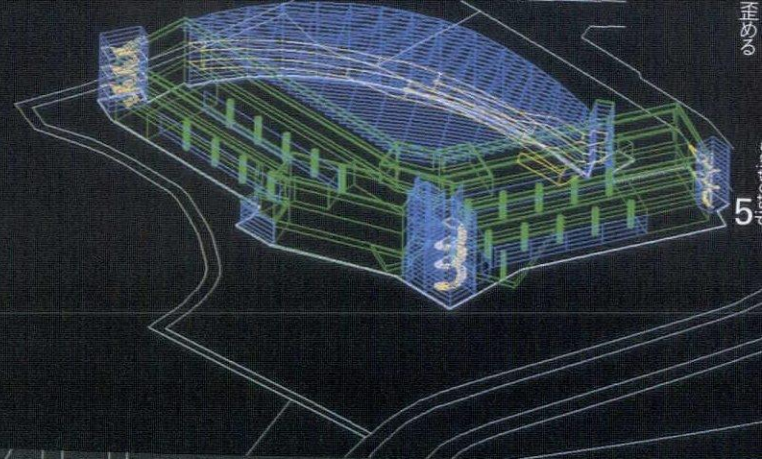
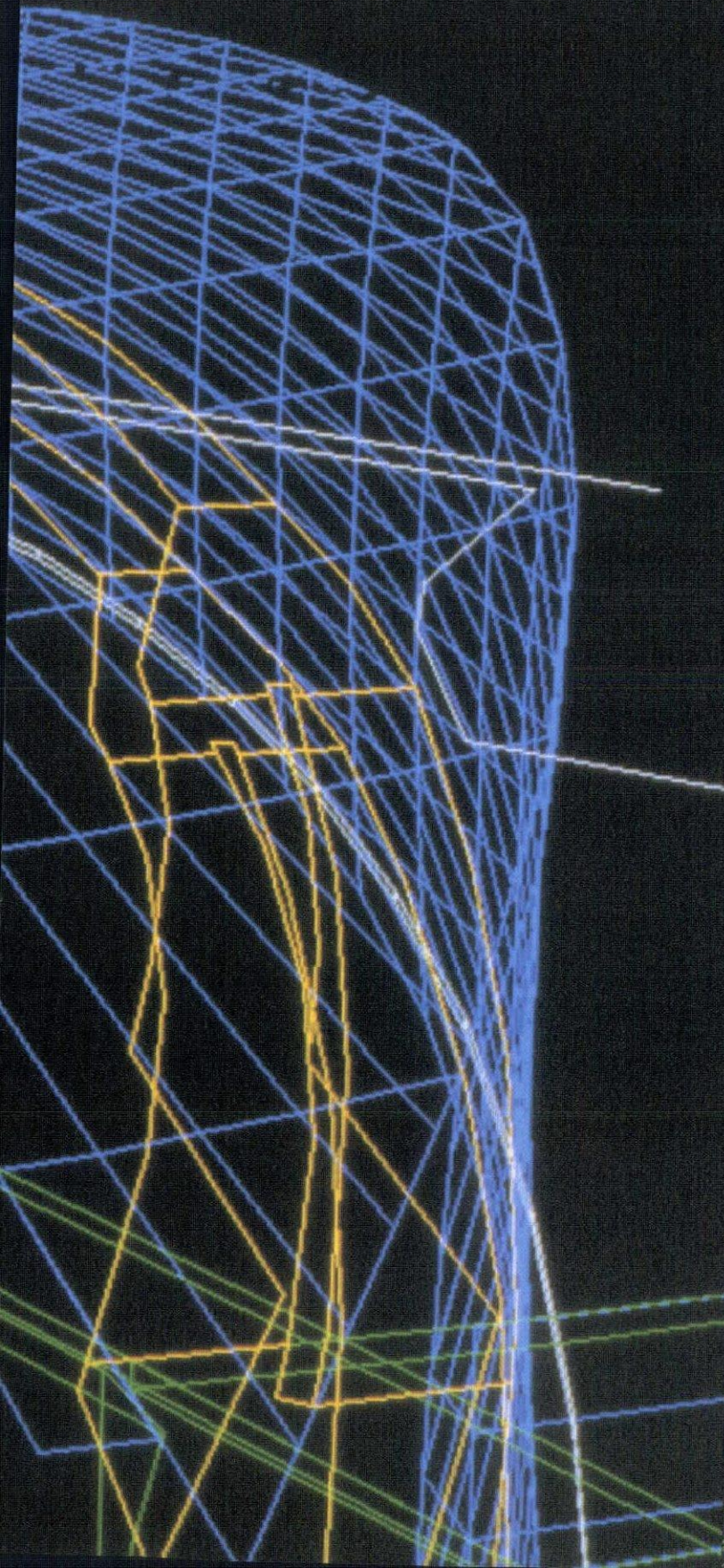
配置図 S=1:2000

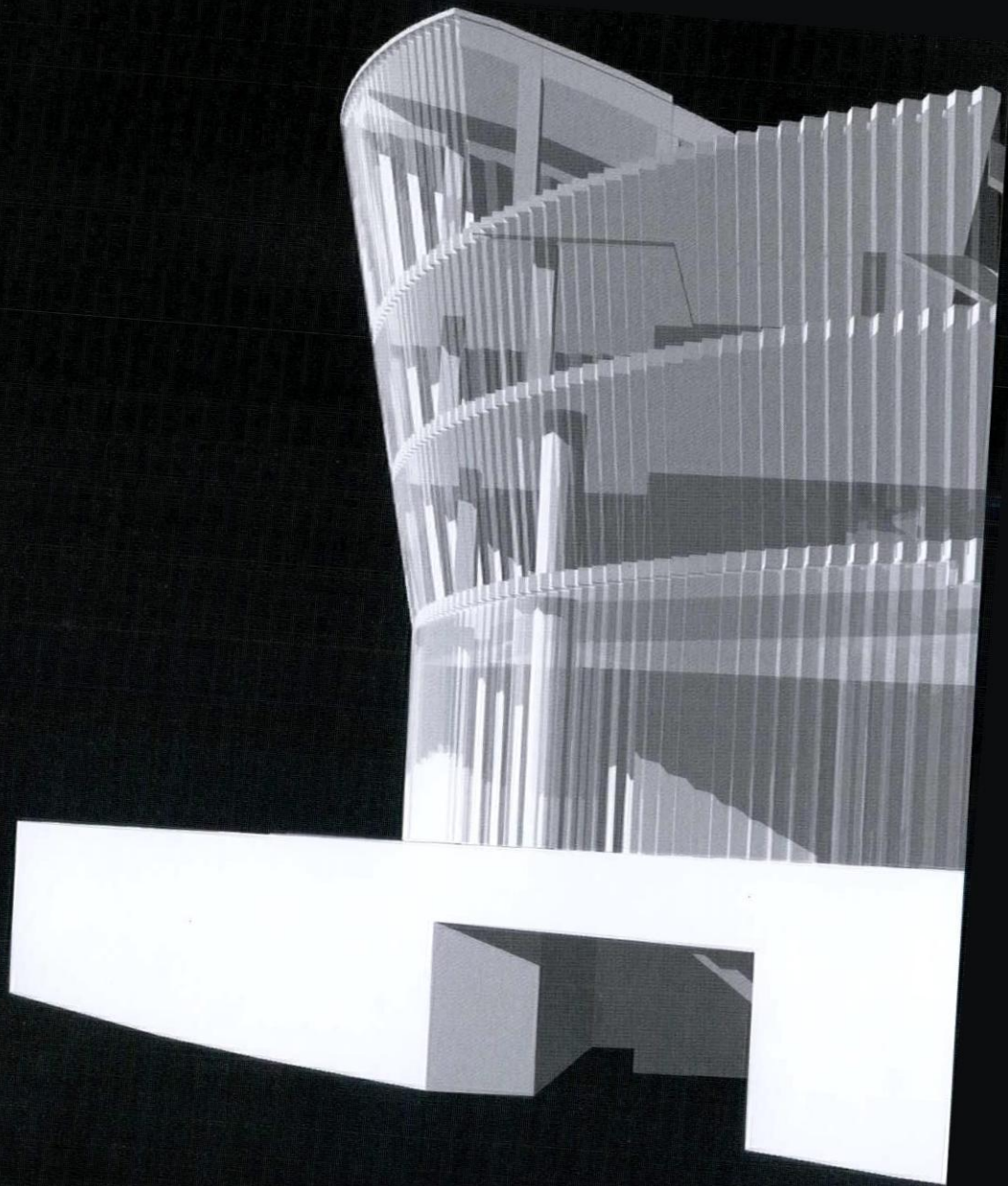


1階平面図

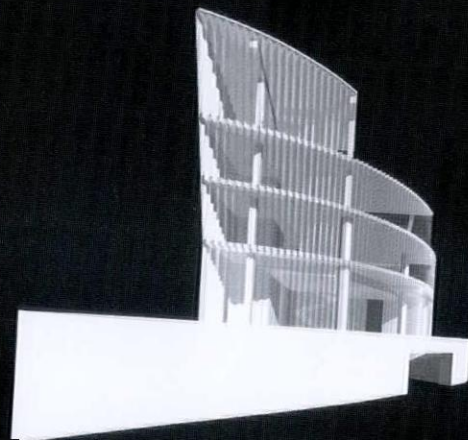
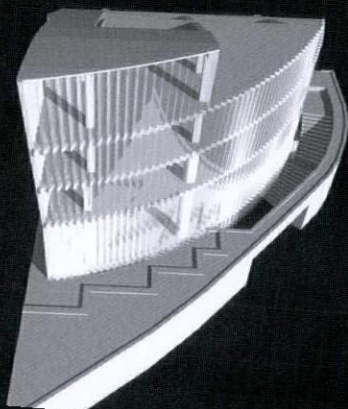


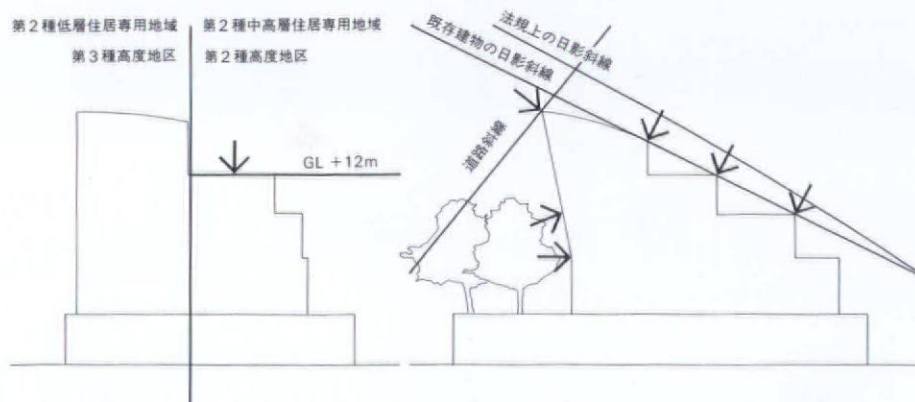
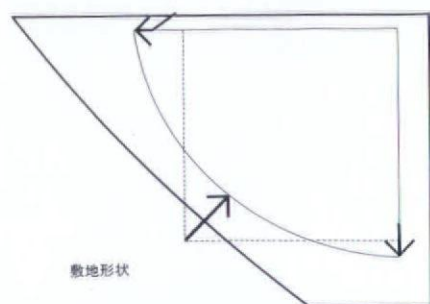
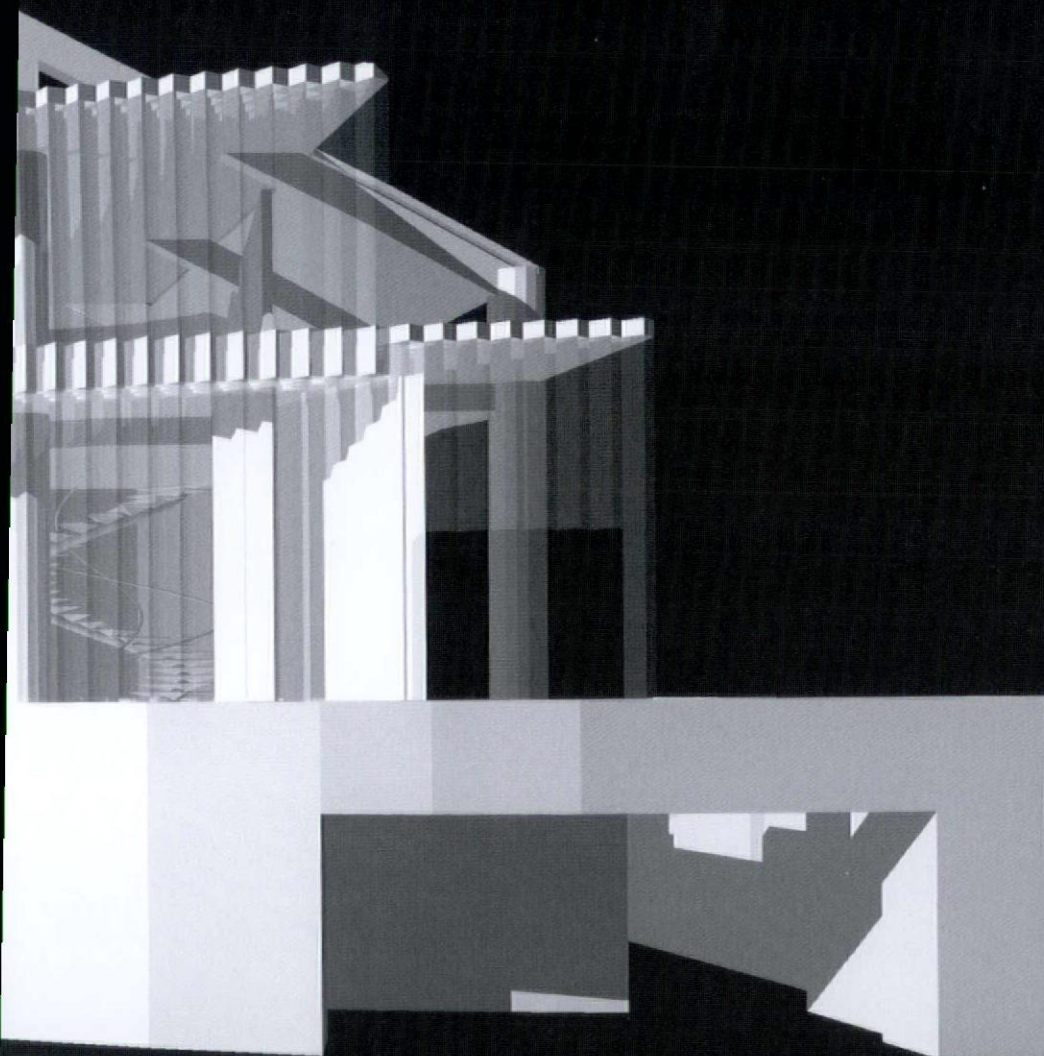






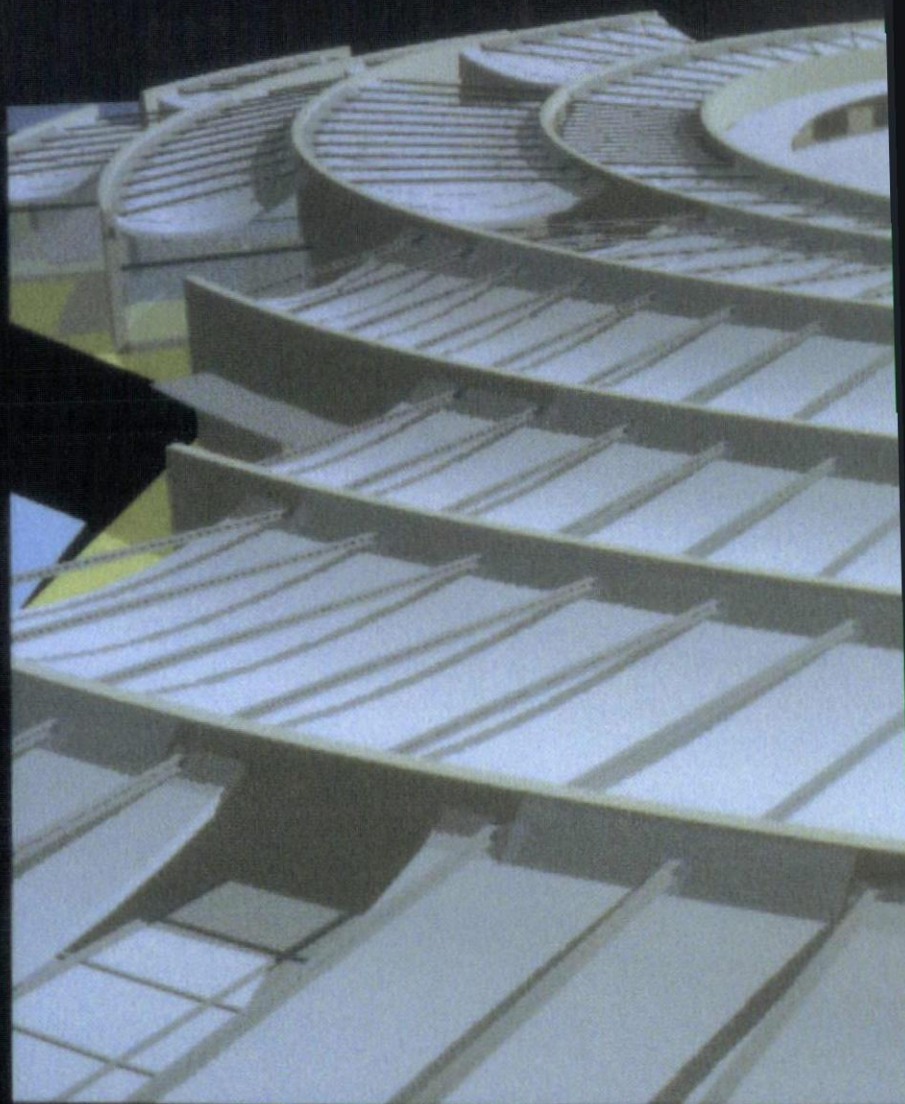
Distortion by codes, crown of tree and neighboring force.



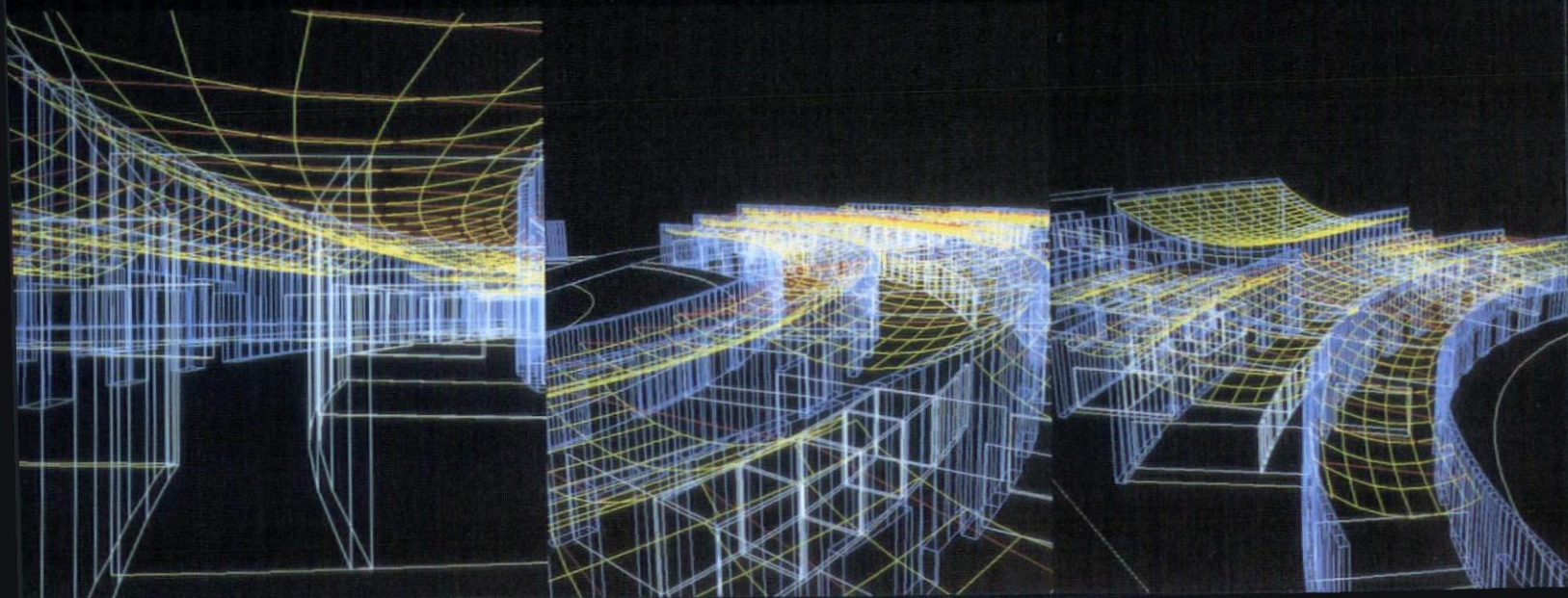


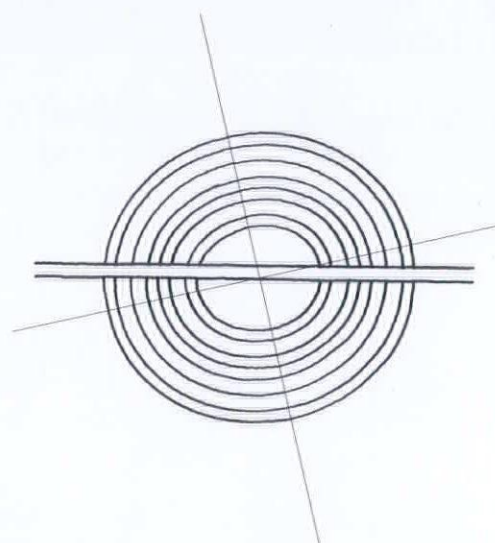
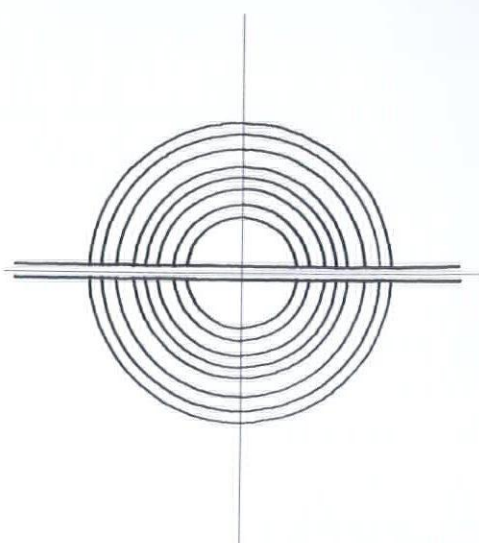
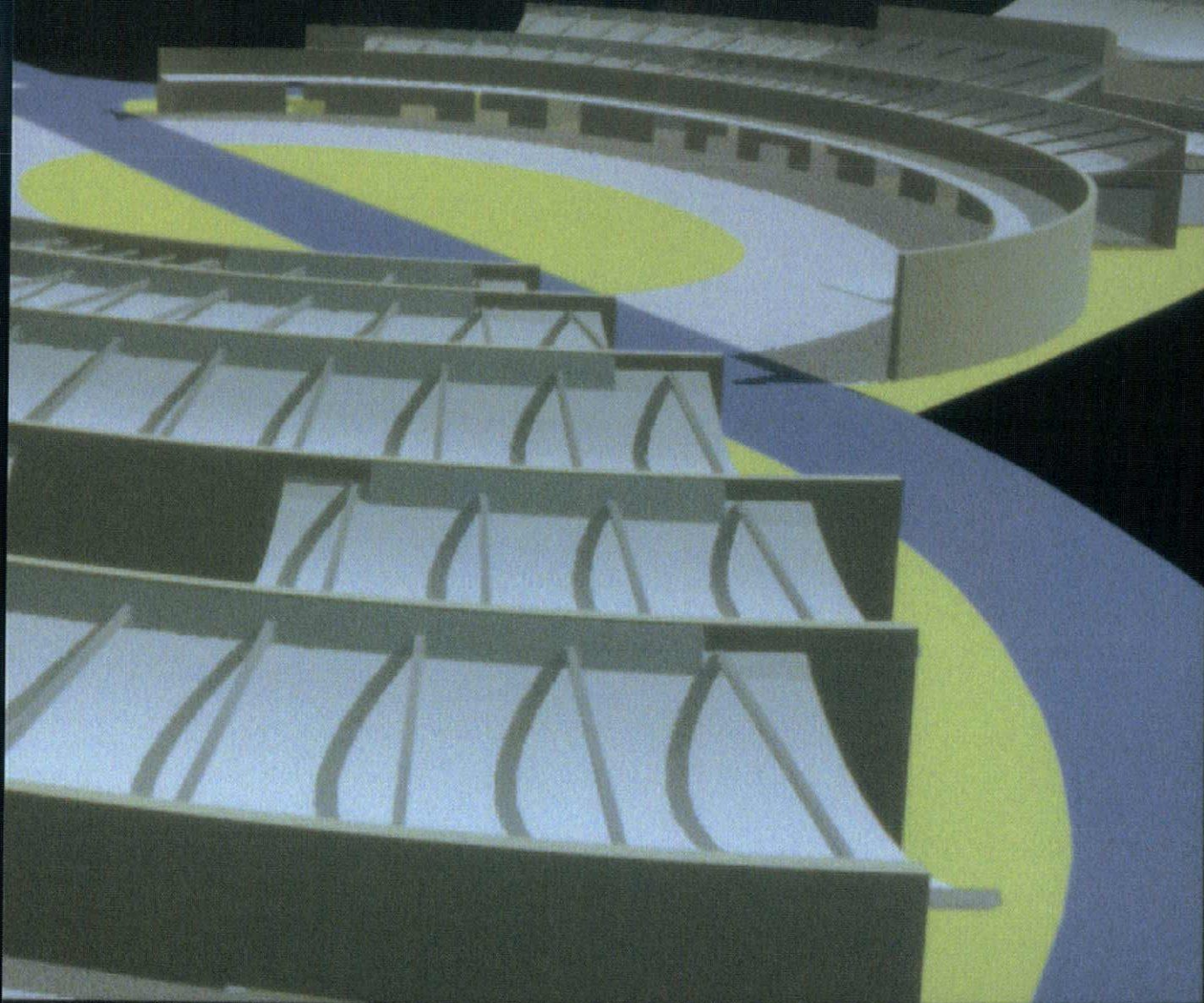
筑穂町福祉総合エリア

General Welfare Center of Chikuho-cho, Fukuoka, 1998



道路を挟んだ施設群。
広場から拡がる同心円は楕円に変形した。
2つの焦点から拡散し、収斂する円周上の施設。
Facilities split by a road in the middle of a flattened circle
connecting and disconnecting with 2 focal points. It
becomes a movement of in warding and out warding at the
same time. More private outside, more public inside -
outside of the oval plaza.





levitating and soaring

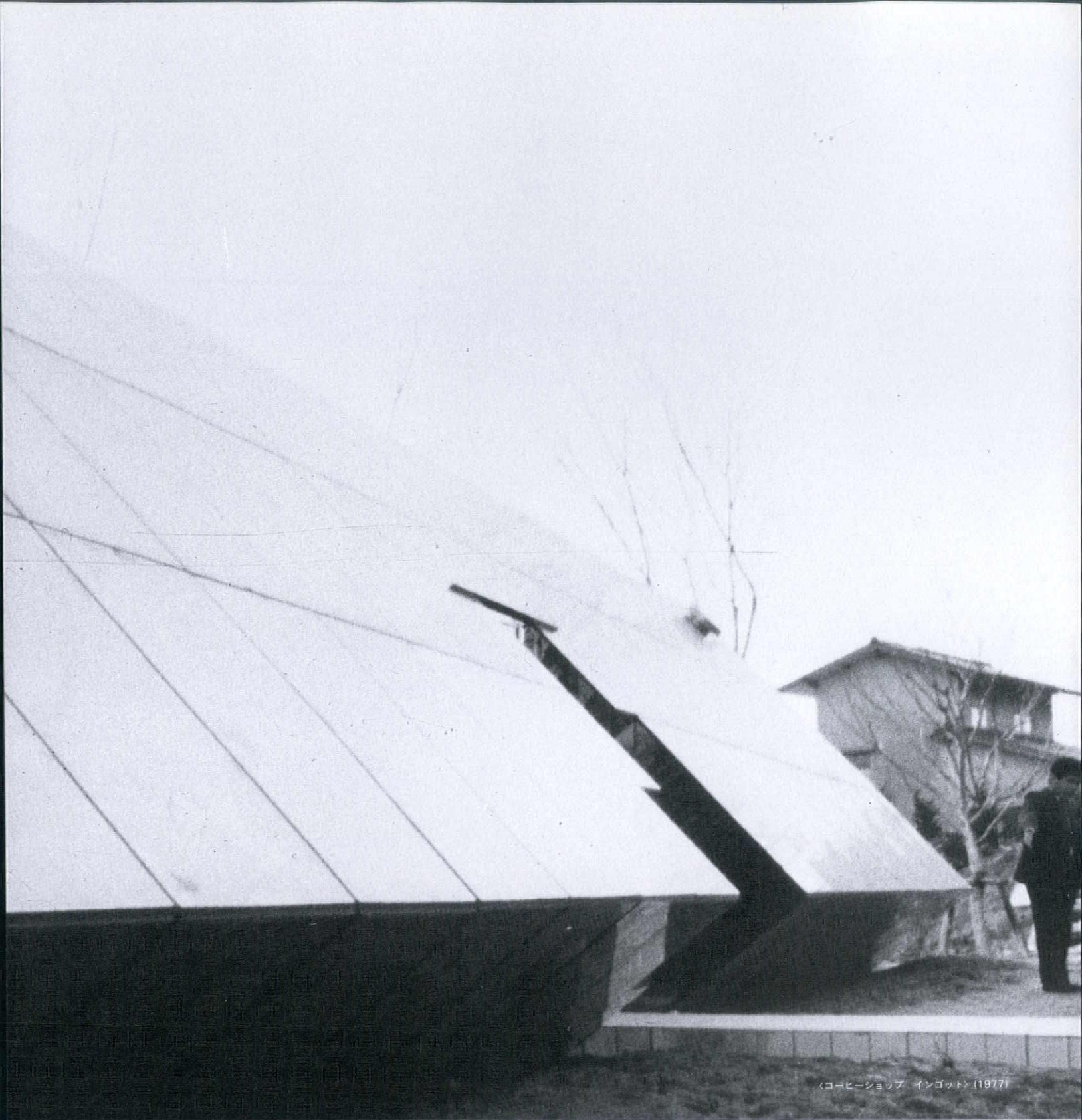
純粹幾何学形態に対する私の偏執狂的執着の理由はその独立性と普遍性にある。純粹であればあるほど抽象化され、普遍化される。ということは、時間と空間を超えることを意味する。キューブ〈風格子の家〉、直方体〈インゴット〉、長円体〈木下クリニック〉、円錐〈海のピラミッド〉、円錐台形〈U-ステーション〉、そのスケール感の欠如、そうして大地との関係の希薄さがそれに拍車をかける。形態的に既に浮上してどこかに飛んで行きそうな気配

があり、大地との接地の仕方も仮設的な印象を意図している。

キャンティレバーであればさらに加速して飛び出さんばかりであり、海と空の間のガラスの家は、吹き荒ぶ嵐の夜には文字通り海と空の間に飛び出し、航行しているように思えるときすらある。音もなく遊離して浮遊し、滑空する感覚がそこにはある。「異物感」が強調され、同化することもなく異化し続ける。フォスターの軽量構造物としての「ライトア

ーキテクチュア」とは全く異なる心理的な重力からの離脱、そうして開放感が目的だからである。

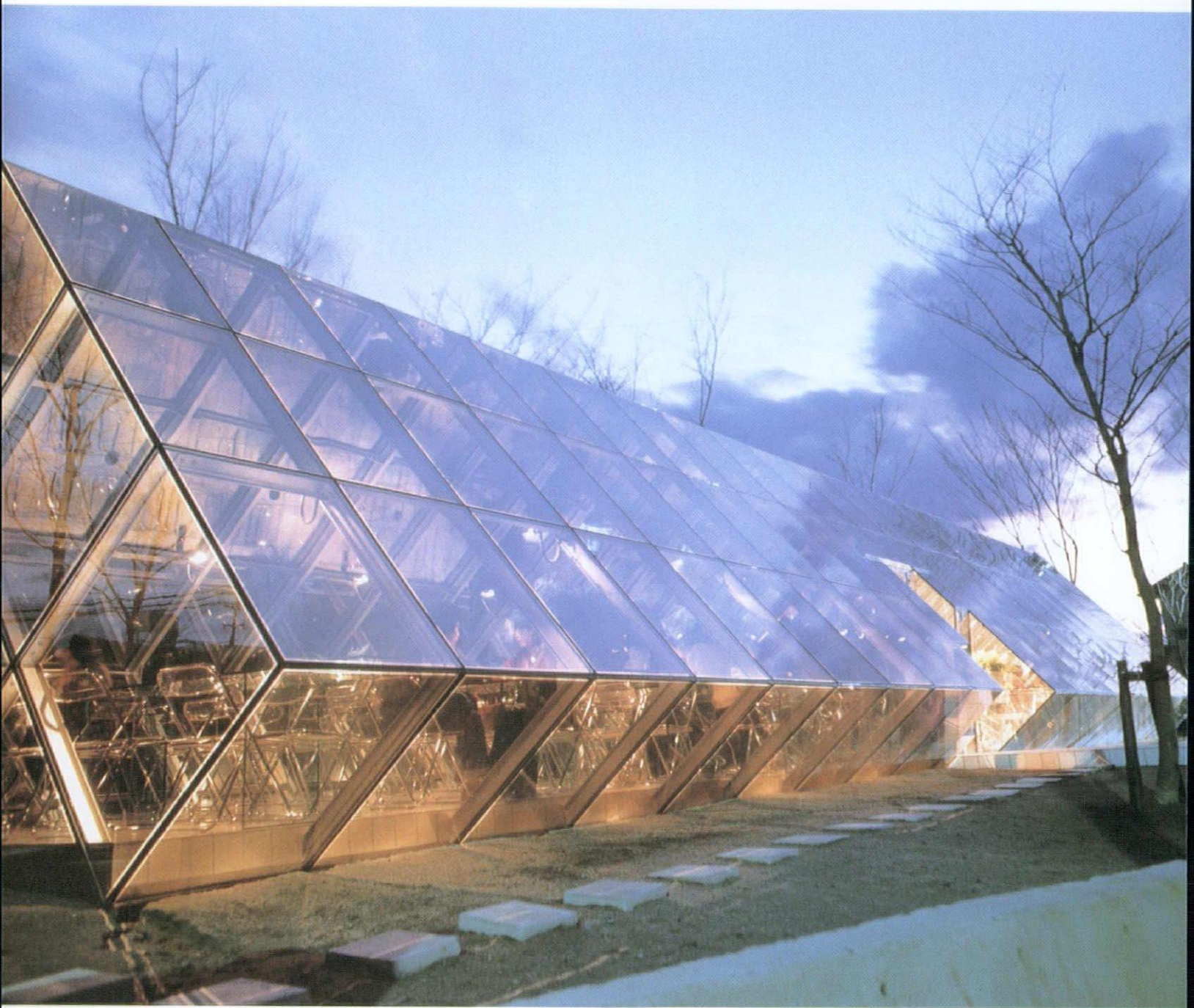
現実には、重力という下向きの力を、安定するとか落ち着くという感覚でとらえる以上、それから逃れて物理的に浮き上がったり、飛び上がることは、不安定そのものであり、そのエネルギーに持続性はない。しかし、その視覚的イメージに過ぎない浮遊感によって中空を漂い始めるのである。そのイメージの精



〈コーヒーショップ インゴット〉(1977)

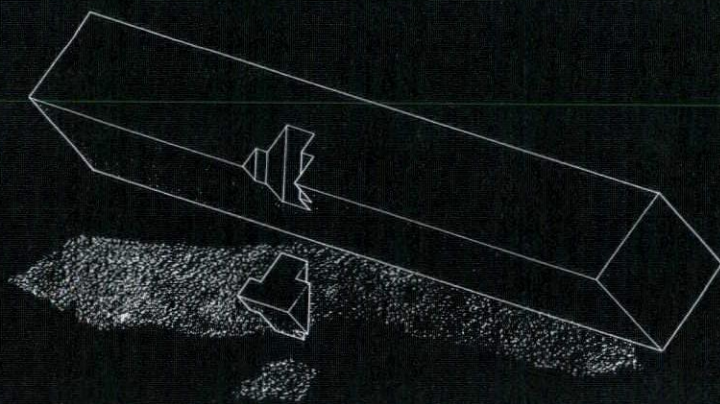
神作用が、重く堅苦しい空間を軽やかに飛翔させる。

コーヒーショップ インゴット
Coffee Shop Ingot, 1977

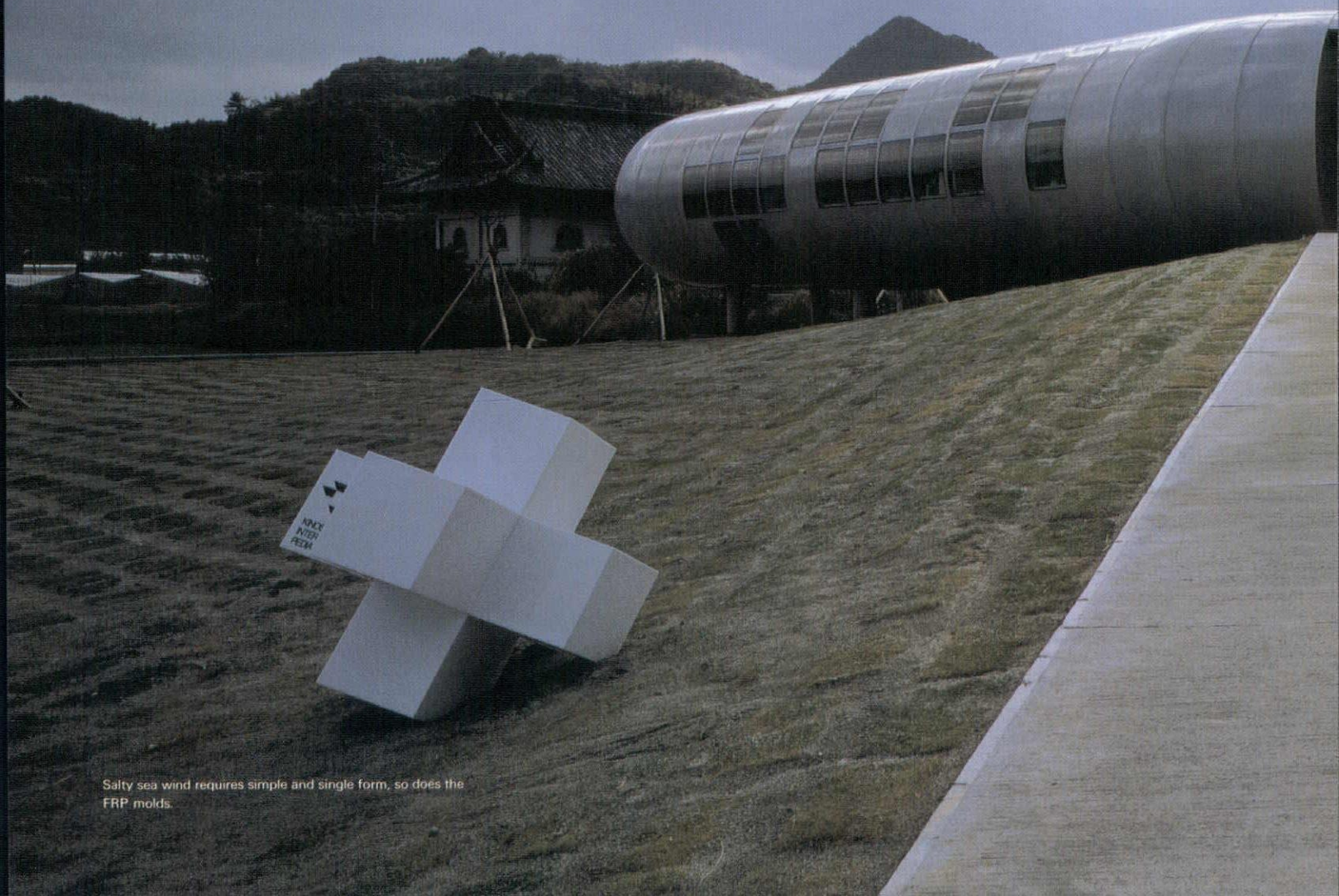








木下クリニック Kinoshita Clinic, 1979

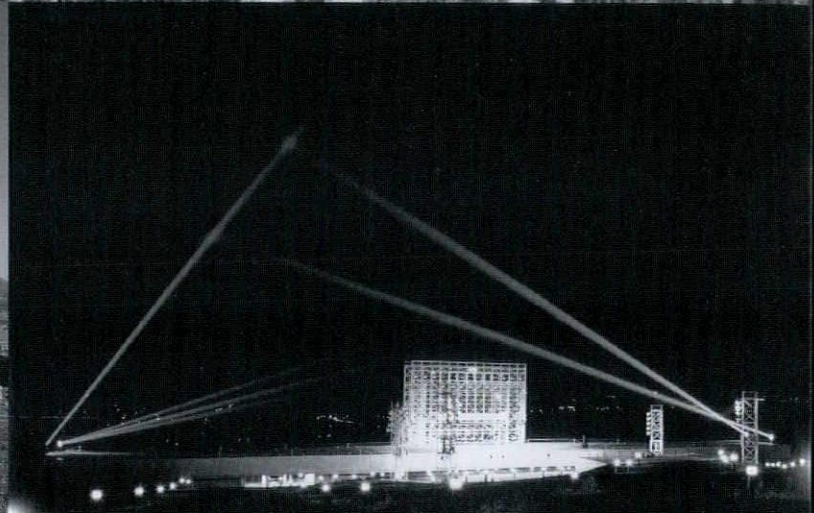
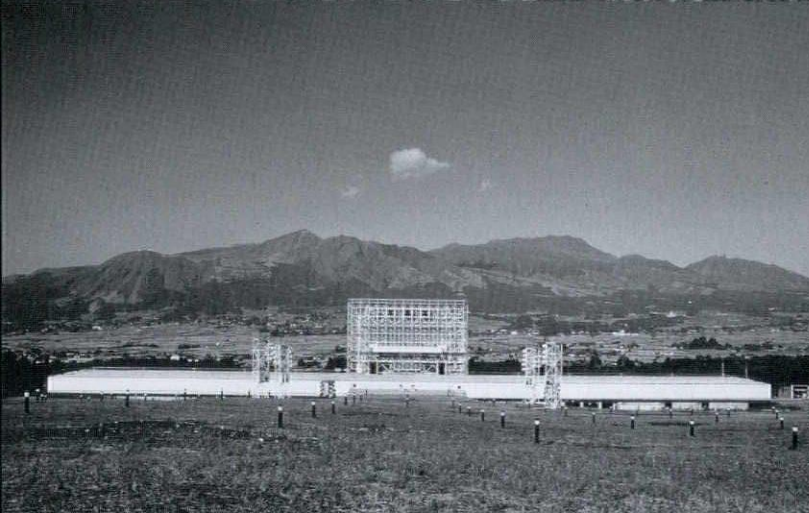
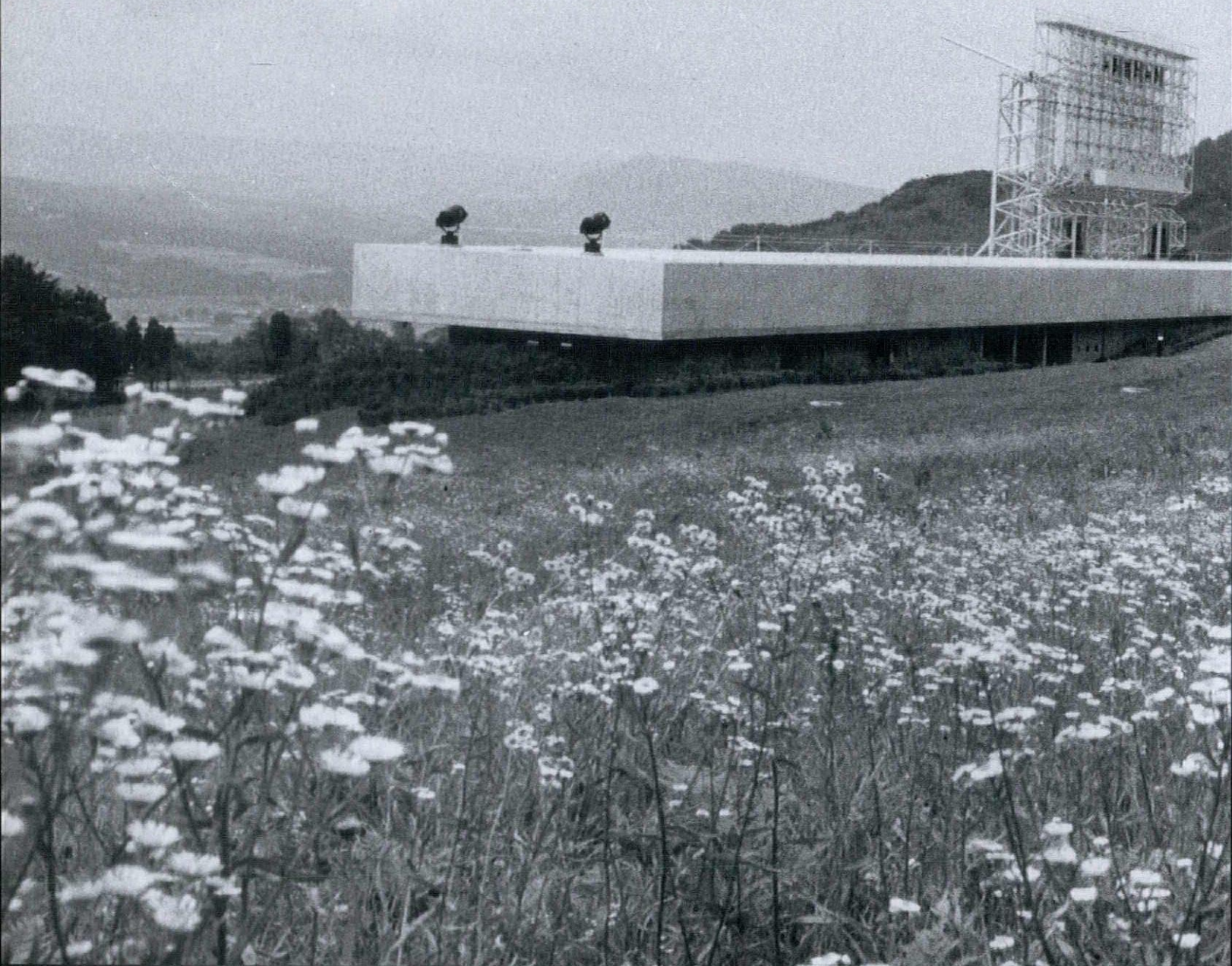


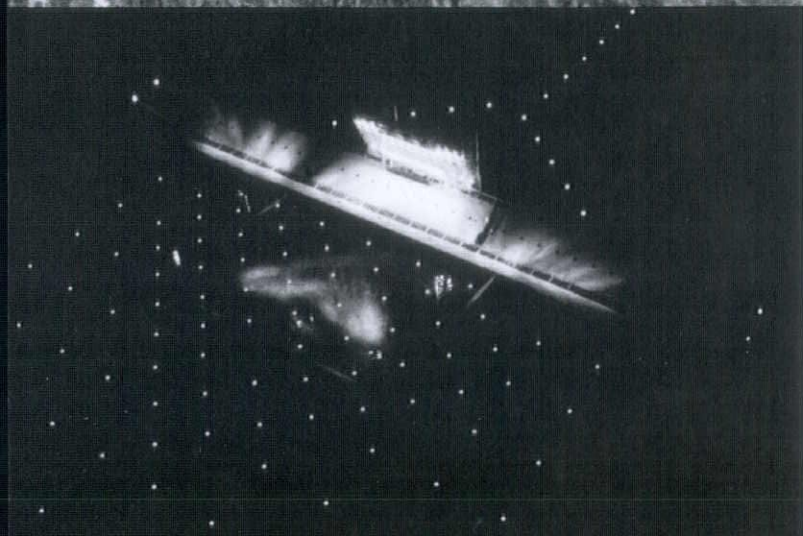
Salty sea wind requires simple and single form, so does the FRP molds.



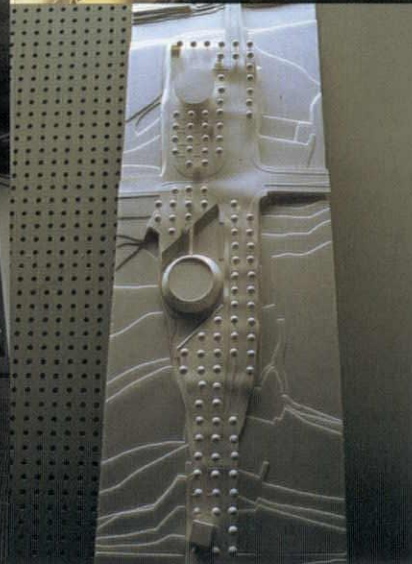
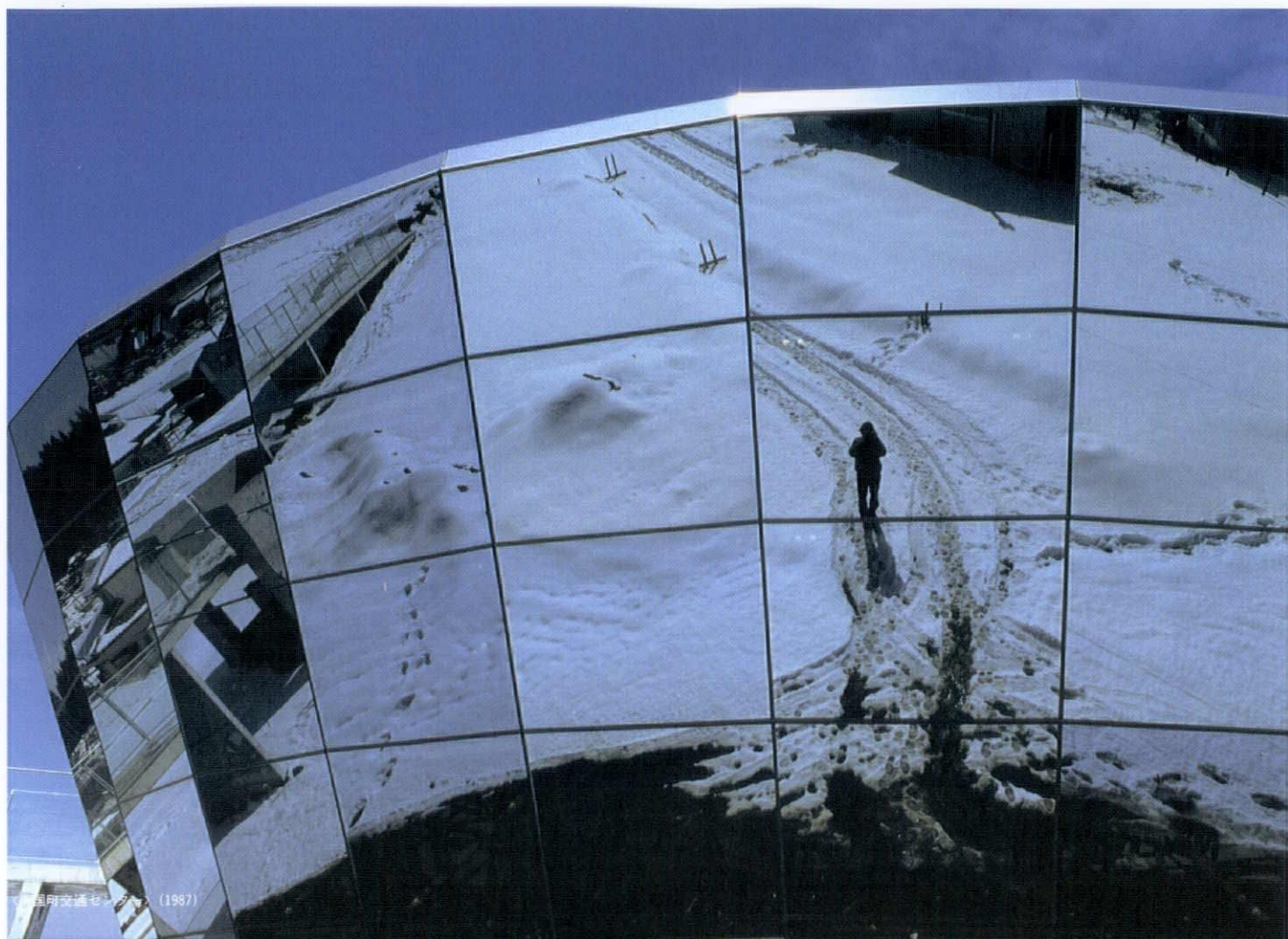
野外コンサート場 アスペクタ

Aspecta, Out Door Theater in Volcano Aso, 1987





Speed of sound 340m/sec at 16°C prevails the whole area.
Sound sculpture of Bill Fontana is seen in our mind.
Monolithic stage to appreciate the natural irregular landscape.
The contrast emphasizes both of neutral and abstract object and nature.



〈肥後小国駅跡地再開発計画 交通センター
及び文化センター〉 (1984—1989)

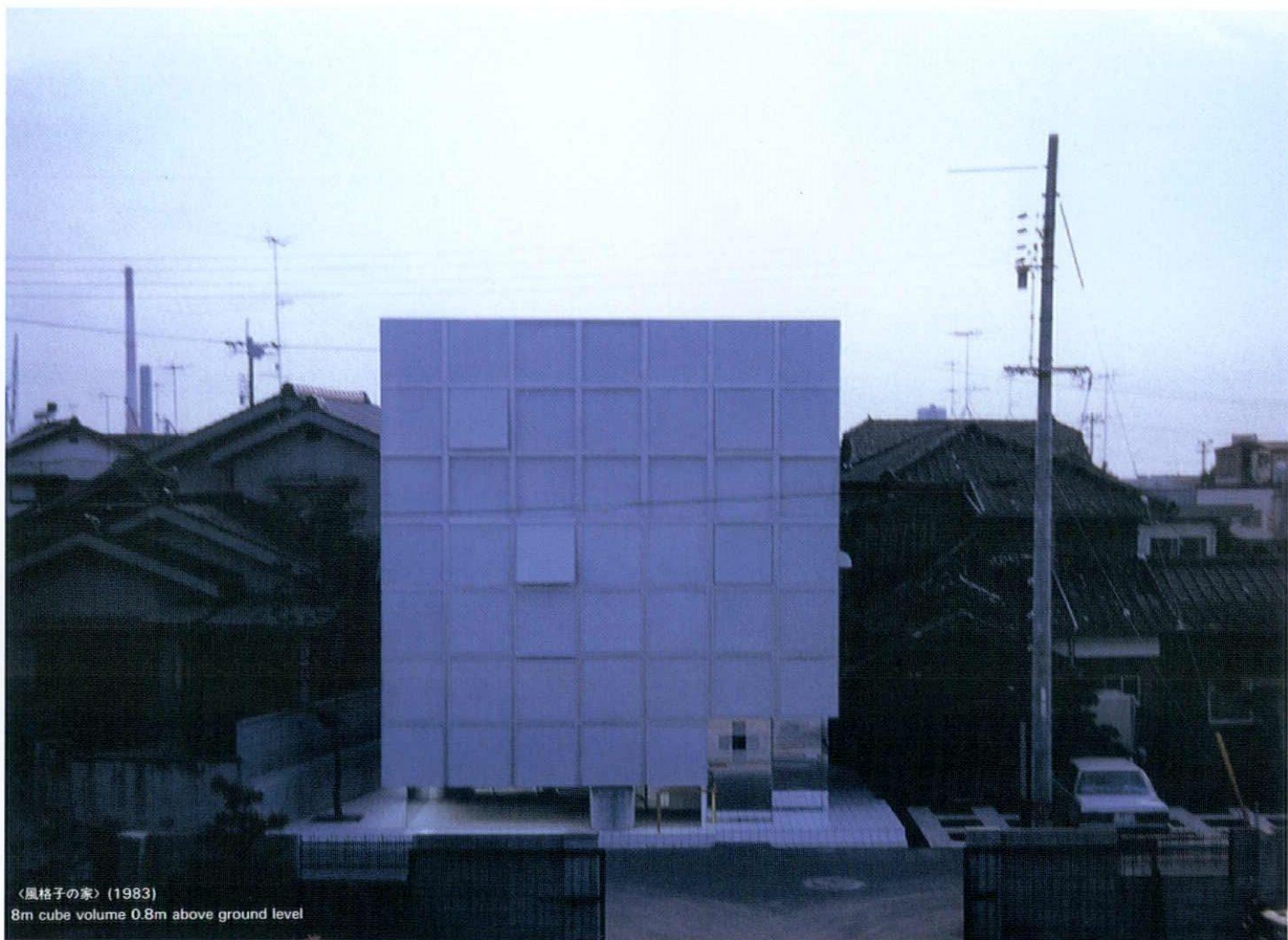


〈太閤山ランド展望塔 プロスペクタ〉 (1992)

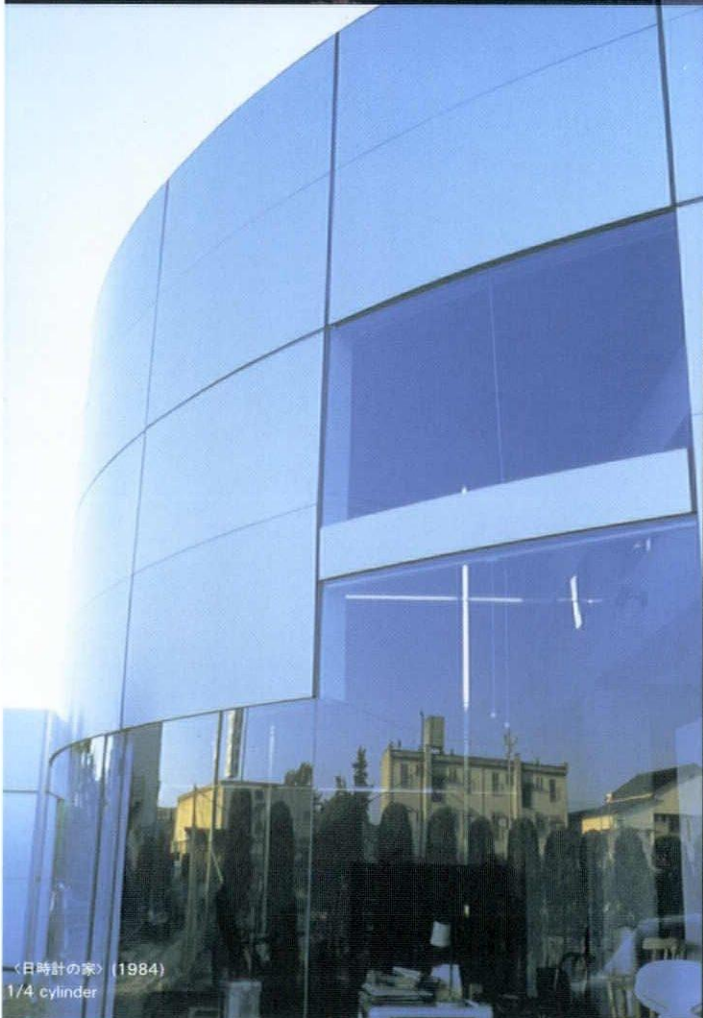


cube frame on a hill.
cylinder in a city.

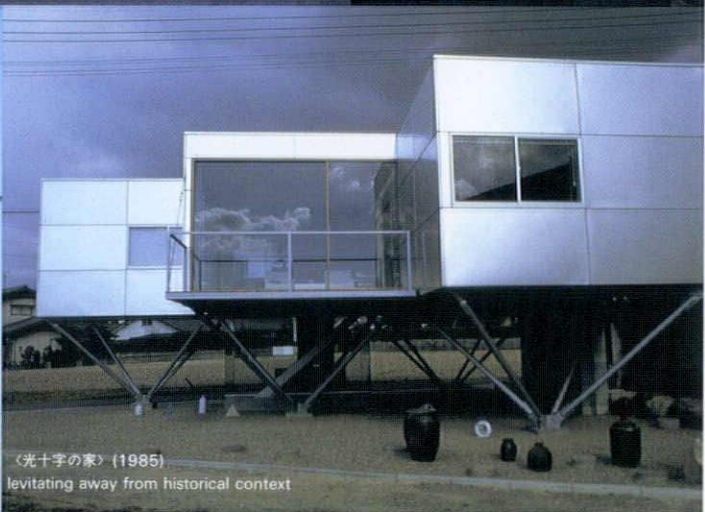
〈ニューロビン カルチャーセンター〉 (1980)



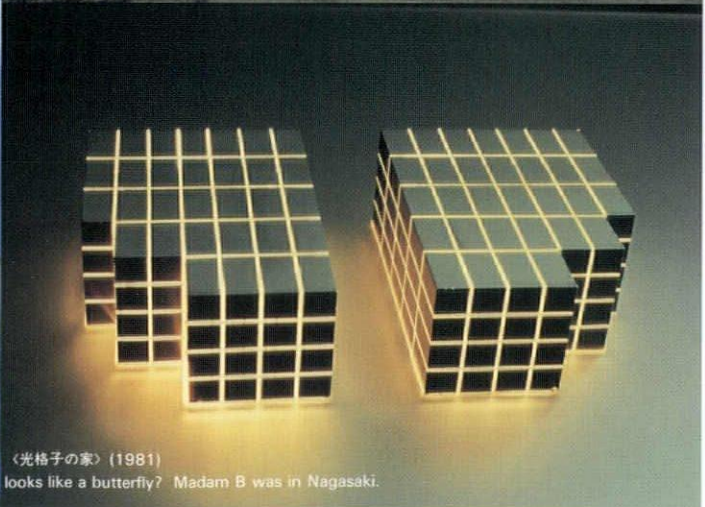
〈風格子の家〉 (1983)
8m cube volume 0.8m above ground level



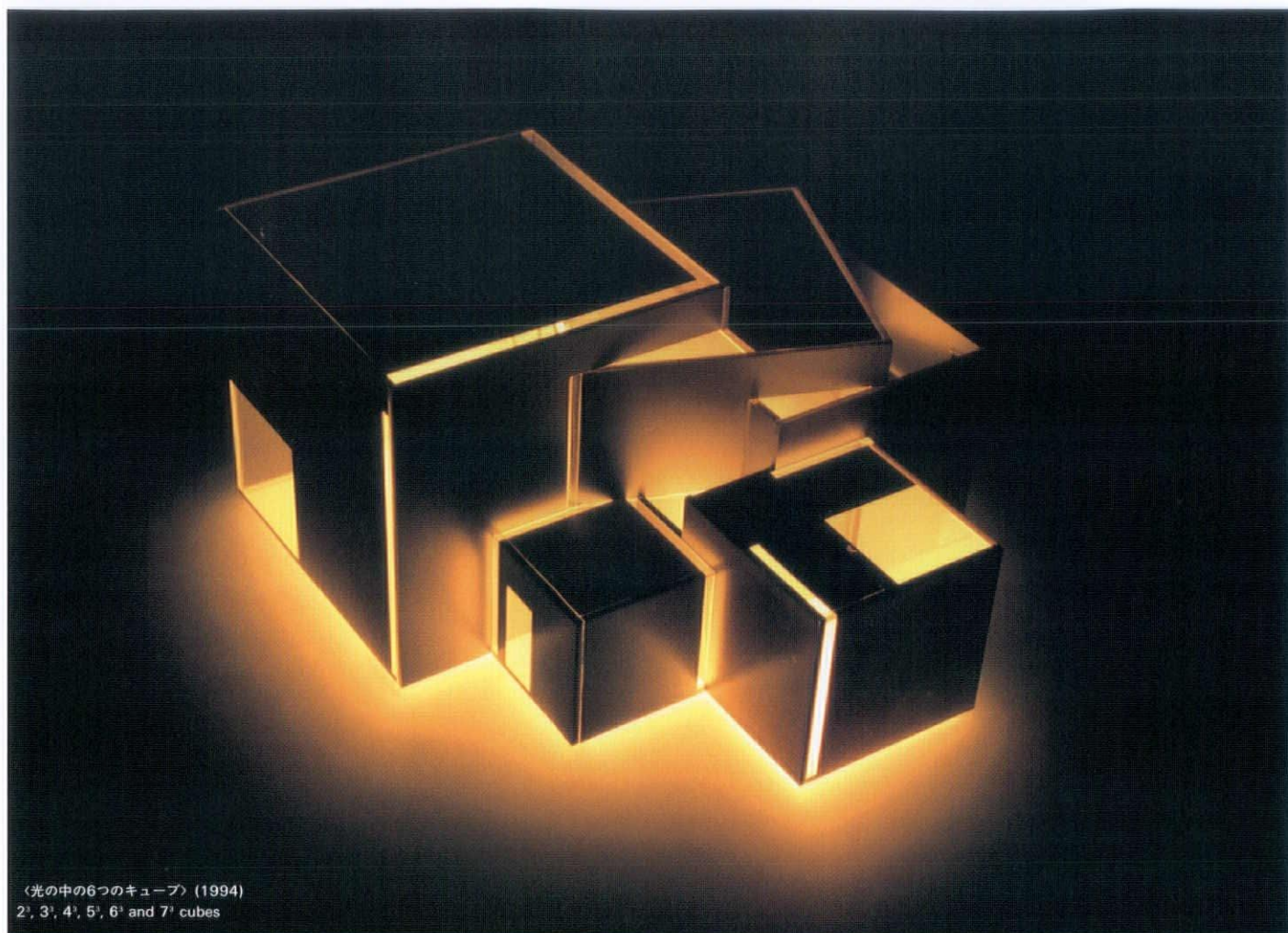
〈日時計の家〉 (1984)
1/4 cylinder



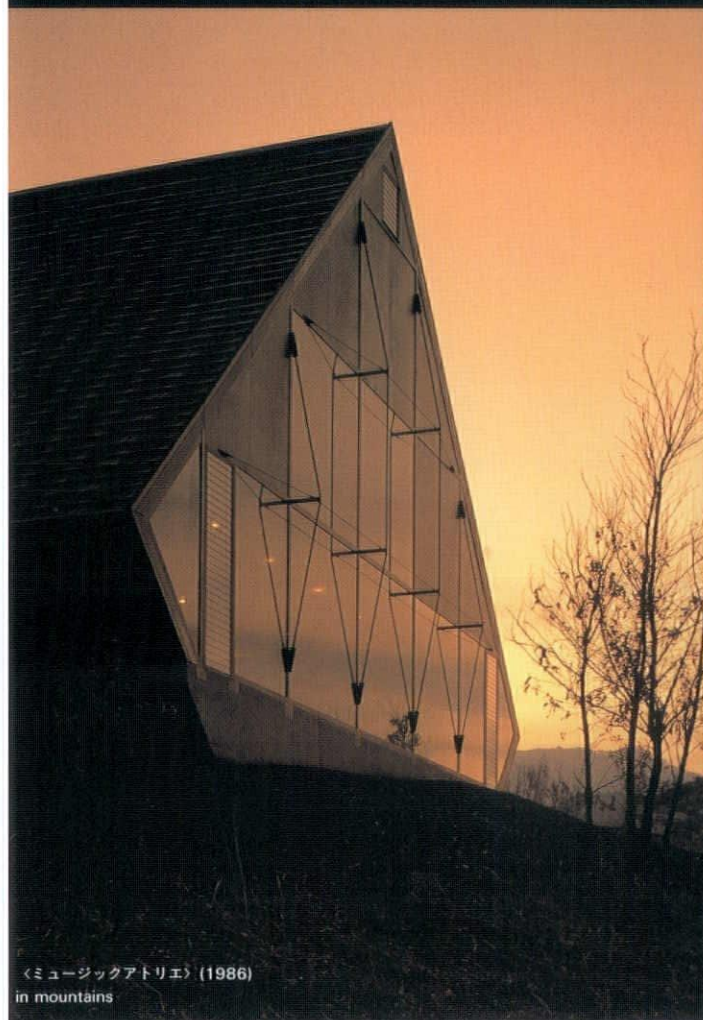
〈光十字の家〉 (1985)
levitating away from historical context



〈光格子の家〉 (1981)
looks like a butterfly? Madam B was in Nagasaki.



〈光の中の6つのキューブ〉 (1994)
2', 3', 4', 5', 6' and 7' cubes



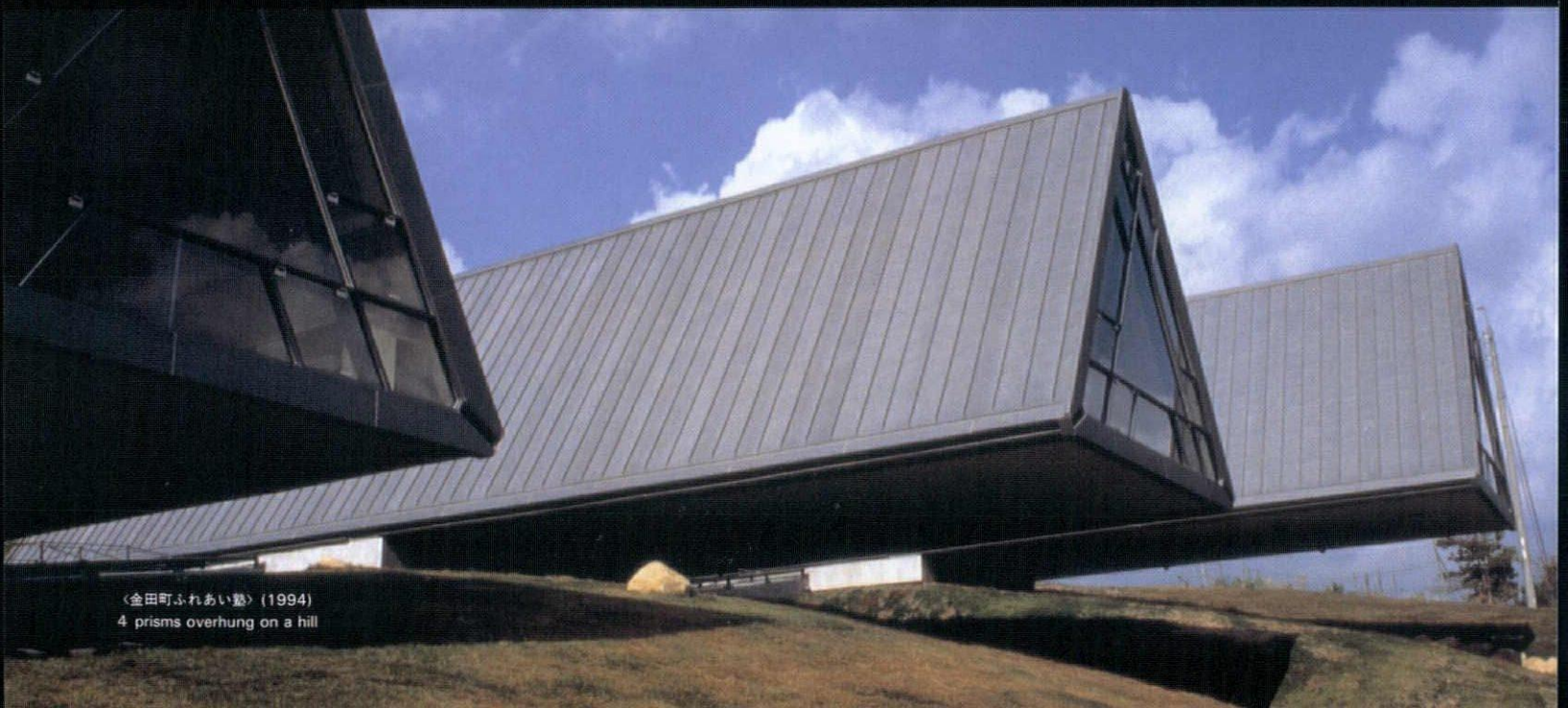
〈ミュージックアトリエ〉 (1986)
in mountains



〈シルバービルディング〉 (1981)
in a city



〈海と空の間のガラスの家〉 (1991)
with vertical and horizontal slabs



〈金田町ふれあい塾〉 (1994)
4 prisms overhung on a hill



〈三角港フェリーターミナル 海のピラミッド〉 (1990)
cone, landmark in a distance from sea and land

7. 揺らす

shaking

動く、揺れるということは「静止している状態」と対比されて初めて意味がある。元々静止している物などある筈もないから、ある支持点を仮に固定した静止状態にあるとすれば、全ては揺れ動いていることになる。人も木も草も建物や橋、道路など、塔であればなおさらのこと大地を支持点として大きく揺れている。吊り構造の建築は揺れ易い。スプリング状に上下に揺れ、左右に振れる。どの程度硬くするかを部位ごとに決めるのだが、吊り構造でなくても同様の作業はしなければならない。固有振動を打ち消したり、複数の材質を用いたり、偏荷重に対処したり、遙かに複雑なだけではなく吊り構造を前提としない現行法規には耐火被覆などの矛盾があるし、熱応力のような曲者が現れることもある。

揺れて当然のサスペンションにサスペンスはつきもののだが、限界を見極めたくて私自身の実物大実験を経時変化と共に観察中である。
〈海と空の間のガラスの家〉(P.86)

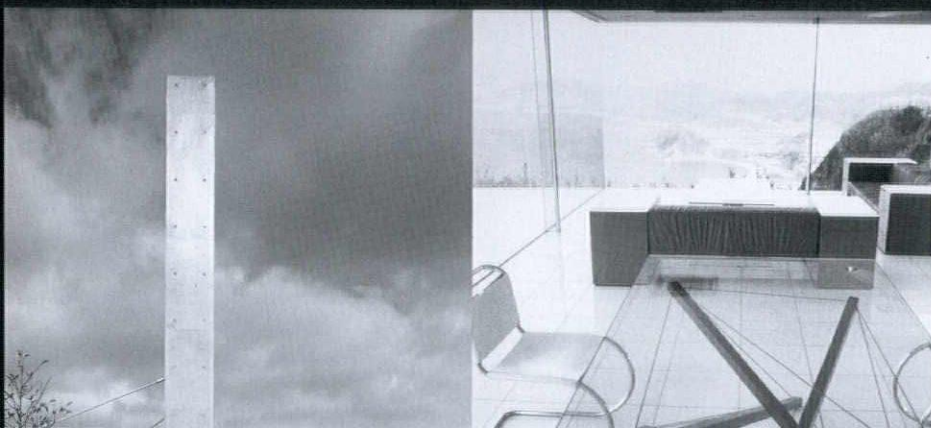
恐怖感を募らせる柔らかさの限界を知るには、体感する以外にはないからだが、今やジェンナーの心境である。家族を道連れにはいけないのだが…。

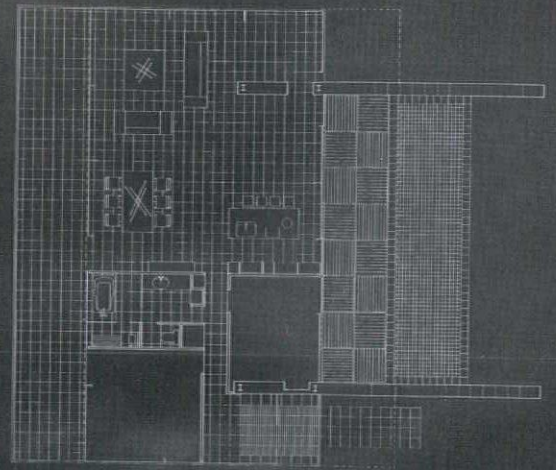
〈海と空の間のガラスの家〉(1991)



海と空の間のガラスの家

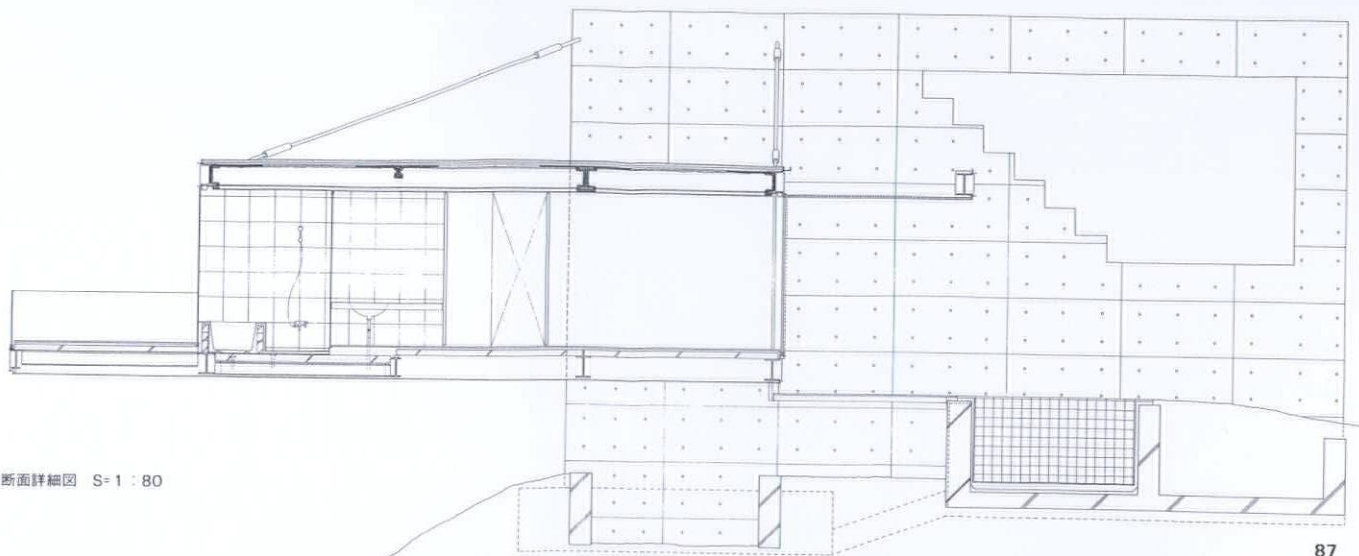
Another Glass House between Sea and Sky, 1991





1階平面図 S=1:200

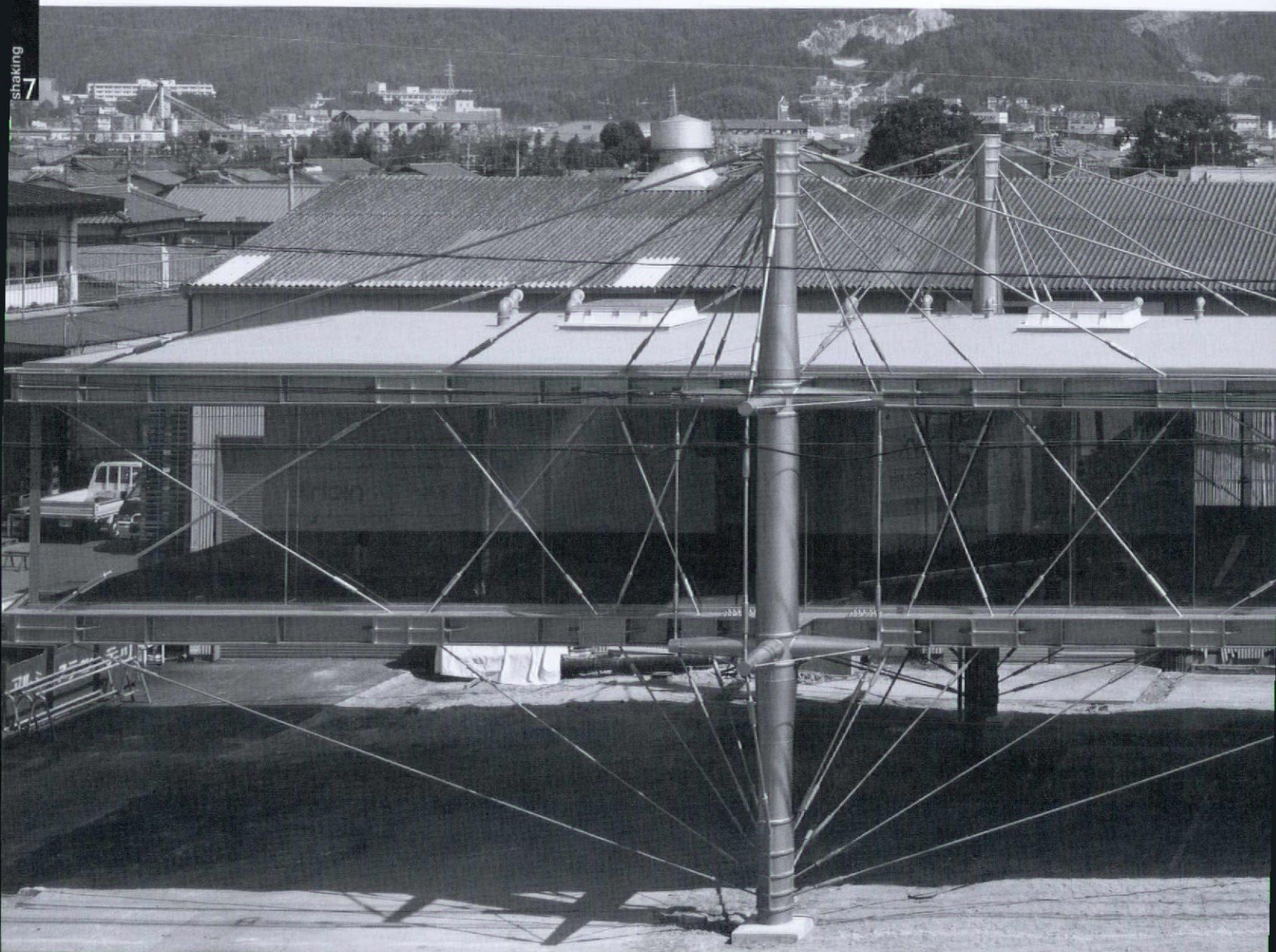
Floating, swaying and soaring in a storm 140 m above sea level

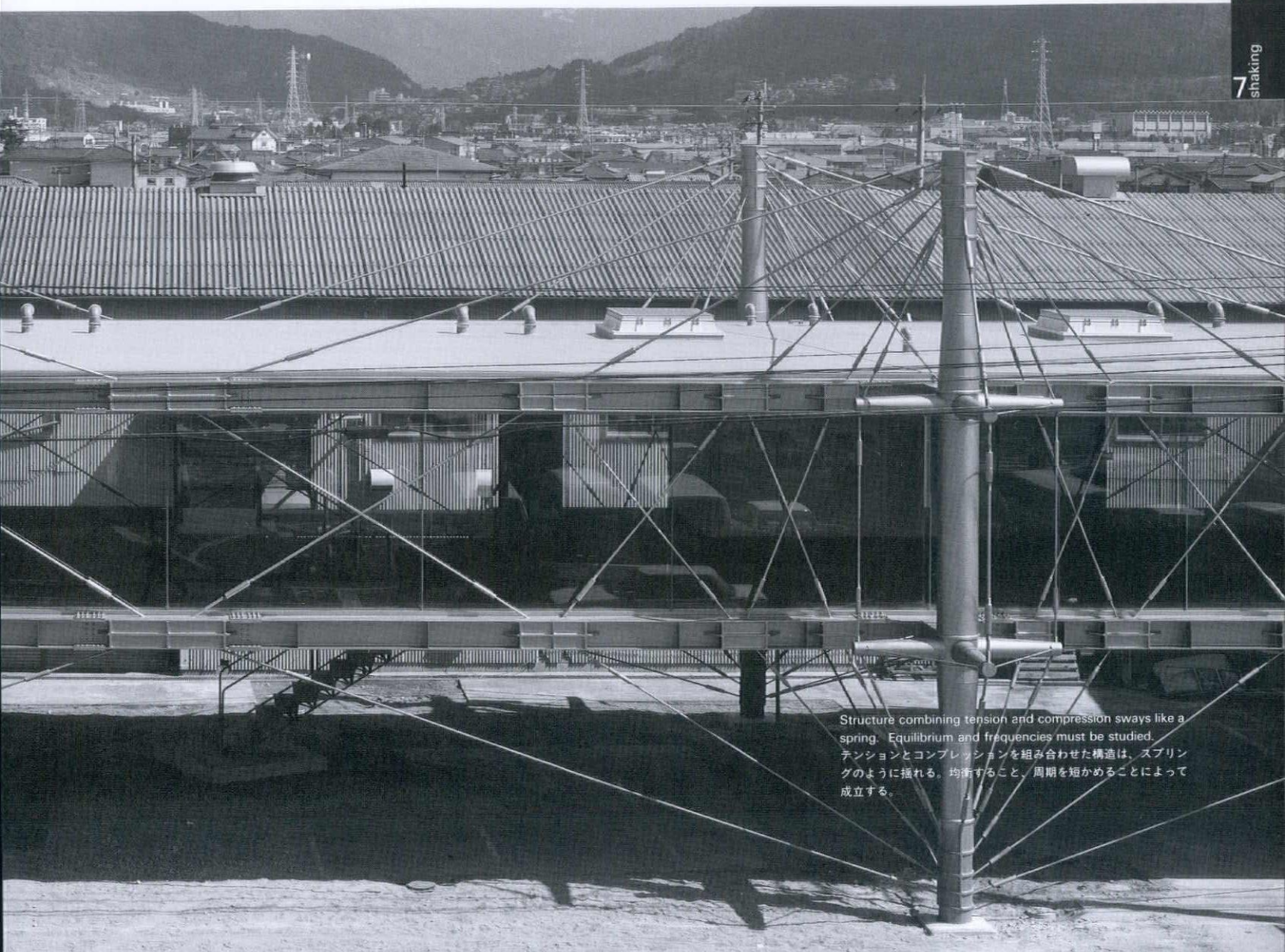


断面詳細図 S=1:80

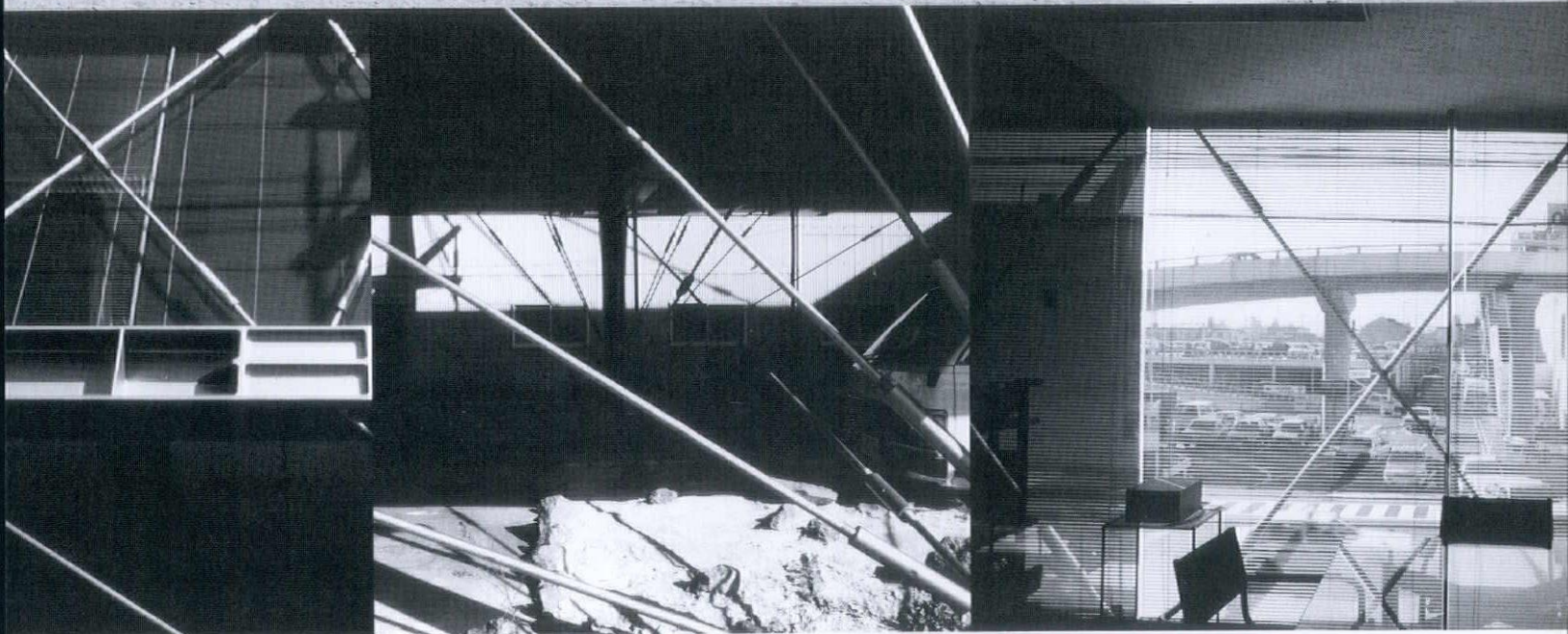








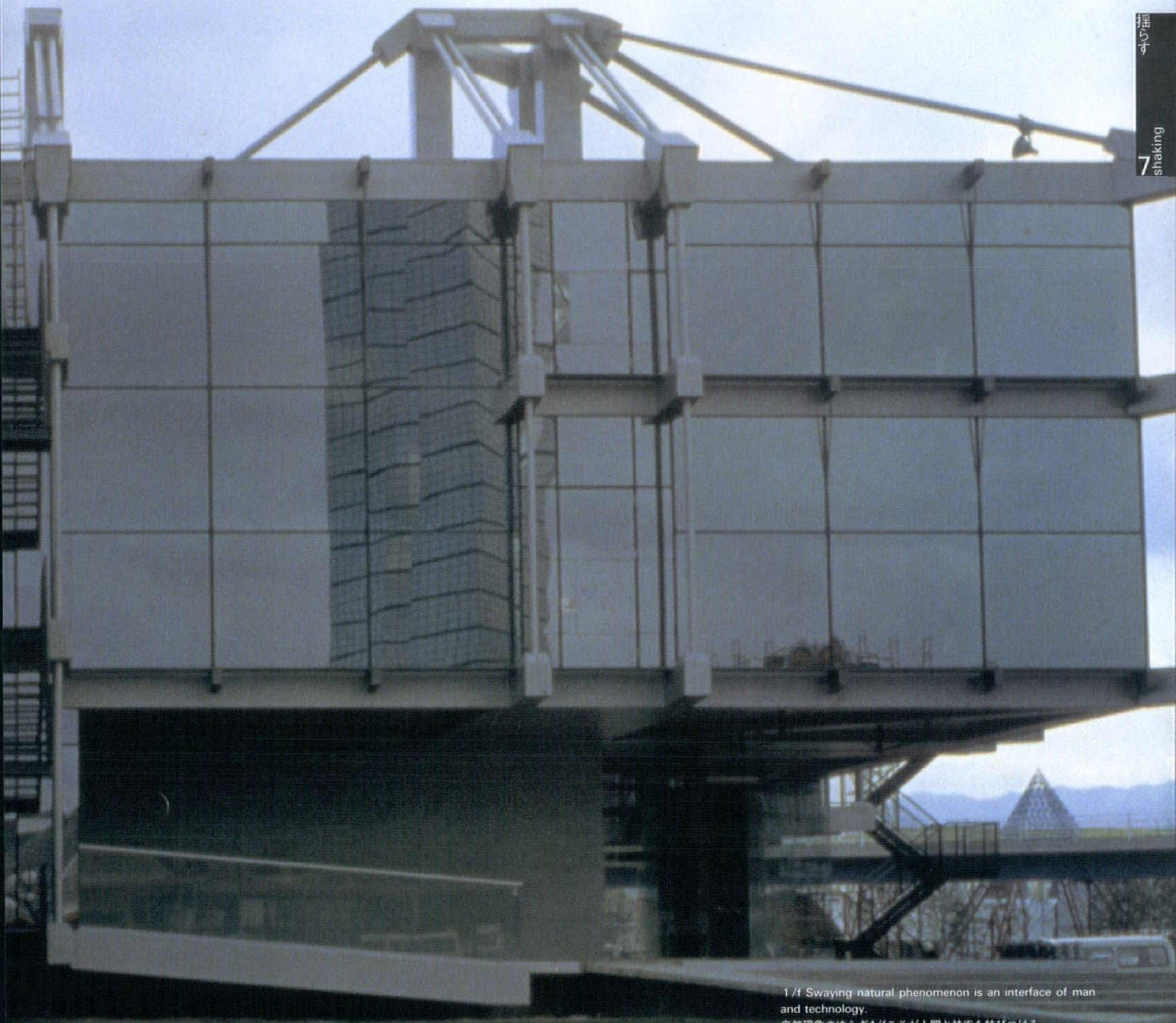
Structure combining tension and compression sways like a spring. Equilibrium and frequencies must be studied.
テンションとコンプレッションを組み合わせた構造は、スプリングのように揺れる。均衡すること、周期を短かめることによって成立する。



西部ガスミュージアム 自然現象美術館

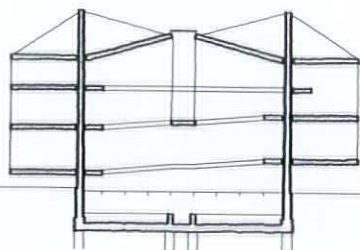
Saibu Gas Museum for Natural Phenomenart, 1989



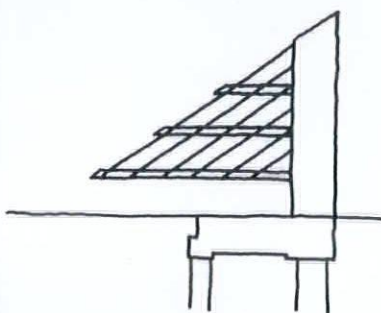


1/f Swaying natural phenomenon is an interface of man and technology.
自然現象のゆらぎ 1/fこそが人間と技術を結びつける

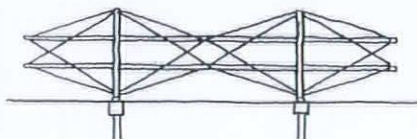




〈西部ガスミュージアム 自然現象美術館〉(1989)



〈松下クリニック〉(1990)



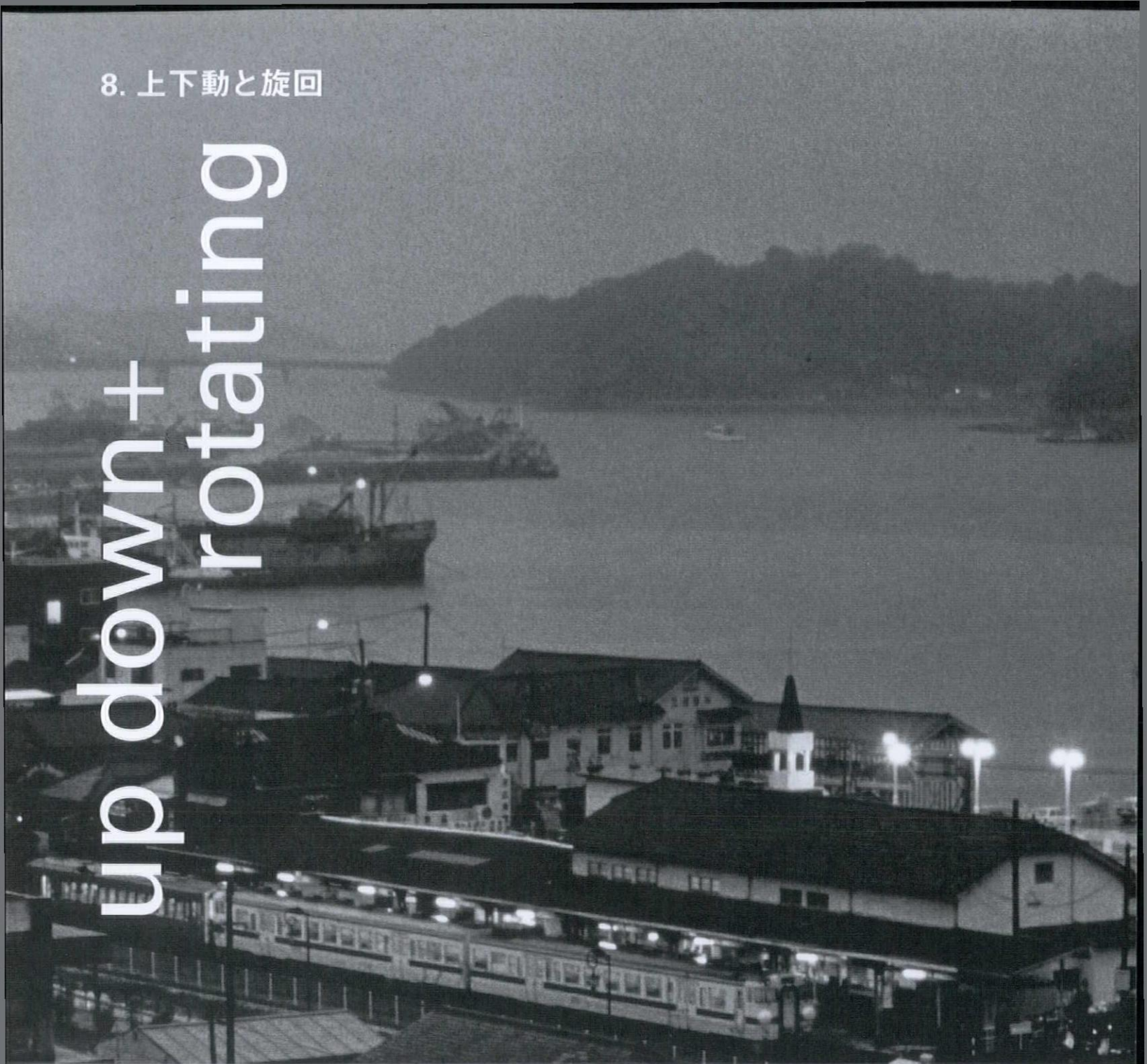
〈ワキタハイテクス本社事務所〉(1990)





〈松山クリニック〉(1990)
Looks unbalance but weighs in balance.
アンバランスに見えるが重さが釣り合っている。

up down+rotating



いつも同じ空間を、イベントやパフォーマンスを行う際に変化させるために、平面だけではなく上下方向に動きを与えて、空間を上下に伸縮させることを実現したのが、クラフォーレミュージアム赤坂であった。多目的ホールをイベントホールとして空間を活性化するシステム、電動昇降床と立体トラスバトンが空間を発生する(P.102)。

Z方向への動きをさらに進めたのが、内外の二重螺旋を持った海のピラミッドである。訪れた全ての老若男女が喜んで頂上へ向かうスロープの長さは、向きは逆でも勾配が同じで高さが同じなので内外とも同じ300m(25m×12)である。互いに交叉する部分で内外の往来ができ、楽しく上り下りができるし、盆踊

りの列もそこで交叉する。〈海のピラミッド〉

旋回する楽しさは富山の〈プロスペクタ〉も同様である(P.108)。この立体格子の自然現象展望塔は、自然現象美術館の〈西部ガスマuseum〉の後につくられた。このフェノメナート・ミュージアムの中心の吹抜けは、地階のガスマシン・ルームの光と音のパフォーマンスを見るスロープが囲んでおり、上り切って最上部から外周のギャラリーに入り、逆方向のスパイラルを下降しながら自然現象の芸術を鑑賞する。

グッゲンハイム、ソニービル、バチカンの博物館と同様、「動線」が建築化されている。最も大きな違いは、富山以外は人が自力で上り、下りてくることである。

自然の山脈の中で、一見滑走路のように見える水平に長い屋外劇場〈アスペクタ〉のステージは、音速に基づいてつくられて、自然を載りとして見せる音場であり、ビル・フォントナのサウンド・スカルプチュアや、手塚治虫の火の鳥のパフォーマンスを楽しむための石舞台である。阿蘇山の火口の反対側にある〈やまなみゴルフ倶楽部〉のガラスのオペリスクの垂直性と共に、132.6mの水平線は広大な自然を見るための補助線である。水平線と垂直線によって初めて感得できるからか、不定形の自然の不確実な情報が定着する感覚がある。

平面の座標をX,Yで表わし、垂直方向をZで表す私達の空間感覚の順位が示すように、大



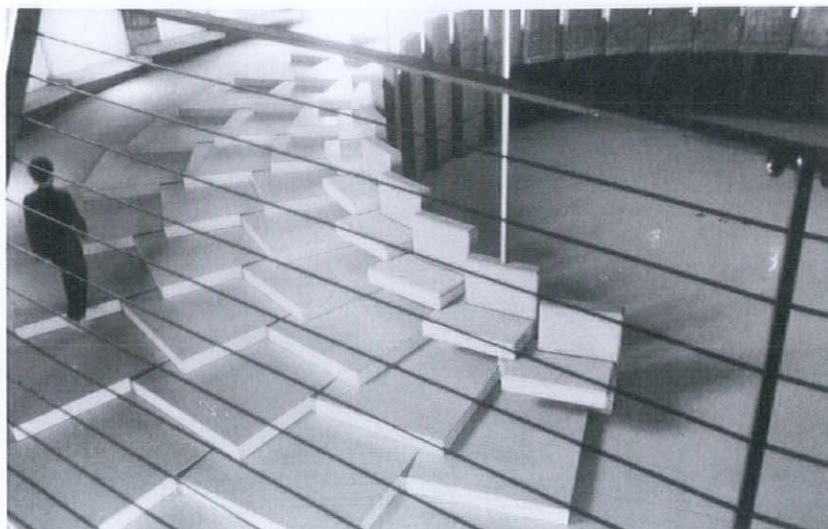
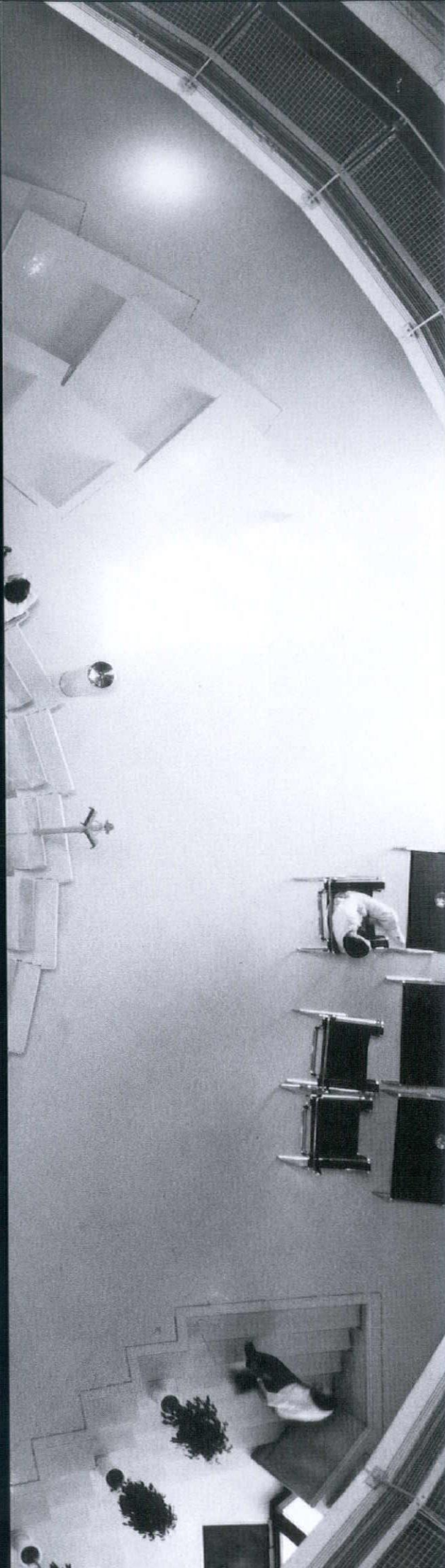
〈三角港フェリーターミナル 海のピラミッド〉(1990)

地にへばり付いて動き廻ること、視線が水平に展開することが理由ではあるが、上昇下降というモーションは日常的な視角に仰角、俯角の新鮮な視点を与える。スパイラル状の緩やかなスロープに1種の快感があるのも確かである。エレベータやエスカレータの強制的機械的モーションの不自然さと異なり、一服して周囲を見渡したり、行動の自由を自らが獲得していることがあるのではないだろうか。全てが直線的に突っ走る近代。スピードと時間を競う時代にもかかわらず、ここでは、時間を止めること、視点を自由に選ぶことが可能になる。アスペクタの原野で大空に仰向けに寝転がることによって視線に「柔らかさ」を与えることができる。

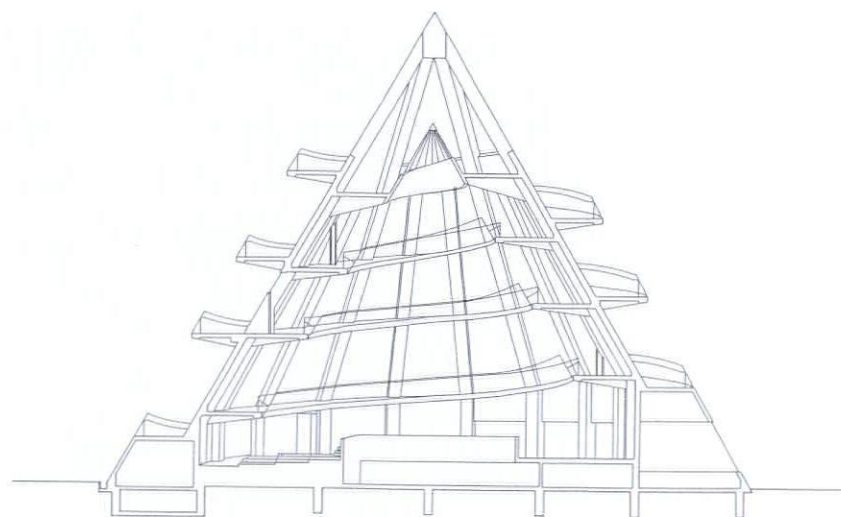


三角港フェリーターミナル 海のピラミッド
Pyramid of Sea, Ferry Terminal, 1990

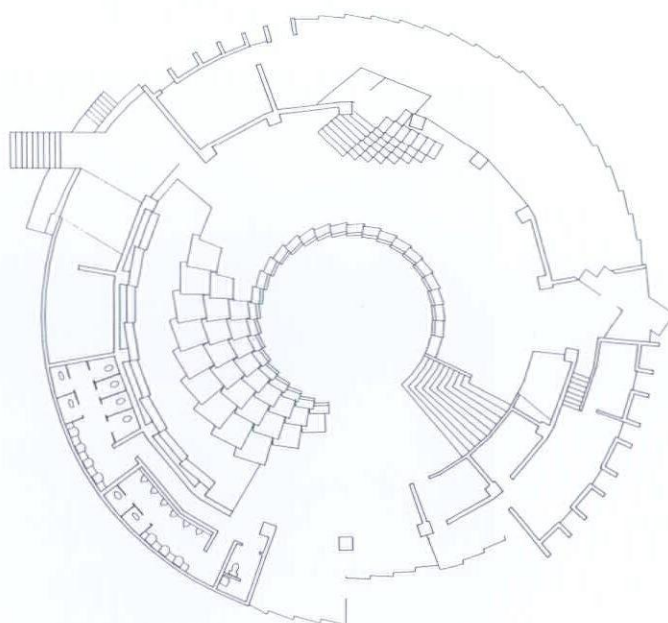




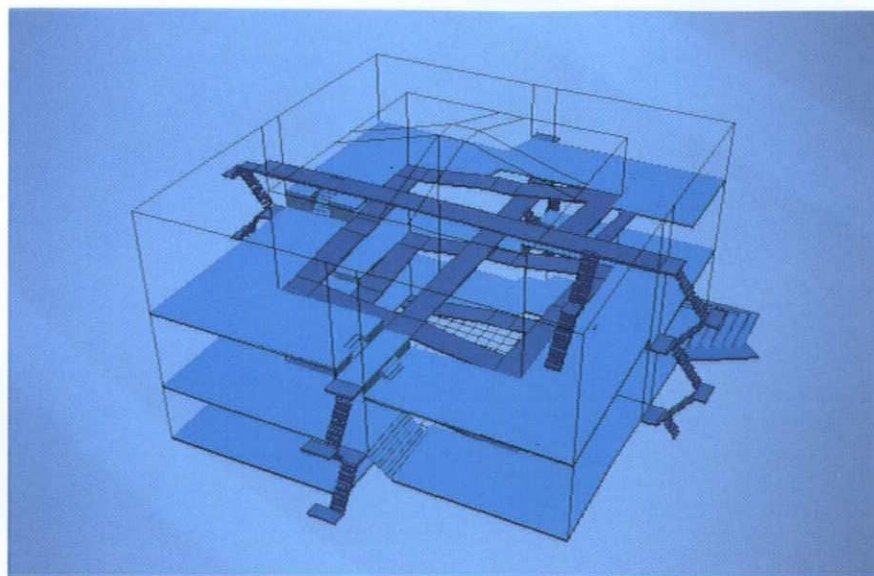
Enjoyment of ascending and descending on foot



断面図 S=1:400

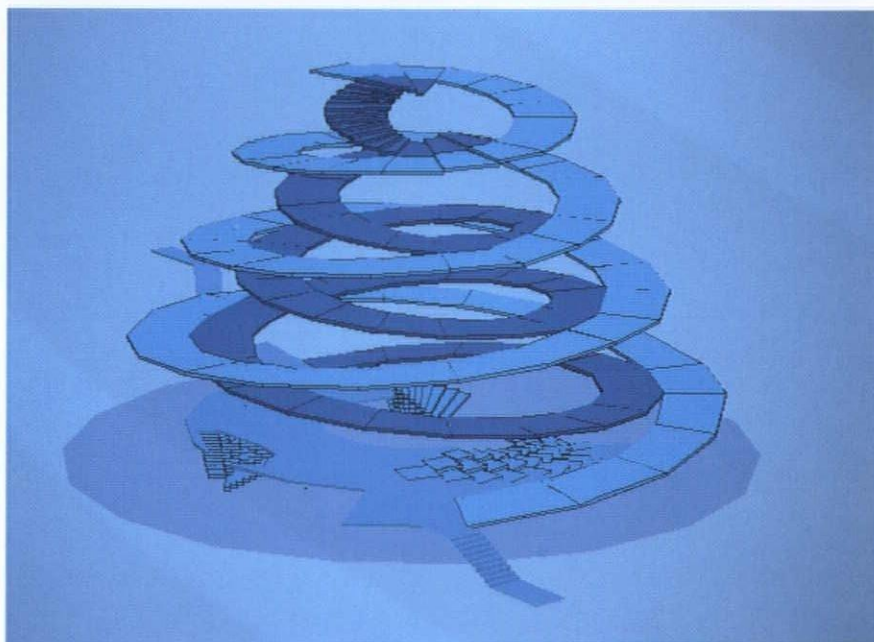


1階平面図 S=1:400

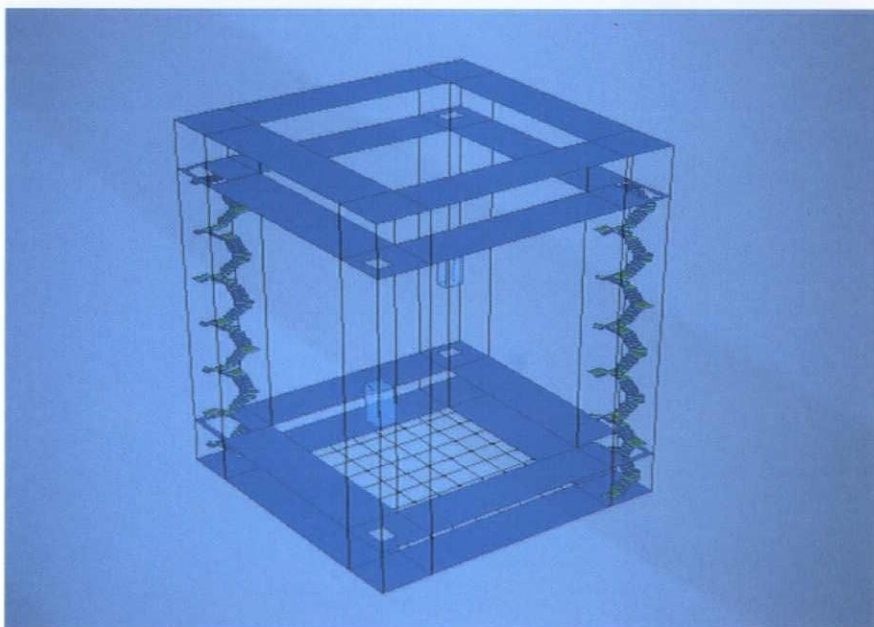


〈西部ガスミュージアム 自然現象美術館〉(1989)

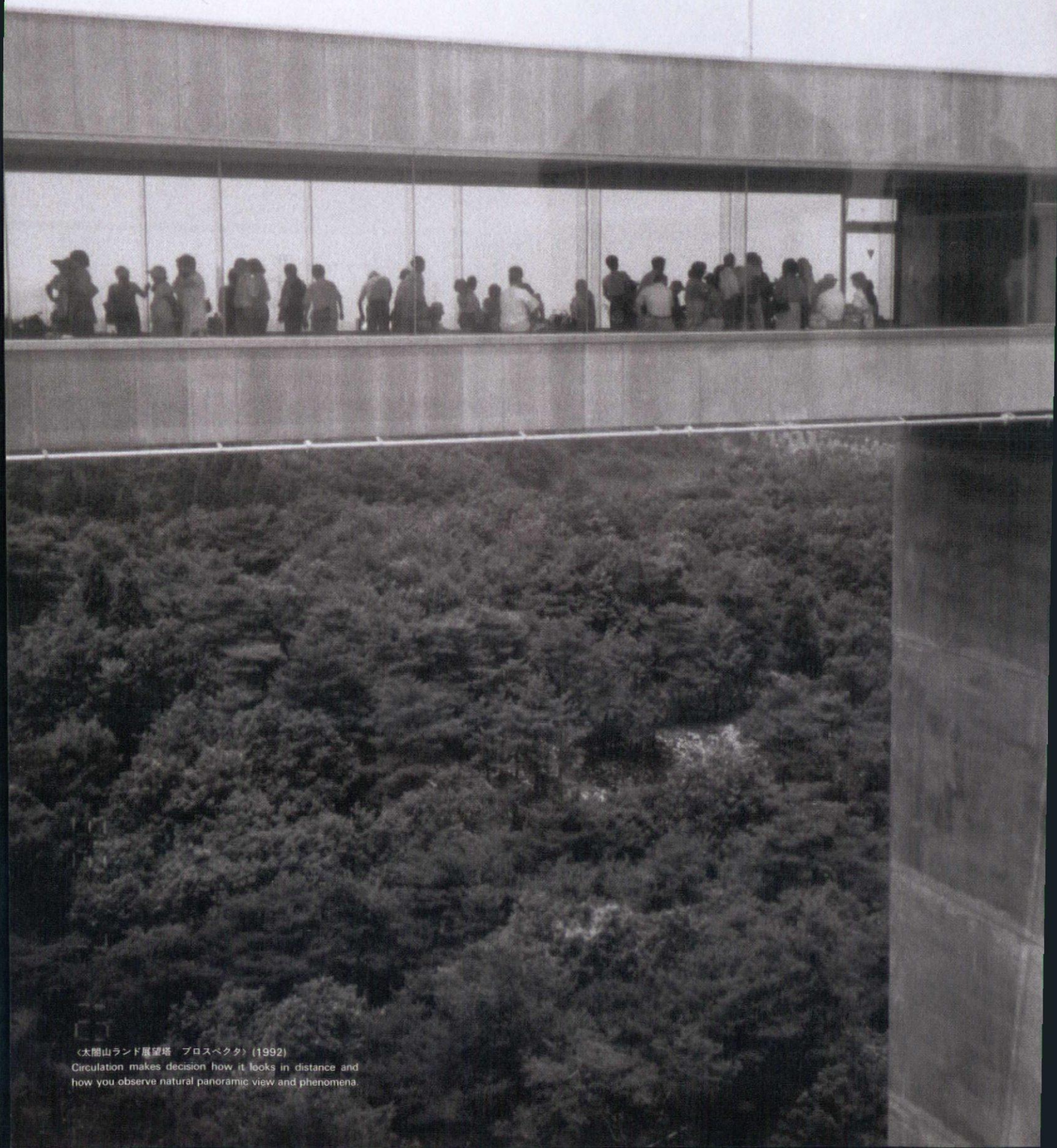
Ascending a slope in the Media Space in the middle of a void space of the building to enjoy "Performance"
Descending the Galleries around the Media Space to enjoy the works of art.



〈三角港フェリーターミナル 海のピラミッド〉(1990)



〈太閤山ランド展望塔 プロスペクタ〉(1992)



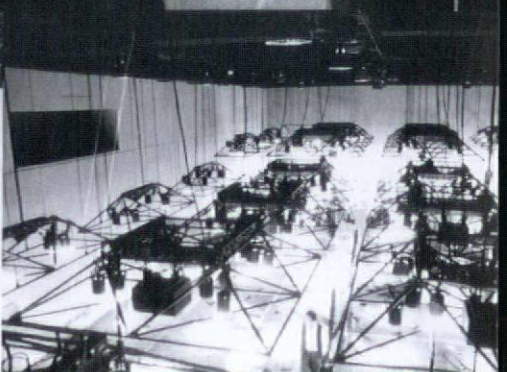
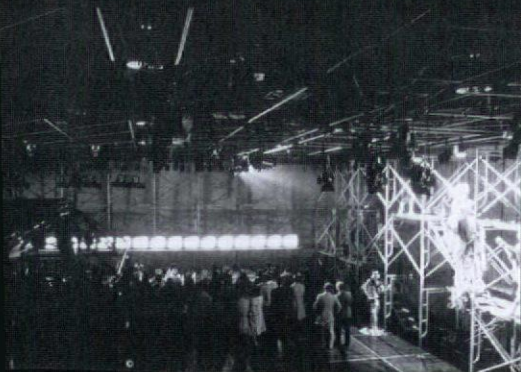
大間山ランド展望塔 プロスペクタ (1992)

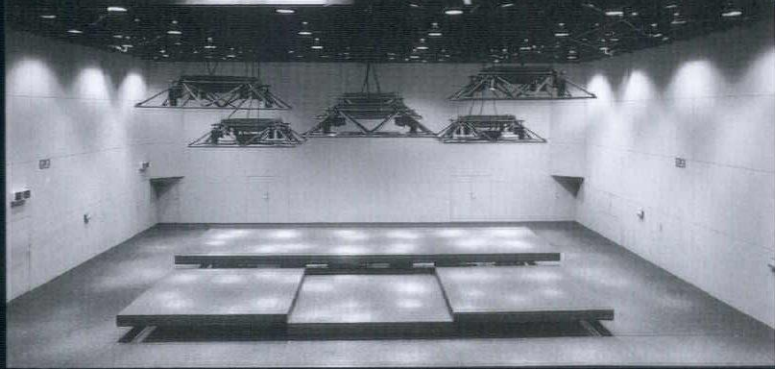
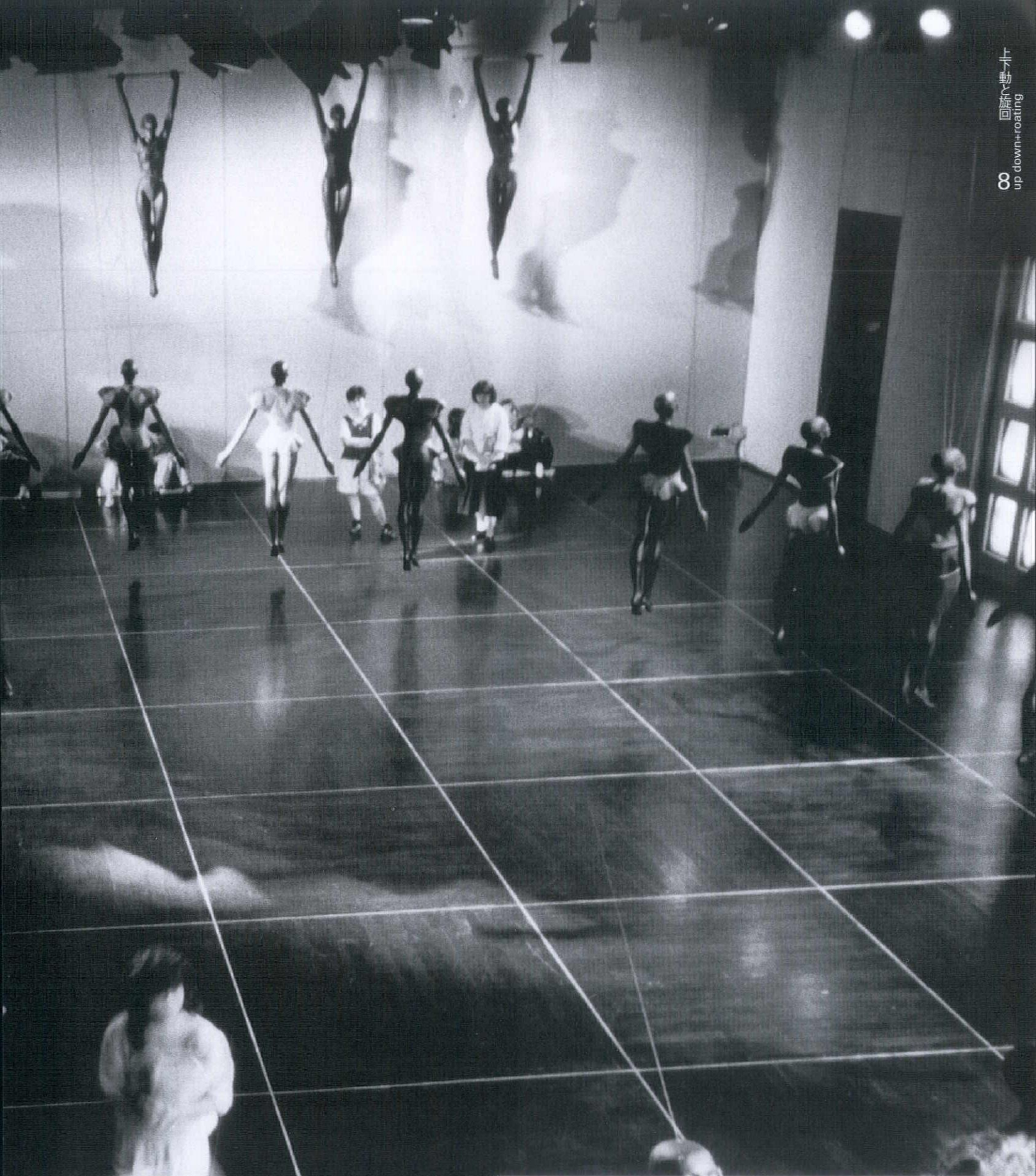
Circulation makes decision how it looks in distance and
how you observe natural panoramic view and phenomena.

ラフォーレミュージアム赤坂
Laforet Museum, Akasaka, 1983



Issey Miyake's installation "Body works"





Performing event space equipped with up down ceiling and floor to provide unlimited applications.

ラフォーレ原宿小倉店

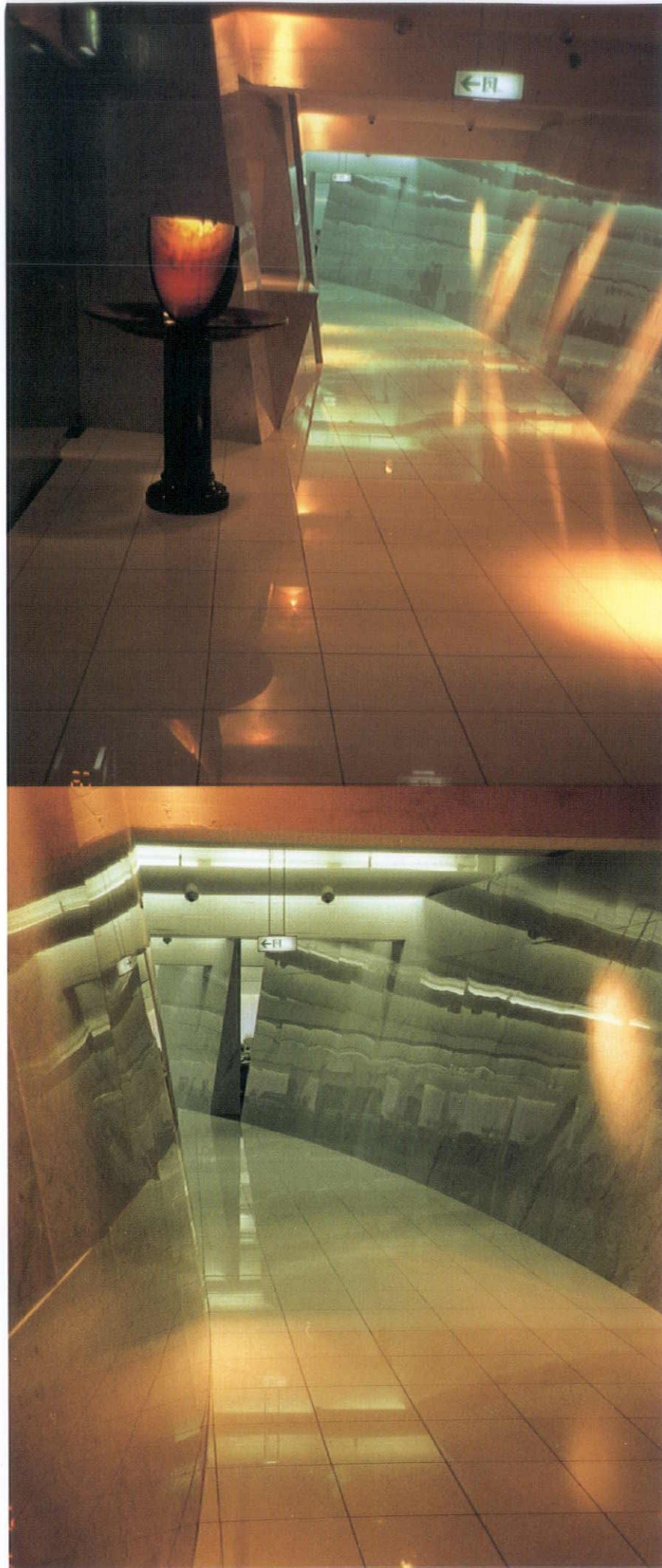
Laforet Harajuku, Kokura, 1993



Staircase with illuminated wall and ceiling. vertical gallery
明るく彩られた階段室、垂直のギャラリー

岩田屋本部

Iwataya Office,
1991



Rotating corridor with centrifugal and
centripetal forces
円周上の遠心力と求心力



moisturizing

タージマハールや金閣寺の美しさが、池に映すことで強調される時、「水」は流れてもいないし動いてもない。一方、潮の満ち引きによって大地と断続したり、継がったりするモンサンミッシェルはその対極にある。しかし、水が水であるのは、もやや霧、雲、雪、雨などの自然現象のもたらす変容、それを知覚する人間との関係にある。「水」と「建築」が池、滝、噴水という古典的関係から出発して、コンプレッサーで圧力をかけて細かいノズルから軽い水蒸気にすることによって、霧の彫刻や虹が発生させたりして、パフォーミングの主演にしたのが富山の〈プロスペクタ〉である(P.108)。

潤いをもたらす水分、水蒸気の粒子には大

きさ重さの違いがある。軽くふわふわと変容し続ける霧が、重ければもやとなり、雨に近い水滴になって初めて虹が発生したり、その変容は最も身近に見られる自然現象であり、水の惑星に帰還した宇宙飛行士の心にしみる情景だという。

亜熱帯の沖縄では琉球石灰岩(P.110)、佐賀県の唐津では唐津石を用いて(P.116)、汗をかいたゴルファーに対して高台の分水嶺から流れ出た水を演出に用いている。石灰岩の小さな気泡が水をプチプチと弾くのを間近に寄って確かめられるような静かな壁泉は、熊本の〈パピリオン〉が初めてであった。音がうるさくおしゃべりが楽しめないNYのペイリーズ・プレースとは対比的である。アラビアの

パラディソの泉水は逆に、水音によって秘密の会合をマスクングしたといういわれがあることから、その後の〈アクト6〉では中庭の床から湧き出た水を床に戻す、その時の音で国道3号線の騒音を消している(P.117)。

中庭を駆け廻る子供たちが、3m×3mのグリッド上の噴水をジャンプしたり、手を触れたりしている。水や緑がなければ空間は乾燥し、ギスギスした物になり、逆に水路と細い路地のヴェネツィアの魅力が相変わらずであるように、潤いをもたらす「水」を欠かすわけにはいかない。

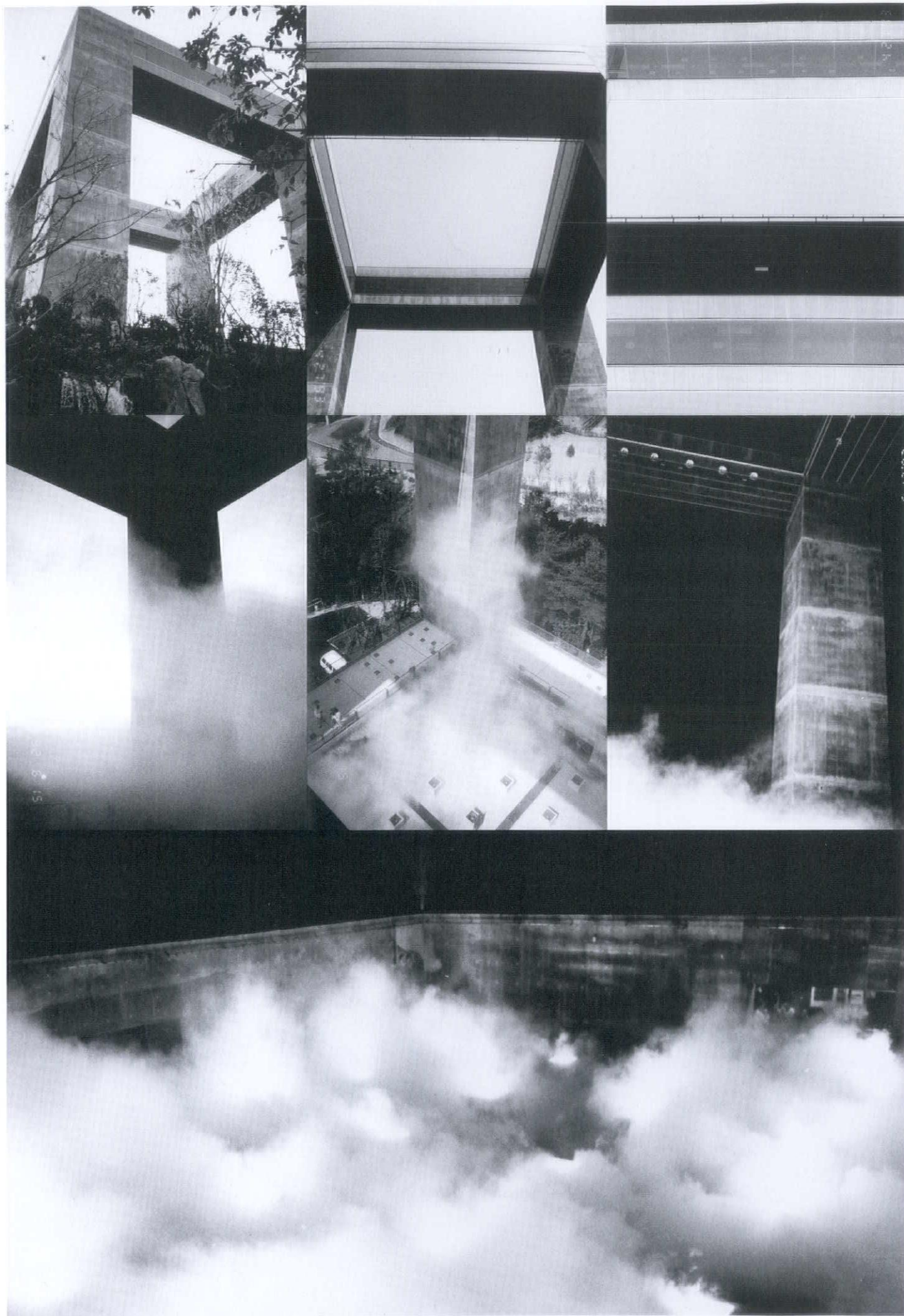
太閤山ランド展望塔 プロスペクタ

Prospecta Toyama '92, Observatory Tower for Natural Phenomena, 1992



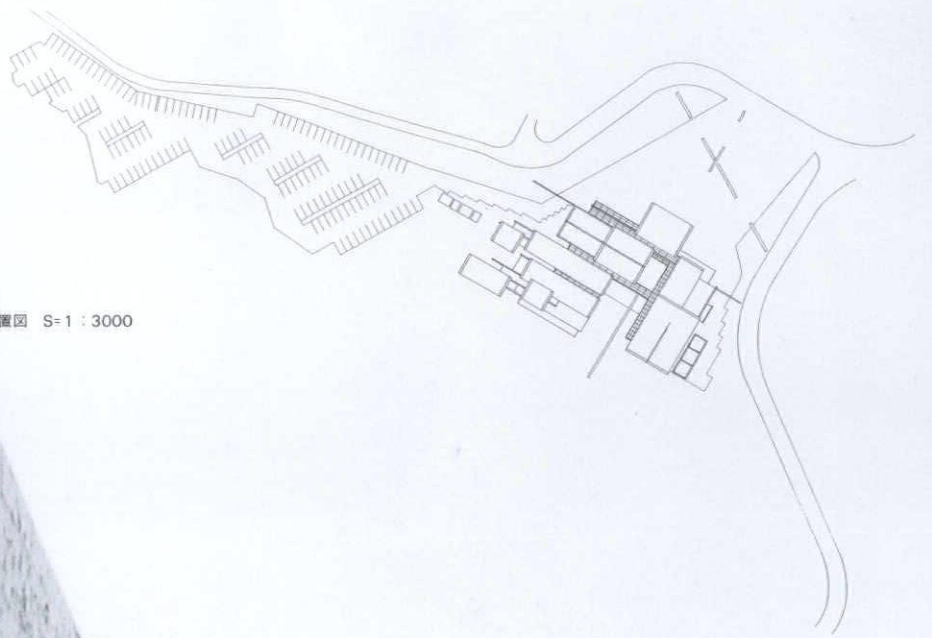
Computer programmed performance of water, collaboration of a fog sculptor, lighting artist and sound artist. Coincidence of your image and performance reduces extremely the time of duration.

自然との交歓の程は経過する時間の感覚に反比例する。



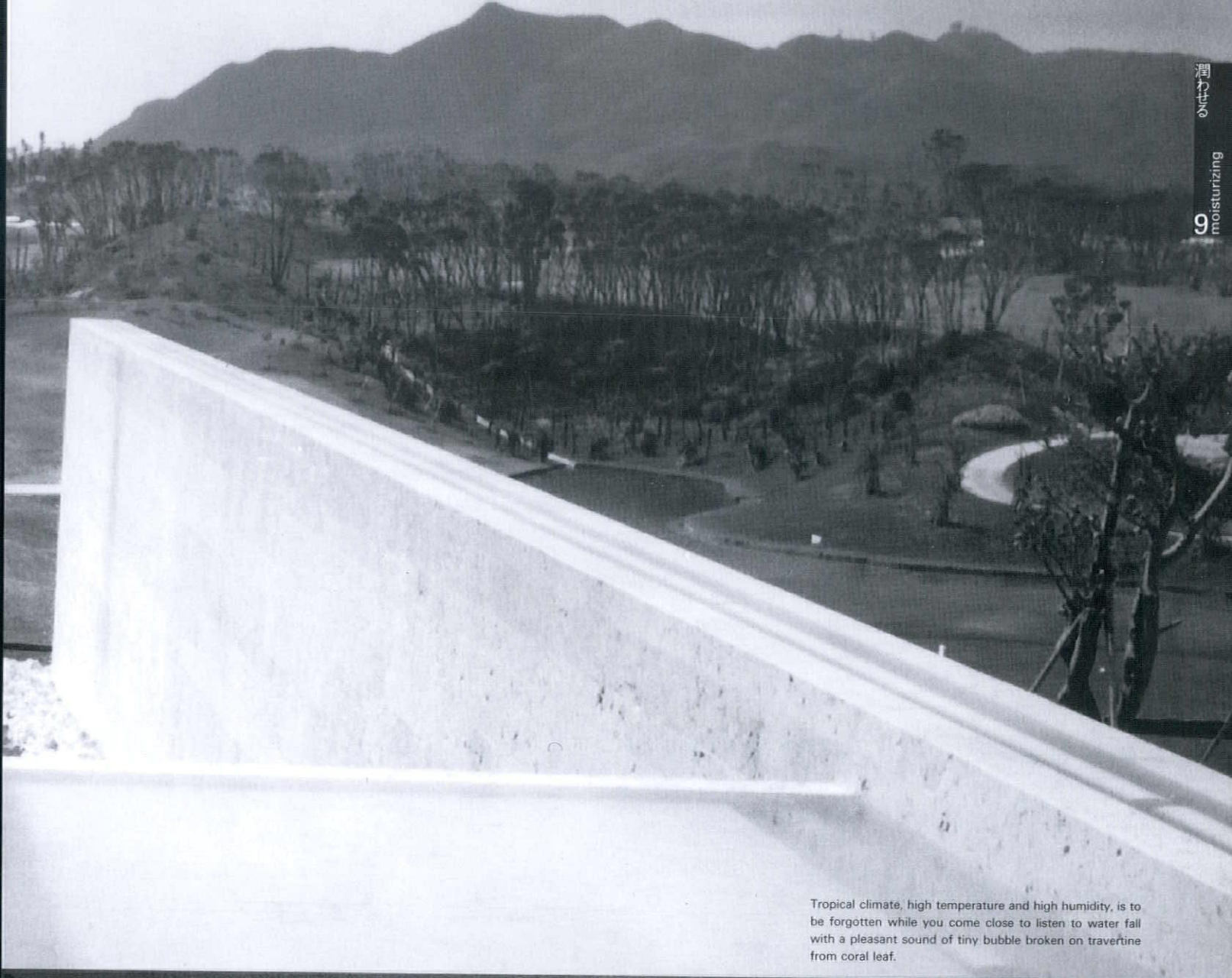
嵐山ゴルフ倶楽部
Arashiyama Golf Club, 1991

配置図 S=1:3000





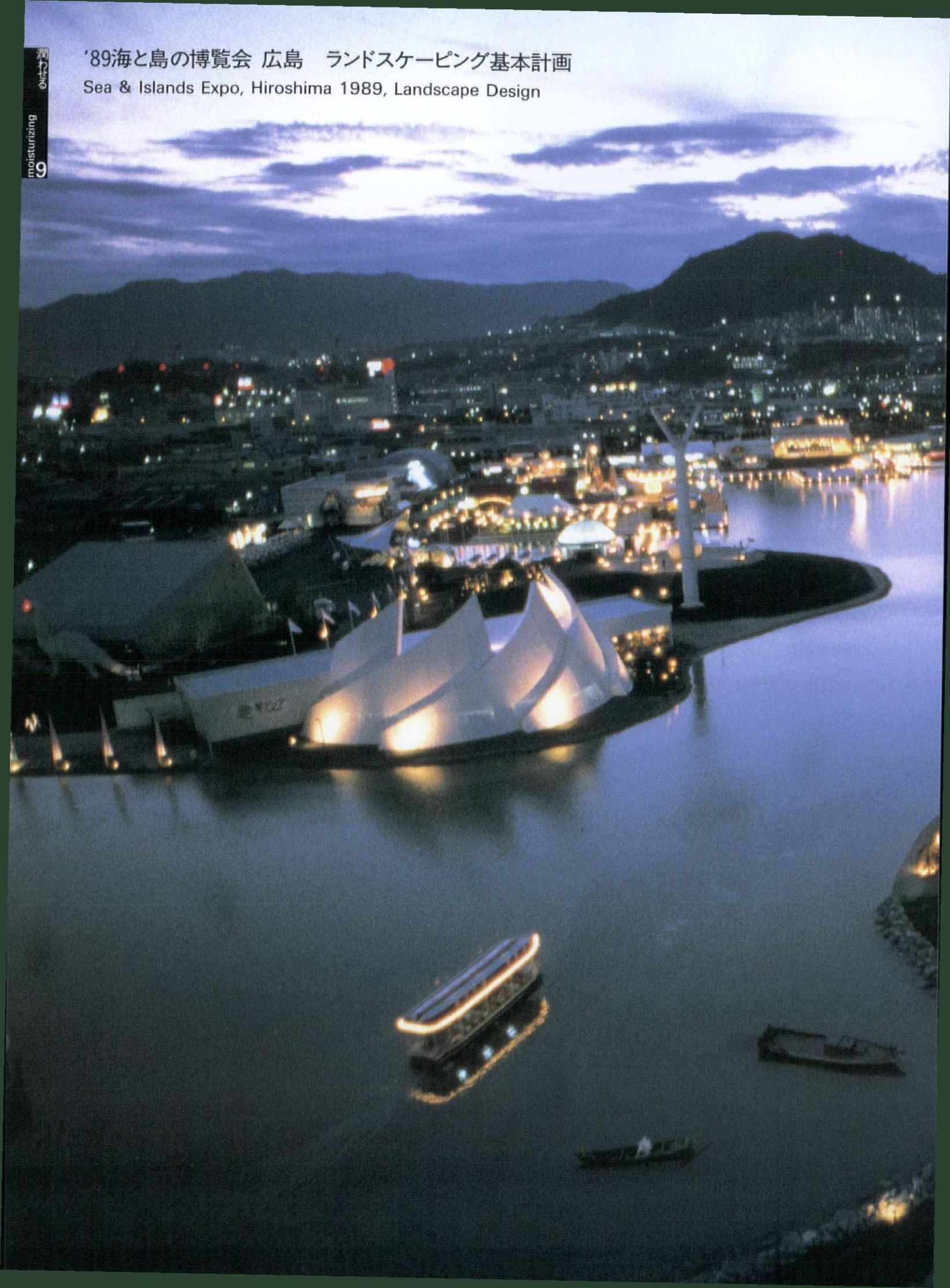


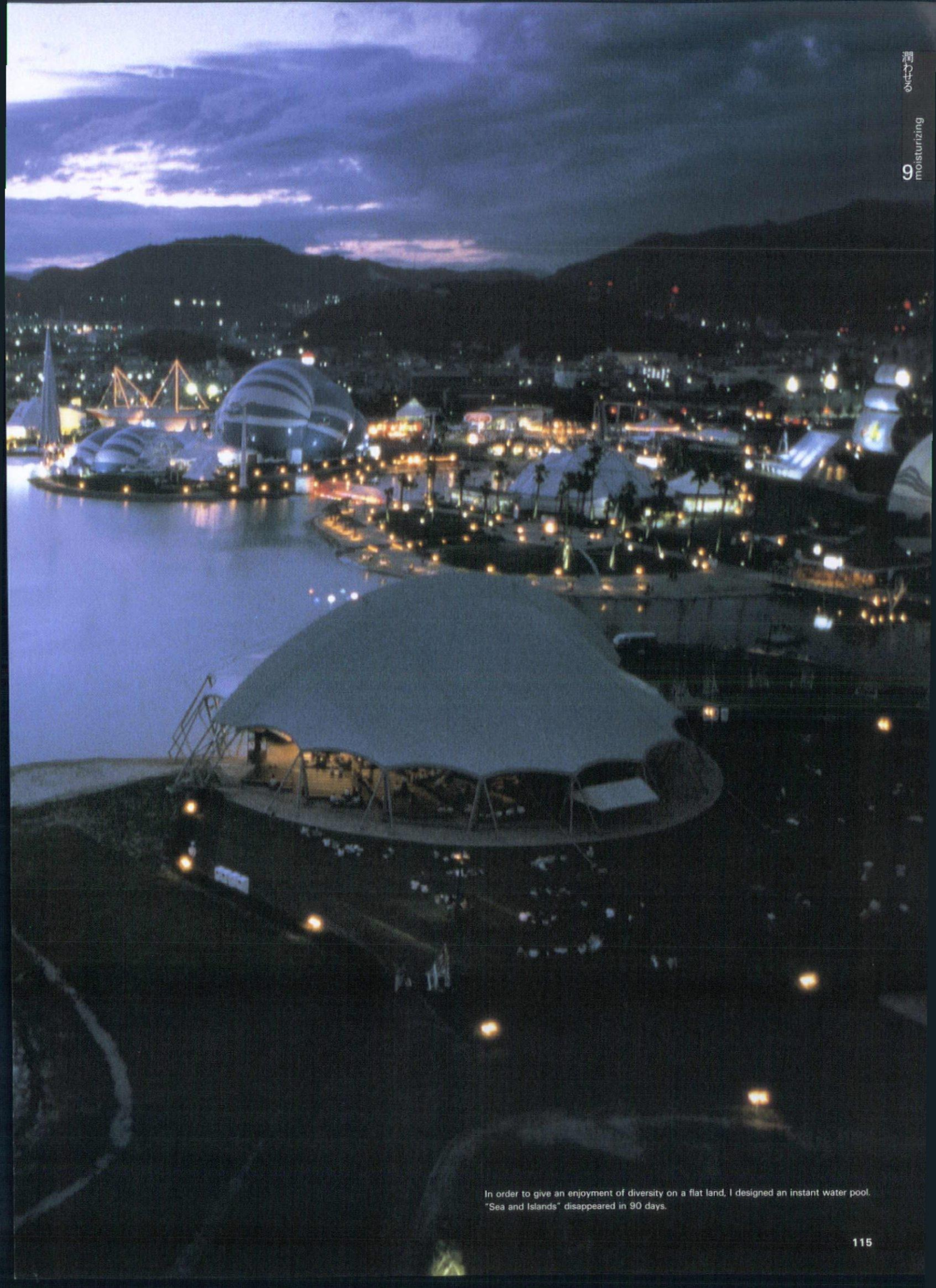


Tropical climate, high temperature and high humidity, is to be forgotten while you come close to listen to water fall with a pleasant sound of tiny bubble broken on travertine from coral leaf.



'89海と島の博覧会 広島 ランドスケーピング基本計画
Sea & Islands Expo, Hiroshima 1989, Landscape Design

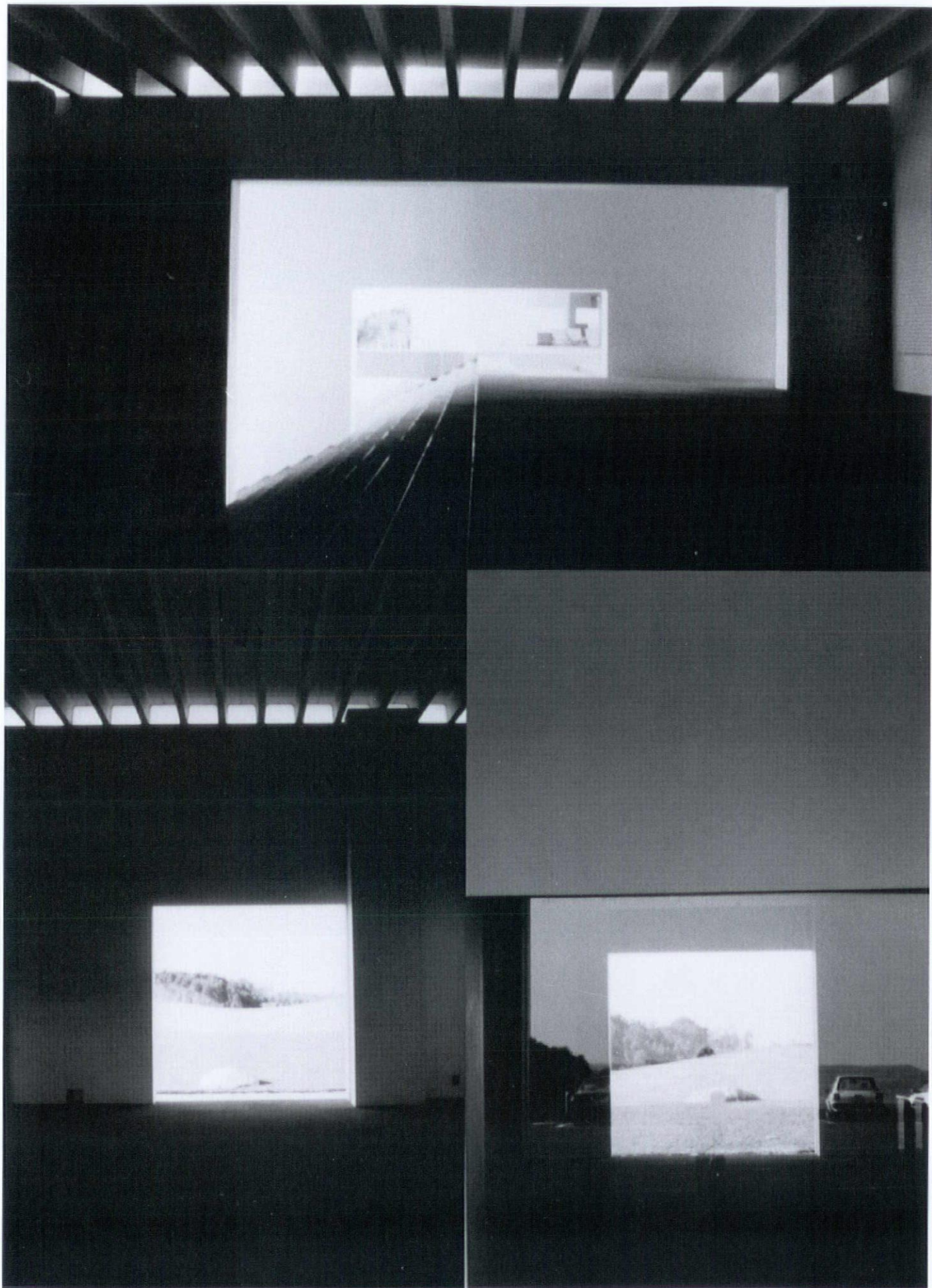




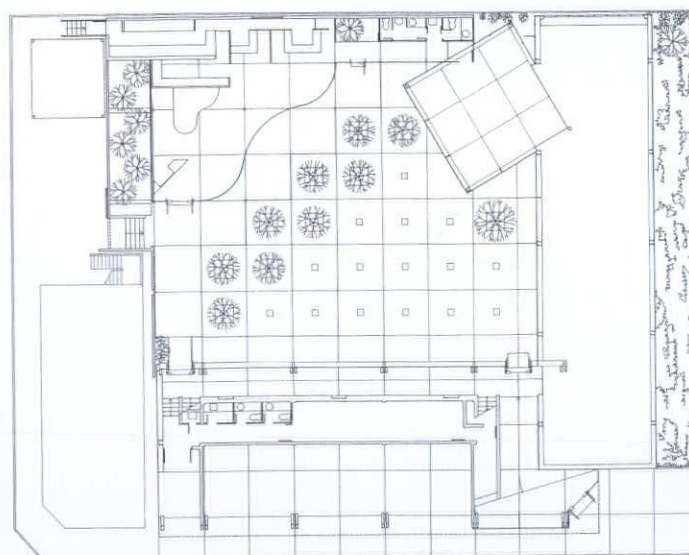
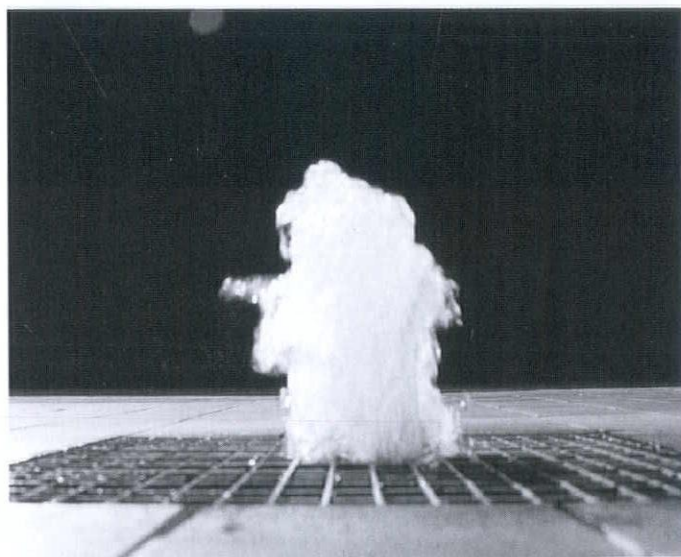
In order to give an enjoyment of diversity on a flat land, I designed an instant water pool.
"Sea and Islands" disappeared in 90 days.

唐津ゴルフ倶楽部

Karatsu Golf Club, 1991



アクト 6 (1985)
Act 6



配置図 S=1:500
3 m grid for the Ambient Installation of fountain or tree.

lightning and lightning

〈光格子の家〉(1981)

現代人がほとんど無関心な日常的な自然現象を知覚する時、イヤホンや虫メガネを使えば拡大して認識できるように、自然現象の中でも光を増幅する装置としての建築群である。

スティーブン・ホールやヘンリー・ブラマーのように、卓越した感覚と知性だけが自然現象と共振する琴線を得ているわけではなく、そのような心と目は誰にでもあり、そのきっかけさえあれば見えるし、感じることができ

る。

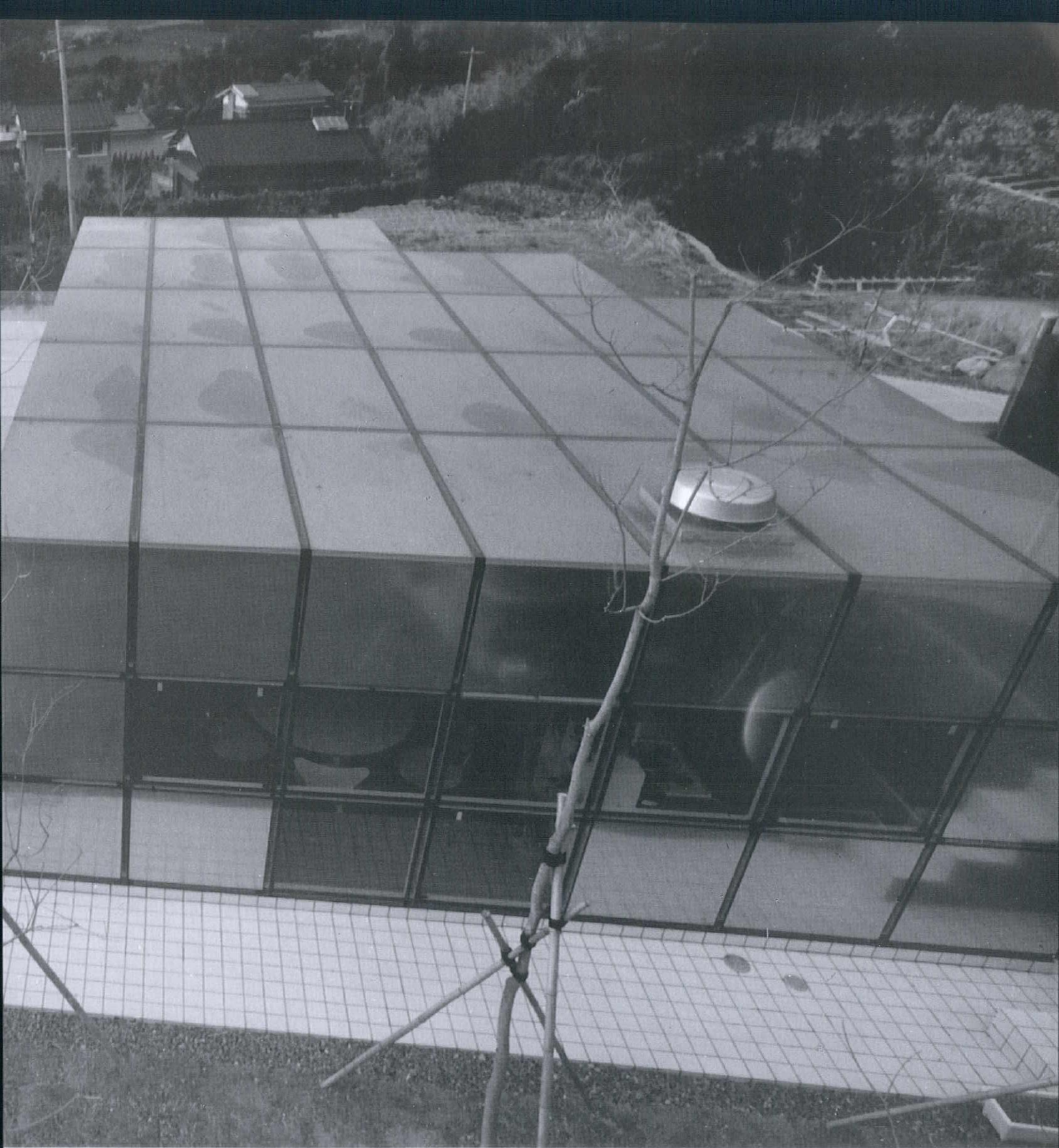
光は影によって存在が可能になる。強い光は濃い影をもたらす。そのコントラストを和らげる方策として、それまでになかった光格子が生まれた。虚の構造体、光の格子は床や壁に光を映している。全空間を律する秩序がそこにはある。〈光格子の家〉(P.122)

光に満ち溢れた影のない世界には浮遊感があり、光を限定することで光の希少性が高ま

る。〈シューメーカー・コーネリア〉〈ジョリ+かねしげビル〉(P.135)

光と影のレトリックは、ありもしない影を床の色で表し、内部の明かりで影を消したり(P.132, 133)、光をメディアとする空間が、1970年以来私のテーマとなっている。

壁、天井の立面がモザイク・ミラーで被われた小さなブティックや、避難階段をギャラリーとした光のオブジェ群などがある(P.104)。



自然の光が界面の光の格子によって日没後には反転して、内から光が漏れる住宅は、〈インゴット〉のミラーガラスの光の反転現象を体験したことがきっかけとなっている。

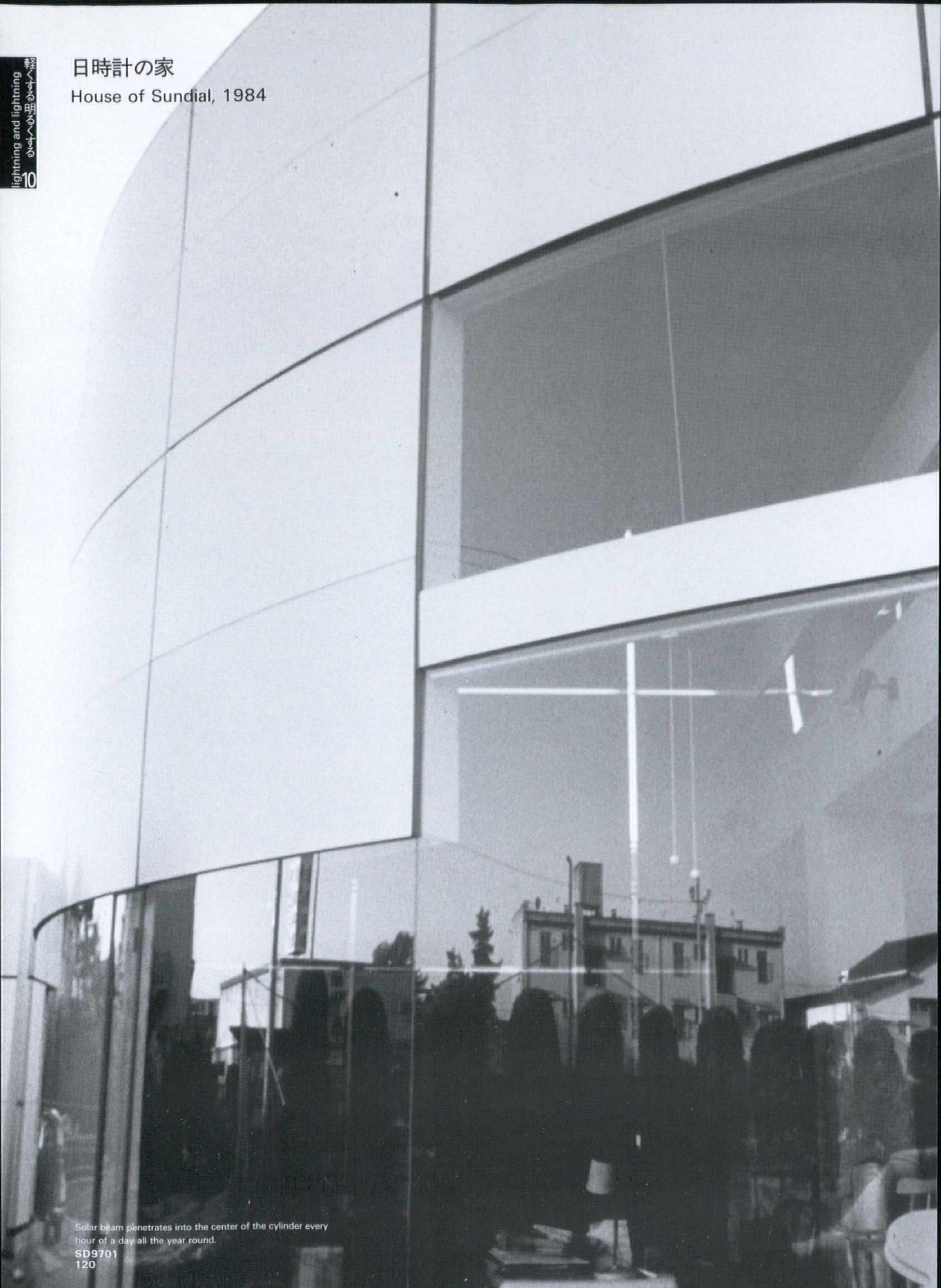
2000年前のローマのパンテオンを原型とする光の建築は、自然現象を増幅する装置だともいえるだろう。

明るい光には軽々と重力を消失させる作用があり、影には重力をとまなう物質性を強調

する作用がある。

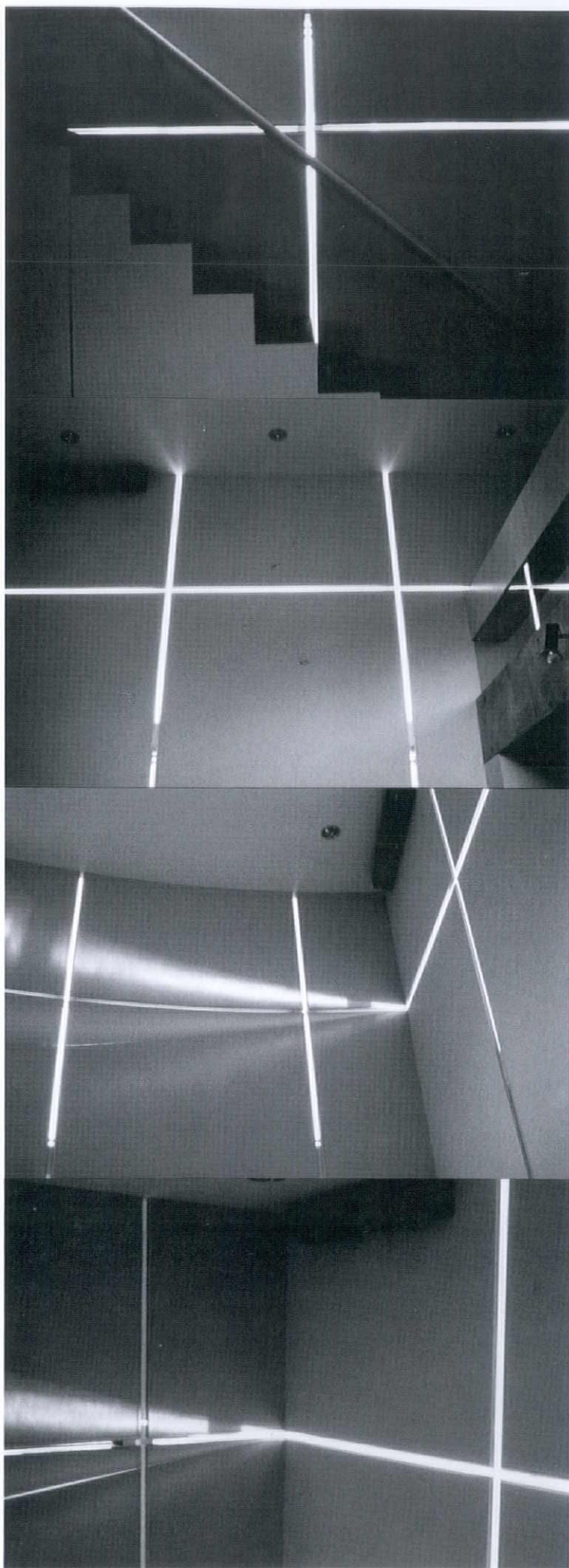
日時計の家

House of Sundial, 1984



Solar beam penetrates into the center of the cylinder every hour of a day all the year round.

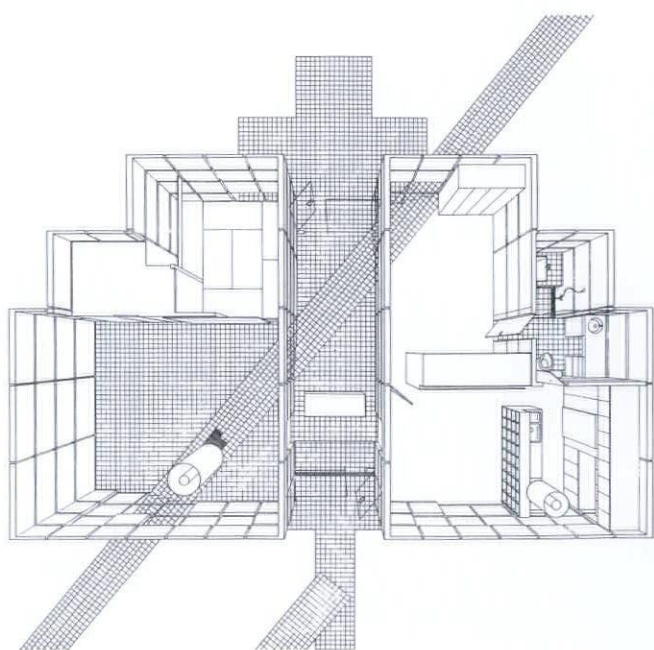
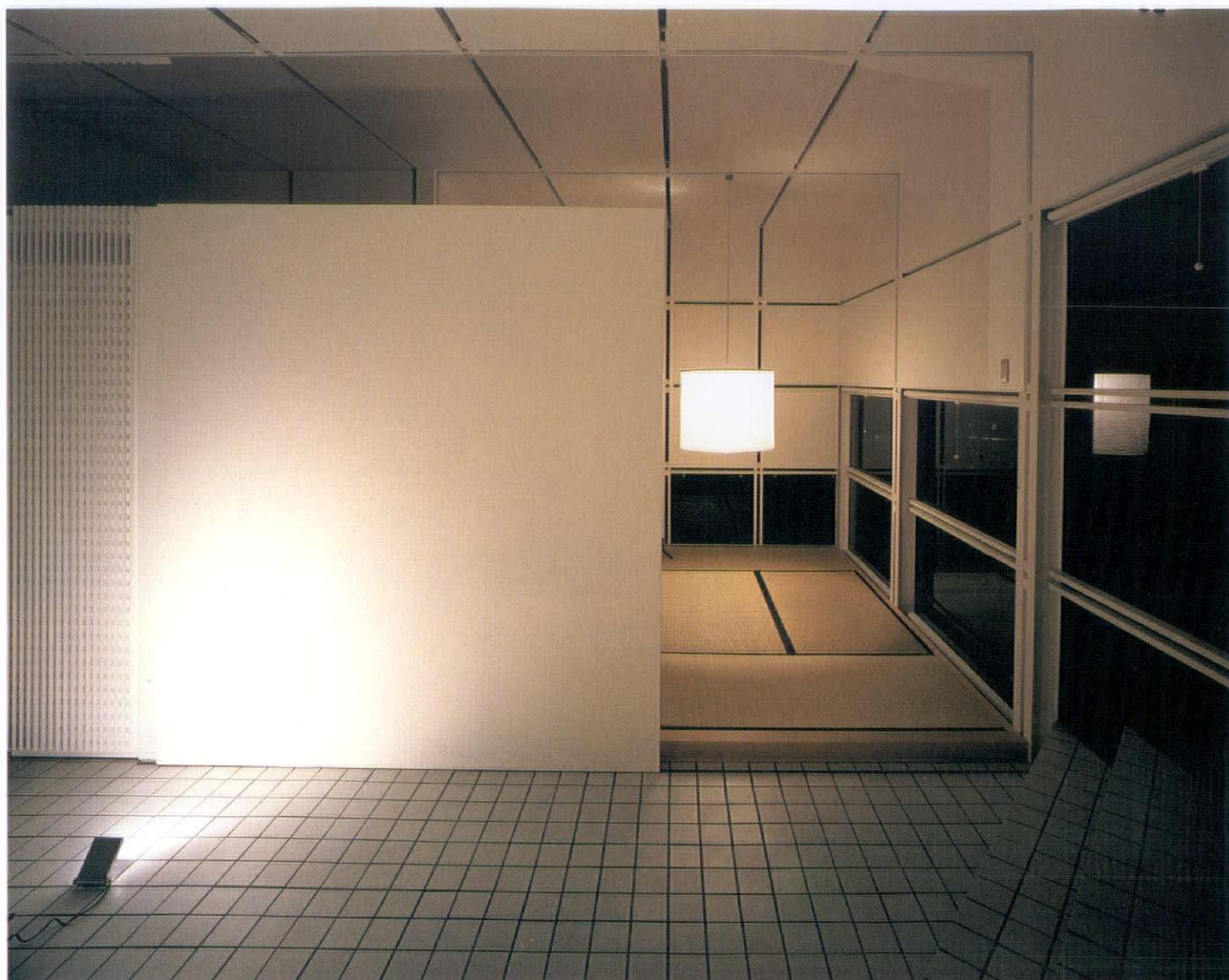
SD9701
120



光格子の家

Stainless Steel House with Light Lattice, 1981

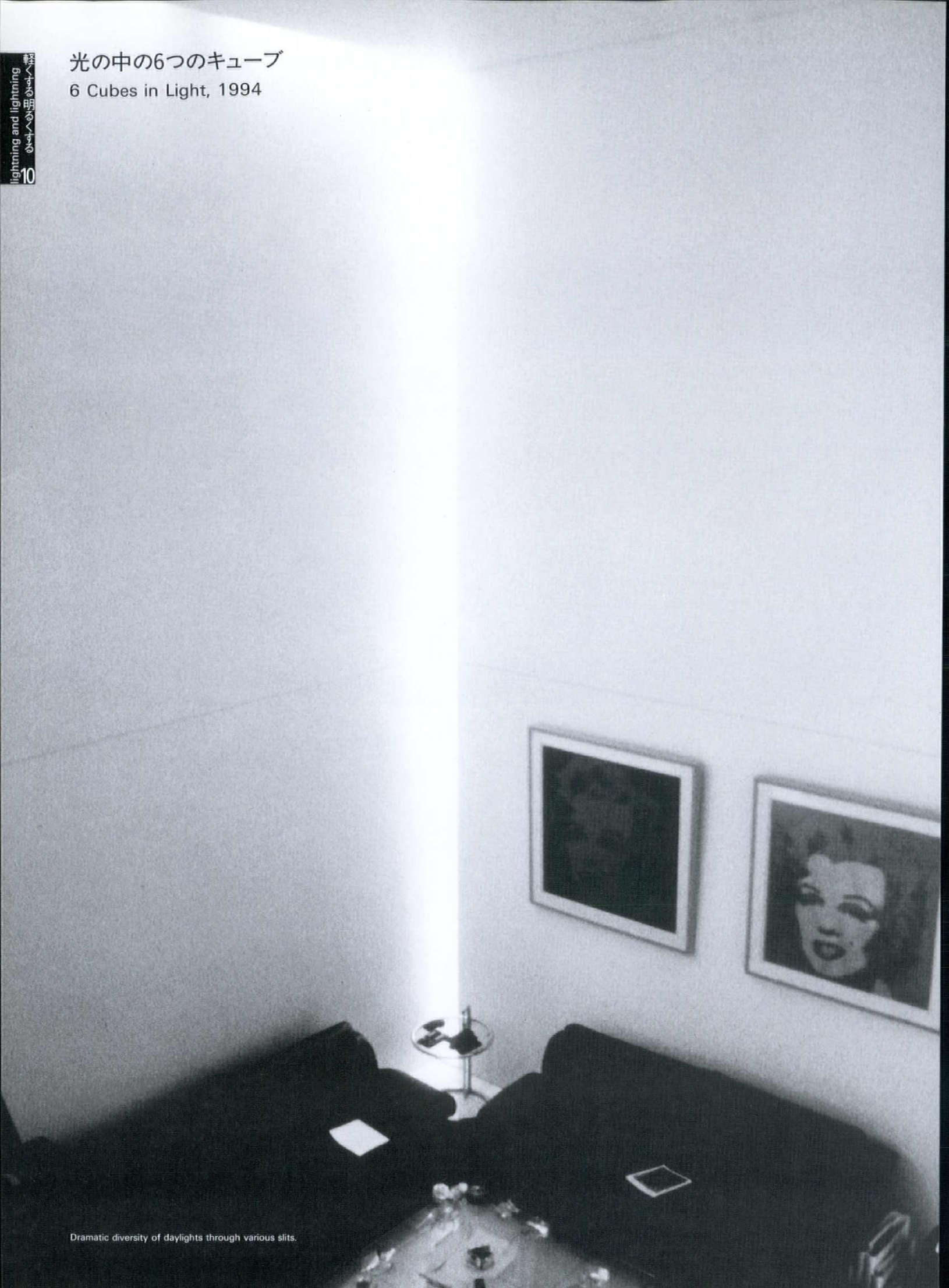




Silent symphony of light lattice is performed every day.

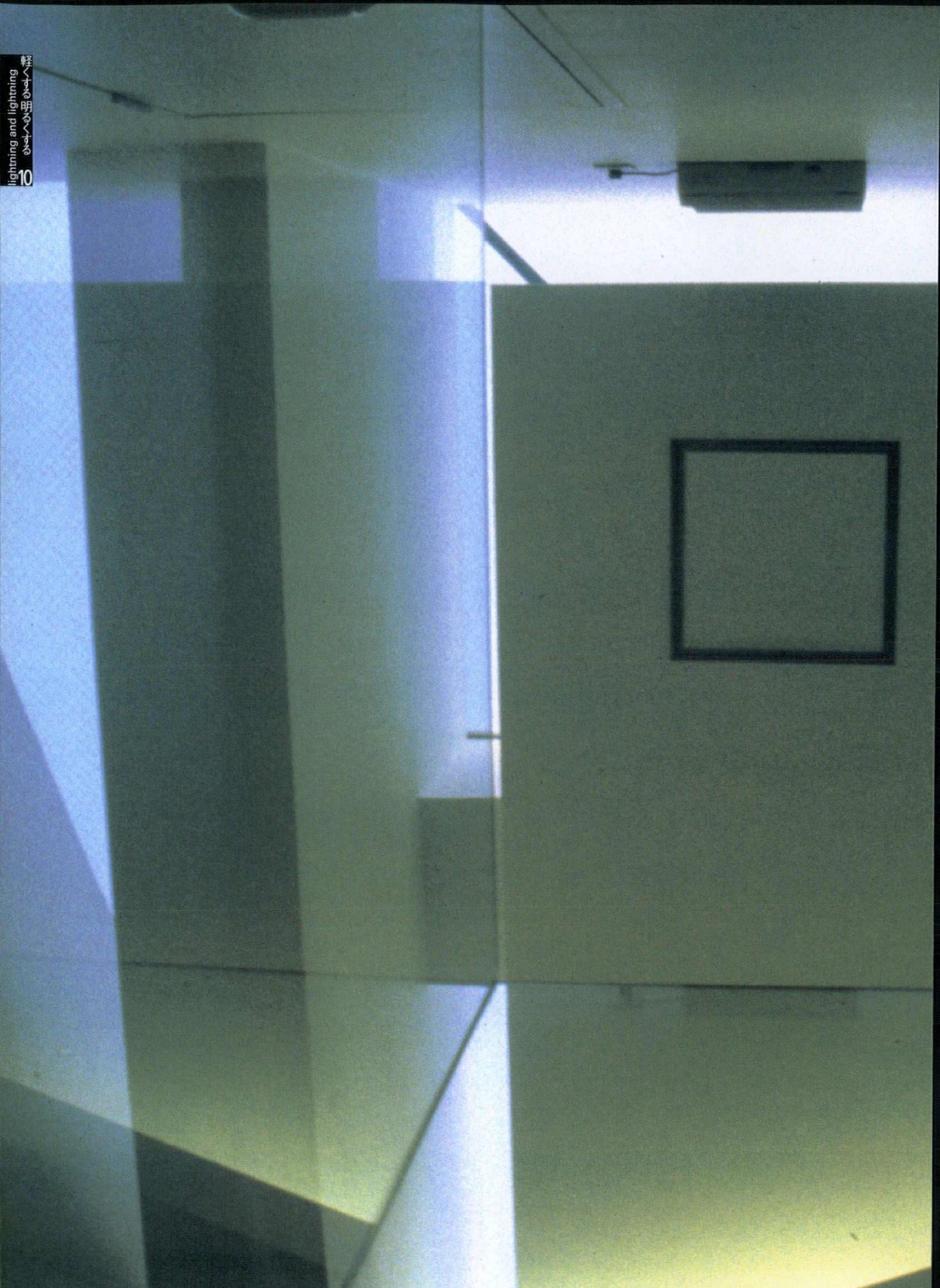
光の中の6つのキューブ

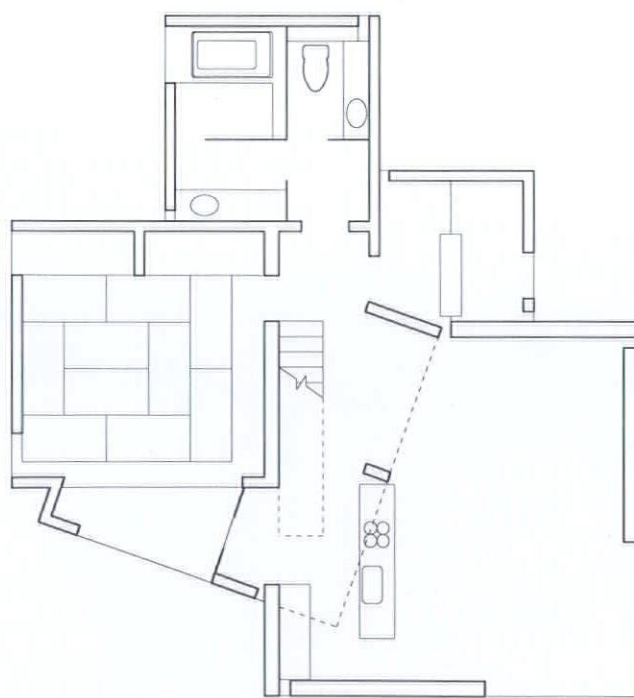
6 Cubes in Light, 1994



Dramatic diversity of daylights through various slits.



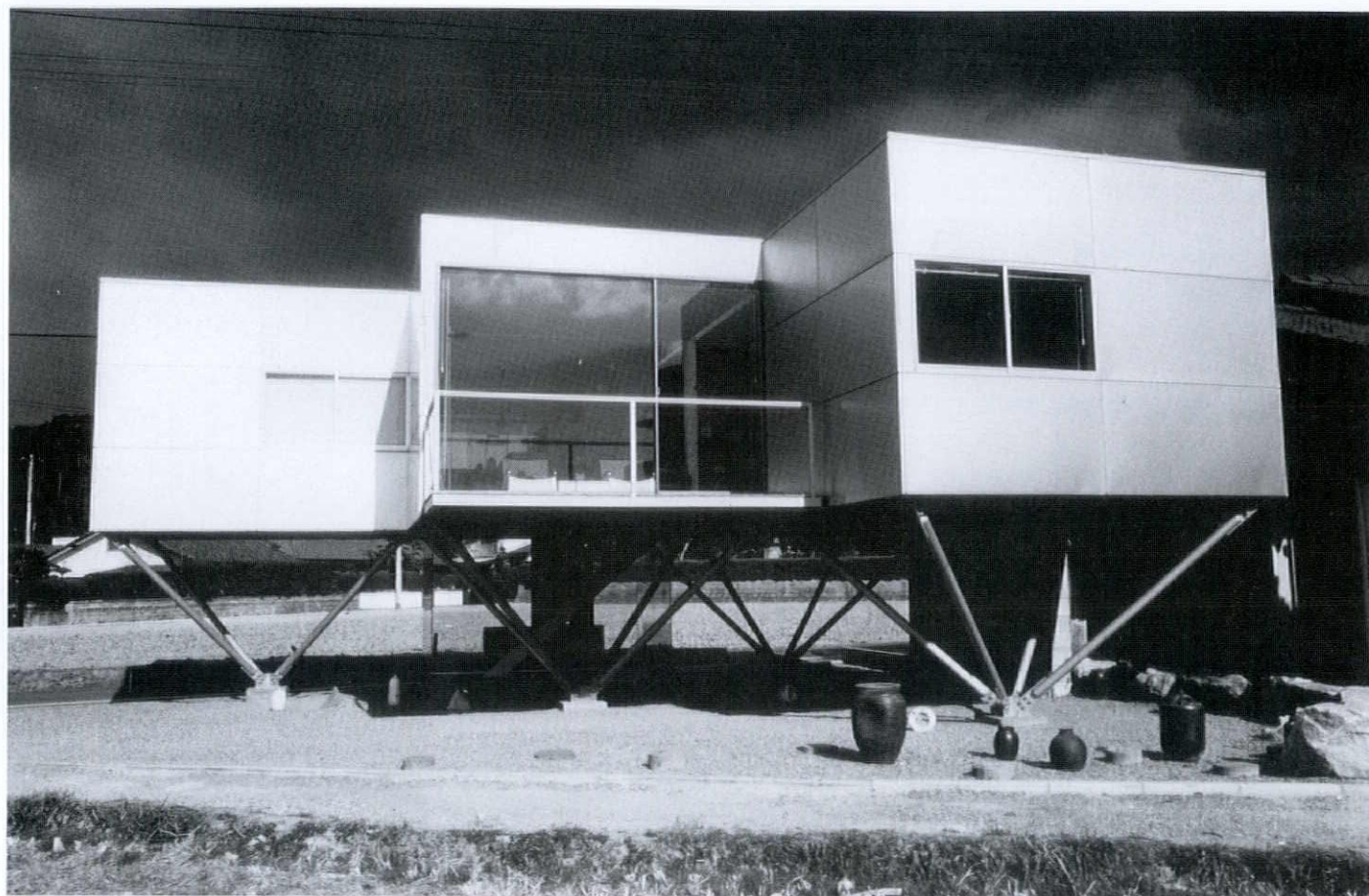




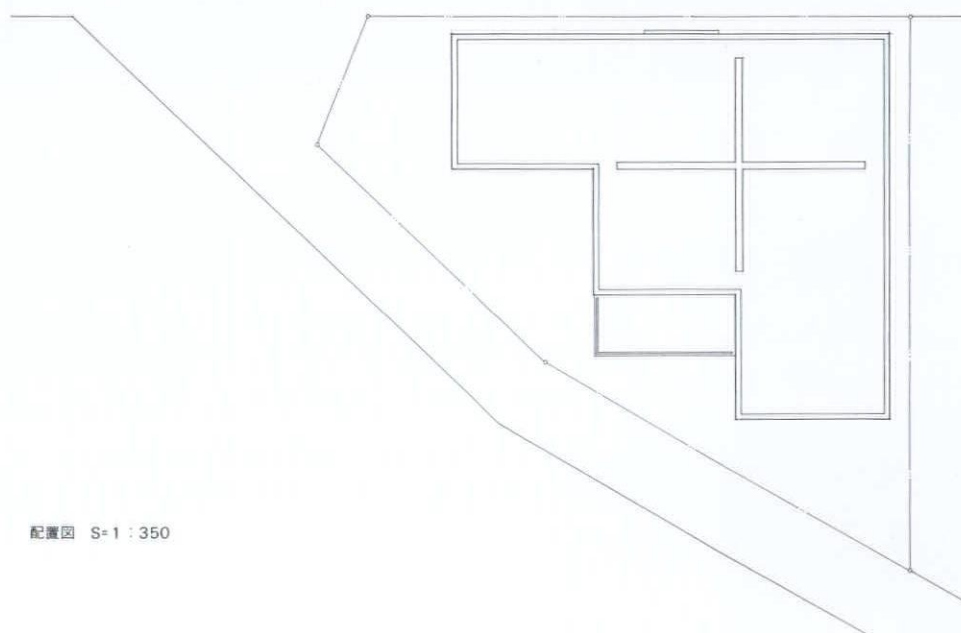
1階平面図 S-1 : 150

光十字の家

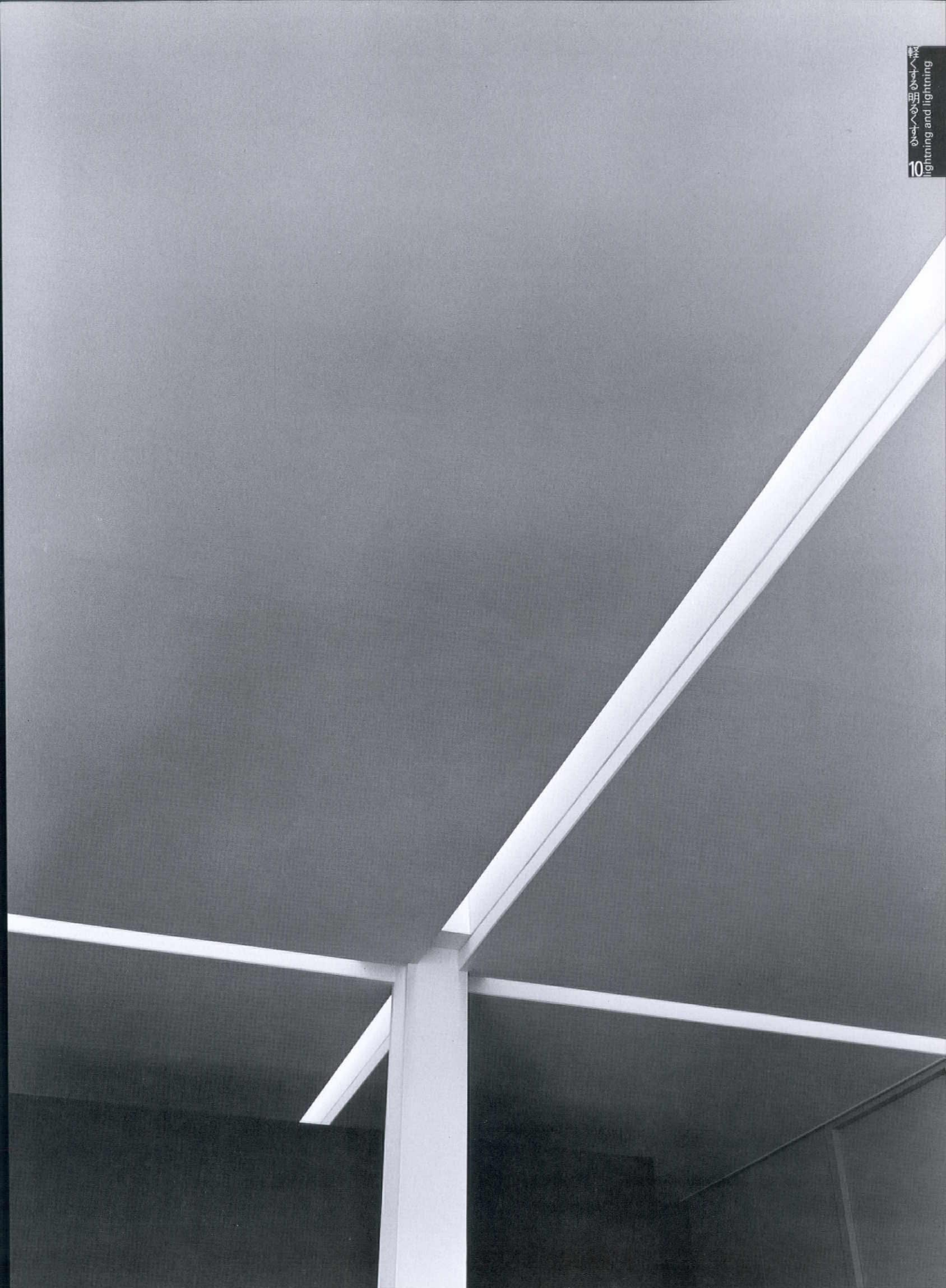
House with a Cross of Light, 198



大黒柱と光十字

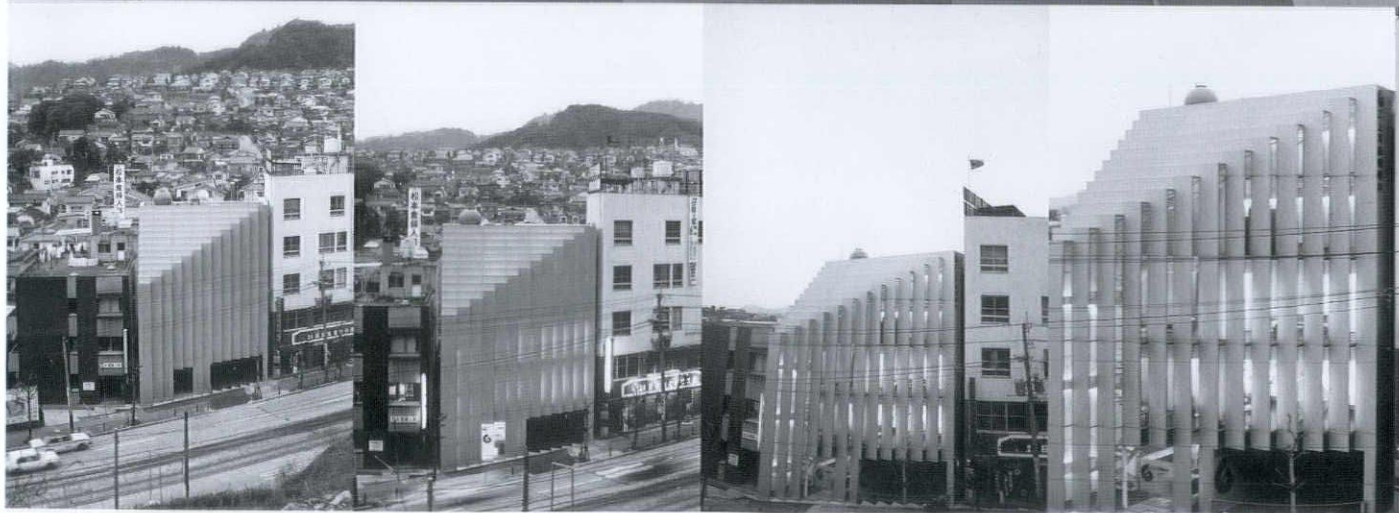


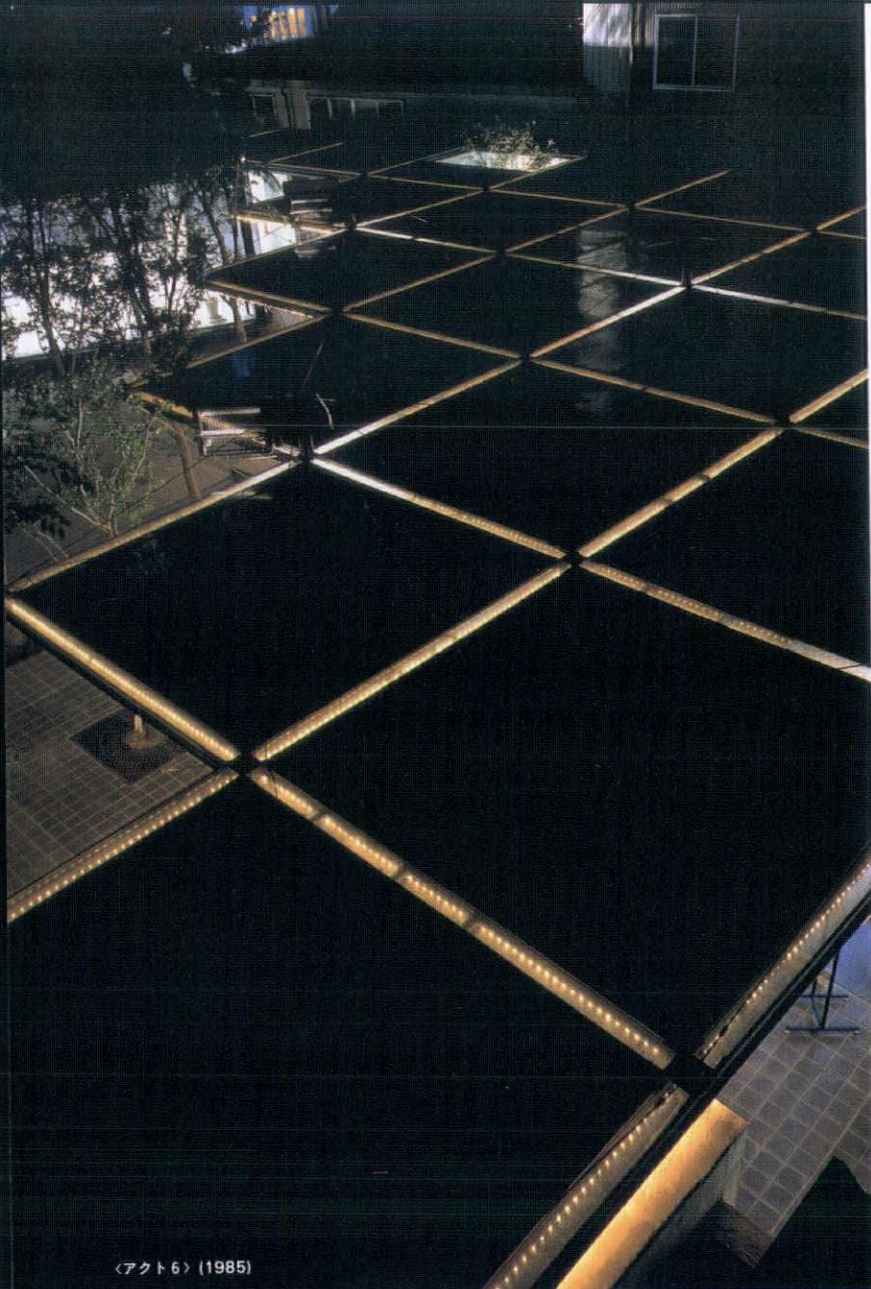
配置図 S=1:350





〈江上クリニック〉 (1982)

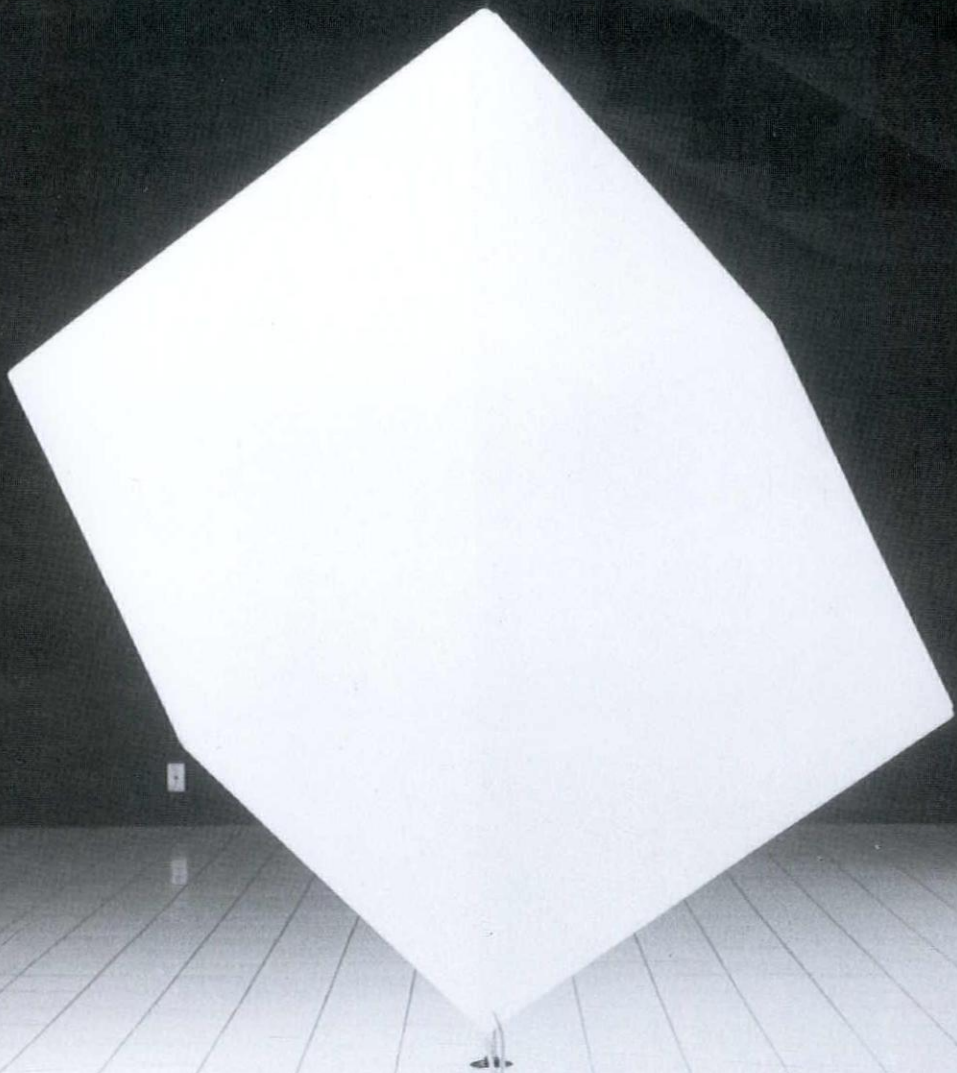




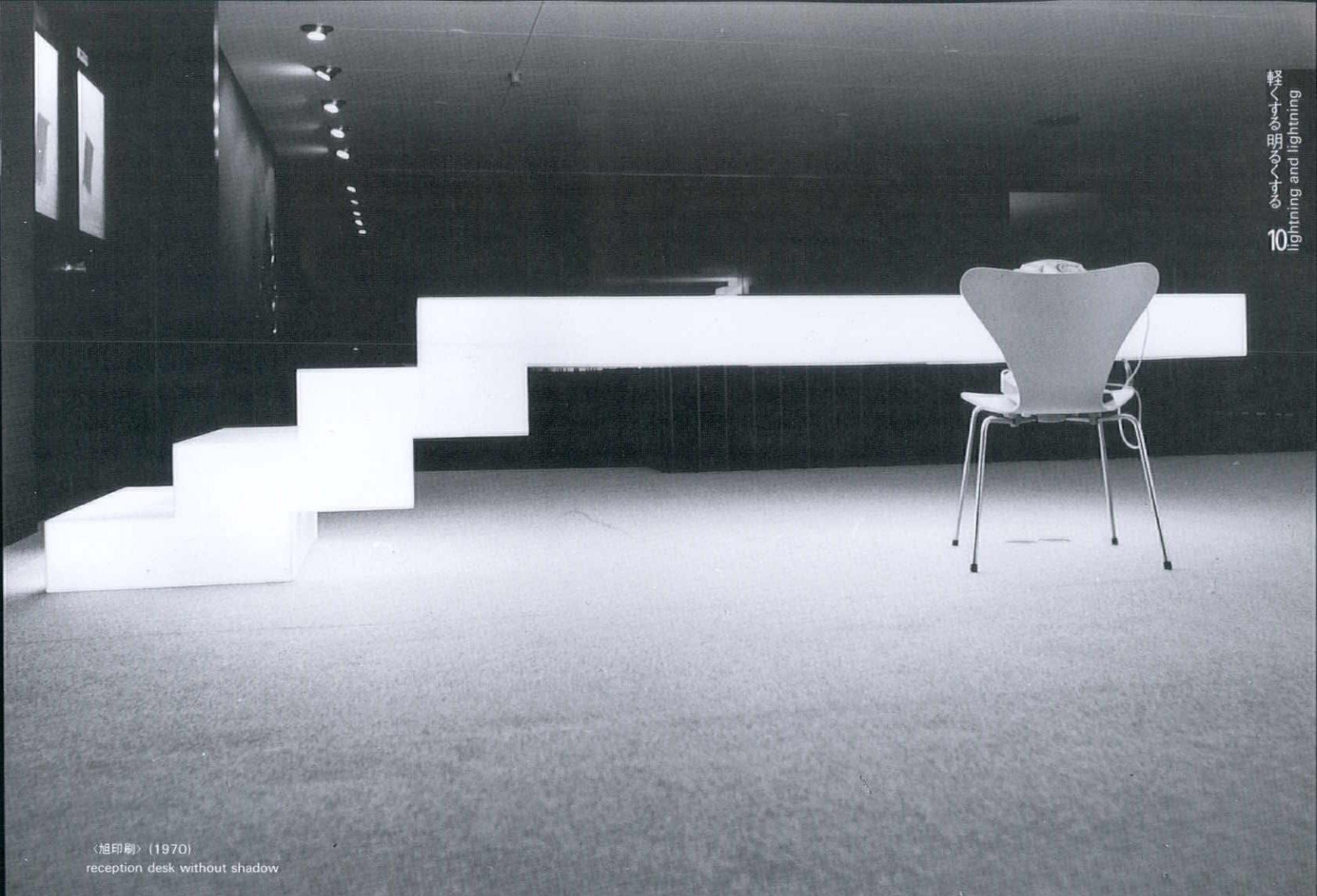
〈アクト6〉 (1985)



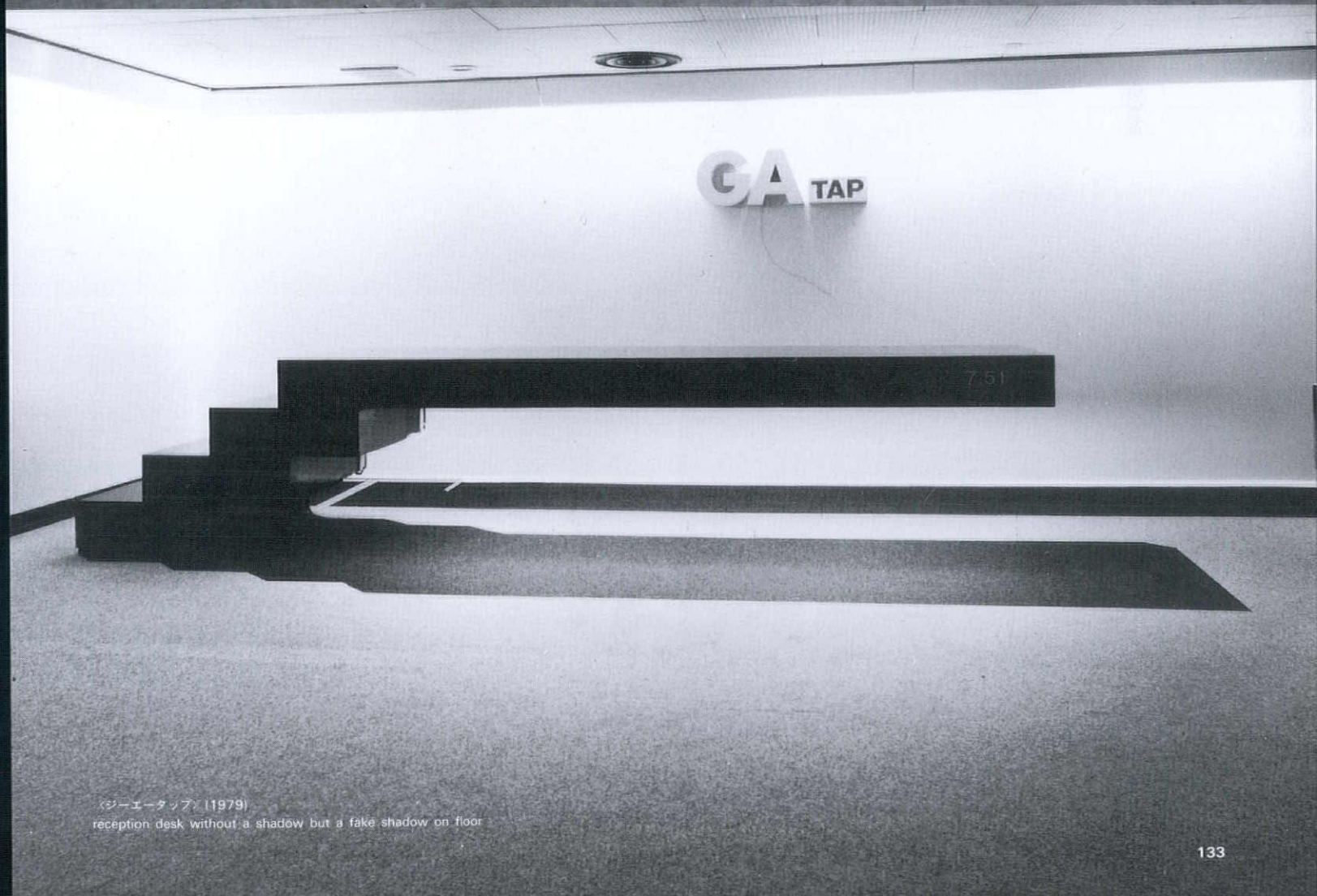
〈パビリオン〉 (1983)



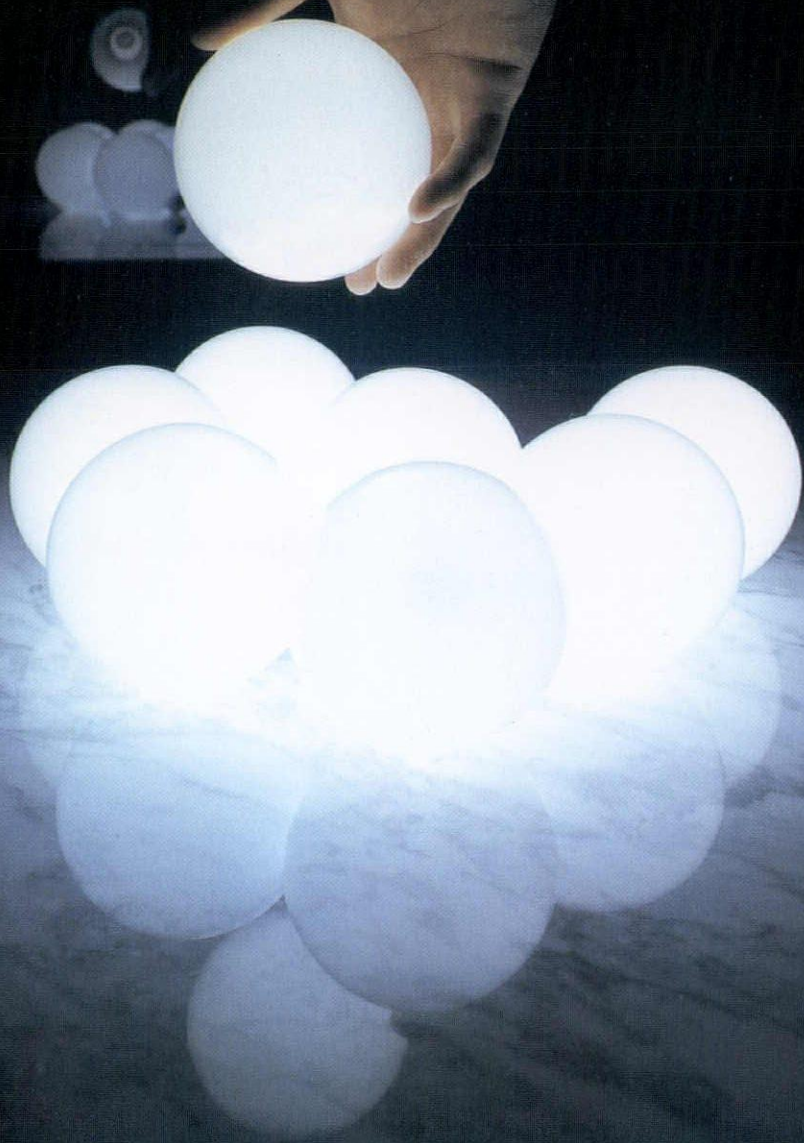
《旭印刷》(1970)
the cube weighs 100kg



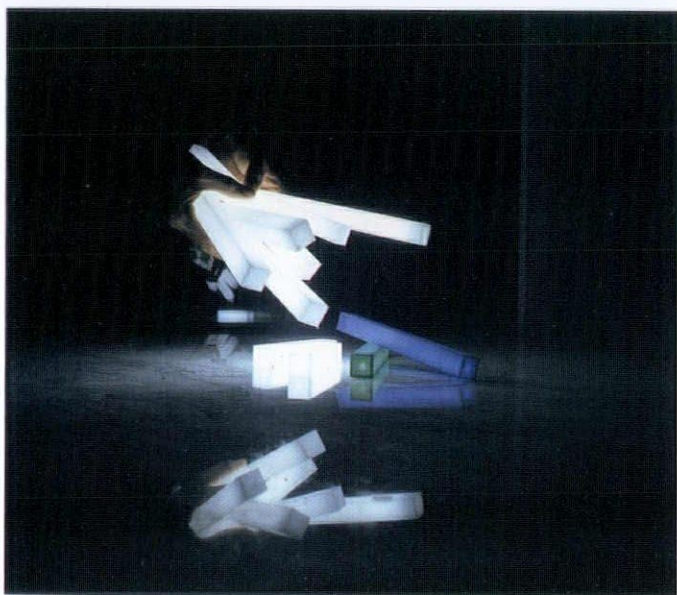
〈旭印刷〉 (1970)
reception desk without shadow



〈ジーエータップ〉 (1979)
reception desk without a shadow but a fake shadow on floor



〈ワイヤレスランプ〉 (1977)
ideal?



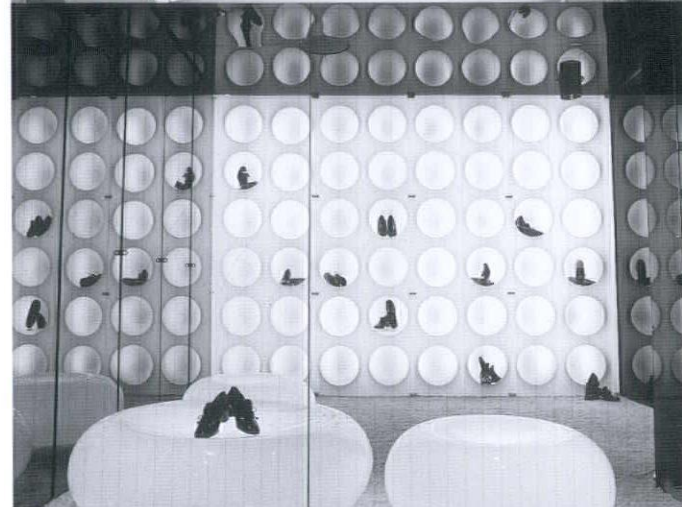
SD9701
134



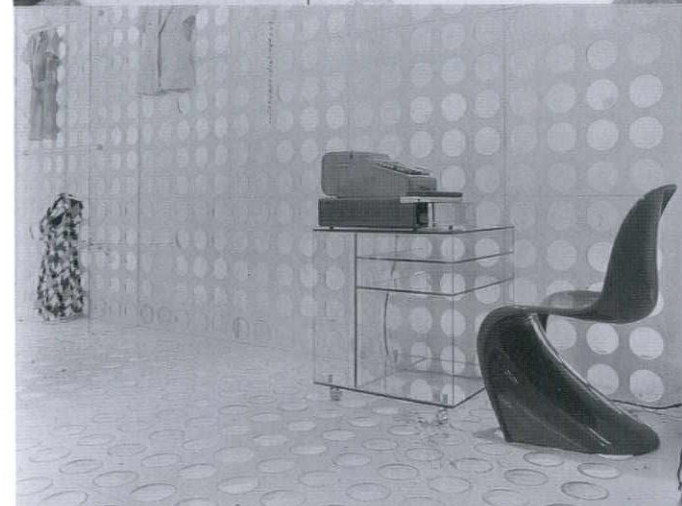
〈ミズレイコ銀座店〉 (1987)



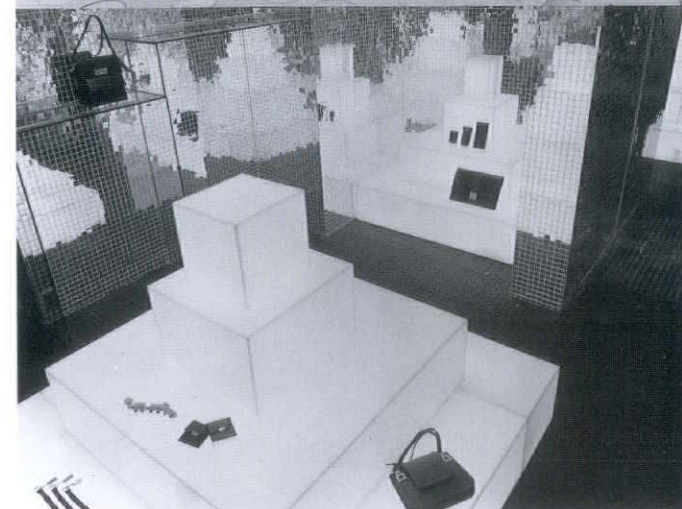
〈カフェソーラー〉 (1970)



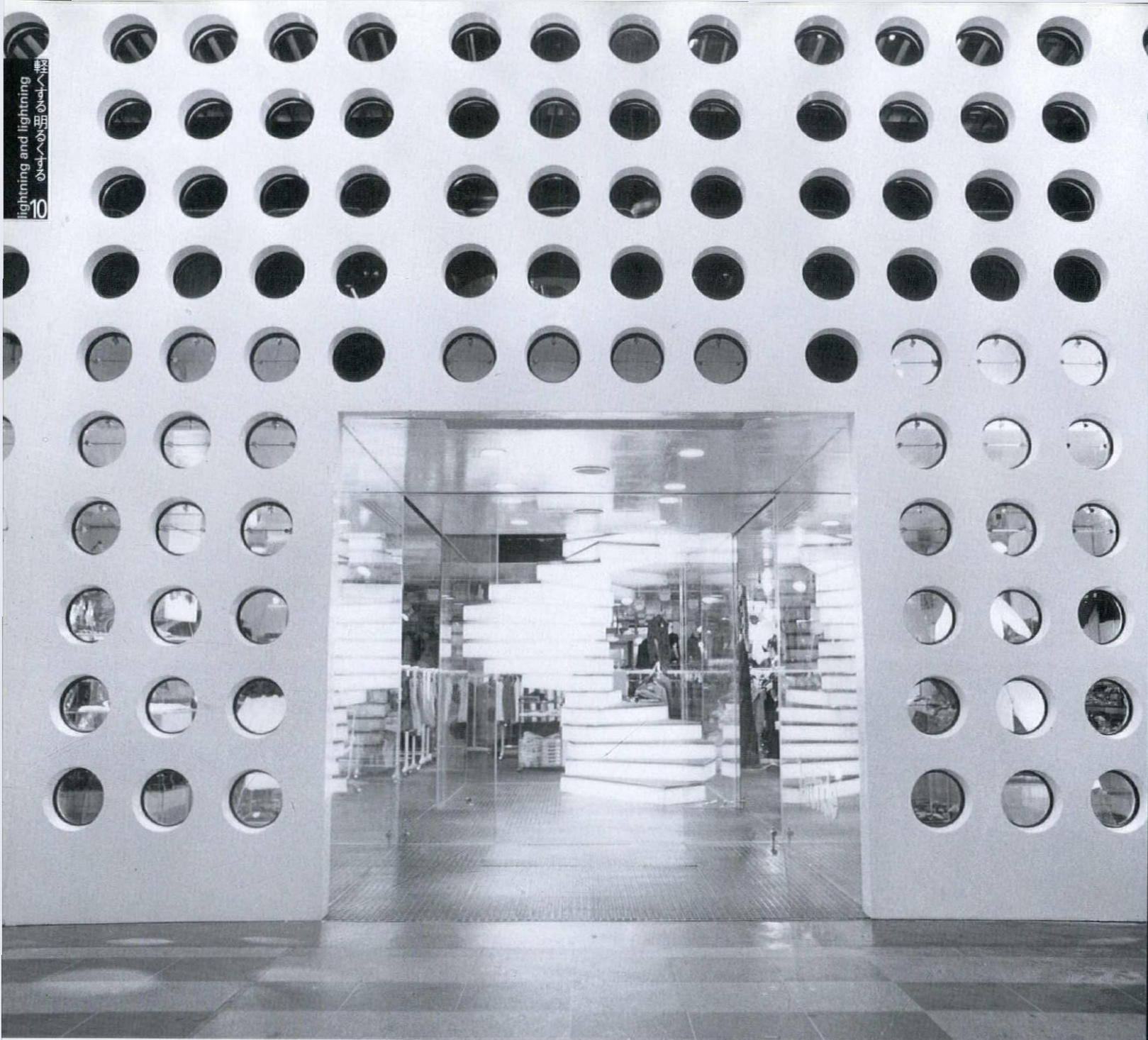
〈シューメーカー コーネリア〉 (1970)



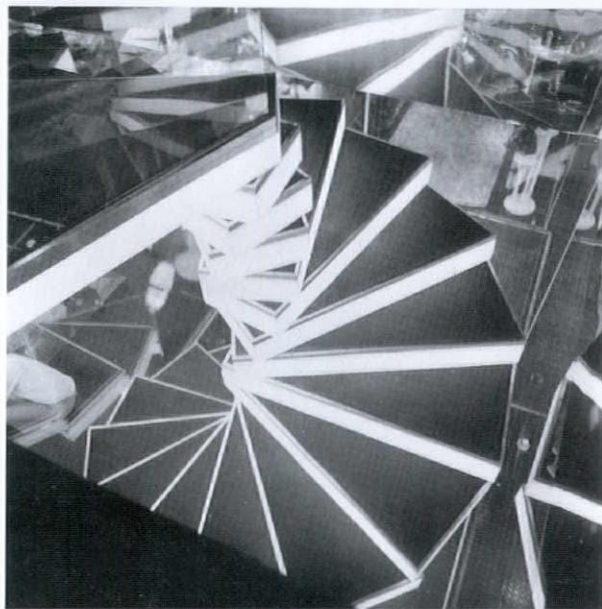
〈ジュリ〉 (1971)



〈ベル〉 (1973)



〈かねしげビル〉 (1973)
which lightning?

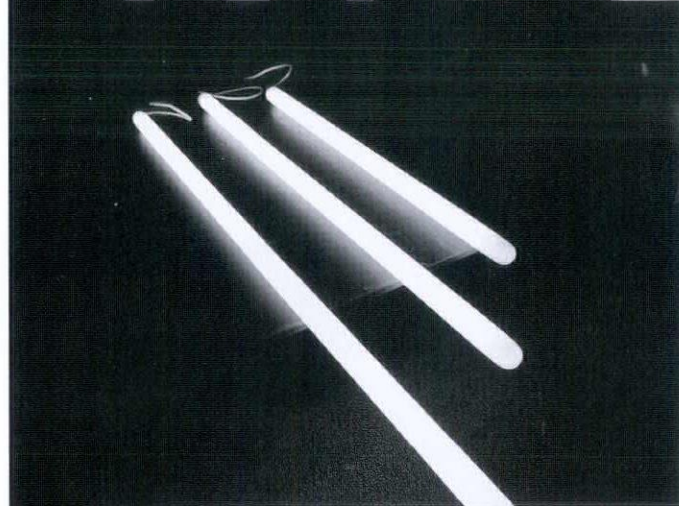




〈マルタ号〉 (1972)



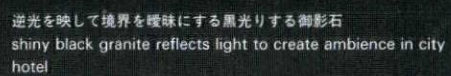
〈マルタ号〉 (1972)



〈ライティングチューブ〉 (1973)
International Lighting Design Competition
Silver Prize awarded



〈ゼン〉 (1974)



小浜観光ホテル
Obama Kanko Hotel, 1978

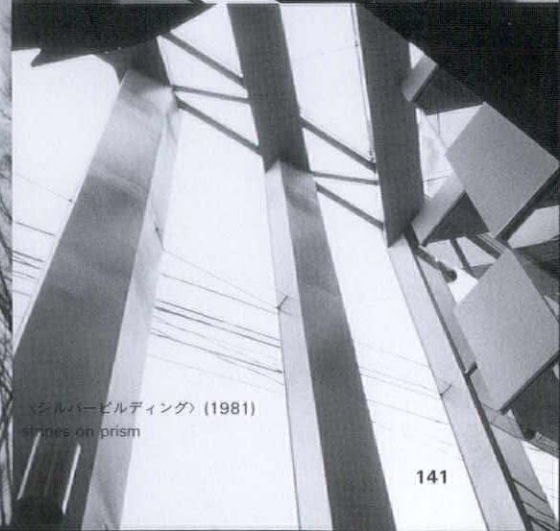
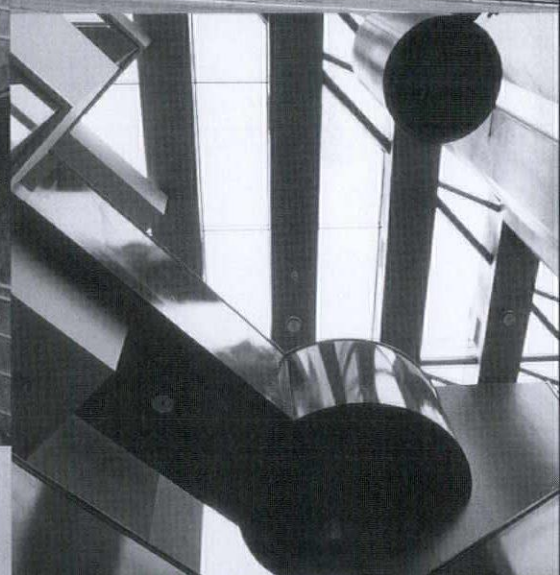


明るく白いリゾートの夕暮れ
bright white emphasize light performance at twilight in resort





〈浮池歯科クリニック 見えない家〉 (1983)
reflected interface hides what is on the other side



阿蘇やまなみリゾートホテル&ゴルフ倶楽部 (1990)
over obelisk 45m tall in mountain disappears in the sky

シルバービルディング (1981)
shines on prism

cushioning

様々の応力が発生する建築にとって、その応力をいかに伝達し、基礎に流すかが最も大きな課題である。急激なショックを与えるライブロードと、自重そのものであるデッドロード、どちらも最終的には大地に向けて発散されるのだが、その応力発生時点でのショックが集中する部分では柔らかに受けとめない限り破壊するしかなくなるし、もし固ければ全体で受けることになる。生き延びるためにはエネルギーは吸収しながら次々に伝達していかなければならない。そのための方法として、木造であれば固いスチールとの間のインターフェイスにエポキシを用い*1、ガラスやアルミ

ニウムにはシリコンを用いている。*2

柔道の基本が受身であるように、エネルギーを吸収するためには自分自身が緩衝材でなければならないし、その媒介としての接合部が生命線である。ギヤの遊びと潤滑油がエンジンに欠かせないように、変形をもたらさない応力伝達には、ガラスならばシリコン、木や竹ならばエポキシという高度の化学製品が必要である。

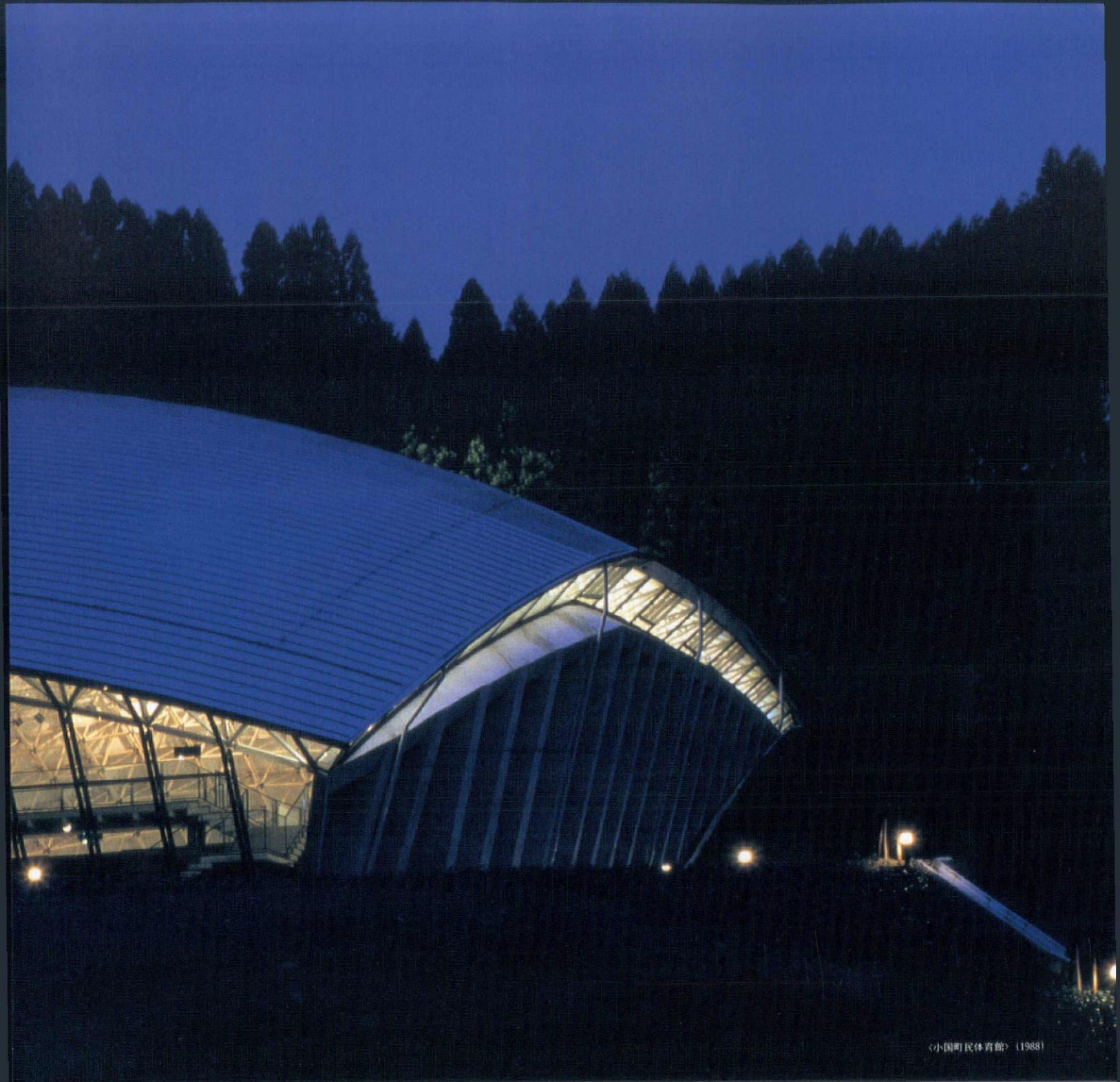
人と技術と自然のそれぞれのインターフェイスには、必ずゲル状の柔らかな緩衝材や空隙（空気はバネになる）が内包されねばならない。内外の意識が曖昧なアトリウム、ピロ

ティ、パティオ、縁側空間、庇下、軒下の空間などもそうであり、それは与圧、減圧のための中間領域であり、緩衝帯でもある。

ウォーミング・アップとクーリング・ダウンという二次的行為なしに急激な運動を行うのが自殺行為に等しいように、「動き」始めて止まり始める時間と空間が、余裕を生み出すことになる。

*1 〈小国町民体育館〉建築基準法第38条認定の条件

*2 1977年〈インゴット〉以来、シリコンとガラスの構造接着は〈小国町交通センター〉でショップグレイジングに進化した。



〈小国町民体育館〉（1988）

小国町民体育館

Oguni Gymnasium, Oguni Dome, 1988



Cushioning epoxi adhesive as an interface between hard steel and soft wood. PAT.

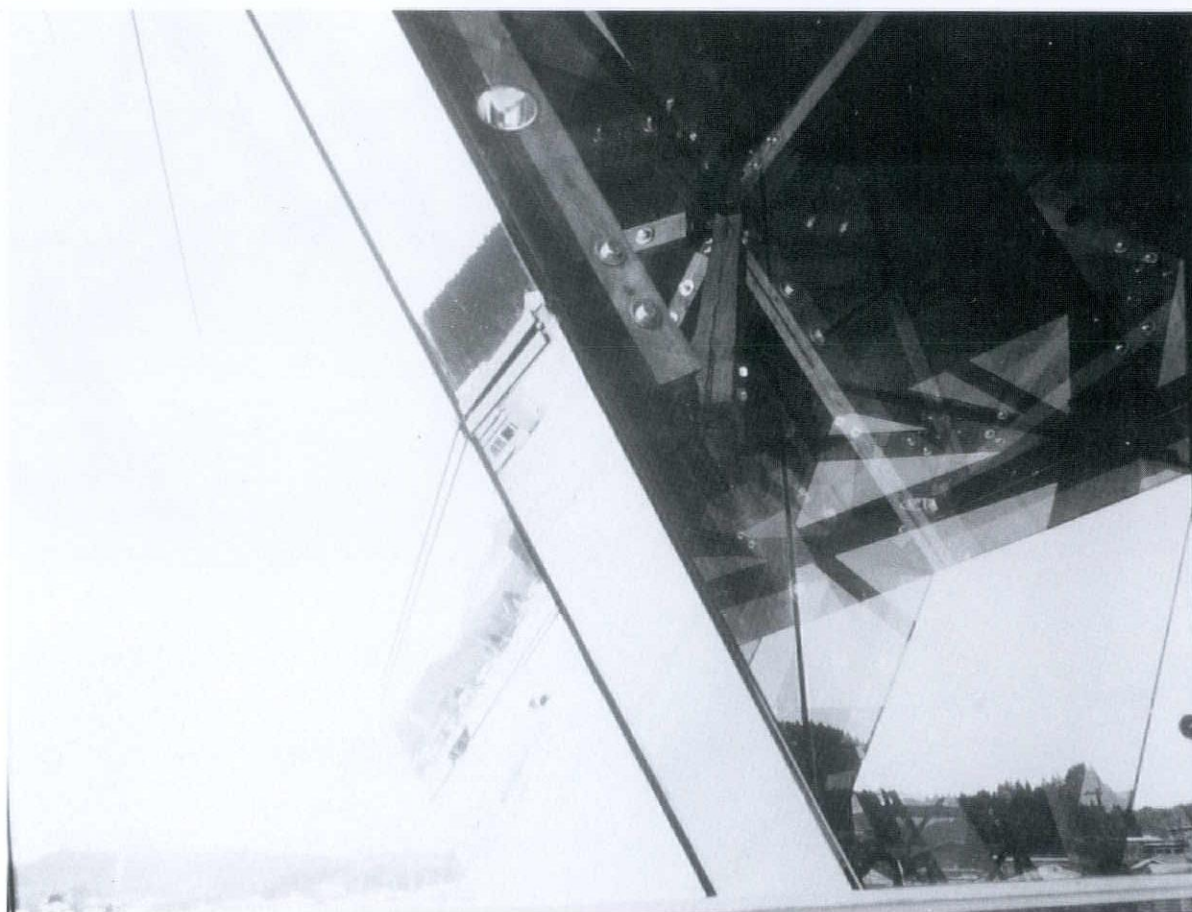
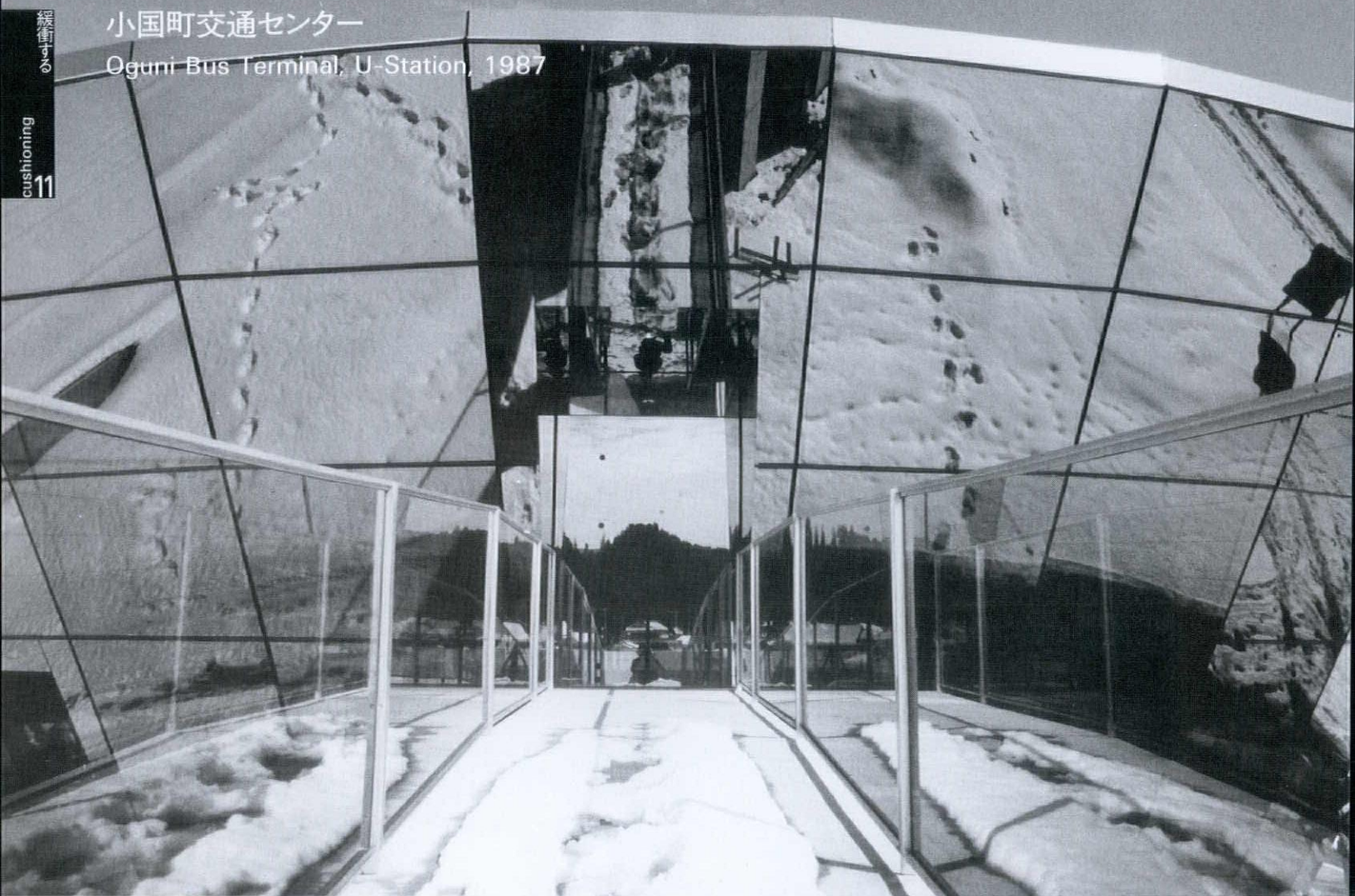




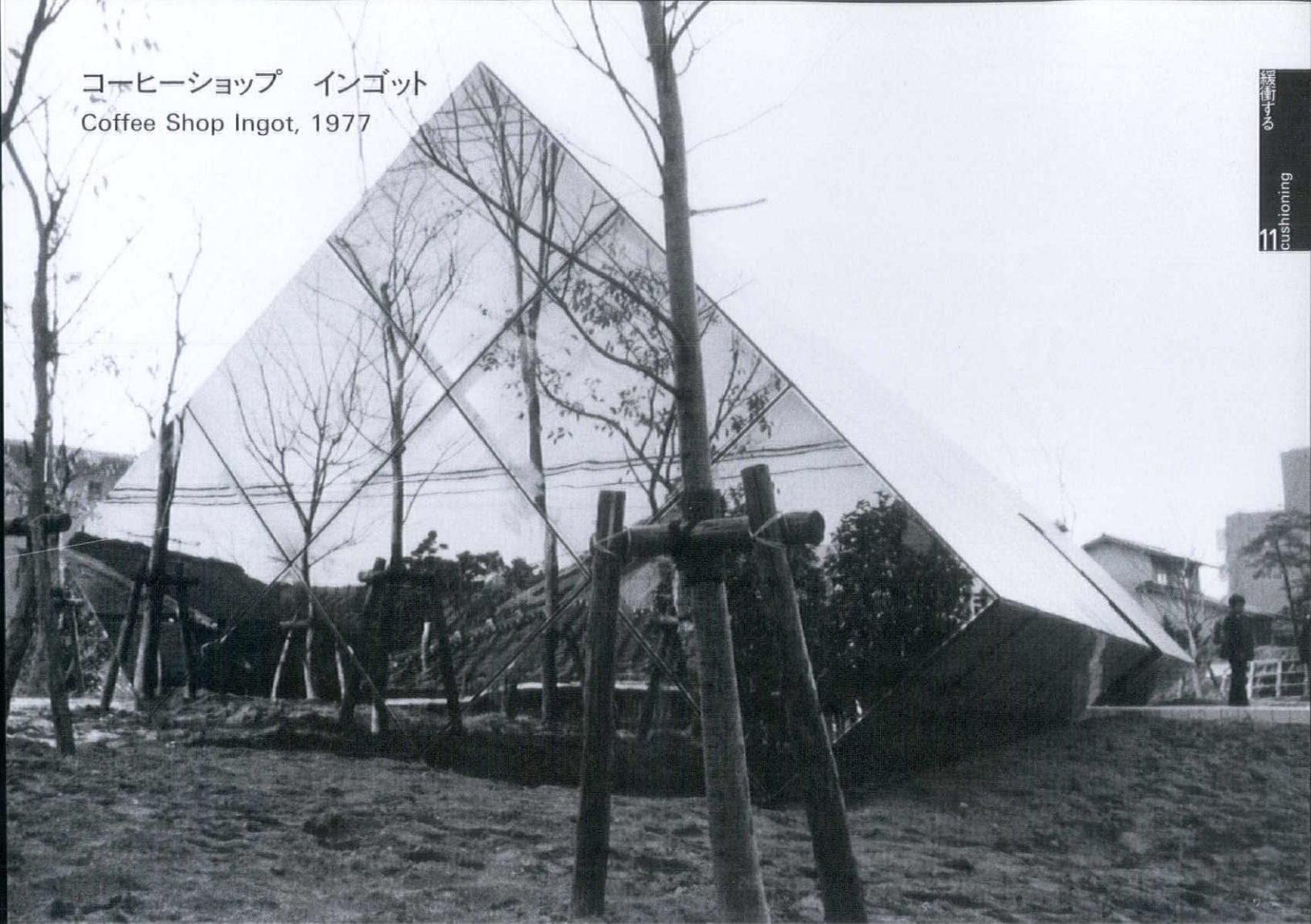


小国町交通センター

Oguni Bus Terminal, U-Station, 1987

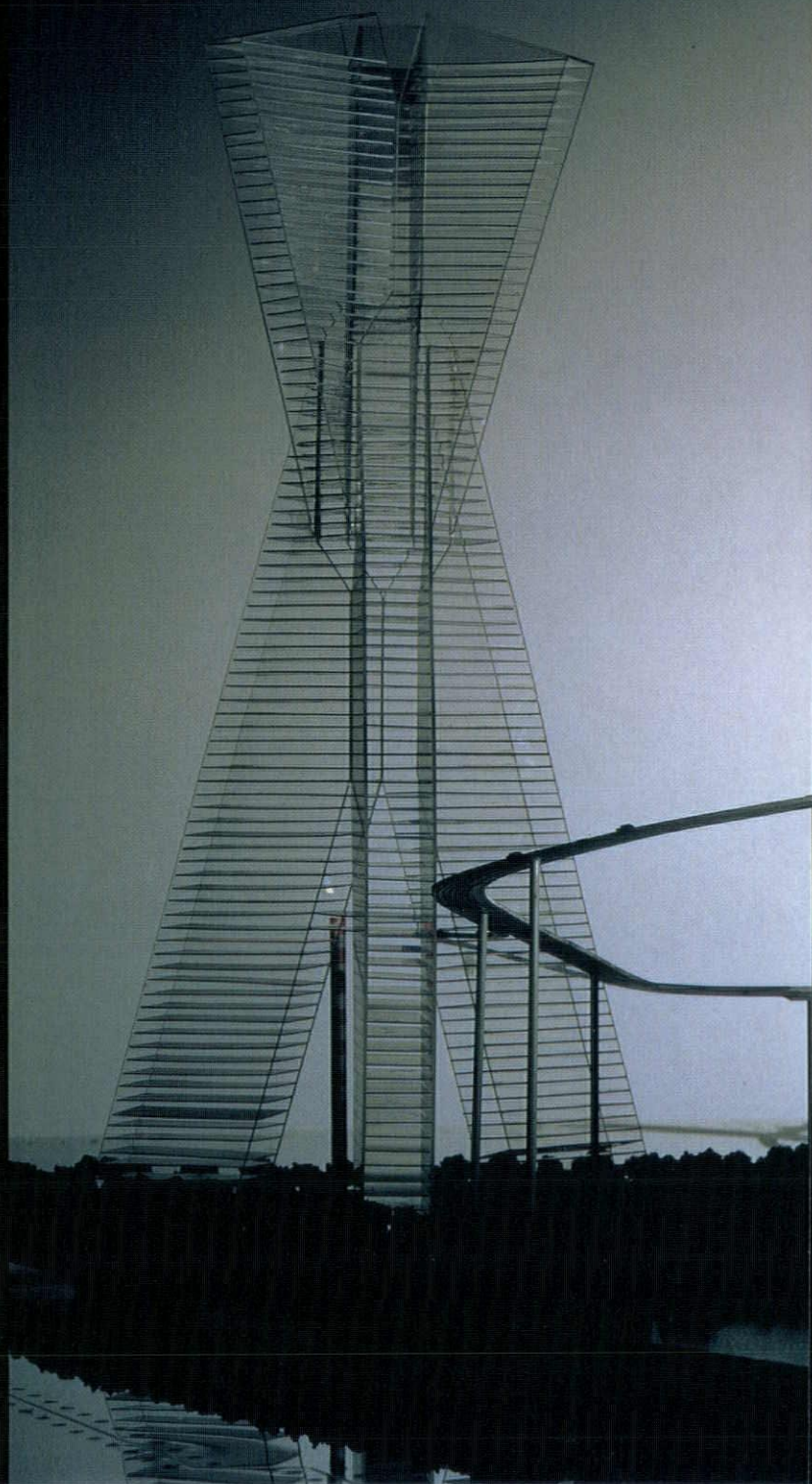


コーヒーショップ インゴット
Coffee Shop Ingot, 1977



Cushioning silicon structure glazing.

standing on head



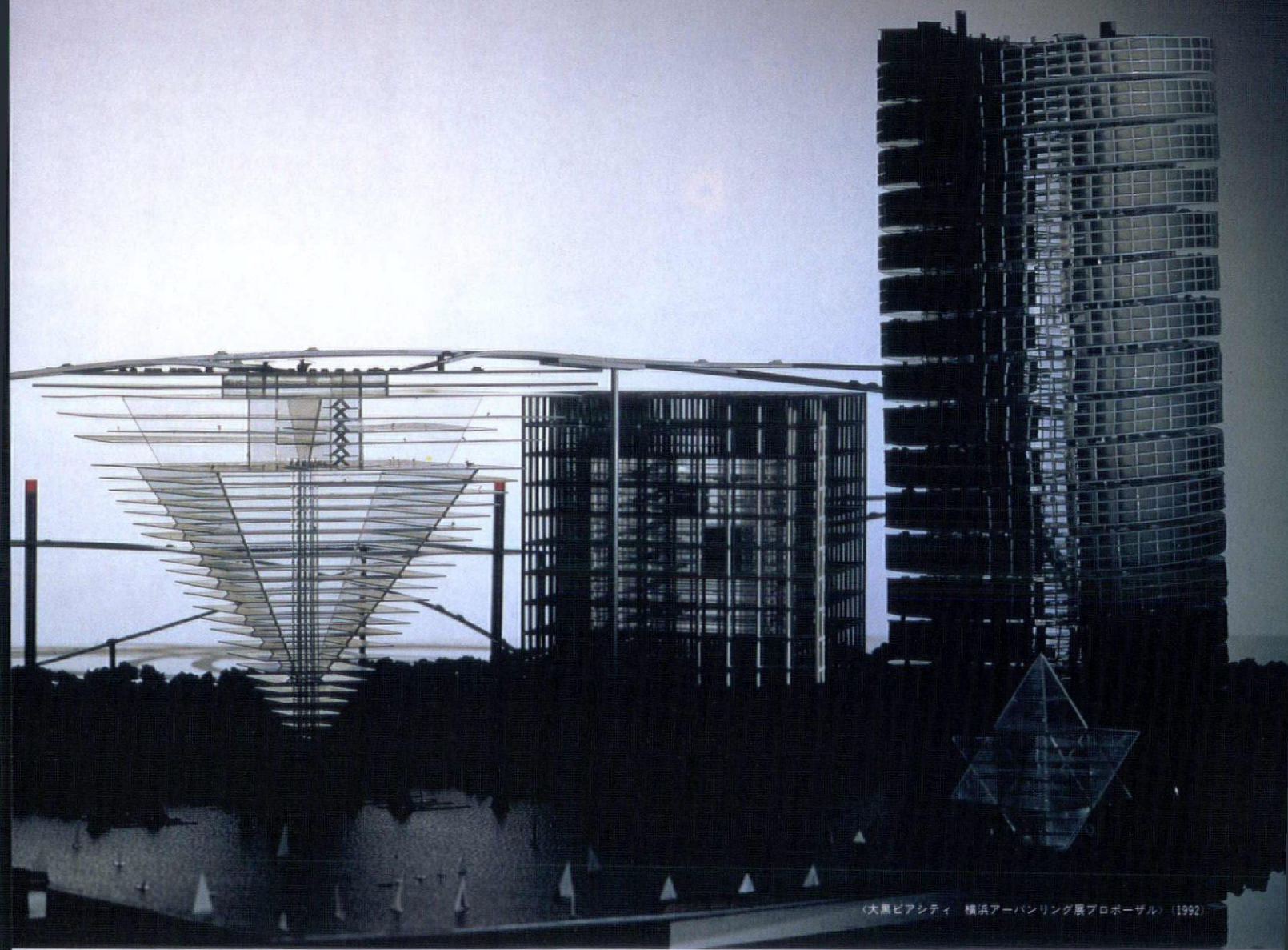
視点をひっくり返して見ると意外な発見をすることがある。柔軟な発想法のひとつである。

貴重な水面を埋め立てて土地を作り、道路をつくって区画して売却することから始まるのを、道路を空中に上げたらどうなるか？ 分割しなかったらどうなるか？ 超高層の途中にアプローチすることのメリットは？ これまでの土地問題や非人間的地上レベルなどの問題のいくつかは雨散霧消するだろう。マンハッタンのセントラルパークの中に巨大な超

高層を数少なく離れて立てるようなものだ。容積は400%~600%を想定している。歩行者に解放された地表面には車も信号もない。敷地を分割したり売却せずに、建物を区分所有すればよい。空中道路はインフラストラクチュアとして物、人、通信、エネルギー、給排水などを受け持ち、ビルの間階にダイレクトにアクセス。結節点はターミナルとして「街」を形成し、上層階と下層階の両方にアプローチし、人々が滞留し賑わいが生まれることにな

る。〈大黒ピアシティ 横浜アーバンリング展 プロポーザル〉(P.152)

もう一度逆立ちをして視点を変えて見よう。都市居住と業務ビルそれぞれが妥協することなく共存することができないかという命題を課せられたとしよう。よく見られるのが下層をオフィスに上層を住居やホテルにする、上下に分割する方法である。しかし、垂直に用途を変更している例は皆無である。もし、南側全面に住居を設けて、北側に業務スペース



（大黒ビアシティ 横浜アーバンリング展プロポーザル）（1992）

を設けたとしよう。都市に住むことが絶望的な、日照を不可欠とする老人や幼児にとって理想的であるばかりか、奥行きが浅い住居と奥行きを深くできるオフィスの住み分けのメリットは図りしれない。オフィスには問題の多い南側の日照と光量の不安定から解放され、ブラインドのいらない安定的な視界が得られることになる。24時間活動するホテルや住居と、昼間の8時間だけしか使用されないオフィスとは熱や電気エネルギーを有効利用する補

完関係があり得る。〈虎の門 麻布台再開発計画プロポーザル〉（1995）

都市が都市であるためには高密度でなければならないが、過密になるのは環境が劣悪化するからである。交通、通信、エネルギー、廃棄物、リサイクルなどまとめて処理し再配分する効率の高さと、文化的、衛生的都市居住のメリットを、互いに分け合うシステムが21世紀には実現されなければならないが、このようなこれまでにない考え方こそ、都市化

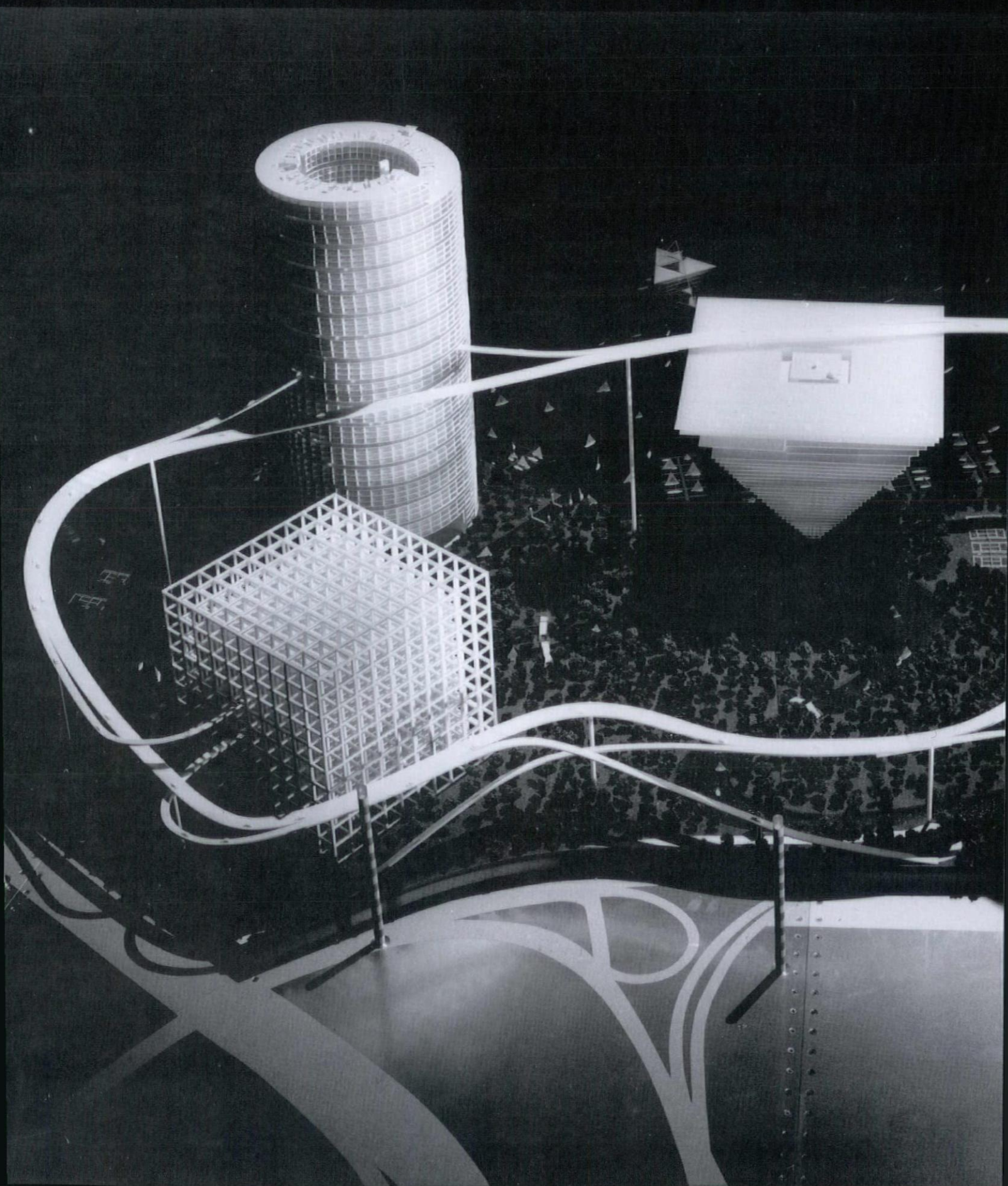
が加速して人口爆発を迎えるアジアの諸都市において検討されるべきではないだろうか。

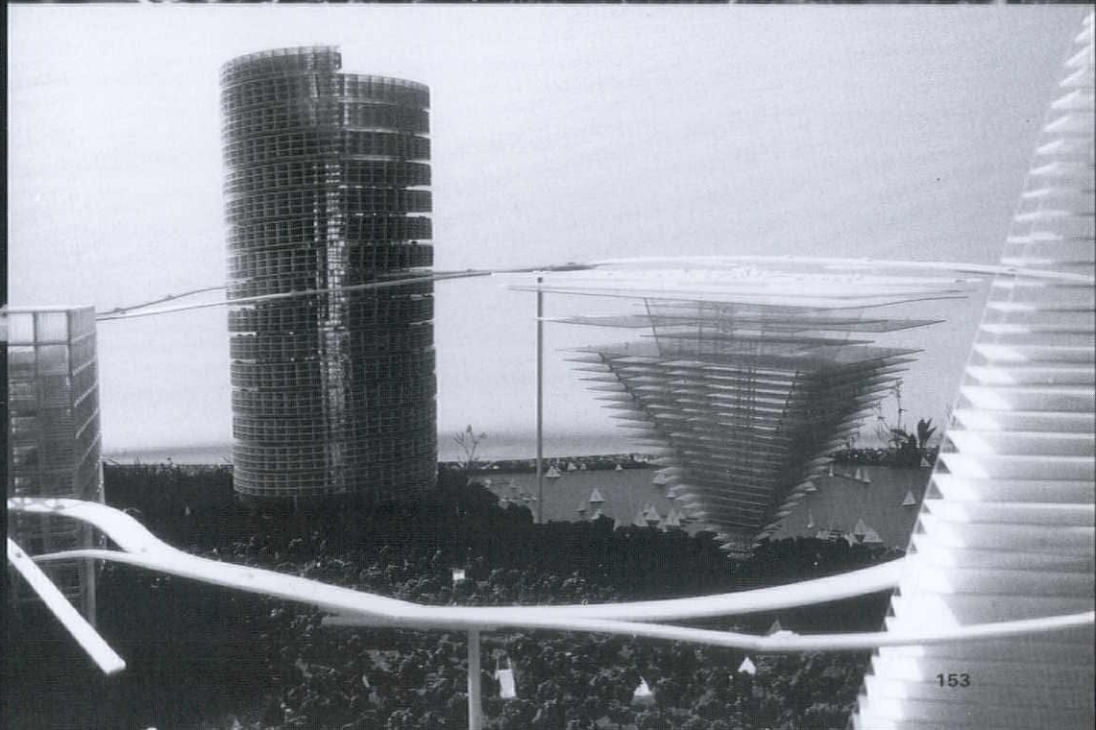
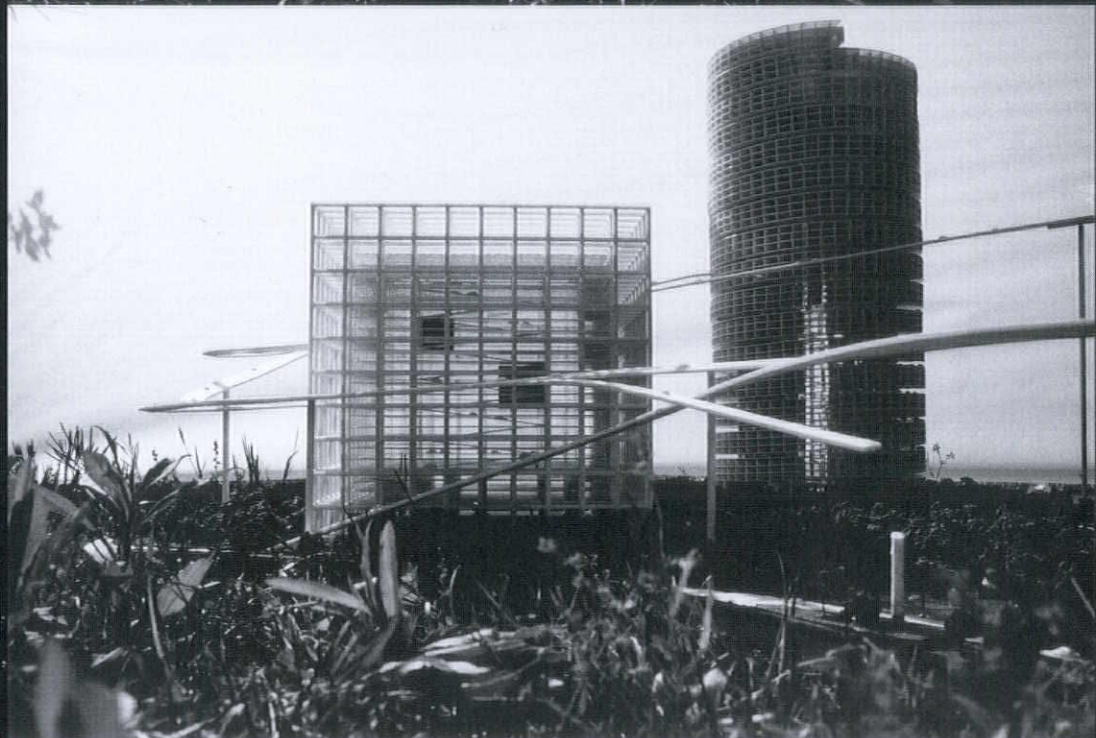
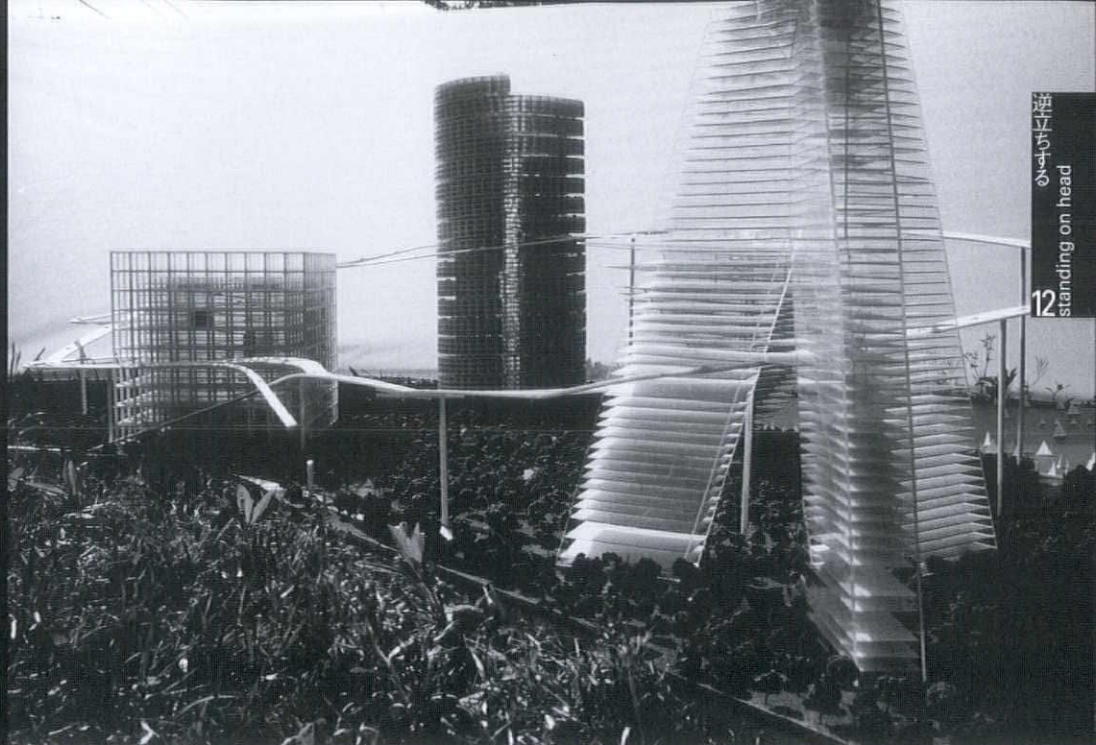
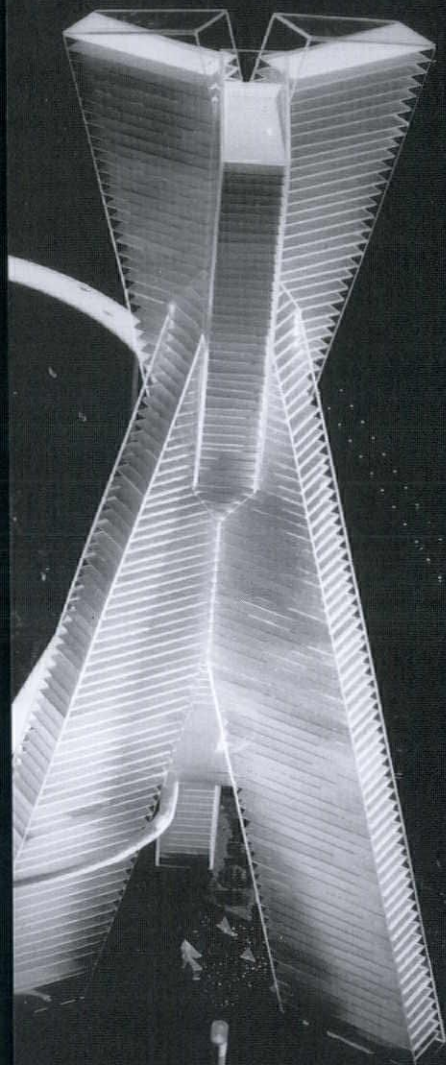
高さ100mを超えれば日影は一定である。複合日影を互いに避けた、ある程度以上の規模の超高層こそ、過密な都市から離脱して快適な都市居住と職住近接の業務空間との共存を可能にする。平面的に広がってしまったメガロポリスに、高さを与え、快適な緑地を増やし、夜間人口の密度を上げるための方策である。

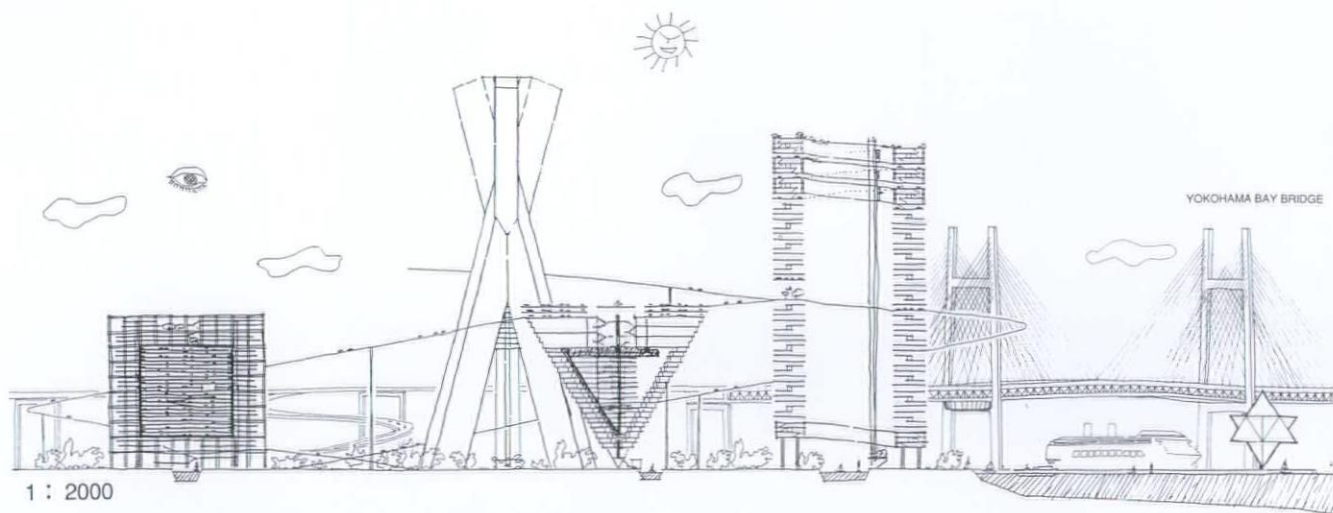
大黒ピアシティ 横浜アーバンリング展プロポーザル

Yokohama Daikoku Pier, Aerial City, 2050:

Yokohama Urban Ring Exhibition Proposal, 1992

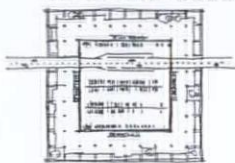






1 : 2000

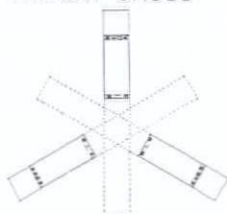
LE GRAND CUBE



Office building to be directly accessible from aerial parking lot through elevated high way. In the core of 120 X 120 X 120 M³ cubic frame of universal grid 72 X 72 X 72 M³ cubic parking and mechanical box is inserted. The core at the center is usually abandoned due to its poor environmental conditions for living or working. High rise and high density building with a full of supporting facilities are provided. The cube, as big as Le Grand Arche, is on the same axis as Champs Elysees in Paris.

- 30 FL H = 114 m
- Floor Space 390,000 m²
- Horizontal Projected Space 14,000 m²
- Capacity 36,000 persons
- Parking 3,600 cars
- Rentable Space 213,000 m²

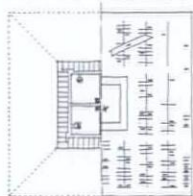
TRIDENT CROSS



Three leaning high rise buildings connected in the air both structurally and beneficially for communicating people of 3 buildings. If one of three is a hotel, 2 other buildings would enjoy hotel services meeting dining, and convention.

- 79 FL H = 326 m
- Floor Space 200,000 m²
- Horizontal Projected Space 6,000 m²
- Capacity 24,000 persons
- Parking 500 cars

HOTEL DIMARYP



All the access is provided at the top of the building toward down wards. More public space on higher level, more private space on lower level. The closer the floor of guest rooms, closer to the earth ground full of trees and flowers the more intimate natural environment is obtained. Hotel Dimaryp is just upside-down of the pyramid of king Cheops in Gizeh, Egypt.

- 32 FL H = 137 m
- Floor Space 144,000 m²
- Horizontal Projected Space 22,500 m²
- Room Number 1,140 rooms
- Capacity 22,000 persons
- Parking 1,600 cars
- Helipad 900 m²
- Convention Space 43,400 m²
- Entertainment Space 13,000 m²

UNITE D'HABITATION , YOKOHAMA



An ultimate convenience of door to door is achieved in habitation. Liberated ground with full of nature, plots and roof gardens are also attractive for urban citizens as Le Corbusier suggested. High rise and dense housing unit to be approached directly by car to each door. In order to make the spiral approach as short as possible less than 2.5m, the section of Unite d'Habitation at Le Corbusier is buck up and rolled in a circle. Every 4 floors, the car parking and slope is provided for both upper apartment and lower apartment unit. (1.2 vehicles per apartment) Every 4 floors, a corridor for pedestrian is provided. Approximately 4 building of Unite d'Habitation Marseille are compactly built which is 700 m long in line, if it is spread in straight in one line.

- 60 FL H = 260 m
- Floor Space 43,400 m²
- Horizontal Projected Space 7,240 m²
- Household 1,500 families
- Parking 1,800 cars

	LE GRAND CUBE	TRIDENT CROSS	HOTEL DIMARYP	UNITE D'HABITATION YOKOHAMA	YACHT CLUB TOWER	TOTAL
Site Area						280,000
Floor Space (m ²)	390,000	200,000	144,000	434,000	6,000	1,175,000
Ratio of Building Volume to Lot (%)	136.8	71.2	51.3	154.5	2.0	417.6
Horizontal Projected Space (m ²)	14,000	6,000	22,500	7,240	1,280	51,420
Building Coverage (%)	5.1	2.1	9.5	2.6	0.5	18.2
Green Area (m ²)						229,400
Green Coverage (%)						87.7
Daytime Population	36,000	24,000	22,000	6,000	400	88,400
Night-time Population		2,000	6,000			8,000
Household			1,500			
Floor Number			1,140			
Parking	3,600	500	1,600	1,800	120	7,620

Ecological Land Use and Urban High Rise City

Yokohama Bay Bridge being a part of the link around Tokyo Bay is the gateway to Yokohama Harbour. It directly connects circularly Scies Kawasaki, Yokohama, Tokyo as well as with Chiba prefecture. Daikoku Pier, a junction adjacent to Haneda Airport rises 50 metres high above ground with a span of 100 metres, with its looped ramp soaring through the air. This three-dimensional road, with its colossal curves, will change the city in the future.

Up until now all of the city planning has set out from a horizontal grid on ground, dividing and connecting based on horizontal roads. Our proposal is a vertical urban space formed by three-dimensional movement that will provide a circulatory system, a nervous system to breathe life into a city in the air, liberated from horizontal divisions on ground.

The lower parts of our super-high-rise buildings, reaching over 300 metres into the air are open for pedestrians and for recreational activities. To restore and conserve the natural environment, roads have been removed from ground

level and taken up into the air; direct access to higher levels above 100 metres frees the city of grids and traffic intersecting at ground level. This aerial city has continuous door-to-door access to one's destination along the aerial roads. The approach level to the free-access high-rise buildings is the entrance hall or lobby, a node just like the concourse of a railway station. From here people can come and go freely to the upper and lower floors. Having parking near at hand means that our perpendicular city can have perpendicular open spaces. Private residences and hotels are linked directly from door to door by double-spiral, similar to our double-spiral Pyramid of the Sea (1991).

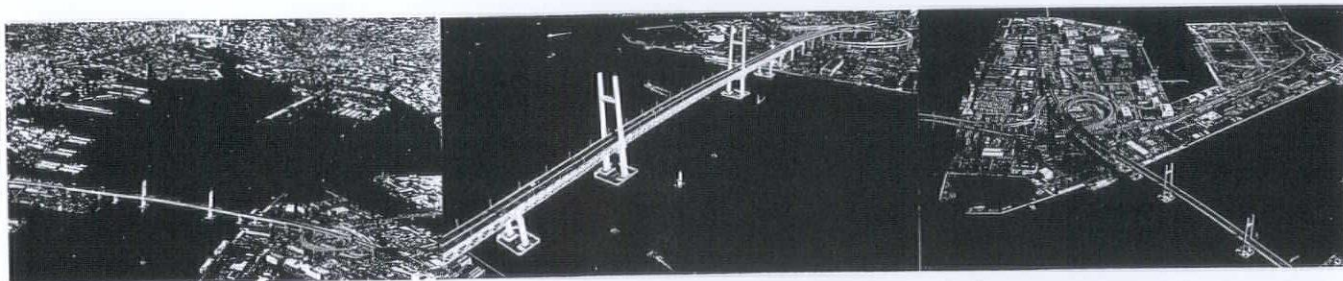
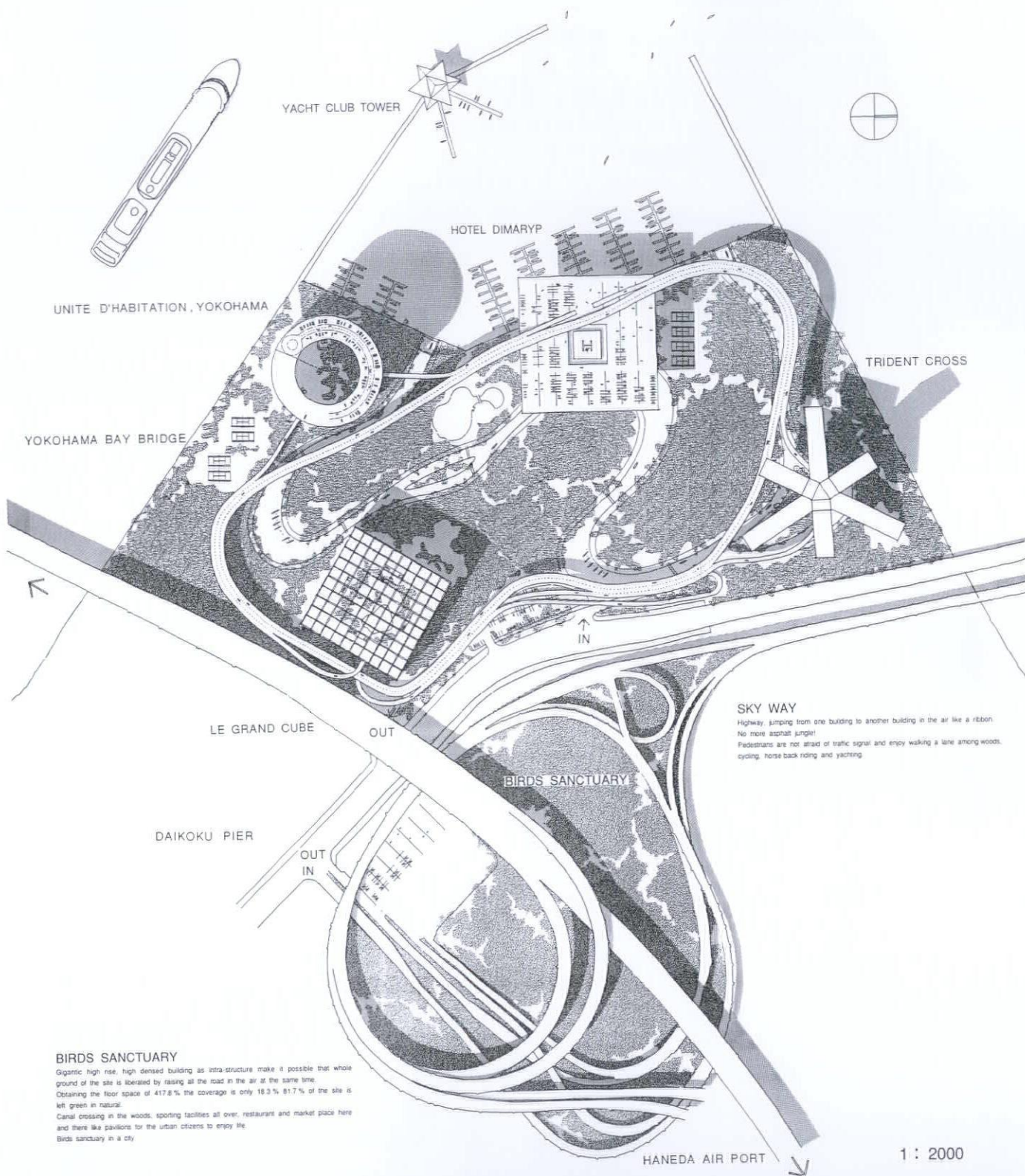
Double-spiral roads and parking areas which allow movement from one private space to another private space, with no need to pass through any public spaces. This was nothing but a dream in the 20th century. When the city takes on a three-dimensional structure in the form of new super-high-rise buildings with continuous and direct aerial access, all the roads, streets and traffic lights will disappear, and natural environment will once more make an

appearance on the ground. We will enjoy jogging along wooded lanes where flowers bloom in profusion, horseback riding, and rowing down canals to Yokohama Harbour where yachts and boats sail on the water.

Cities linked by light ribbon-like skyways. Daikoku Pier City is just 10 minutes from Haneda airport. The super-high-dense and diverse living space is a highly-convenient, highly-efficient, 24-hour-a-day city; yet if you go down to ground level and you will find yourself in a green, shady woods. It becomes possible to live in a paradise on the ground level and the city in the air, which makes the traditional choice of either city or country, an alternative of the past; and at the same time makes commuting both pleasantness and convenience. In the near future, there will be no more asphalt jungle. This is how to realize a sophisticated smart city without any compromise such as inconvenience, danger of traffic, artificial nature.

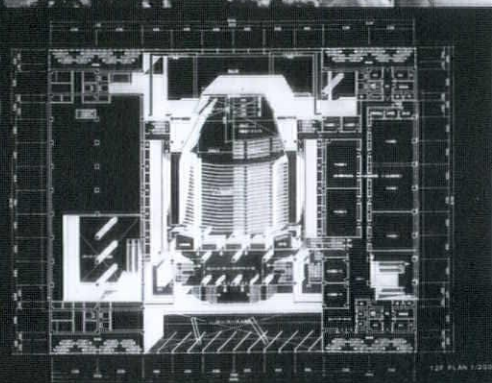
We presumably enjoy the aerial city life as a community as well as a country club without going out of the city.

This is our proposal for Land use and Urban ecology without a contradiction.



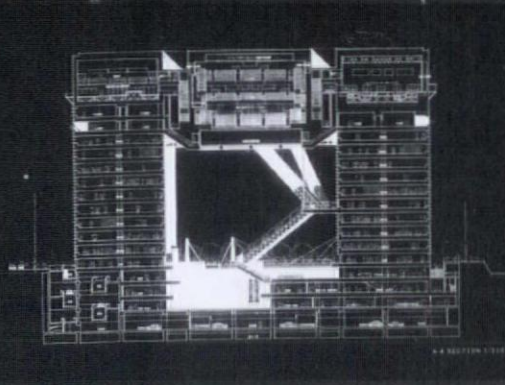
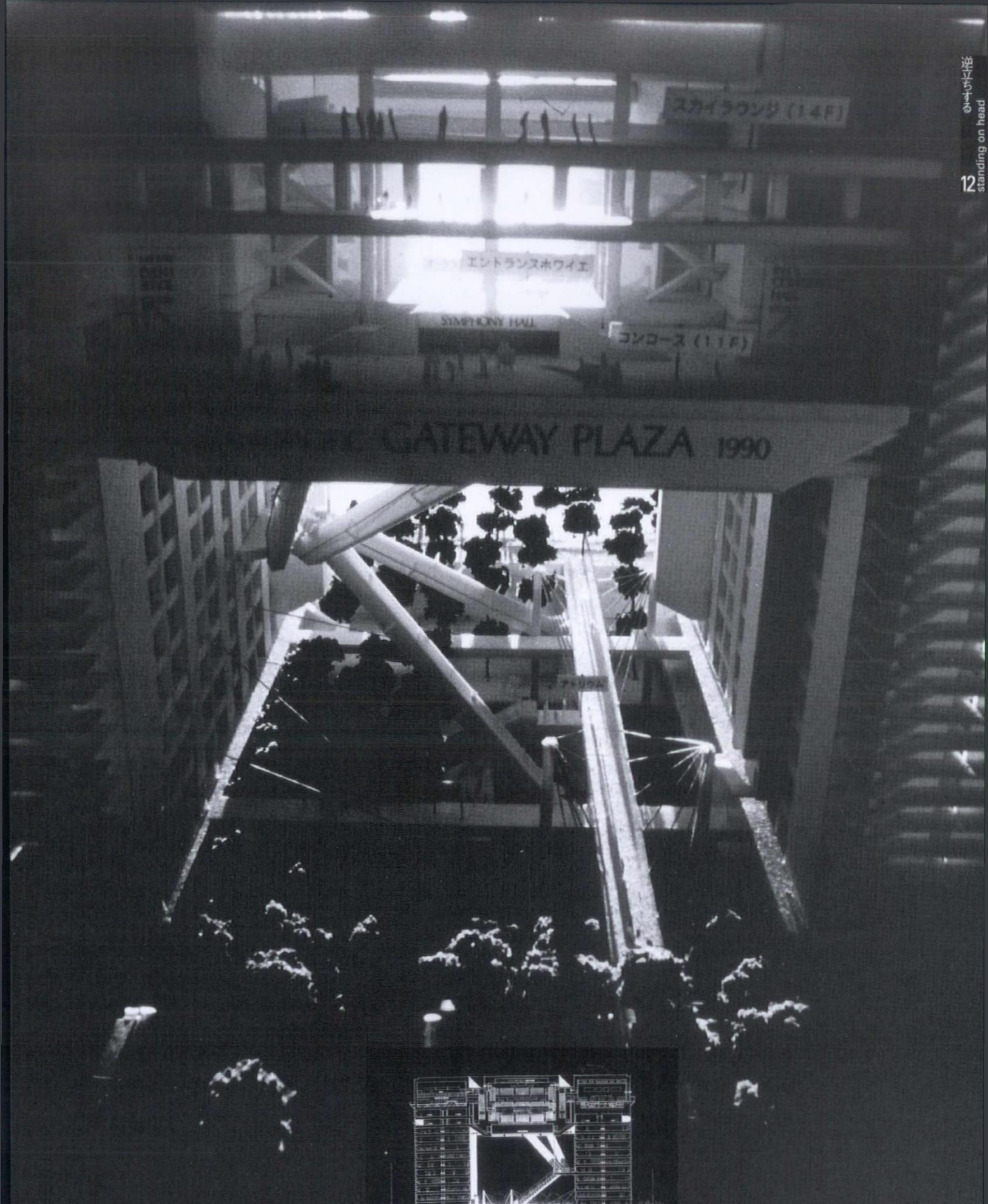
YOKOHAMA DAIKOKU PIER, AERIAL CITY

福岡県庁跡地アジアパシフィックゲートウェイプラザプロポーザル Asian Pacific Gateway Plaza Proposal, 1991



Non profitable symphonic concert hall is to be supported by 2-row of office building financially and physically. Open air atrium is a city plaza where people gather for exchanging goods, services and information from Asian Pacific area. アジアの玄関は、フクオカではなかった。

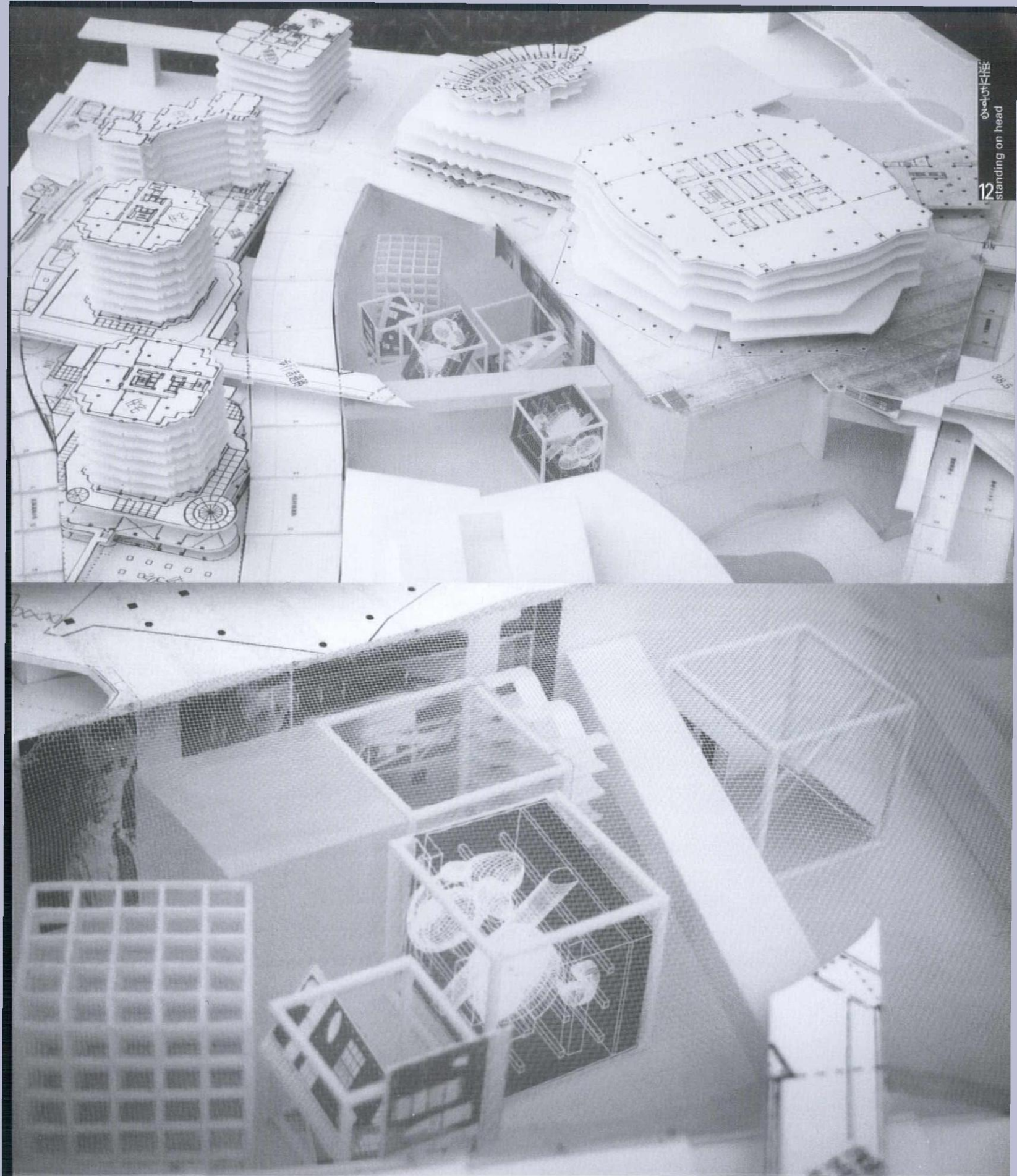
12F PLAN 1/200



採算の合わないコンサートホールは中央の中空にあって、二棟の業務棟によって構造的にも、経済的にも支持される。オープンエアのアトリウムは、街の広場であり、アジア太平洋地域の人々が集まり、互いに物やサービスそうして情報を持ち寄って交換する「シティ」になる筈だった。

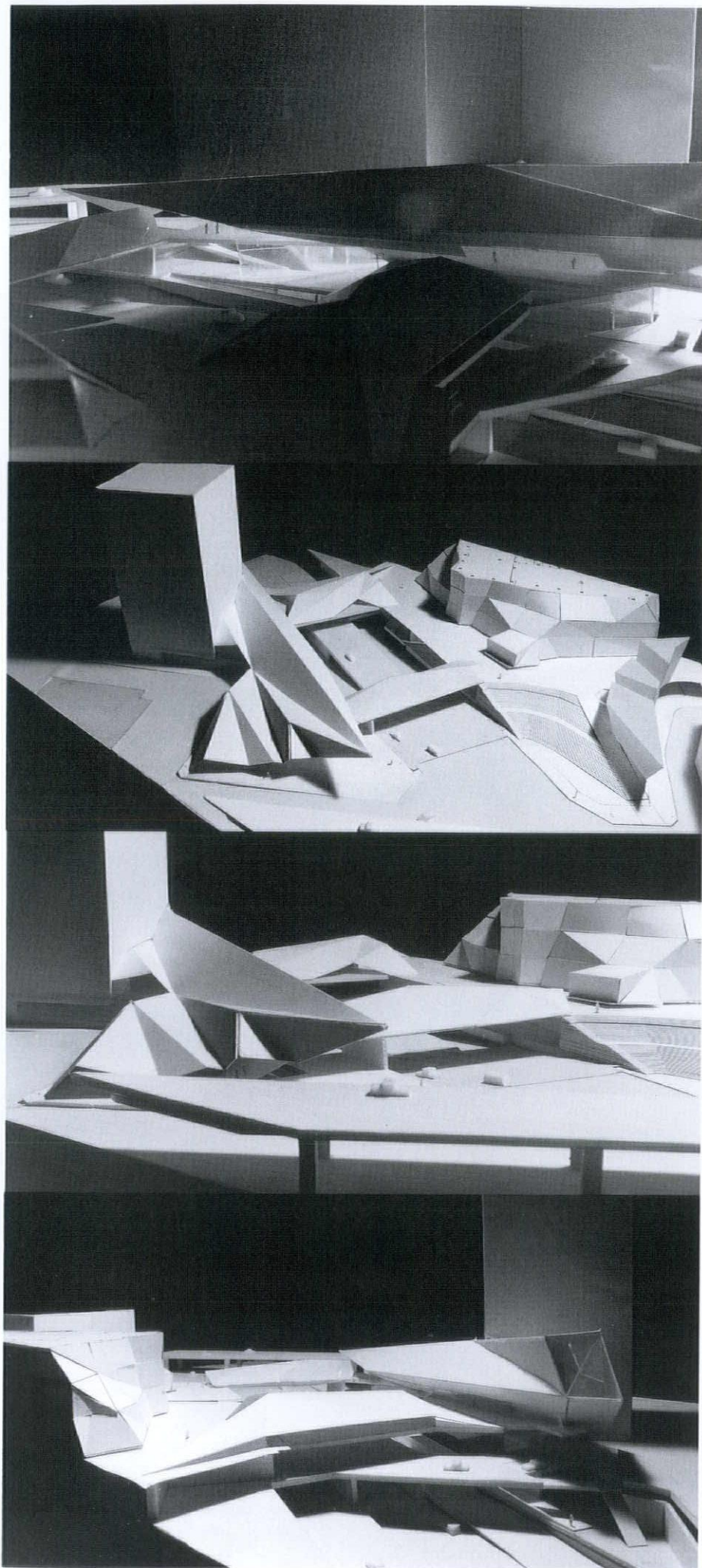
六本木六丁目地区再開発計画プロポーザル Roppongi 66 Project Proposal, 1995





Below the open air art museum, instant or temporary performing art spaces within a vast and tall space. No permanent facilities are scheduled. It becomes a Cyber Space Installation.

地形を復元した公開緑地はオープンエアミュージアム。その地下の無柱空間に期間を限定したインスタレーションとしての劇場、サーカス、ディスコが出現し消滅する都市施設群。常に新陳代謝されることを前提とするサイバースペース。



〈六本木六丁目地区再開発計画プロポーザル〉 (1995)

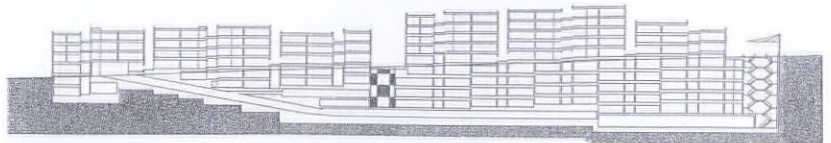
Celebrating Gateway Plaza with stairs, main entrance and subway concourse.

祝祭性・正面性を付与するゲートがあれば、広大な再開発地の顔は見えなくなる。

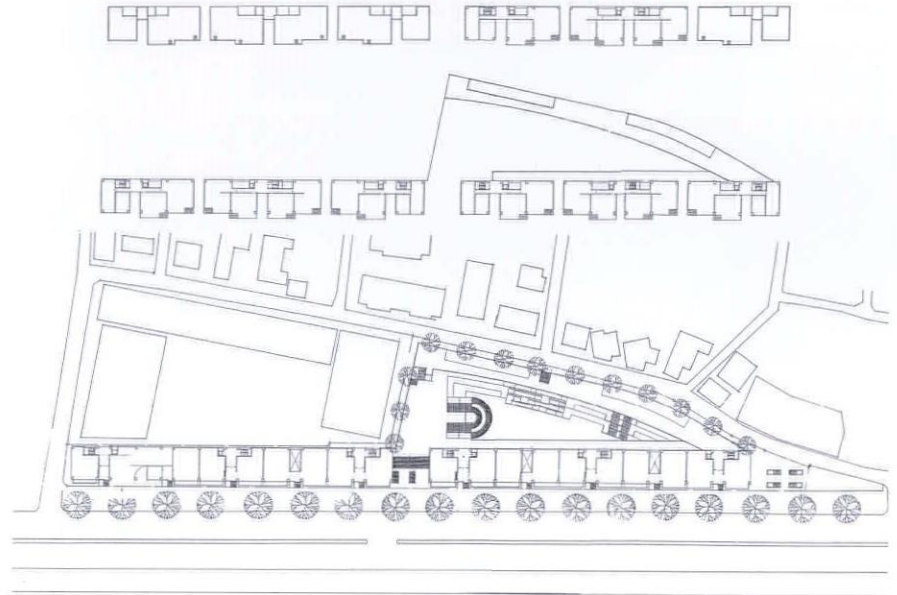
KPFの超高層デザインに呼応する低層部の歩行者空間の明るい賑わいは24時間都市に相応しい輝きを与え、多面体のデザインが、スピードと運動感を与える。セレブリティを付与する階段広場と地下鉄のコンコース。

同潤会青山アパート再開発計画プロポーザル

Dojunkai Project Proposal, 1988

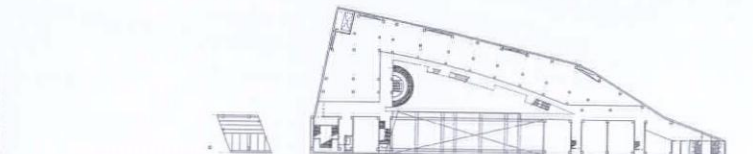
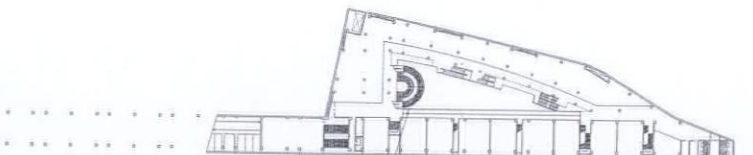
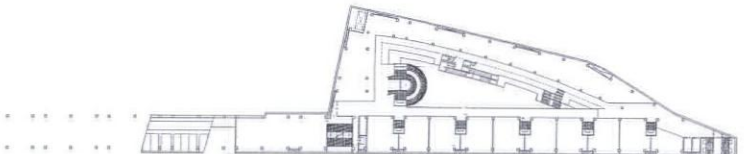
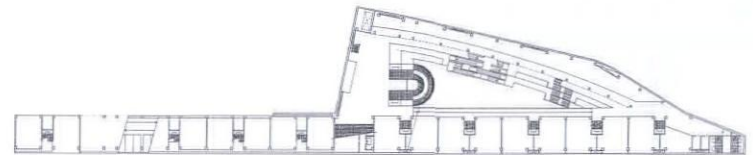
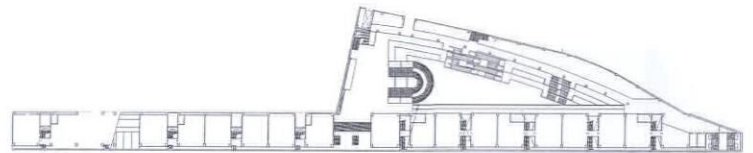
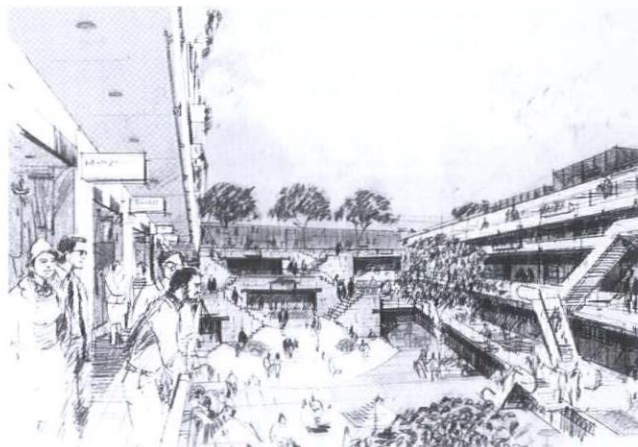


断面図

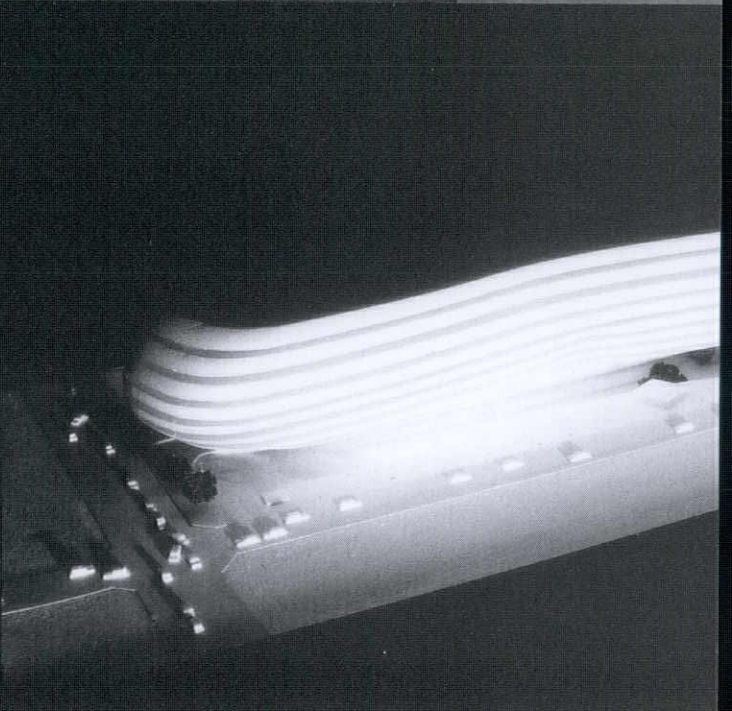
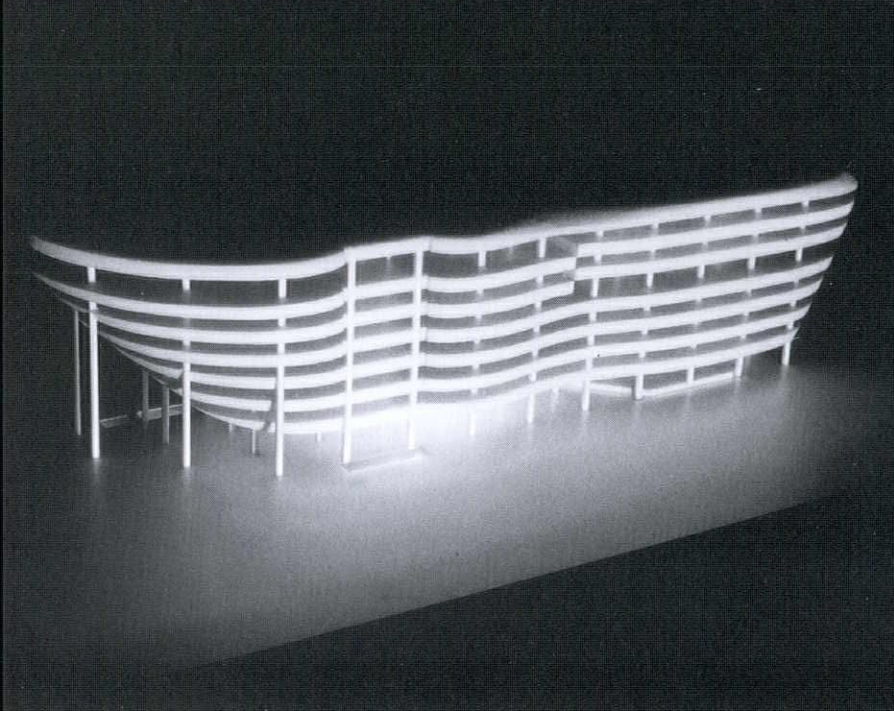
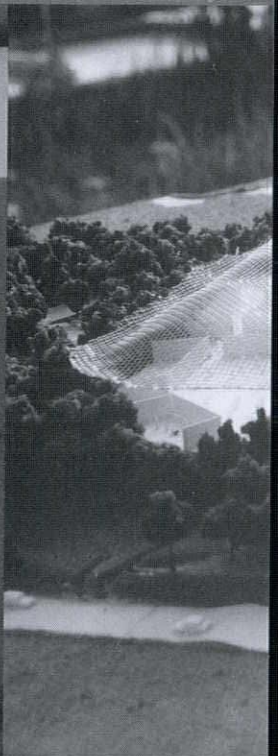
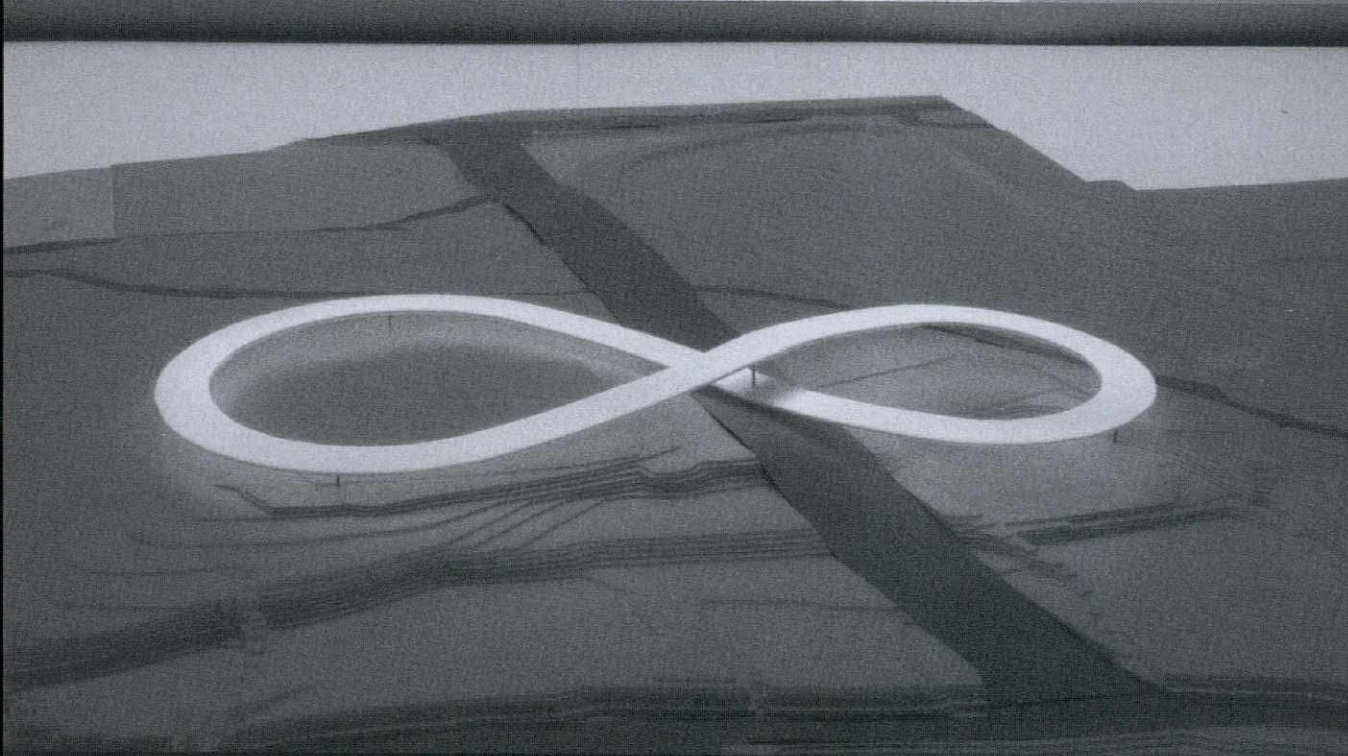
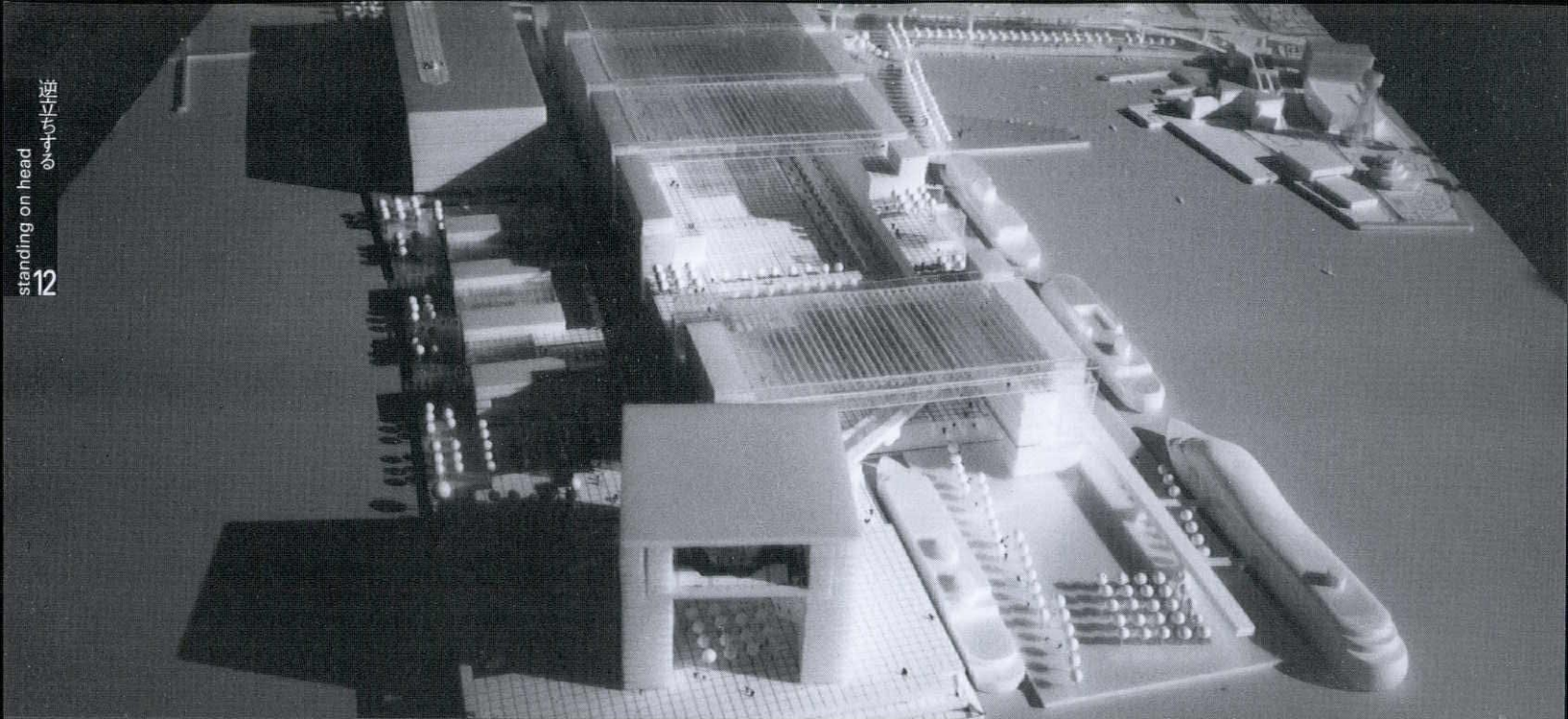


A slope rotating within an open air atrium surrounded by shops underground. The first RC apartment in Japan is to be re-built with its sweet memories. Walking, strolling and enjoyment is our aim.

ケヤキ並木の道を散歩する楽しみこそ私達の目的である。オープンエアアトリウムの店舗群に取り囲まれた周囲を回遊するスロープは、表参道の地形を生かしており、坂道を導入した階段広場で地階に降りることになる。店舗部分の有効率67%、住居・業務部分79.8%、平均70%の有効率と、地階下層部の効用比の高さは前例がない。容積率を残したことによる外部空間の快適性は、けやきの生い茂る街並と一体化していることで得られている。クローズモールや、クローズアトリウムは表参道には似合わない。



平面図 S=1:2500

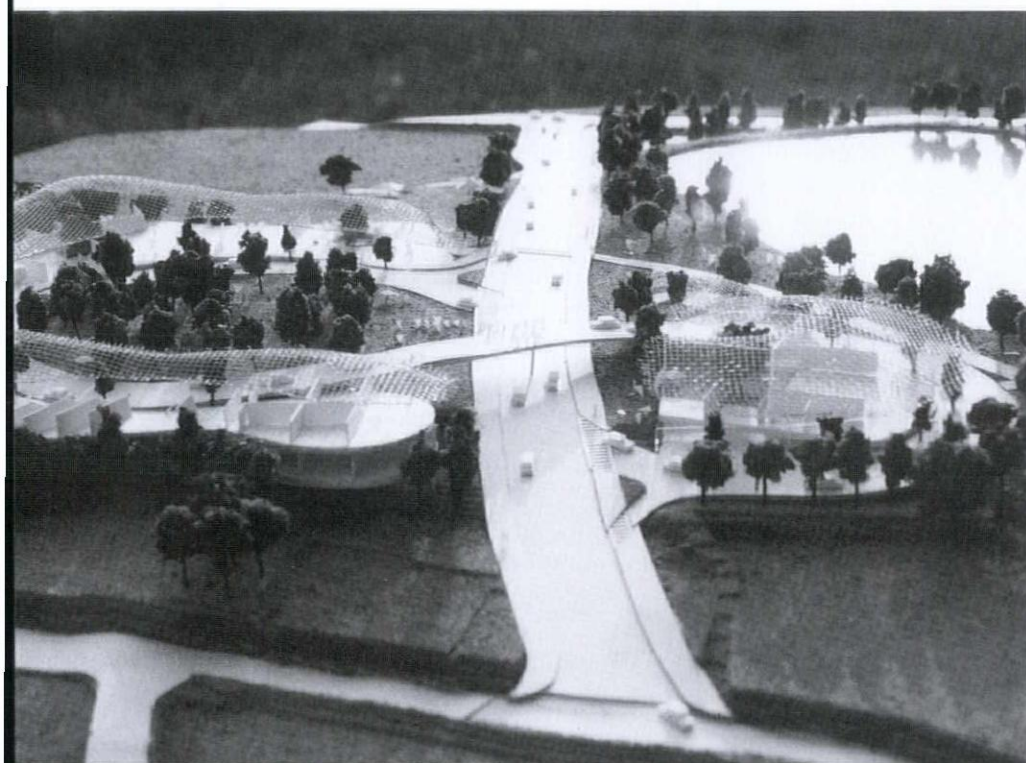


〈博多港ポートネッサンス21 中央埠頭地区計画プロポーザル〉
(1990)

Sports, exhibition, convention facilities with car parking on ground floor level an easy access for any events provided. Sliding roof units and separating walls expand the necessary space as required. Elastic space application program is possible.

伸縮自在のイベントスペース。

GLに同面積の駐車場を設けたコンベンション・スポーツ・展示施設。スライディングルーフと移動壁によって、必要によって伸び縮みするエラスティックな空間。多目的スペースが伸縮すれば、その効率性は高まったく無駄がない。利便性と効率性を極限に求めている。



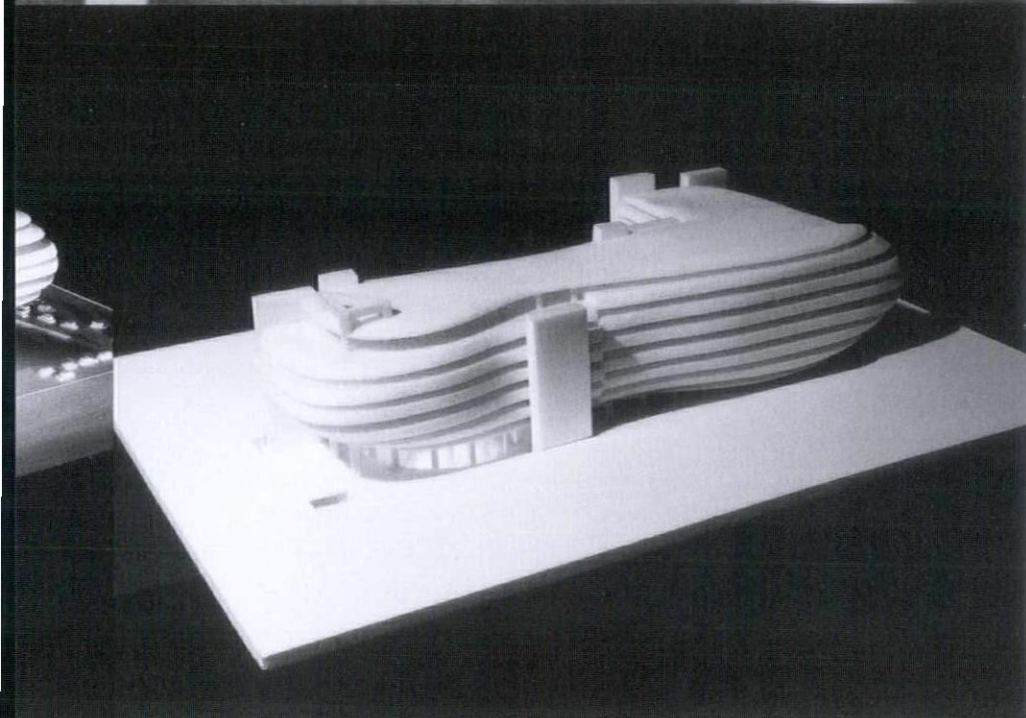
〈宗像市総合福祉センタープロポーザル〉 (1995)

Divided properties connected by bridge. Barrier free space is accessible wherever you like as the access is rotating infinitely.

歩けないときの道はどうあるべきか? 寄り付きこそ最も必要だという提案。

敷地が二分されることを生かして、アクセスをまったくのバリアフリーとする。

目的の建物の直前に雨風を避けてアプローチできるアーケードと立体交差するブリッジ。サービス動線と利用者動線を計画のバックボーンとしている。



〈岩田屋計画〉 (1994)

Diversity in homogeneous modern space is designed to be looked out side sacrificing a very little space. Inviting guests to the basement is also intended.

四角い箱は決してやさしくはない。柔らかさは強靱さを意味する。狭い道路に面した長い巨大百貨店の地階を見せることによって、スムーズな導入と歩行者との文脈が目的で、柔らかな凹凸を外周にデザイン。床面積への影響は見た目よりも小さい。無愛想な四角い箱だけが効率が高いわけではない。

かつて葉は、自分の建築にふれながら、もはや非建築であることにしか可能性はないという意味のことを語ったことがあった。たしかに彼の建築は、一見オーソドックスな合理主義的な建築のように見えて、なにか独特の雰囲気醸し出している。例えばガラスという素材の可能性の追及こそが目的であるような「インゴット」は、被膜のみに存在意義を見出し出している点で、それまでの建築とは異なるかもしれない。しかし彼はハイテク素材にのみ注目するのではない。竹や間伐材を、その土地の素材であるという理由で、しかも新たな手法で使い、民芸調にもピクチャレスクにもならない。

考えてみれば、葉は逆説的な建築家である。キューブ、三角柱、三角錐などの純粋形態を使う一方で、〈内住コミュニティセンター〉等では従来の概念では有機的建築として分類されるような造形をする。キューブなどの観念的な形態をつかうのは、むしろ光や風といった現象的なものを操作するためである。

彼はリアリティを求める。しかし彼はリアリズムの建築家なのだろうか。歴史、宗教、神話、偉人を描くことこそ芸術であるという絵画観に対し、市井の人々のそれまでを描く価値のないと思われていた生活を描くことが19世紀的リアリズムであるとするなら、彼のアプローチは文化という上部構造の虚構の部分を認めないという点ではリアリズムかもしれない。しかしそのことを指摘しても、なにか実質的なことを分析したことにはならない。というのは、誰もそれなりのリアリズムをもっているからだ。ただ、そのリアリズムが向かう対象は異なる。だから葉が何にリアリティを見い出すかが、ここでは問題だ。

〈光格子の家〉や、〈日時計の家〉は光はテーマである。しかし光を主題とする建築は別に新しいものではない。ロマネスク教会の肉厚の壁に穿たれた窓から入る光は石という物質の素材性を強調し、ゴシック教会のステンドグラスは地上に天井の世界を存在させ、草庵茶室の地下窓は自然現象として変化してゆく光の表情を室内に伝える。しかし葉のこれらの住宅における光は、単に自然を象徴するためのものではないし、何かを照らし、表すための光でもない。日時計の家では、ある時刻

はあるスリットから、次の時刻には次のスリットから光がはいる。光格子の家では、キュービックな室内の各面から浸入する光の強さが比較され判断するようになっている。そこでは光そのものが主題であり、建築は一種の分析装置となっている。光が、別のある対象を明らかにするための媒介としてではなく、プリズムによって光を要素に分解し分析するように、光そのものがあるリアルな対象として葉の前に存在する。そうした、葉のリアリティとはなにか。

あるいは太閤山ランド展望台 プロスペクタの上から、環境芸術としての人工の霧を見る時、そこには景観としての霧というフィルターを通して自然を眺めるという伝統的な美意識よりも、自然な霧も人工的なそれも、少なくともミクロにしてみれば同じ現象なのだという、高揚しながらも冷静な美意識が見られる。こうした感受性をもつ葉にとってリアリティとは何だろう。

伝統的な、あるいは少なくともヨーロッパ的な建築観のなかでは建築は支えるものと支えられるものの対話である、という考えが一般的であった。それは古代の神殿における柱＝梁構造であれ、ゴシック建築におけるヴォールトとバレットレスの関係であれ、こうした二分法は生きていた。建築の本質は柱か壁かという議論が、ルネサンスにもあったし、18世紀のいわゆる啓蒙主義の時代のヨーロッパにもあった。荷重を支える柱と、間取りすなわち機能にとって重要な壁のどちらが建築にとって本質的かという議論だが、しかしそこでも荷重／支持という構図が下敷きにされている。

一方、西洋建築では、支持される屋根構造の特徴は、その強い規則性あるいは幾何学性である。西洋建築のドームは、もともと組積造の原理でできている。鉄筋コンクリートとは違って、補強剤としての鉄は部分的あるいは例外的にしか使われない。従って球形や円形などのように応力を計算しやすく構造的に有利な形態が選ばれる。その結果、荷重／支持という対照的な構図によって、平面もまたこうした原理に支配されて、円形や正方形といった幾何学が支配的になる。そうした伝統はコンクリートのシェル構造で大スパンの橋

やホールを多く建設した20世紀の大建築家ピエール・ルイジ・ネルヴィのなかにも生きている。彼は、建築史家ジークフリート・ギョーディオンによれば、この新しい構造の可能性を最大限に生かしたとされる。しかし彼もやはり幾何学的な構成という伝統を引き継いでおり、調和は計られているとはいえ、自然のなかで人工的で幾何学的な造形物を対比的に使っている。

ヴィオレ・ル・デュクは建築を個々の石と、石から石に伝えられる応力に還元した。構造体に仮想の断面を想定し、その断面に作用する応力を計算するのが現代の構造力学の基本的な考え方だとすれば、それもやはり荷重／支持という古典的な哲学の延長線上にある。

葉の建築に、こうした境界面はない。むしろ異なる素材が出会う場所には、両者を緩衝しつつなぐための第3の素材が強調される。エポキシや、シリコンがそうである。こうした素材が、欠如を補うためではなく、まさに異質なものの出会いのために特別な意味づけがなされる。そうした意識にとってのリアリティとはなにか。

〈筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館〉と、〈内住コミュニティセンター〉は、屋根の独特の形態が特徴的である。鉄筋コンクリートによる実に自由で変化に富んだ曲面でできたシェル構造の曲面屋根だが、それは西洋建築に伝統的に見られるヴォールトあるいはドームとは著しく異なっている。つまり葉のこうした構造は荷重／支持という断面はなく、それ自身を支える構造である。そこでは支え、支えられるという二分法は存在しないし、曲面シェルはアドルフ・ロースが建築の根本としてとらえた布による被覆のようなものであり、それゆえの襷が〈内住コミュニティセンター〉に表れている、とさえ考えることが可能である。

景観にとっては、屋根と柱は、柱や壁以上に重要である。つまり、屋根は空との、床は大地との関係を示しているからである。建築は、空と大地の間に位置し、それらの力を受けながらも、そうした諸力をやりすごし、あるいはそれらを変換し操作し、両者の間にうまく調和的に介入してゆく。そう建築をとらえれば、それはまさに人間の営みそのもので

ある。

一方では、葉の建築では、床が自己主張しない。地面に密接する形式の建築では、大地がそのまま床となり、起伏に富んだ土地に建設される建築では、床は逆に軽々と宙に舞い、いずれにしても床は堅牢な人工性は主張しない。

西洋建築には床は重要ではないかと思われるかもしれないが、「基壇」は造形上、人工的な構造物を周辺から際立たせるためには欠かせない要素である。それは環境や自然に対して対峙しようとする。

〈筑穂町高齢者生活福祉センター〉は老人の足元を考慮してバリアフリーであり、徹底して段差を排除している。中庭の芝生も、縁側も、内部の床もすべて同じレベルにある。外周はすべてガラスであるから、床は大地のそのままの延長であり、その結果、これは民家における土間の解放性に似たものとなった。

〈内住コミュニティセンター〉でも、縄文時代の竪穴住居のように、敷地はすこし盛り上がった場所にあるが、逆に、内部の床はすこし凹んでいる。

葉の建築のあるものは、屋根と大地からなる縄文的な造形である。南方的な高床ではなく、明らかに壁穴住居を髣髴とさせる。そしてこうした古代人にとって屋根を架けることが最も重要なテーマであった。こうした建物の屋根は、大地の上に漂う雲か霧のようだ。あるいは林か竹藪に例えたほうが適切であろう。コンクリートの柱は木や竹の幹を、屋根は茂った枝と葉を象徴する。村の人々は、この木陰で集う。

〈松下クリニック〉、〈海と空の間のガラスの家〉などに見られる床は、意図的に構築的な強さを与えられていない。それはもちろん西洋建築におけるピアノ・ノビレでもないし、ピロティによって力強く支えられたル・コルビュジエの床でもない。それはまるで、自動車の床が地上数10センチを滑空し、飛行機の床が空中高く舞い上がる一瞬を凍らせたようなものだ。それは確固たる存在でありながら、建築としての特権は意図的にはく奪されている。

しかし縄文的なものと弥生的なものの対比がここで重要なのではない。西洋建築で特徴

的な、人工と自然、内部と外部といった二分法が、ここでは極力回避されている。ここではそのことがコンピューターを使った合理的な方法によって達成されていることが興味深い。建築構造は静力学の問題だが、この力学は人工物のみならず自然現象をも支配しているはずであった。こうした意識にとってのリアリティとはなにか、再び問いかけて見てみたい。

〈内住コミュニティセンター〉や〈筑穂町高齢者生活福祉センター〉は平面がまず自由である。内野では、集会室、個室、食堂、児童図書館といった多くの機能が比較的自由に、敷地の形状に従ってのびのびと設定されている。次に屋敷構造が決定されるが、支柱の位置もまちまちなのでコンピューターによる構造計算が不可欠である。しかしその結果、屋根の形は自由な平面を反映した、変化に富んだものになる。平面は比較的整形の〈小田原市総合体育館〉や〈ふるさとパレス ギャラクシー富山〉でも、その屋根の断面をみれば、屋根から見れば任意に配置された支柱に適合して、屋根が様々な厚みをもっていることがわかる。

これは公園などの設計で、道等をあらかじめ図面の上で決定するのではなく、自然にできた獣道を後から整備して道とするのと少し似ている。つまりあるアブリアリな幾何学性から始めるのではなく、手続きは徹底して合理的だが、それ故に逆に、最初の偶然性がうまく表現のなかに反映される。それは空気中の水蒸気が結露して微小な水滴となって空中のなかである平衡状態を発見し、雲として自己実現するのと似ている。

葉は自分の作品を説明するというスタイルでしか思想を表明しない。だから彼にとってリアリティとはなにかということは、まだ、体系的には説明されていない。しかし逆に、彼がどんな方法論を採用しなかったかを見れば、少なくとも彼が何にリアリティを感じていなかったかは判明するだろうし、そこから彼にとってのリアリティが垣間見えるのではないか。

彼が採用してこなかったのは、西洋的な二分法のそれである。支持と被支持、内部と外部、大地と床、人工と自然。それらの間に境

界線を引かないために、媒介的な素材、平衡点、襲といった概念が浮上する。伝統的な二分法は、世界を二領域に分割したが、その両者の一致こそがリアリティを保証すると考えられてきた。つまりリアリティというのはそもそも世界の二分法の結果として生まれた概念のようなものだが、葉は、出発点において意図的に分断したものを最終的に一致させようとするのではなく、こうした構図そのものを始めから見ない。だから彼のリアリズムは今は迷宮なのであり、それ故にこそ葉にとってのリアリティは何かを問う意義がある。こうした彼の方法論に立脚したリアリティとはいかなるものかは、これから徐々に明らかにされるであろう。しかしどのみち彼にとって建築は、内部の囲い込みではなく、環境全体の再秩序化なのである。

● とい・よしたけ／九州芸術工科大学助教授

光の恐怖

飯島洋一

現代日本の建築家の中でも、葉祥栄ほど「光」とらわれた人はいない。実際のところ、葉祥栄がいかにか「光」を意識する建築家であるかについては、彼が手掛けてきた数々の作品を振り返ってみれば、誰の目にも明らかである。たとえば私たちは、〈光格子の家〉(1981年)、〈日時計の家〉(1984年)、〈光十字の家〉(1985年)といった彼の作品の題名に、光のイメージをすぐさま嗅ぎ取ることが可能だろう。そこではタイトルが何よりも明快に物語るように、「光」がデザインの、最も重要な核を成すものとなっている。

具体的に個々の作品を眺めてみよう。たとえば福岡県久留米市につくられた〈日時計の家〉は、全体がコンクリートのフレームに対し、アルミニウムに包まれた四分の一の円柱が2個、絡み付いた格好をしているが、そこではアルミに包まれた柱には十字のスリットが開けられ、約1時間おきに、各々の開口から太陽光線が室内に射し込む仕掛けだ。また太宰府市の〈光十字の家〉は、アルミで包まれた雁行する箱がふわりと宙に浮かんだかたちをしているが、軽快な、どこかしらSFめいた感覚を持つこの作品では、室内の天井に十字のスリットが開けてあって、そこから光が射し込むことになっている。

さらに長崎県長崎市の〈光格子の家〉は、こうした「光」を主軸にした作品の中でも特に興味深いものである。雁行する、ふたつの箱が対になって向き合ったデザインのこの作品では、通常ならガラス面を支える構造部分にあたるスチールの格子部分が、スリットに置き換えられていて、そのため葉自身もい

ように、「光が構造」であるかのように見え、光のスリットが「虚の構造」として感じられるのである。〈光格子の家〉にあっては、本来なら力の流れを支えるポジティブな部分が、光というネガティブなイメージに転移されてしまっているのだ。

結果的にこの建築の室内では、光のラインが縦横に流れをかたちづくり、不思議な浮遊感を感じさせるのだが、〈光格子の家〉において、より注意をひくのは、葉がこの作品を論じた「光を！」と題するエッセイにあって、次のようにいっている部分だ。

「はくにとって、空間は永遠に明るく、自由でなければならない」×1。

冒頭でも述べたように、私が葉祥栄の建築に触れて、彼がつねに光にとらわれ続けたのではないかと考えてしまうのも、光をデザインの特性とするその建築作品のありようだけでなく、いま述べたように葉が、「光」に対して特別な思いを抱いているからにほかならない。すなわち葉は光に、「永遠」や「自由」といったイメージへとつながる何かを感じているのである(それは彼が照明デザインに、エテルナ=永遠とリベラ=自由、という名前をつけていることから同様に窺える)。一方、これらの建築の仕事に並べて、葉祥栄が光にとらわれている例証として、彼の照明デザインにも目を向けてみる必要がある。それらは〈ワイヤレスランプ〉(1977年)や〈ライティングチューブ〉(1973年)、それに〈マルタ号〉(1971年、72年)といった作品だが、そこでも照明器具の装飾性は一切排除され、彼の眼差しは、ただ純粋な「光」そのものに向けられ

ているように見えるのである。

ともあれ、このように葉祥栄は、少なくとも70年代から80年代の半ばまでは、光に固執した作品を多くつくり続けてきたわけだが、そのように彼をつよく誘い込む「光」とは、一体どのようなイメージを持つものなのだろうか。いや、葉祥栄にとっての「永遠」であり「自由」である光というよりも、現代にとって、「光」とは一体どのようなものとしてあり続け、私たちに関わっているのだろうか…。

それについてもっと深く論じるために、葉祥栄の最初期の代表作〈コーヒーショップ インゴット〉について語ってみたい。1977年に北九州市につくられたこの建築は、ガラスの立方体が敷地の中に一部分埋ったまま横たわっているという印象を与えずにいないものだが、全体は反射性ガラスによってすっぽり包まれ、そのため外観では、日の移ろいが刻々と壁面に映し出されることになる。

そうした〈インゴット〉にあって、作者の意図が十分に表出されるのは、その内部に一歩足を踏み入れた時である。そこではただ、光だけが空間に充満している。私たちを光から遮るものは、そこには何もない。いささか大袈裟にいうならば、この〈インゴット〉の内部には、日がある限り、光が無限定に射し込んでくるような気配さえ感じ取れるのだ。

この作品は、これまで述べてきた〈光格子の家〉などの一連の、光をテーマとした彼の作品と較べてみても、日の光の強烈さからして、ほとんど「光の恐怖」、と叫びたいものだろう。抽象的ないい方に聞こえるかもしれないが、その光の圧倒的な空間で、私たち

は、光に対していかに無防備でしかあり得ないかを思い知らされるのである。〈光格子の家〉や〈光十字の家〉や〈日時計の家〉において、あくまでも美学的な、柔らかな位置付けとしてあった「光」が、それらの原点をなすこの〈インゴット〉にあっては、強烈な「光の充満」として表れているのだ。

それは葉にとってみれば、「空間は永遠に明るく、自由でなければならぬ」という言葉そのものを表す光の建築だといえるのだろう。しかし私には、その光の充満する空間性が「永遠に明るく」、そして「自由」であるというよりも、逆に私たちの時代の、ある喪失感を裏返しのかたちで表現しているものに見えるのである。

充満するがゆえに、失われたものの大きさもまた倍増する。しかし、その場合の喪失感とは具体的には何を指すのだろうか。それは「光」に対して、私たちが歴史的に一体どのようなとらえ方をしてきたのかを、思い起してみれば理解できるはずだ。そもそも長い間、私たちは「光」というものに対して、多く畏敬の念を抱いてきた。たとえば人類が洞窟の暗闇から出て、初めて光の相のもとに自身を曝した時のことを想像してみよう。その時、光の充満するさまは、崇高さを讃えてはいても、決して恐怖や喪失の対象ではなかったはずである。また中世の教会のステンドグラスのきらびやかな色彩をもつ輝く光はどうだろうか。その麻薬的な煌めきにも、私たちは畏敬の念を持っても、決して喪失感を抱かなかっただろう。「光」は多く、崇高さや超越性を、そのまま表明するものであった。「光」の前で

は、人々は自分たちを越えた、何か大きな存在をいつも感知し続けてきたのである。

しかし私たちの時代には、光はそのような象徴性をとくに失ってしまっている。それはもはや白の光の素晴らしさを人間的に表すものか、あるいは採光という機能的な存在と化しているに過ぎない。ドイツの哲学者、ハンス・ブルーメンベルクがその著書『光の形而上学—真理のメタファーとしての光』*2の中で指摘するように、光には「真理」の隠喩とでもいうべき系譜があったが、それが現代では失われてしまっているのである。そしてその意味でいえば、葉の建築に満ちる「光」とは、そのような始原の「光」でも、ステンドグラスから射し込む象徴的な「光」でもない。それはいうならば、あらゆる「光」の象徴性、神話性、超越性がはぎ取られた後の、「空虚としての光」であるだろう。20世紀の終わりに生きる私たちは、「神」の死んだ時代を生きているが、それはある見方をするならば、私たちが「真理」の隠喩としての「光」が死んだ時代に生きていることを意味している。

そうした光の終焉とでもいうべき現代にあって、葉祥栄がそれでもなお光にとらわれ、光に充満した建築をつくる時、それに触れた私たちは、その「光の充満」に、現代における「空虚の充満」をどうしても感じ取らざるを得ないのだ。先に私がいった喪失感というもの、現代では光が本来の「真理」や「意味」を失ってしまっているからである。

こうして「光」がそのまま「空虚」を指し示すこの時代には、光という「空虚に

満ちた空間」は、人々に対して、先にも指摘したように、いやが上にも「光の恐怖」を、すなわち「神のいない恐怖」を感知し続けることになるはずである(もちろん、ここで私という「神」とは、宗教的な意味での神の復権という問題では決してなく、私たちが、規範や様式や中心の瓦解した、曖昧で頼りない遊牧的状态の恐怖の中に、漂い続けていることを指している)。

光の時代が終わりを告げた後の、いわば空虚な時代に生きているにもかかわらず、このように葉祥栄は、なおも光=空虚にとらわれ、執拗に光を主題に置きながら建築をつくり続けている。しかしその空虚な光に満ちた作品は、時折、不思議な魅力を放散することがある。奇妙に聞こえるかもしれないが、私が彼の作品に魅かれるのも、実はその点においてこそなのである。

●いいじま・よういち／建築評論家、多摩美術大学助教授

*1 このあたりの葉祥栄の発言は、すべて新建築1981年4月号の葉祥栄「光を！」による。

*2 ハンス・ブルーメンベルク『光の形而上学—真理のメタファーとしての光』(生松敬三・熊田陽一郎訳、朝日出版社、1977年)。

建築のリアリティ

松畑 強

1

「柔らかな建築のための」「柔軟体操」。いささかメタフォリカルなタイトルかもしれない。葉の建築はいまやいささか擦り切れてきた「柔軟」といった言葉ではたしてどこまでメタフォリカルに語れるのだろうか？「すべてはメタファーだ」というピーター・アイゼンマンふうの謂いは確かに有効なものだが、しかしそれはつねに素朴なメタファー主義や形式主義に転落する危険性をも孕んだものとも言える。

形態的なメタファーによって潮流を形づくる方法は「デコン」から始まったと言えるかもしれない。ここでアイゼンマンはフィリップ・ジョンソンとともにニューヨーク近代美術館で「デコン…」展を仕掛け、この展覧会にあわせて開催されたコロンビア大学での講演会で「デコン…」が近年まれに見る歴史的出来事だと語っている。似たようなメディア戦略はこうした「柔らかな建築」、あるいは「建築のひだ」という潮流でも展開されてきた。ただし今度は雑誌『AD』（や、アイゼンマンの愛弟子であるグレッグ・リンを）使い、再びこれが近代建築史上の画期的出来事であるかのように宣伝してきたからである。「デコン」や「柔らかな建築」はデザインとして見るなら面白いもので、アイゼンマンが過去20年の最も重要な建築家の一人であることにも違いなからう。しかしながらこうした潮流がけっきよく素朴なメタファー／形態主義となり、さらにアイゼンマンの過度にメディア的な狼少年のようなパフォーマンスが、多くの建築家の不評や反発を招いてしまったのも否めないことだ。

「ある時代の建築はその時代の思潮を形態として反映する」というパノフスキー的な謂いを、アイゼンマンは「ある時代の建築はその時代の思潮を形態として反映せねばならない」と転倒させてしまったかのように見える。80年代には「デコン」とデリダが語られ、90年代には「ひだ」や「柔軟な建築」とドゥルーズが語られる。いうまでもなく「柔らかな建築」で語られる幾何学の線形性／非線形性＝複合性といった問題提起はドゥルーズ＋ガタリの『千のプラトー』のなか、「14、平滑と条理」の部分をいささか通俗化して反芻したものだ。だがしかしあとで一瞥することだ

が、葉の建築は一貫してメタファーを可能な限り拒絶するところにあったと言えるものでもあろう。メタファーとは、とりわけ素朴なメタファー主義とは、世界の素朴な解読格子であるとともに作品や形態に「意味」を与えようとするもので、むしろ葉の作品はそうしたメタファー的な意味や造形性を可能な限り知的に拒絶することにあつたようにも見えるからである。

素朴なメタファー主義や形態主義が自らの意味を世界に押しつけるものだとすれば、これとは逆に世界の機構をそのまま受けいれてしまう立場が、その対極としてあろう。むしろ多くの人々はこうした立場に立っている。具体的には、生産／消費回路の単なる結節点に安住してしまうものだ。そこでは建築や建物はまったくの「商品」にすぎず、建築家は商品生産者として自らの商品に価値を付けることに汲々とし、クライアントは「消費者」としてこの商品を安く買い叩くことに汲々とすることになる。彼や彼女の立場からすれば建築は「作るもの」ではなくまったくの「商品」として売られるものであり、また「消費者」として「買うもの」なわけだ。こうしたことは近年の日本において「規制緩和」の要求としてさらに加速されつつあるようにも見える。「規制緩和」は経済的に見ればやむを得ぬことにせよ、実際には何のための「規制緩和」かが問われることなく、単にますますの商品化や物象化があたかも賞賛すべきことのように喧伝されているからである。まして「アメリカ人建築家が設計したオフィスビル」とか「北欧ふうの高気密・高断熱住宅」といったものが商品として、それもそれ自体が商品価値を持ってしまうことなどは、単に商品化の問題だけでなく、日本人はもはや骨の髄まで植民地化されてしまったのではないかとさえ思えてくるものだ。いずれにせよこうしたところからは野心的な建築など何一つ生まれてこないだろう。いうまでもなく葉の建築は、こうしたますます悲惨になりつつある状況に對しても、建築として何とか屹立し続けようとする意志を突きつけるものでもあるのだ。

一方にはメタファー主義や形態主義、あるいは造形主義をはじめ、世界に意味を投影する建築があり、他方にはますます意味を失い、商品／物象化していく建築がある。ここでさしあたりの結論を提示するなら、こうした両極の深淵のあいだにかすかにあいたきわどい領域を葉の建築はたえず歩んできたし、また歩んでいると言えるだろう。そうした建築こそが最も野心や緊張感があり、リアリティがあるからだ。

2

いささか学術的な謂いを許してもらえれば、「わたし」は英語では「I」と「me」の二種類の単語によって措定される。そして前者は能動的なものと思われ、後者は受動的と思われ、ラカンふうに言うなら「大主体」と「小主体」とも言い直せるかもしれないが、現実のわれわれはこの二つの「わたし」のあいだを行き来しながら生きていよう。もしも「わたし」が能動的な「わたし」を通して肥大化し、世界に「わたし」を押しつけようとするれば、それは「狂気」と呼ばれるだろうし、たとえ自分の意志で動いているつもりでも結局は世界の単なる結節点にすぎぬのだとすれば、それは「パブロフの犬」とたいして変わるところはない。同じことは建築家についてもあてはまる。もしもそう望むなら、建築家は図面のうえで文字どおり狂気にいたるまで形態や理論と戯れることもできるし、もしもそう望むなら単なる生産システムに埋没することもできるのだ。だが繰り返すなら、最もリアリティと緊張感を保持しうるのは、この両者のあいだのきわめてきわどい領域なのである。

こうした考えはパノフスキーの先行者でもある今世紀初頭の実験家アロイス・リーグルの「芸術意欲」という概念を、あるいは髣髴させるかもしれない。ある時代の芸術意欲はその時代の制約や形式を通して、あるいはそれらとの緊張関係を孕みながら表現されるというものだ。リーグル的な概念は19世紀的な造形者とは異なる造形主体を提起するものでもあった。そして葉の建築に見出されるのも、こうした主体なのである。

たとえば小国町での一連の仕事は葉と小国町の出会いから始まり、それもおそらく葉以外の建築家では、なおかつ小国町という場所以外では構想され得なかったものだ。葉は林業で知られるこの町の間伐材や技術を取り込んで「木造トラス構造」を実現させ、それを巧みにデザインしながらこの町の拠点に建築として打ち込んでいく。交通センターと林業センターがこの町の幹線道路沿いに、さらにそこから少しはずれたところに町民体育館が建設されることで、公共建築の新しいネットワークが形成され、過疎化に悩む山村に新しい息吹を吹き込むことになったわけだ。なおかつ繰り返すなら、これらの建築はこの地の素材と技術に大きなヒントを得て構想されたものでもある。つまりところ小国町の一連のプロジェクトは、この地の現実から導き出され、この地の現実と干渉し、そしてこの地の現実を変えていったのである。これはデミウルゴスの造形の強制でもなく、小国町の現実

に埋没してしまうわけでもない、いわば「インターラクティブ」なものだ。こうしたあり方は「建築家はここに造形者として形態を生み出すより、効果を生産するものだ」というコールハースの考えと、あるいは近いかもしれない。ただしコールハースの考えの背後にあるものが、ニヒリスティックなミニニズムであることを除いては。

ともあれ小国町との関係が相互干渉的なものだとなれば、葉が小国町の現実を変えたように、葉自身も小国町によって変わったはずである。〈小田原市総合体育館〉やくふるさとパレス ギャラクシー富山〉といったその後の葉のトラス構造の建物は、あきらかに小国町での経験から導き出されたものだろう。葉はここで今度は「自然」という現実と相互干渉したように見える。とりわけくふるさとパレス ギャラクシー富山〉は、おそらく積雪が問題になるだろう敷地でむしろ積雪を巧みに屋根のデザインに取り込んだと言われるものだ。この屋根の形は積雪荷重から導き出され、なおかつ部材を極力少なくするための解として導き出されたものだと葉は解説する。こうした謂いをそのまま受け取るなら、ここでは造形者はまったく消去されており、積雪という現実とのシステムティックな相互干渉だけがある。しかしにもかかわらず、単に技術的・経済的システムだけからでは生まれなかっただろうデザインでもあるのだ。同じことは筑穂町内住コミュニティセンターなどの近作にもあてはまる。造形的な主体を消去している一方では、単なる構造的な合理性から導き出されたものでもないからである。さらに一連の木材や竹の使用は、鉄やコンクリートといったモダニズムの代表的な素材に対してこれらの素材が「柔らかい」から「柔らかい建築」だと解されるべきものではなく、むしろ素材に対する倫理を一貫して追求している点では、「造形」や「形態」としてではなく「倫理」としてのモダニズムを貫いているとも言えるものだろう。

3

葉はオハイオのウィッテンバーグ大学で建築ではなく美術を学んでいる。このことが彼の建築の独自性にも反映していよう。なるほど自邸やセカンドハウスの〈海と空の間のガラスの家〉、〈カフェソーラー〉やくワキタハイテク本社事務所〉はミースのガラスハウスを髣髴させ、〈嵐山ゴルフ倶楽部〉やく唐津ゴルフ倶楽部〉は同じくミースの独立壁原理を髣髴させるが、しかし葉のとりわけ初期のデザインはどちらかといえば建築よりミニマリズムという美術界の潮流から生まれたものだろう。

う。あるいはもしも建築学科で教育されていたら、こうしたデザインは生まれてこなかっただろうものでもある。

葉がウィッテンバーグで美術を勉強していた60年代中期は、アメリカの現代美術が頂点を迎えていた時代でもあった。つまり1963年から68年のミニマリズムからその後のポストミニマリズムへ、さらにアースワークへと動いていったまさにアメリカ美術の黄金時代で、こうしたミニマリズムの流れは美術のあり方をも大きく変えていったとされる。たとえばそれまでアメリカの美術家はもっぱら物好きと落ちこぼれの「職業」と見られがちだったのに対し、ミニマリストはみな大学出の当時としてはエリートで、彼らは美術をいわばビジネスとして積極的に肯定し、さらに造形性より理論武装を優先したのだった。手の痕跡を可能な限り消去した彼らの純粋立体は結果として高度に知的な様相を呈し、これに目を付けた広告代理店によって上層中流層の知的なデザインとして流布していったのだった。そしてこうしたミニマリストが理論的に依拠していたのが、現象学である。つまりミニマリズムとは、美術からあらゆる内面やメタファーや意味や造形性をはぎとり、人間の身体や知覚との可能な限り純粋な関わりとして、もう一度美術を根底から定義し直そうとする試みでもあったわけだ。当時アメリカにいた葉はこうしたミニマリズムの洗礼を何らかの形で受けただろうし、それが彼の初期の作品に反映されているものでもあろう。この論文のはじめで葉の建築はもともと意味やメタファーや造形性を極力避けてきたと述べたのも、彼のミニマリスト的作風から推測してのことである。

たとえば〈ニューロビン カルチャーセンター〉ではまったくの円筒が横に置かれたデザインとなっているが、これは作家の芸術的内面を表しているわけではないし、何かを表象しているわけでもない。正面のハーフミラーガラスは見るものの視線を跳ね返し、さらに建物の外皮はアルミパネルで覆われ、内面性や表象性を暗示するものをすべて消去していよう。あるいは〈ブティック ミズレイコ〉のインテリアで少しずつ角度をずらしながら空中を浮遊する直方体やくコーヒーショップ・インゴット〉、自立発光体の直方体などは、ミニマリストのロバート・モリスの直方体のコンセプトと通底するものだ。インゴットではまた40度に傾けられた直方体にハーフミラーガラスが貼られ、日中は変わりゆく空の風景を写し出し、夜間は自ら発光体となって知覚のあり方に揺さぶりをかける戦略が採られている（これはのちの〈アクト6〉でも繰り返

される戦略だ）。同じ時代に制作された〈WXYZチェアー〉ではガラスがフォトボンドで接着され、ここではもはやガラスの素材性と「座る」という人間の身体機能性以外のものはすべてそぎ落とされ、究極的な椅子が実現されているとも言えるものである。というより、ガラスの素材性が結局は自らを消去していくことにあるとすれば、もはやこの椅子は自分自身をもそぎ落とすぎりぎりのところで成立しているものでもあるだろう。〈WXYZチェアー〉はある意味で、ミニマリズムの極北をなす作品である。

この延長で考えるなら、1980年代にはいつて葉が「光」や「風」や「水」や「音」といった素材を繊細な手つきで扱い始めたのは自然なこととも言えるかもしれない。こうしたものは人間の知覚に最も基本的な役割を果たす素材そのものでもあるからである。安藤忠雄も同じ時代、やはりこうした素材を扱っているが、ただし安藤がたとえば「光」を象徴的に扱ったとすれば、葉はどちらかといえばクールに扱ったのである。〈時計の家〉やく光格子の家〉やく〈アクト6〉での光の扱いは、そうした光の扱いのいい例である。こうした葉の光の扱いはどちらかといえば、（安藤の光より）ジェームス・タレルの〈光のストップージュ〉のコンセプトに近いものだ。さらにその延長で、近年の葉はこの特集でいう「柔らかい建築」をも扱っているわけである。だが繰り返すなら葉の建築がもしも仮に「柔らかい」ものだったとしても、その柔らかさは単なる形態や造形や、あるいは素材や構造の「柔らかさ」にあるというより、葉の建築家としての態度や倫理にあるというべきものだろう。裏返して言うなら、たとえ堅い造形や堅い素材や堅い構造を持っていたとしても、葉の建築は「柔らかい」ものとしてあり得るはずなのである。

葉の作品はけっして過剰なジェスチャーを伴うことはないし、自己顕示的で狼少年的なマニフェストを伴うこともない。かといって社会の現実にあ住しているわけでもない。それは、能動的な「わたし」と受動的な「わたし」のあいだにきわどくある、しかしバランスのとれた大人の「わたし」であり、そうした「わたし」が現実とリアリティをもって関わりながら生み出していく、大人の建築というべきかもしれない。しかしながらこうした建築が淡々としながら、にもかかわらず野心と緊張感とリアリティを持って、未来の希望を切り開いていける可能性を持っていることも、また確かなのである。

●まつはた・つよし／建築家

主要作品リスト

■1970

＜カフェソーラー+エアーサービス＞
大分 S造、270m²、ニック
＜シューメーカー コーネリア＞
福岡 インテリア ニック

■1971

＜ジョリ＞
北九州 インテリア ニック、勝務店

■1972

＜マルタ号＞
熊本 インテリア 松屋プラスチック工業

■1973

＜かねしげビル＞
北九州 S造、4F 768m²、清水建設
＜キャンティレバールーフの家＞
北九州 RC+S造、144m²、清水建設
＜ライティングチューブ＞
松屋プラスチック工業
＜プティック・ベル＞
北九州 インテリア サンケン、タナチョー、松屋
プラスチック工業

■1974

＜旭印刷＞
福岡 インテリア サンケン、松屋プラスチック工
業、タナチョー、田島メタルワーク
＜ZEN＞
福岡 インテリア タナチョー、山本石産、マツヤ
プラスチック工業、常盤商事、サンケン

■1976

＜WXYZチェアー＞
家具 キヨミガラス

■1977

＜コーヒーショップ インゴット＞
北九州 S造、84m²、直営(協力：藤本猛、金重勝次
郎)
＜ワイヤレスランプ＞

■1978

＜小浜観光ホテル＞
長崎 インテリア 清水建設

■1979

＜木下クリニック＞
福岡 RC造+FRP、188m²、福島工務店
＜GA-TAP＞
福岡 インテリア サンケン、松屋プラスチック工
業、タナチョー、田島メタルワーク

■1980

＜Y-コートハウス＞
熊本 RC造、715m²、堀内工業
＜ニューロビン カルチャーセンター＞
北九州 RC造(一部S造)、4F 1211m²、奥村組
＜ホテルグランドパレス徳島＞
徳島 RC、SRC、S造、7F 5395m²、清水建設

■1981

＜光格子の家＞
長崎 S造、125m²、島田建設
＜シルバールディング＞
福岡 S造、4F 413m²、大和建設

■1982

＜江上クリニック＞
長崎 RC造(一部S造)、3F 266m²、島田建設

■1982—83

＜ラフォーレミュージアム原宿、飯倉、赤坂＞
東京 インテリア 総匠企画、清水建設、鹿島建設

■1983

＜風格子の家＞
宇部 S造、3F 197m²、今田工務店
＜浮池歯科クリニック 見えない家＞
熊本 RC造、2F 438m²、安藤建設
＜パビリオン＞
熊本 S造、555m²、堀内工業

■1984

＜日時計の家＞
久留米 RC+S造、2F 260m²、安藤建設

■1985

＜アクト6＞
八代 S造、965m²、大成建設、西田工業 JV
＜光十字の家＞
福岡 S、RC、木造、84m²、島田建設

■1986

＜ミュージックアトリエ＞
熊本 本造立体トラス造、法38条認定 173m²、蔵原
建設

■1987

＜野外コンサート場 アスペクタ＞
熊本 RC造、1200m²、三津野建設
＜小国町交通センター＞
熊本 本造立体トラス造、法38条認定 500m²、松岡
工務店、小国町森林組合、太陽工業、旭ガラス
＜小国町林業センター＞
熊本 本造立体トラス造、法38条認定 583m²、長尾
工務店
＜飯倉タクシーステーション＞
福岡 本造3次曲面板構造、40m²、佐伯住建

■1988

＜小国町民体育館＞
熊本 本造立体トラス造、法38条認定、2F 3200m²、
橋本建設、太陽工業、小国町森林組合
＜慈愛園乳児ホーム＞
熊本 RC造、339m²、安藤建設
＜0°—90°＞
家具 天童木工

■1989

＜西部ガスミュージアム 自然現象美術館＞
福岡 S造、サスペンション構造、4F 3467m²、竹中
工務店
＜アジア太平洋博覧会—福岡'89 郵政パビリオン＞
福岡 木造、竹造、法38条認定 159m²、悠木産業
＜'89 海と島の博覧会広島 ランドスケーピング、
メインステージ＞
広島 ランドスケーピング 本造格子2方向吊屋
根、法38条評定 23.75ha、1332m²、フジタ工業
＜ミズレイコ銀座店＞
東京 インテリア、37m²、ライブ

■1990

＜三角港フェリーターミナル 海のピラミッド＞
熊本 RC+SRC造、1052m²、岩永組
＜ワキタハイテク本社事務所＞
福岡 S造、テンション構造、2F 380m²、安藤建設
＜松下クリニック＞
長崎 S造、サスペンション構造、4F 239m²、佐藤
工業
＜阿蘇やまなみリゾートホテル&ゴルフクラブ＞
熊本 RC造、BI-13F 10676m²、緑宮建設

■1991

＜唐津ゴルフクラブ＞
唐津 RC造+PC、4900m²、鉄建建設
＜嵐山ゴルフ倶楽部＞
沖縄 RC造、4400m²、青木建設
＜岩田屋本部＞
福岡 インテリア、1000m²、ニック
＜海と空の間のガラスの家＞
福岡 S+SRC造、サスペンション構造、216m²、福
島工務店、エアーズ

■1992

＜ふるさとパレス ギャラクシー富山＞
富山 RC造、S造、2F 6218m²、大成建設、川田工

業、日曹建設 JV

＜太閤山ランド展望塔 プロスペクタ＞
富山 RC造、S造、2F 1150m²、寺崎工業、松島工
業、丸孝建設 JV
＜ミズレイコTOKYO＞
東京 インテリア、270m²、瀬戸工務店

■1993

＜原田ビルディング＞
熊本 RC造、627m²、松岡工務店
＜グラスステーション＞
熊本 RC造+ガラス膜構造、652m²、安藤建設
＜ラフォーレ原宿小倉店＞
小倉 インテリア、17491m²、清水建設

■1994

＜金田町ふれあい塾＞
福岡 木造、615m²、桑野組、幸組
＜内住コミュニティセンター＞
福岡 RC造+シェル構造(竹型枠)、234m²、功住建
＜光の中の6つのキューブ＞
熊本 RC造、141m²、安藤建設

■1995

＜小国町降保館＞
熊本 木造シェル構造、2F 506m²、宮木工務店
＜筑穂町高齢者生活福祉センター及び内野児童館＞
福岡 RCシェル構造(竹型枠)、587m²、間組

■1996

＜老人保健施設サンダイヤル＞
福岡 RC造、S造、4F 5382m²、大成建設
■1997(予定)
＜Ms. REIKO TOKYO＞
東京 RC+SRC+S造、1450m²、太平工業
■1998(予定)
＜筑穂町福祉総合エリア＞
福岡 RC造、S造、3801m²、大本組

プロポーザル

■1972

＜福岡市立美術館＞福岡市市民としての提案(三浦
紀之、伊勢博臣と協同)

■1973

＜福岡市中央区天神南北軸及東西軸モール計画＞
九州デザインコミッティーメンバーとしての提案

■1988

＜同潤会青山アパート再開発計画プロポーザル＞

■1990

＜博多港ボトルネッサンス21 中央埠頭計画プロ
ポーザル＞

■1991

＜福岡県県庁跡地 アジアバシフィックゲートウェ
イプラザ＞
＜小田原市総合体育館プロポーザル＞

■1992

＜大黒ピアシティ 横浜アーバンリング展プロポー
ザル＞

■1994

＜岩田屋計画プロポーザル＞

■1995

＜六本木六丁目地区再開発計画プロポーザル＞

■1995

＜宗像市総合福祉センタープロポーザル＞

■1995

＜虎ノ門 麻布台地区再開発計画プロポーザル＞



■略歴

- 1940 熊本県生まれ
- 1962 慶応義塾大学経済学部卒業
アメリカ ウィッテンバーグ大学 ファイン・アプライド・アーツ奨学生
- 1970 葉デザイン事務所設立
- 1992～九州大学非常勤講師
- 1992 コロンビア大学大学院建築学部客員教授
- 1996～慶応義塾大学大学院教授

■個展

- 1978 ガラスの椅子 WXYZチェア展 (東京デザイナーズスペース)
- 1980 空間から空間へ 葉祥栄デザイン展 (日本デザインコミティー)
- 1982 光の建築展 (東京デザイナーズスペース)
- 1984 ライトアーキテクチャ展 (イナギャラリー)
- 1985 葉祥栄 木の建築展 (日本デザインコミティー)
- 1987 葉祥栄建築展 インターフェイスデザイン展 (ギャラリー間)
- 1991 葉祥栄 水の建築展 (日本デザインコミティー)

■受賞

- 1973 東京国際照明デザイン指名コンペ銀賞
- 1979 日本インテリアデザイナー協会賞
- 1983 毎日デザイン賞 (一連の作品) 毎日新聞社
- 1983 日本建築家協会新人賞 (光格子の家) 日本建築家協会
- 1984 熊本市優秀建築物表彰 (バビリオン) 熊本市商空間デザイン賞 奨励賞 (ラフォーレミュージアム赤坂) 日本店舗設計家協会
- 1985 商環境デザイン賞 優秀賞 (バビリオン) 日本商環境設計家協会
熊本市都市景観賞 (バビリオン) 熊本市
- 1986 商環境デザイン賞 優秀賞 (アクト6) 日本商環境設計家協会
- 1987 北九州建築文化賞 (NRCC) 北九州市
- 1989 日本建築学会賞 作品賞 (小国町における一連の木造建築) 日本建築学会
- 1993 商環境デザイン賞 奨励賞 (唐津ゴルフクラブ) 日本商環境設計家協会
- 1993 福岡市都市景観賞 (西部ガスミュージアム) 福岡市
- 1993 IAKS AWARD 1993 GOLD MEDAL (小国町民体育館) (国際余暇スポーツ施設賞、ケルン)
- 1993 木造施設普及コンクール 農林水産大臣賞 (小国町民体育館)
- 1993 中部建築賞 (太閤山ランド展望塔)
- 1994 福岡県建築住宅文化賞 優秀賞 (海と空の間のガラスの家)
- 1994 くまもと景観賞 (ガラスステーション)
- 1994 BENEDICTUS AWARD (ガラスステーション) (国際合わせガラス建築賞、ワシントン)
- 1994 福岡市文化賞
- 1994 福岡市都市景観賞 [集まり、空間部門] (世界の建築家通り南1街区Aブロック A-2棟)

■BIOGRAPHICAL NOTES

- 1940 Born in Kumamoto-City, Japan
- 1962 B.A. in Economics at Keio Gijuku University, Tokyo
- 1962 Foreign student grant in aid, majored in Fine and Applied Arts at Wittenberg University, Springfield, Ohio
- 1970 Established SHOEI YOH + ARCHITECTS, Fukuoka
- 1992～Lecturer at Architecture Department of Kyushu University
- 1992 Visiting Professor of Architecture, The Graduate School of Architecture, Planning and Preservation, Columbia University, New York
- 1996～Professor of Architecture and Urban Design, The Graduate School of Keio University

■EXHIBITIONS

- 1978 Glass Chair WXYZ (Tokyo Designers Space) (permanent collection of National International Museum in Osaka)
- 1980 TRANSFORMATION from space to space (Japan Design Committee)
- 1982 LIGHT ARCHITECTURE (Tokyo Designers Space)
- 1985 FORMS IN WOOD (Japan Design Committee)
- 1987 INTERFACE DESIGN (Gallery MA)
- 1991 AQUARCHITECTURE (Japan Design Committee)
- 1995 6 CUBES IN LIGHT (permanent collection of Nouveau Musee, L'Orelean, France)

■AWARDS

- 1979 Japan Interior Designers Association AWARD for 1979
- 1983 Mainichi Design AWARD for 1983
- 1983 Japan Institute of Architects AWARD for 1983
- 1989 Architectural Institute of Japan AWARD for 1989
- 1993 IAKS AWARD for 1993 Gold Medal (Koln, Germany)
- 1994 BENEDICTUS AWARD Finalist (Washington, U.S.A)

■葉デザイン事務所

葉村祥栄、葉村公子／上窪哲也、辻卓見、
浦川智広、西重隆／
滝澤俊之、信濃康博、八下田裕之、大室俊之、
中山聖、川津浩幸、渡瀬克則、谷口純、馬場明、
目田兆、上野一平、河村嘉和、飯坂保、永田正則、
和久野博

■フォト・クレジット

新建築社 写真部

p.18-19上、p.57左上、p.57左中、p.81下左、
p.84-85、p.86-87上、p.86下左、p.93下左、
p.94-95、p.129、p.131上、p.140、

GA photographers

p.39、p.90-91上、p.106、p.108

白鳥美雄

p.70、p.71、p.72-73、p.73上、p.74-75、p.80
上、p.103下、p.118-119、p.122、p.123、
p.130上

浅川敏

p.86下右、p.150-151、p.152-153

岡本公二

p.98-99、p.142-143、p.144

■C.G.クレジット

太陽工業

p.16-17、p.22-23、p.24-25上

■写真提供

天童木工

p.27

グリーンピア南阿蘇

p.76下左、p.77下

凸版印刷

p.76下右

富山県

p.79上

その他の写真は、葉デザイン事務所

第10回コイズミ 国際学生 照明デザインコンペ



10周年記念「あかりのあかり」

【作品募集】

金賞(1点)	賞状・賞金100万円
銀賞(2点)	賞状・賞金30万円
銅賞(5点)	賞状・賞金10万円
佳作(若干数)	賞状・賞品
審査委員長	栄久庵 恵司(インダストリアル・デザイナー)
審査委員	栗津 潔(グラフィック・デザイナー) / 菊竹 清訓(建築家)
	葉 祥栄(建築家・デザイナー) / パオロ・ロマッツィ(インダストリアル・デザイナー)
	アンジェロ・コルテージ(インダストリアル・デザイナー)
アドバイザー	小泉産業(株) 3名
応募資格	1996年9月1日現在、在学中の全世界の学生
参加申込受付	1996年9月2日～1997年1月31日(当日消印有効)
作品受付	1997年2月10日～1997年2月20日(当日消印有効)
主催	小泉産業株式会社
後援	(財)日本産業デザイン振興会 / (社)日本インダストリアルデザイナー協会 ICSID(国際インダストリアルデザイン団体協議会)

詳しくは応募要項をご覧ください。ご希望の方は90円切手同封の上、下記へご請求ください。
〒541 大阪市中央区備後町3-3-11 小泉産業株式会社内
コイズミ国際学生照明デザインコンペ事務局 TEL 06-262-1369

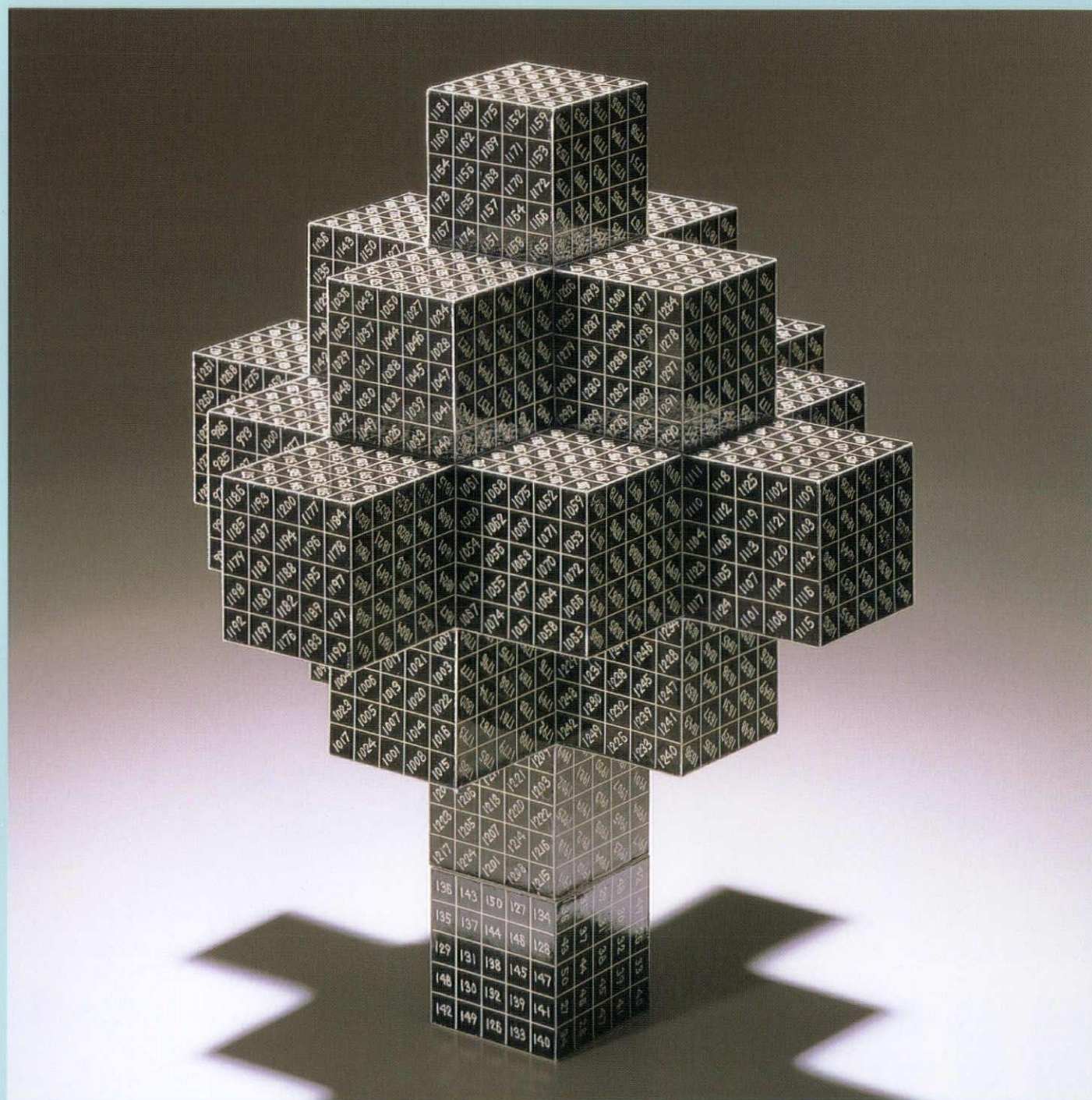
応募要項は学校事務局にも若干数用意してあります。
電球等の資料も準備してありますのでご請求下さい。(380円切手を同封して下さい。)





戸村 浩

STAIR CUBEとCROSS CUBE



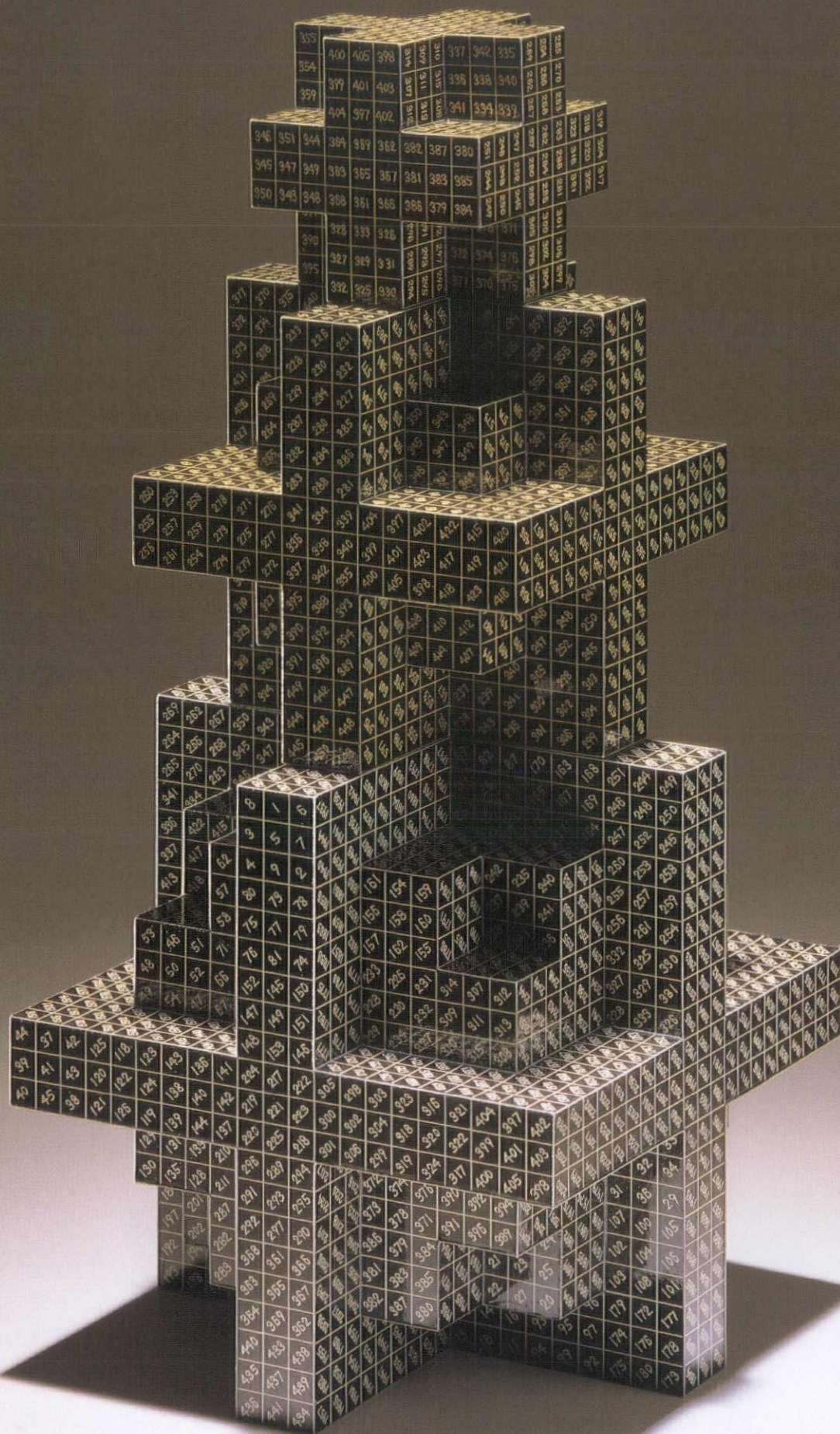
格子は内部空間が外部に対して開いた窓。その幾多の窓から行儀の良い数字達がのぞいている。無限を目指すかのように小さい方陣から、徐々に大きい方陣へと作られてきたこれらの魔方陣は、積み上げ、重ねることにより特異な様相を見せてくれる。右の三個のクロス・キューブのごとく、今までにも再度試みてきた。立体物は、平面作品と違って積み重ねたり、組み合わせたりすることが可能だからである。

通常、絵画や彫刻の芸術作品、または有機的な自然現象は、何らかの同じ要素の反復によって表現され、形成される。それは、近年のフ

ラクタル理論によっても証明されているところだ。

ところが、これらのMAGIC CUBEでは、基盤となっているグリッドを除けば、1・2・3・・・と連なる数字がそれぞれ僅かずつ違っていて、二つとして同じものがない。すべてが異なる多くの要素によって組み立てられた、真に稀なる造形作品だと言うことが出来る。

数字だけによるデジタルな表示でありながらも、アナログな雰囲気をかもし出し、見事な和を作る魔方陣は、個と全体とが調和したあまりにも完璧なユートピアのようだ。 ●とむら・ひろし／造形美術家





快適環境グレーチング

建物のインテリアにファッション性あふれる効果を発揮します。

床材はもちろん、間仕切り、天井、日除け、階段、バルコニー、ドアなど使い方は無限です。



株式会社 **ダイクレ**

本社 〒737 広島県呉市築地町1-24 ☎(0823)21-1331代表 Fax.(0823)25-7790
 東京支店 〒104 東京都中央区京橋3-7-8 アビタシオンビル9F ☎(03)3561-8825 Fax.(03)3561-1469
 大阪支店 〒531 大阪府大阪市北区豊崎3-20-9 三栄ビル8F ☎(06)371-5836代表 Fax.(06)373-2561
 広島支店 〒732 広島県広島市南区楠荷町4-1 住友生命ビル10F ☎(082)262-7181代表 Fax.(082)261-3562
 福岡支店 〒812 福岡県福岡市博多区博多駅前3-2-1 日本生命博多駅前ビル8F ☎(092)411-2606代表 Fax.(092)411-2870

上海からのメッセージ 「上海国際住宅会議2000」に参加して

1300万人が住む中国第二の都市上海は、現在最も盛んに開発が行われている都市のひとつだろう。僅か1年半で環状高速道路を完成させ、第二の地下鉄路線が工事中である。街の至る所で古い建物が取り壊され、高層オフィスビルや集合住宅が建設されている。私たちが初めて見た上海の街は、車の排気ガスと解体现場の塵埃によるスモッグの中に霞んでいた。そして、イルミネーションに輝く中心街は、店頭には並ぶ商品と、夜遅くまで行き交う人々のエネルギーに溢れていた。思い描いていた中国のイメージを、ここに見出すことはできなかった。

私たちは、去る1996年11月3日から4日間にわたって開催された「上海国際住宅会議2000」に出席するため上海を訪れた。この会議は、上海市人民政府と上海市建設委員会が今年1年を通じて行っている「'96上海住宅設計国際交流活動」の一貫として開かれたもので、中国国内はもとより、海外25ヶ国から約500名の研究者や建築家が参加した。

上海では今世紀末までに毎年1000万㎡の住宅建設が必要だとされている。これは、自由経済政策によって発展を続ける都市へ、農村部からの人口集中が起きているためであるが、慢性的な住宅不足は上海だけではなく、大都市に共通する社会問題になっている。ほとんどの上海市民は所属する単位から与えられた集合住宅に住んでいる。また、里弄と呼ばれる上海固有の低層高密度住宅が市内の至る所に残っていて、かつて1家族のためのメゾネットであった1ユニットに、現在は3家族4家族が集まり、1部屋に親子3人が寝起きしているといった状況も珍しくないという。平均的市民の住宅事情は決して恵まれてはいない。

このような中で、公共住宅だけでなく、デベロッパーが行う分譲型の住宅建設も盛んに行われるようになってきたが、価格が高く一般の人々には全く手が届かないため、空室ばかりが目立っている。バブル期の我が国を思わせるようで、経済活動優先型の住宅開発の弊害が早くも現れ始めているように見えた。

上海市は、居住者の側に立った、持続可能で環境共生型の住宅開発の手法を、広く国内外から提案してもらうためにこの会議を開催した。会場では、北京、上海の建築設計院、大学研究院の代表、チャールズ・コレア(インド)、オープン・ビルディング・システムの権威ジョン・ハブラーキン(オランダ)、中国での設計経験の豊かなジョン・クリケン(SOMアメリカ)をはじめとする建築家の基調講演に続き、分科会形式で様々なディスカッションが行われた。欧米の都市計画を模範として今後の上海の住宅計画に言及する中国の出席者に対して、現在の上海の開発が、欧米のスタイルと全く変わらないことへの疑問と、アジアや中国の地域性を加味することで解決の道が見つかるとはならないかという意見が、海外の参加者から多く出されたのは印象的だった。

私たちがこの会議に参加したのは、これに先立って公募された「上海国際住宅デザインコンペ96」の表彰式に出席するためでもあった。このコンペは上海の中心部から20km程離れた現在建設中の地下鉄沿線にある12ha、19ha、21haの3つの敷地に、約400人/haの高密度な集合住宅群を計画するものである。中国ではこれまで国際指名コンペはいくつか行われているが、公開の国際コンペは初めての試みだと思う。コンペの要綱はインターネットを通じて各国に伝えられた。しかし、ホームページ

'96上海住宅設計国際交流活動
主催：上海市人民政府／上海市委員会
1996年8月5日：コンペ応募登録締め切り
1996年10月10日：コンペ応募提出締め切り
1996年11月3～6日：上海国際住宅会議2000開催
コンペ審査員：C.Correa (India), J.L.Kriken, N.J.Habraken (U.S.A.), L.T.Ker (Singapore), C.Zhenyu, H.Birong, W.Liangyoung, Y.Bing, Z.Shiling(China)

を開発しても建築学会やマスコミ等に直接案内が送られなかったせいか、日本での認知度は低かったようだ。応募総数は海外から101点、中国国内から402点にのぼり、住宅問題への関心の高さが窺えた。

審査は基調講演を行った9人の建築家によって行われ、結果最優秀作品には北京精華大学建築設計研究院案が選ばれた。私たちの案も上位20点の優秀作品に入選することができた。会期中に応募作品の展示が行われたが、設計者名がなく、入賞者がどのような提案をしたか正確に知ることはできなかったが、開発によって取り壊されていく里弄を再解釈して提案した案に評価が集まったようだ(会議最終日にコンペ事務局から、後日市民に公開するというコメントがあった)。

中国政府は、住宅建設を起爆剤とした産業の振興育成を、経済政策の最重要項目に掲げている。開放政策によって身近になった中国市場には、今や建設に関わる多くの国内外の企業が参入したいと考え始めている。

一方、高密度の都市において持続可能で自然環境と共生した建築を実現していくことは、もはや国や地域を超えて目指すべき課題だといえる。

世界的に見ても、これほど膨大な数の住宅を短期間に建設しようとする例は極めて少ない。そして今、多くの人が経済効果や利便性だけを目標にした開発の限界を知っている。中国の巨大な建設市場で実現されようとしている都市や建築の姿を、世紀末のあだ花に終わらせないためにも、上海市が先駆けて公開国際コンペを実施した意味は大きいといえよう。

●上野 武・藤井正紀／建築家



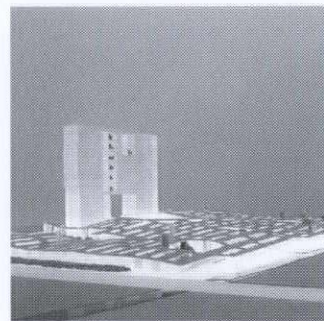
会議風景



取り壊されていく里弄



空室が目立つ分譲マンション



浮遊公園城市／上野・藤井建築研究所入選案

景色を創る?——照明デザインってなんだろう

連続13回の講座の中で、一回くらいは「照明デザイン」に焦点を絞った話を、ということで今回は気鋭のライティングデザイナーの海藤春樹氏をゲストにお招きした。

海藤氏は、演劇、舞台照明から空間、建築デザイン、そして都市計画までの幅広い分野で仕事をされている多角的なライティングデザイナーである。それぞれの仕事のなかでどのように照明を捉えているのか、また、演劇、舞台というバックグラウンドで都市照明を考えるとどのように影響しているのか、という私たちの興味から、テーマは「都市照明の演劇性、街はどこまで芸術的に表現されるか」と決定した。

照明デザイナーという同じ肩書きを持つ身でありながら、コーディネーターの面出とは仕事の内容も目指すものもかなり異なる。その差異を前提としながら、日本ではまだなじみのない「照明デザイナー」(最近ではドラマの主人公が照明デザイナーであったりするが)という職能の実体について、講座の参加者に紹介することも目的のひとつだった。

探偵レポーターによるテーマの解説は今回は行われず、海藤氏と面出の肩の凝らない対談のみで講座は進行した。

始めに、海藤氏の20年にわたる照明の仕事で80枚余りのスライドで紹介していただいた。

東京キッドブラザースなどのミュージカル、芝居、デイビッド・シルビアンや林英哲のコンサート、日比野克彦の展覧会、等のコラボレーション的なものから、店舗やホテルのインテリア、イベント・ライトアップも含めた公共建築や〈ファール立川〉での街路照明、都市照明の計画などと、その守備範囲の多様さには目を見張るものがある。この幅広い仕事の中で氏が培ってきた照明デザインの思想やセオリーとは何か。代表的なプロジェクトに文章を添えてまとめた作品集『LIGHT COMPOSE』を熟読した面出は、小さな答えを誘導するための10の質問を予め用意した。

1. 照明デザインは自己表現の手段か否か
2. 人のための照明デザインは可能か
3. 照明デザインは職業として未だ成立していない
4. 照明デザイナーは寿司屋の板前か
5. 照明デザインにはセオリーや形式が必要か
6. 都市照明・景観照明は罪悪か
7. 自然光から何が学べるか
8. 照明デザインは景色のデザインではない
9. 非日常的な時空と日常的な時空での仕事の同一性あるいは相違性は
10. 照明デザインという仕事は21世紀に輝くか

これらの質問は時間の都合で半分ほどしか答えていただけなかったが、実際のところ氏は

大上段に振りかざした思想や蘊蓄を述べる、ということが肌にあわないようで、対談はラフな雰囲気でも終始淡々と進んだ。学生を中心とした参加者の多くは、そんな語り口に共感を覚えたようだ。

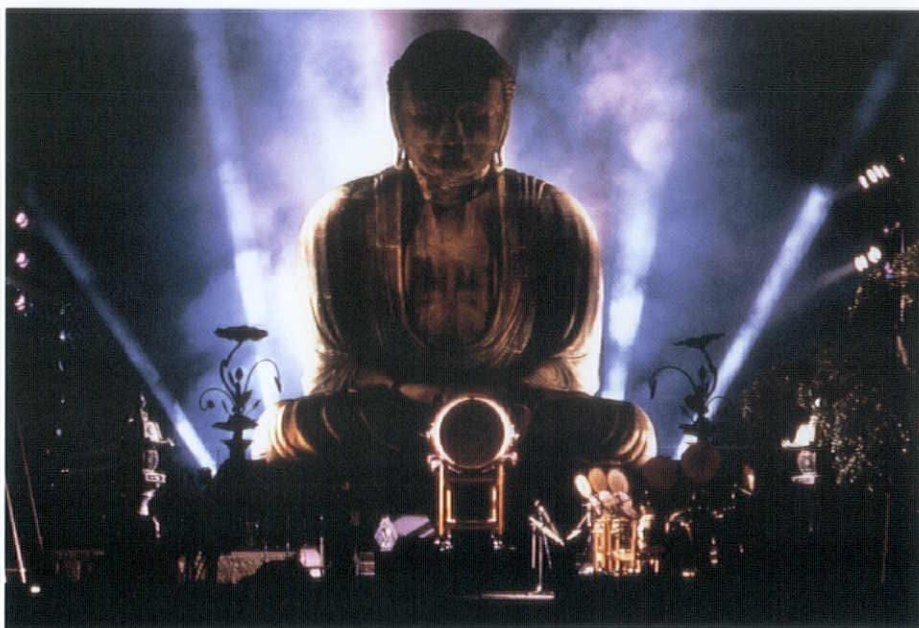
海藤氏は自らを「寿司屋照明」と名乗る。つまり寿司屋の板前のように、入ってきた客の様子を見て客が何を欲しているのかをその場で判断し、そして提案するという方法。その場の状況と人との関係の中でしか物をつくらない、「関係の中でしか成り立たない。自分をどこまでニュートラルにできるかということ。主体が自分の方にはないんです。あいつ相手によって全然違っちゃうんだよね、ってむしろ言われたい」というのが基本姿勢。また、照明のみならず、「デザインは自分の価値観を人に押しつけることになりがち。デザインとは自己表現の手段ではない。表現というのはそもそもデザインの敵ではないか」と結果的には不特定多数に向かって放たれる「デザイン」というものに常に矛盾と懐疑を感じている。例えば「街をつくることは悪いことだと言っても、街はそれでも作られるものであり、なるべく押しつけにならないものを作るようにしよう」と言うことがあります。都市計画的になりますと、単体の空間プロジェクトを表現するのは違うコミュニケーション言語が必要になります。つまり、別の次元で



ファール立川、街灯デザイン：海藤春樹 (写真 池上直哉)



横浜ポートサイド、クリスマスイルミネーション：海藤春樹 (写真 池上直哉)



古都大仏シンフォニー：海藤春樹 (写真 松尾トシ)

不特定多数の人にどう理解してもらえるかということが必要になります」と著作でも書いているように、舞台や商業空間から一步出て街の中のデザインを考える時は、どうやら必要最小限度にできるか、と海藤氏は自問自答する。

面出は常々「照明デザインとは景色を創ること」と言ってはばからないが、海藤氏は、「照明＝景色」論に対して異議を唱える。

「作られた景色というのは、観る側と観られる側との間に、必然的かつ致命的な距離があって、関係としては常に寂しくよそよそしい。街の意志に感応し、街によってデザインさせられるべきものであり、景色を描くためには、環境を作るためになされなければならない。景色はあくまでもその結果であり、人は景色という平面の中には住むことも潜むこともできない」

このコメントに対して、「それは長い間、舞台照明の世界で背景としての景色を作ることをして来たことによるもので、都市の中の景色はそれほど平面的でもなく、よそよそしくもない」と面出は反論する。その面出のデザイン思想を説明するものとして、また「演劇性」という今回のテーマに触れて、舞台照明から出発した海藤氏とは対照的に、建築照明の世界から時には演出的な照明を試みるライ

ティングプランナーズ・アソシエーツ（LPA）の仕事のスライドで紹介した。その中には音と光で環境を演出した〈新宿アイランド〉のパティオ、広場の床に光のもてなしの演出を施した臨海副都心部、渋谷という地域性から劇場都市をイメージした〈パルコ〉周辺の演出照明などがある。

若者が集う渋谷公園通りの交差点を都市ステージに見立てて、スポットライトの光を可変させるアイデアを披露し、劇場のハレの光を公共的な都市空間に伝えたい、という面出に対して海藤氏は、劇場空間は都市空間とは全く関係のない物で、演劇性を街に持ち込もうとは思わない、とする。そこでは同じ照明デザインという土俵にありながら、思想やゴールとして目指すものの姿勢の違いが端的に現れており、興味深かった。

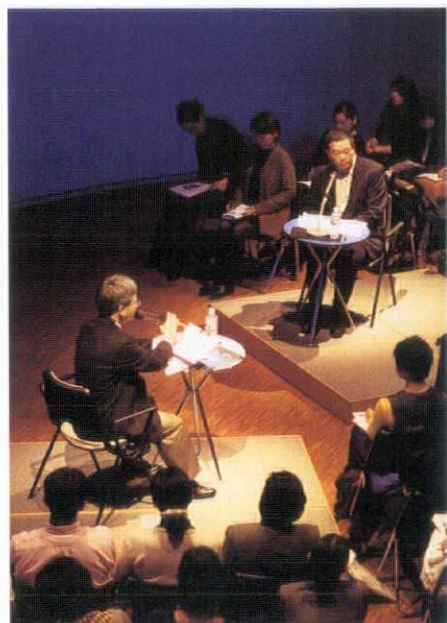
海藤氏にとって、都市の演劇空間とは「デザイン」や「都市計画」によって「演出」され得る空間ではなく、そのように「作られた景色」とは氏には実感のないよそよそしいものに感じられるらしい。キレイにつくられた街、パリのように歴史の重みの中でしつらえられてきた街には魅力を感じない、「『キレイ』であることはそんなに大切であるか、計画された空間とはただのお化粧であって、それは実感を伴わないのではないか」と疑問を投げかけ

る。そのことを「建築設計で模型をつくって都市を考えようとしたところで、その目線から見えるのはスーパーマンだけ」とも表現された。

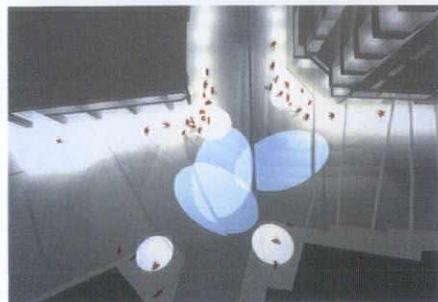
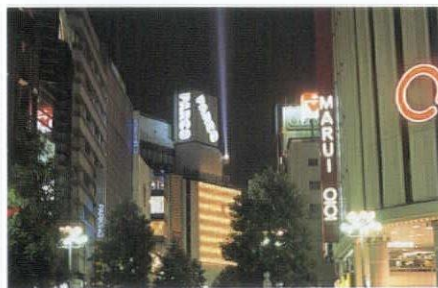
また、「照明デザインに限らず、もしかすると日本では建築デザインもインテリアデザインも何も成立していないのではないかと、デザインなんてどこにあるのかと思うこともある」と言う。氏の言葉の端々には、照明デザインという範疇を越えてプロデューサーとしての痛烈な精神を感じさせられた。

講座の締めくくりとして、照明探偵団の連続講座の意義を評価しながら、海藤氏はこのような活動を通してデザイナーを名乗る人を増やしていくことのみならず、サポーターを育てていくことの重要性を語った。そして面出は、今回の対談のように、照明デザイナーという同じ肩書きの中で生きるもの同志が、相互のスタンスや思想のズレを学んだり批判しあってゆく機会を作ることが一層大切になってくるのではないかとまとめた。

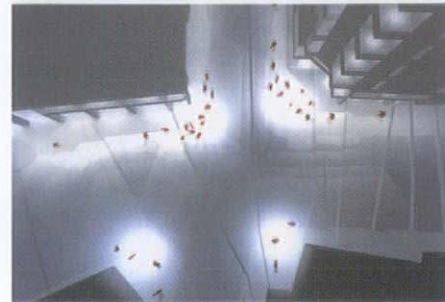
●葛西玲子／LPA



会場風景



渋谷パルコ、LPAのプロジェクト



渋谷パルコ、CGによる照明提案

繊細な色柄とソフトな質感で 空間をやさしく彩る、 ビニル床シートです。

学校や病院、公共施設などのパブリックスペースでは、よりソフトで温もりの感じられる空間づくりが求められています。こうしたトレンドにお応えし、ロンシールでは幅広い用途で活躍する汎用性の高いビニル床材として、ロンリウムナチュラルを開発。雲柄をベースに数種のチップを散りばめたソフトなデザインが、空間にやさしい表情を与えます。また重歩行にも耐える耐久性も備えながら、価格を抑えることによってコストパフォーマンスも追求したビニル床シートです。



ビニル床シート

ロンリウム ナチュラル

用途

学校・幼稚園等文教施設、病院・養護老人ホーム等 医療福祉施設、庁舎等公共施設の一般室・廊下・通路・階段、レストラン・喫茶店・デパート・ショッピングセンター・オフィスなどのロビー・エレベーターホール・湯沸室など。

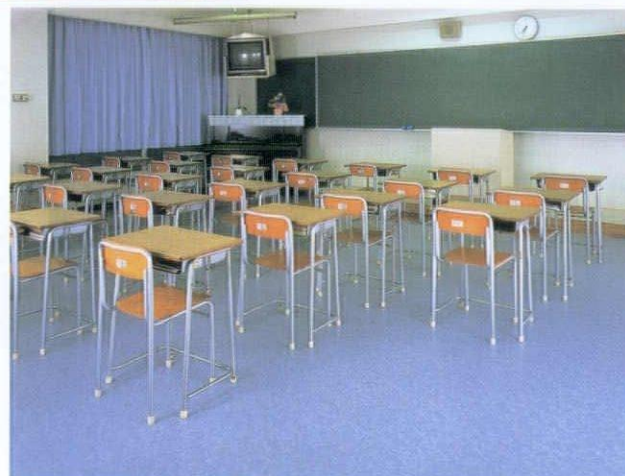
規格

- 12色
 - 2.0mm (2.5mm) 厚さ×1820mm 幅×9m長さ
- ※受注生産品



特長

- 雲柄に加え、微細な繊維状・粒状など数種のチップが深みのあるデザインと温もりを醸しだしています。また、ビーチを思わせるソフトでやさしい質感を備えています。カラーは12色。さまざまな空間イメージにお応えできる多彩なラインアップです。
- 歩行時のショックをやわらげる適度な柔軟性・弾力性、さらには適度な防滑性を備えているため、快適な歩行感が得られます。
- 継ぎ目はスーパーシームシーラーによる液溶着ですから接合部が目立たず、一枚フロアのような美しい仕上がりで、かつ十分な強度を実現しています。また、下地によくなじむうえにカッティングも軽く、細部の施工が容易です。
- 重歩行に耐える、すぐれた耐久性を備えていますから、仕上がり時の美しさを保ちます。
- 酸、アルカリ、アルコール類、塩類などへの耐薬品性にすぐれています。
- 一体化した床面をつくることのできるため、汚れが取れやすく日常のメンテナンスが容易です。



ときめきの生活空間をサイエンスする

ロンシール工業株式会社

●本社 千130 東京都墨田区緑4-15-3 ☎03(5600)1821
●大阪支店 千532 大阪市淀川区西中島3-9-13 大北ビル ☎06(304)2700

●営業所

札幌 ☎011(531)2602	大宮 ☎048(664)1511	静岡 ☎054(251)3712	広島 ☎082(211)2700
青森 ☎0177(77)1155	土浦 ☎0298(32)8813	名古屋 ☎052(935)7063	高松 ☎0878(31)4177
仙台 ☎022(265)4771	千葉 ☎043(246)5851	金沢 ☎0762(92)1161	福岡 ☎092(472)5857
新潟 ☎025(243)3791	横浜 ☎045(662)7370	岡山 ☎086(231)6011	鹿児島 ☎099(258)6571

デザイン環境の変化は、設計に携わる者にとって大きな関心事である。電子メディアを用いた設計は、紙など既存のメディアで行う従来の設計方法を変える可能性があると言われながら普及が遅かった。しかし、この1年で本格的なデジタル・スタジオが随所でスタートした。今回は、その先陣をきったコロンビア大学の例を振り返ってみる。

CYBERTALK 連載：サイバートーク
電子メディアのフロンティア

vol. 1

創造環境としてのデジタル・スタジオ コロンビア大学での試み

Presented by

渡邊朗子

日本女子大学家政学部住居学科卒業後、コロンビア大学大学院建築学科で建築や都市デザインについて学ぶ。現在、慶應義塾大学環境情報学部助手として研究するかわら、実際に都市デザインや住宅設計等も行う。

サイバーROPPONGIの銀河系

電子空間に漂流する3次元情報は、どのように人間の創造過程を刺激し、どのようなヒューマニティを発見させるのか。デジタルメディアやネットワーク・コンピューティングが新しいデザインの創造的環境になりえるのではないかと考え始めたのは、3年程前からである。

デジタルメディアとデザインの新しい動きを求めて海外を彷徨っているうちに、風のうわさを聞きつけて母校コロンビア大学に舞い戻ることになったのは、なんと皮肉な偶然であった。1996年春、私はグレッグ・リンとデジタルスタジオを教えることになった。Tokyo Experimental studio*だ。

スタジオの学生は、フランス人、アメリカ人、台湾人ら、計5カ国籍、11名、と国際的な構成。このスタジオは、意識的に、都市の変動する一時的な力を可視化させ、そこからデザインを行うことを目的としたため、全てのデザインをコンピュータで行うペーパーレス・スタジオで行った。コンピュータは、アニメーションのソフトウェアを使用することで動きの表現を可能にする。動きの表現を使って、都市をインターアクティブで有機的なフィールドとしてデザインしたかった。絶えず活発に変動する力やフィールドといった、都市のフローなパターンから引き起こる組織、そのものが有機的な都市のタイポロジーである、と考えたからだ。

課題は、東京都市部の「六本木六丁目再開発プロジェクト」である。このプロジェクトは、住宅が密集している住居区域に、ホテル、高層住宅、オフィスなどの複合施設を建設する実際の都市再開発計画である。スタジオでは、物理的にサイトを訪ねる代わりに、ネットワークのウェブ上に公開しているサイトにアクセスして、そこから現在計画されている建設計画に関する具体的な情報を拾うことから始まった。サイトの欠席をうめる情報として、計画地の図面、人口密度や交通機関に関する統計データ、びあやTokyo Walkerなど街の情報誌、地勢図のはいった敷地の3次元モデルデータなどをスタジオに提供した。複数のメディアや情報を通して、仮想のRoppongiがサイバースペースの銀河系に有機的な組織として立ち上がっていった。

ネットワーク・コラボレーションの失敗

ある程度、サイトに関する考察が進んだ段階で、2ギガバイトの共有のサイバースペースを構築した。サイトが巨大なアーバンスケールであることから、コラボレーションでひとつのサイトモデルに有機的なアーバンエコロジーを作成する計画でいた。

つまり、各自別々のコンピュータ上でデザインは行うとしても、全体のサイトモデルをあらかじめ共有のサイバースペースに構築しておき、ネットワーク上で3次元グラフィックスを取り扱う標準であるVRMLを利用し、別々のコンピュータから同一のサイバースペースにアクセスして、ひとつのプロジェクトを仕上げていく計画でいたのだ。しかし、実際には、ネットワーク・コンピューティングによる協同デザインは、2人の学生によってのみ実行されただけで、大半の学生たちは、協同デザインに参加しなかった。サイバースペースでのコラボレーションは実現されなかったのだ。これはいったいどうわけなのだろう。

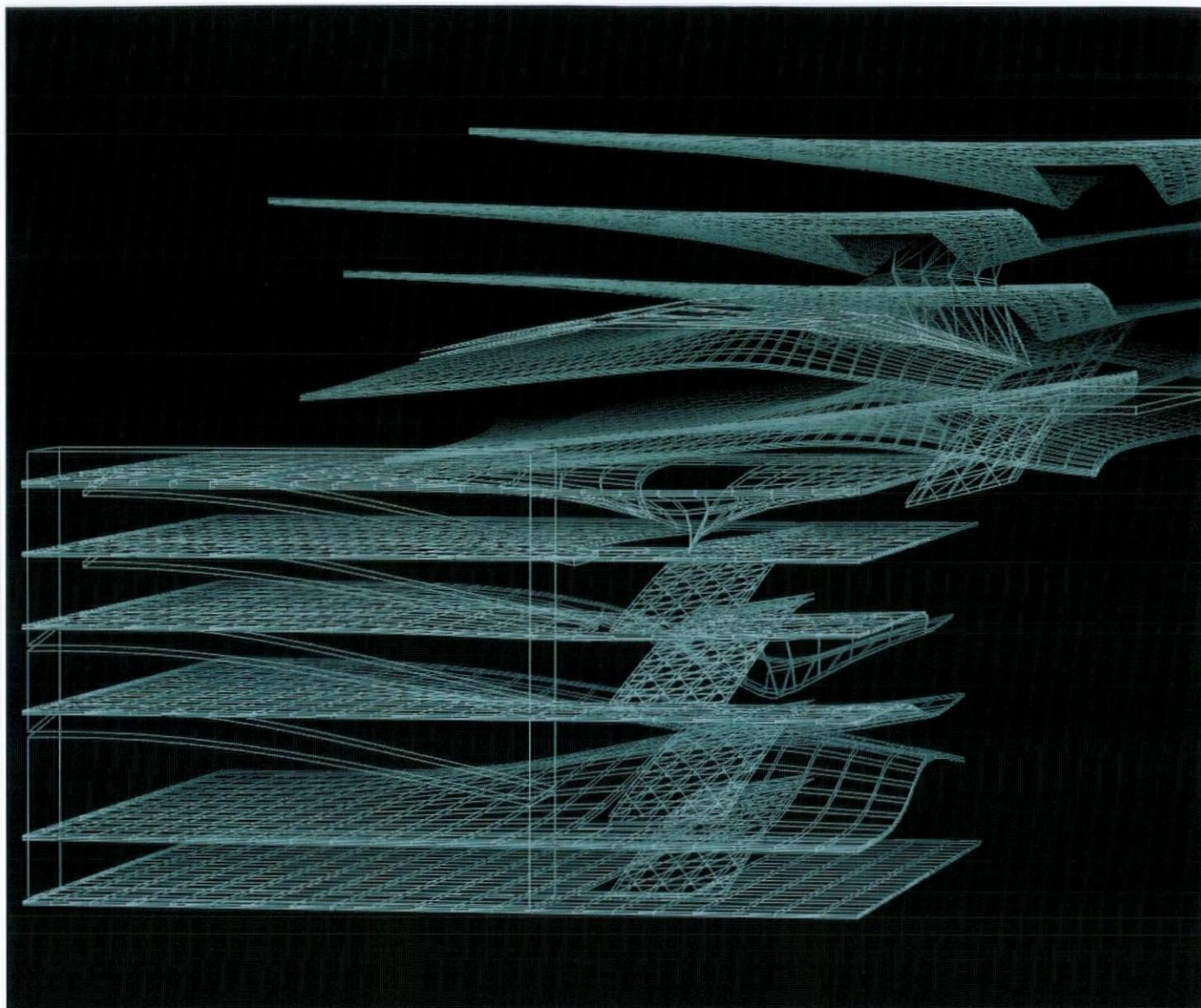
ひとつの理由は、スタジオの学生たちがコンピュータやネットワークに関する情報リテラシーをほとんどもっていなかったことにある。デジタル・スタジオをデザイン環境と考える以上、最低限のコンピュータ知識と情報リテラシーが必要になってくる。にもかかわらず、大学では、全てのコンピュータやネットワークの管理、運営をコンピュータ・サイエンス出身のルートと呼ばれる職員に任せている。学生たちは、ソフトウェアやアプリケーションの使い方は習得しても、デザインに必要な情報処理やネットワークの構造は一切学ばないままデジタル・スタジオでの作業にとりかかることになる。情報技術を新しいデザイン環境を構築する技術と考え、デジタル・スタジオで本格的なデザインを行うのであれば、情報技術の基本的な知識を習得する「デザイン情報処理」のような授業をカリキュラムに取り入れる必要があるだろう。

ネットワークでコラボレーションが実現できなかったもうひとつの理由に、デザイン環境のインターフェース問題があげられる。コンピュータ上でデザインするとき、視覚的な情報は、モニターに映し出される情報に限られてしまい、コラボレーションの連携が図りにくい。大きなスクリーンを用いて情報共有とグループの求心性を図ることが可能か、コラボレーションがしやすいデジタルデザイン環境とはいったい何かなど、基本的な環境構造を考えなくてはならない。

3つめの理由は、デジタル・スタジオという新しい創造環境が、どん

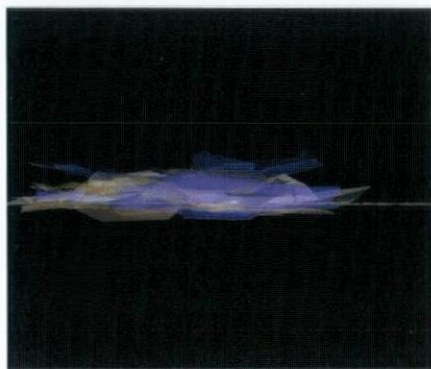
*[Tokyo Experimental Studio] 大林組からの助成による特別スタジオ。工藤国雄氏、グレッグ・リン氏、エド・ケラー氏、渡邊朗子によって指導。途中林島和世氏がゲスト・クリティックに訪れる。

スタジオでは、インターネット上の六本木六丁目再開発プロジェクトのホームページ、「サイバー66」(<http://www.cyber66.or.jp>)からプロジェクトの敷地と計画のプログラムの情報を収集した。



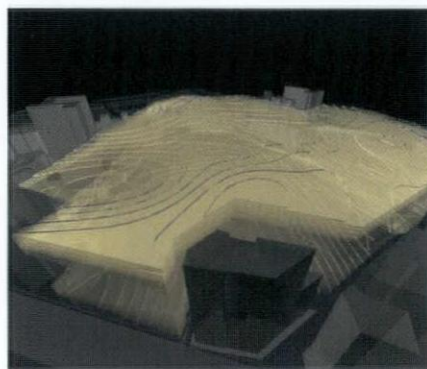
ピーター・コーディ&バイヘン・ツァイ 最終案 インタラクティブで柔軟な構造をもつ情報ネットワークを都市の新しいインフラストラクチャととらえ、その構造をモデル化しようと試みた作品。情報ネットワークがもたらす時間的なずれ

や空間的な位相のずれの連結を、メッシュモデルをなめらかに変形させることで、表現している。この作品は、スタジオで唯一コラボレーションに成功したチームの作品で、抽象的で洗練された造形は、共同作業の成果であろう。



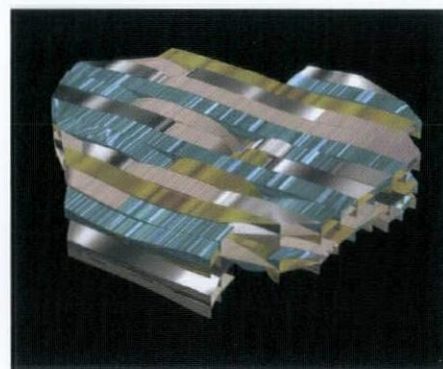
アマル・エル・ニ 第1フェーズ この作品は、ホテル、住居、オフィスといったプロジェクトの機能のプログラムを、柔軟な皮膜のようなものに置き換え、それらを有機的に重ね合わせることからデザインが始まった。

実際の計画では、機能によってビルディング・タイプが分かれている。それに対するアンチテーゼとして、多様な都市の機能が、折り重なって複合的に存在する計画を目指した。

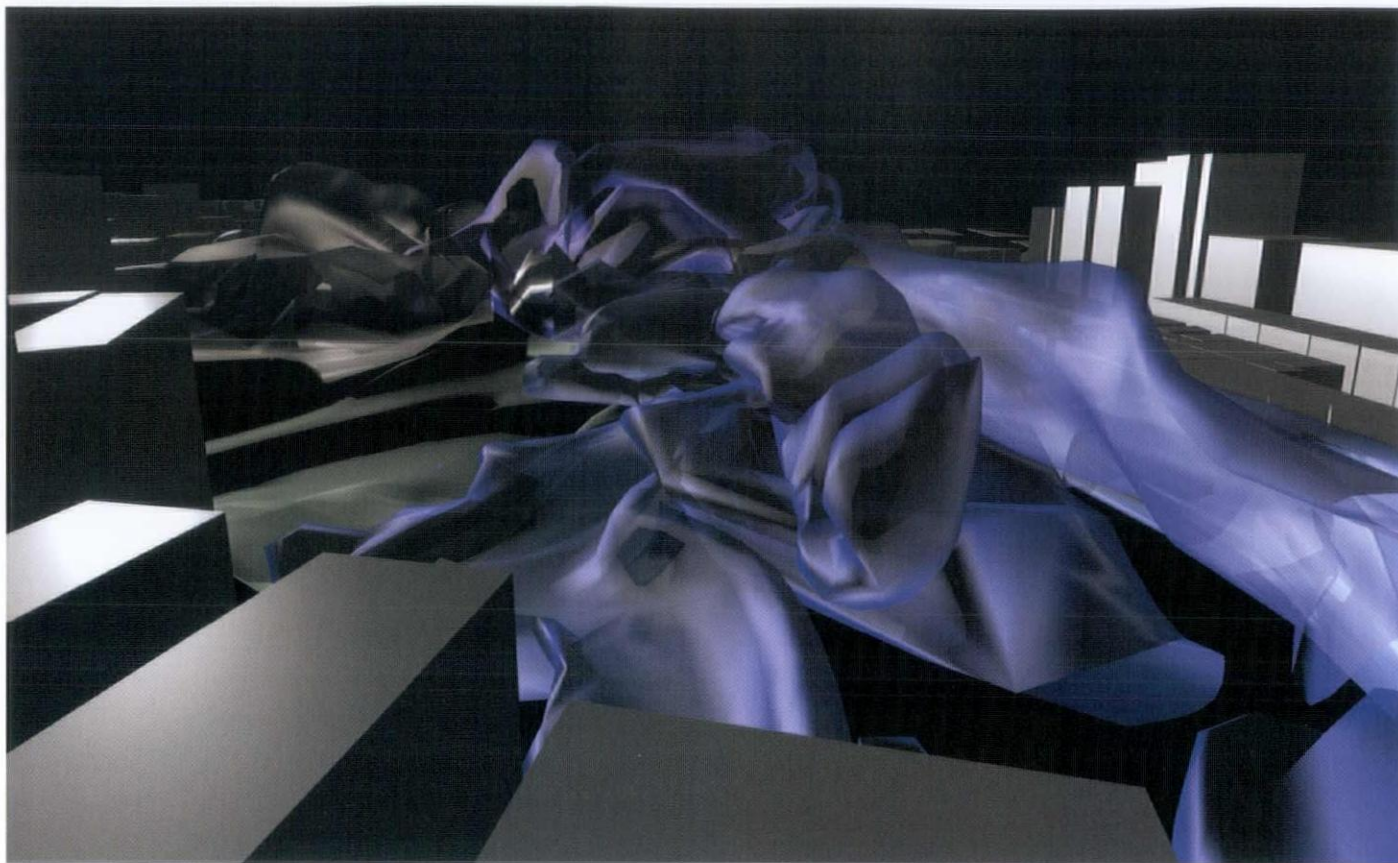


第2フェーズ 前のコンセプチュアルなモデルをもう少し建築的に解釈しようと、ところどころ穴の開いた層が幾つも重なったモデルが作成された。

この学生は、このモデルを作成した直後、触れることのできないサイバースペースの中のモデルを実際の手で確認したくて、コンピュータの3次元データからそのまま実物の模型を立ち上げる、ソリッド・システムを使って模型を作成した。



最終案 最終的に提出されたモデル。初めに考えた機能分離ではなく機能融合の思想が貫かれ、かつ建築的なボリューム感が加わっている。しかし、最初のモデルで表現されていた、軽やかな有機性は消えている。最初にペールのような皮膜で試みた機能の重ね合わせを、一軸方向のボリュームの重ね合わせで構築したために、織り込むような都市のダイナミズムを表現するには至っていない。



チャット・ロバーソン 最終案 この作品は、都市の密度やムーブメントから形態を生じさせる試みを行っている。この学生は、初め「ソフトイメージ」の中の「パーティクル」というコンピュータ・アプリケーションを使って、人や乗り物の動きを小さな粒子(=パーティクル)に風力のような力を設定して表現した。そこか

らパーティクルの流動的な運動の外郭を抽出し、それをもとに、「エイリアス」という流線型のモデリングが得意のソフトウェアを使って、垂直方向にも水平方向にも有機的なモデルを構築した。

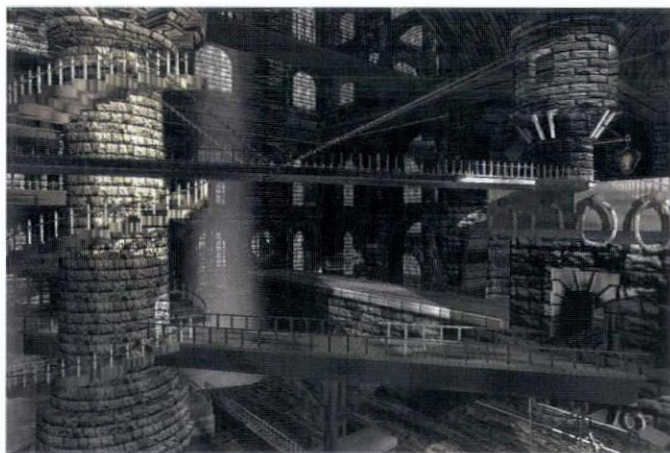


7F
Paperless Studio
6F
Digital Output Center,
Combined Studio
2F
Entrance
B1F
Multi-media Theater,
Indy Room, Mac Room

エブリーホールの7階のロフトがペーパーレス・スタジオ。6階には、デジタル・アウトプット・センターが学生によって運営されており、デジタル・スタジオで作成したイメージをカラーでA1などの大きいサイズにプリント・アウトすることができる。また、高性能コンピュータと既存の製図版が共存するコンバインド・スタジオもこの階にある。

スタジオの講評は、地下1階の普通の講義室にプロジェクターを設置しただけの、マルチメディア・シアターで行われる。学生たちは、ネットワークに接続されたコンピュータから自分のデータを読み出し、大画面に作成したイメージやビデオを映し出して、教授陣や招待批評家の前でプロジェクトのプレゼンテーションを行う。

マッキントッシュやSGIのINDYが並ぶCADの演習用の部屋は、この地下1階に位置している。ルート(学科内のすべてのネットワークとコンピュータの管理者)が、ここに常時いることから、情報技術の先端知識は、この地下階に集まる傾向にある。デザイン・スタジオがある6、7階からは、かなり離れており、デザイン作業の現場にコンピュータや情報技術の知識が伝達されにくい。実際、学内では教師陣も学生もデザイン系と情報技術系に分かれており、その間のコミュニケーションはあまり行われていない。



G.B.ピラネージ「幻想牢獄」の3次元モデル



レベルス・ウッズ「フリーゾーン」の3次元モデル

CADのムーア教授らが進めているコラボレーションによるマルチメディア・プロジェクト。実は、こちらの方が、デザイン・スタジオより高性能なコンピュータを使っている。ピラネージの「幻想牢獄」やレベルス・ウッズの「フリーゾーン」のスケッチをもとにサイバー・スペースに3次元モデルを構築している。

それらの作品は、現物(オリジナル)よりも妙に先鋭な光を放って、生き生きとした3次元のシミュレーション空間として表現されている。

ピラネージやウッズとの知的なコミュニケーションでもあり、とても面白い。

なデザインパラダイムを可能にするかがまったく未知数であることだ。情報技術システム環境という新しい技術を用いたデザイン環境でデザインしているにもかかわらず、紙や模型でデザインしていたときと何ら変わらないパラダイムでデザインしている。情報技術を十分に理解し、その環境が引き出すデザインパラダイムとは何かを見つけたい。

サイバースペースのアーツ&クラフト

しかし、問題ばかりに直面したわけではなく、新しく発見したこともあった。それは、工業技術のなかにクラフトマンシップが存在したように、情報技術がうみだすサイバースペースにもクラフトマンシップやアーキテクチャが存在することだ。

アーツ&クラフト運動が、工業技術という時代の技術に新しいデザインの華を咲かせたように、今後は、情報技術が切り開くデジタル・メディアフィールドで新しいかたちのアーツ&クラフトが華々しく展開することになるだろう。それはおそらく、3Dグラフィックスであり、アニメーションのようなムービングイメージに違いない。事実、デジタルスタジオで仕上がったコロンビア大学建築学科の卒業生のうち約20%近くは、メディア業界にはいって、腕のいいデザイナーとして活躍している。中には、ハリウッドの映画制作会社に勤めて、バットマンの飛ぶ未来的デザインのメトロポリタンやスティーブン・スピルバークのファンタジックな世界をつくりたりしている。これも洗練されたサイバークラフトマンの仕事といえる。

映像の発見から1世紀近く経て、世界はヴァーチャル・リアリティという新しいメディア技術を手入れし、サイバースペースというこれまでのスペースとは異なる空間を獲得した。3D感覚を使って思考、研究環境を利用してメッセージを伝えることのできるインタラクティブなメディアが、ヴァーチャル・リアリティだ。今後このヴァーチャル・リアリティが、エンターテインメントだけでなく、教育や人文科学など今までヴァーチャル・リアリティとは無縁とされてきた分野での研究展開が期待されている。

そのひとつの例が、デジタル・スタジオである。デジタルスタジオは、今後ますます情報処理能力のスピードを増し、質の高い3Dのヴァーチャルリアリティを可能にしていくだろう。ヴァーチャル・リアリティは、これまで2次元の紙の上だけでデザインしていたときとは全く異なるデザイン思考を可能にする。例えば、ウォークスルーに象徴されるような時間軸の入った表現は、動きの体験からデザインを可能にするし、自由な視点の選択は、大人から子供さらには動物まで、多様な視点や角度から空間や環境のリアリティをデザインできるようにする。これらは、空間や環境をデザインする側からでなく、使用する側からのデザインを許容する。

1970年代にすでに、都市や建築をダイナミックで複合的なシステムのエコロジー・モデルとしてとらえようとする人達がいた。ジェーン・ジャコブスやクリストファー・アレキサンダーたちである。彼等は、当時注目され始めていた情報論やサイバネティクス論に新しい時代の人文主義を感じていた。しかしながら、サイバネティクス理論は適切な手法と技術を獲得できなかった。写真や紙上のパーススケッチ、バルサ模型では、同時多発的でインタラクティブな都市理論を翻訳することができなかった。当時のコンピュータや通信技術は、特殊なもので、操作も難しく専門家しか扱うことができなかったのだ。デジタル・スタジオの到来で、デザイナーはようやく70年代に出てきたサイバネティクス理論に答え得るようなデザイン環境を手に入れることができたといえる。

デジタル・スタジオは、ハリウッド映画の魅力的な街から、現実の平

穏な街角のデザインまでを、同じ環境でデザインできるようにしてしまふ。映画の中の街は、サイバースペースのなかで完結するだけだが、現実の街角は、サイバースペースを経由しても、リアルな世界に様相を表出してくる。その違いはあるとしても、サイバースペースが創造的環境の一部であることには変わりはない。何度もデザインをシミュレーションして、デザイン思考のトライ・アンド・エラーを繰り返すことで、デザインの洗練や適正化を図れるのが、デジタル・スタジオのメリットだ。

創造環境をもったアーキテクト

学科長のバーナード・チュミは、デジタルスタジオの導入を、どのように考えているのだろうか。

チュミは、「建築家の役割の変化は、建築家が建設の技術にかかわらなくなった代わりに、建築家は技術の構築にかかわるようになるのだ。」と、新しい建築家像について語っている。

歴史的に見てみると、欧米の建築家の職能は、細分化しつづけてきた。初めの分離は、1670年にルイ14世の命により建築学校が設立されたとき。建築家は、建築を建設現場ではなく、学校で学ぶようになった。建築の実務と理論の分離だ。2度目は、建設産業と建築家の分離。建築家は、建設技術を現場管理しなくなった。3度目の分離は、実施図面を描く建築家と発想や理論を綴る建築家の分離。理論派建築家はもはや建築を建てず、絵を描き、文章を書く。

チュミは、「これからの建築家は、単なる建設技術の枠組みを超えて広い意味での技術を再編しながら、建築的な空間で繰り広げられる行為、経験、プログラムや事象から新しい時代にふさわしい建築や都市生活をデザインしていかなければならない」と言っている。チュミが、情報技術を建設技術と並んで建築家が取り組むべき技術として考えていることに敬意を表したい。

しかし、チュミはデジタル・スタジオを紙やえんぴつと同じデザインの道具として考えている。私は、デジタル・スタジオは、紙やえんぴつがおいてある環境と同じ、創造環境と考えたい。デジタル・スタジオは、もはや決まったデザインを描く道具ではなく、デザインの本質を転換させる知的な環境なのだ。

この新しく魅力的な創造環境が、どのようにデザインの地平を切り開いていくのか、しばらく目が離せないでいる。

NEXT NETWORK メタ東京プロジェクト Presented by 田島則行

ソフトウェアとハードウェアという言葉は、そもそもコンピュータにおけるプログラムと機器を分けるものとして使われ始めたものだという。今回レポートされたコロンビア大学で行われたTokyo Experimental Studioは、コンピュータならではの新しい視点がよく現れていて、興味深い。つまり、見えないインフラストラクチャや情報といった、都市の「ソフトウェア」に着目してそこから、都市というハードウェアを考えてゆく。これは、当たり前なことだけど、あまり建築界では主題になることがなかった。このレポートを、特に都市のハードウェアのことばかり(形態・景観論のこと)を考えている昨今の建築家にこそ読んで欲しい(ソフトがなければハードは無用の長物!)

今回のサバートークでは、インターネット上で行われている「メタ東京」エキジビションの紹介を通して、物理世界の都市が、下層空間上の都市とどのような関係を持つのかを考えてみたい。

連載: CYBER TALKの

プレ・トーク

連載開始を機に集まっていたいたプレゼンターの語り逃げ

「建築と都市にまつわるこの頃の電子メディアについて思うこと」

座談会形式 於: ヒルズ・アカデミー

Interface	建築設計におけるペーパー上での思考とディスプレイ上での思考の違い		インターフェイスと身体性
Environment	ヴァーチャル・リアリティ環境	ヴァーチャル・リアリティとフィジカル・ワールドの共存	建築家の職能とクライアント
Network	電子メディアとネットワークの普及	地方自治体のホームページ	ネットワークがつくる都市

1996年ほど電子メディアのネットワークが成長した年はないだろう。電子メディア環境が整うに従って、そこでのコンテンツに関心が注がれる。コンピュータで何ができるのか。そこで本誌では日々そこかしこで立ち上げられている、電子メディア上での新たな試みを今月からレポートする。毎月1人のプレゼンターが居けるプロジェクトのひとつひとつが、この頃の電子メディアの動向を語る。

各月で紹介する電子メディアのフロンティアの3つのラインナップ

Interface Line:

人とコンピュータのインターフェイス。身体と認識の問題

Environment Line:

ヴァーチャルな環境・スペースとフィジカルな環境・スペースにまつわる問題

Network Line:

ネットワークと都市の問題。

渡邊朗子

(慶應義塾大学環境情報学部助手)

グレッグ・リンが言っていました。「建築家はもともとサイバースペースのなかで思考していたようなものだ。3次元のイメージを頭の中で動かして、それを図面や模型にアウトプットして人に表現していた。だから、3次元シミュレーションには慣れているんです」

ここ1-2年の学生の傾向を見ると、最初の世代はマルチメディアや映像に長けていて、次の世代はネットワーク、今はCGやVRML等の3次元ものに飛びつくと言ったような、その時代の電子メディアの潮流を反映していると思います。

コンピュータの環境を立上げるのはお金がかかりますけど、他の方法での宣伝費を考えれば安いんですよ。

でも技術が追いつけば、誰かが言うように、そのうちサイバースペースに暮らすようになるのでしょうか。

これからはネットワーク社会だ、都市の営みが変わるんだと言っても、コミュニケーションがネットワークの中だけになったり、その逆になったりすることは無いと思います。相互に連携し合って、新しい生活環境が生成されるでしょう。

「豪華さ」「ステータス」が、クライアントに快感を与える大きな要素になっていましたが、「コミュニケーションのし易さ」もクライアントを満足させる要因になるでしょう。

石原弘明 (建築家)

自分の空間体験を元にそれを2次元に置き換えるプロセスですね、建築設計って。そういうプロセスを無くしたときに何が起きるか、興味があります。

デジタル・キャッシュとクレジット・カードはどう違うんですか。

デジタル・キャッシュは、本人を証明するカードも、サインも要らないというところが、クレジットカードと違うところです。暗証番号だけの決済では、安全面で不完全ですけど。

石原4Ee: クライアントにデザインの裁量権がわたっても、発見的方法でクライアントをサポートできる力量のある建築家は求められ続ける。

建築家が自分の空間を提案しにくくなるのでしょうか。

地方自治体はけっこうどこもホームページをつくっているんですね。ホームページをつくって紹介するから地元でもっといい来つくれ、とか。何も無いところから、何か立上げようとするときのひとつの刺激になっているようです。

ネットワークは賢者が比較的からないというのが特徴です。50%のボランティア団体が、50万円程度の年間予算でやりくりしているのですが、その予算でどうやって行動と繋がって行くかというところにネットワークの真価の可視性がある。

岡崎泰之

(慶應義塾大学大学院政策・メディア科1年)

コンピュータの仕事は建築設計に比べると、自分の考えがハツと結果になるところが好きです。

建築家は、ナビゲーターになるのかも知れない。そのナビゲーターの力量は、さもクライアントが自分でうまくデザインしたようにすることにあるでしょう。

ヴァーチャル・リアリティを使うと、目に見えないものをさえも可視化できる。埃、光、風など五感で感じるものを数値化して、ヴァーチャル・リアリティの中に浮かび上がらせることができる。それを見たクライアントが、ここは暑いんだとか、ここは音が聞こえて来るんだ、それなら壁をもう少し厚くしようとか、ここに窓を付けようとかいう決め方ができる。

クライアント主義の設計は、建築家の職能の意義と魅力も従来とは違うんですよ。たとえば「サティスファクション120%」がウリになるような徹底したサービス業だったりして。

田島則行 (建築家)

ホームページに自分の文章が載って言うんで、それはすごいと思って見ていたら、自分のワープロ画面を見ているようで何だかがっかりしました。

建築設計ができる人は、頭の中で空間を3次元で理解する能力に長けているからなんだろうと思います。コンピュータの能力が上がってきて、思考とシンクロして3Dでいじれる。このことに意味があります。

三角定規や平行定規が、建築家の考えを限定しているのと同様、アプリケーションやインターフェイスそのものが、別の限定を生み出すかも知れない。

集まれるものなら集まって打ち合わせしたい方が多いんじゃない?

ネット上で議論する機会いっつもどこでもアクセスできるので、コミュニケーションのチャンスを増やせるし、人前で意見を言うのが下手な人も有効な発言ができる。

人の交流、動きをコントロールするインターネットの仕組みを考える人は、本当の建築家よりもっと建築家なんじゃないだろうか。

小林敦 (デザイナー)

仕事でプランからドローイングまで全部マックでやらないかならないことがあって、そのときはじめて手作業と全く違った思考のプロセスが見えてきました。

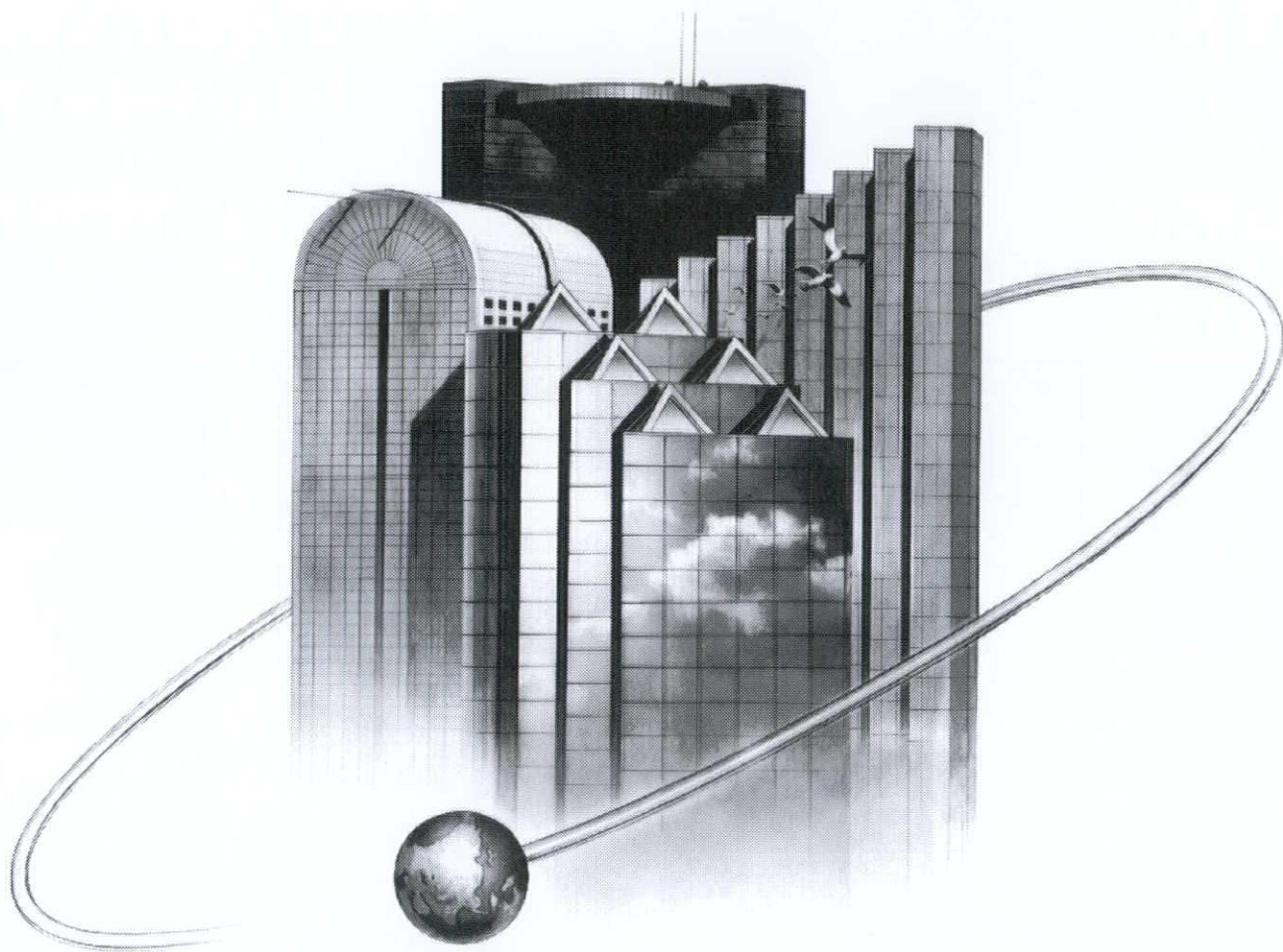
自分でCADを使って感じることはやはり、平立断面図の感覚がなくなることでしよう。3つのファクターがあったわけです。それが消えて、1つになった。

実用的な建築プランニングのアプリケーション・ソフトができた時、そのプログラミングをした人が建築家と呼ばれて良いんじゃないだろうか。

シミュレーション・メディアといわれた電脳やテレビが既に日常のツールとなったのと同じ状況に、ネットワークやヴァーチャル・リアリティもなりつつあるのではないかと。

作業を続けて行く中で、徐々にツールとしてのコンピュータに対してよりも、それと対峙している私、つまり人間の感覚の変化に、より興味の対象が移ってきた。メディアによって空間の認知がどう変容してゆくか、ということと、それによって空間記述の方法もまた、何か変化があるのではないかと。これは、大袈裟に言えば初めてパースペクティブを手にした人間と同じ、といったような。

快適創造



人と自然と機能が調和した理想の快適環境を。

人と自然、そして機能が調和した新しい快適環境を創造する。

それが三機工業のめざす総合エンジニアリングです。

都市、コミュニティ、産業施設…人を取りまくさまざまな環境について考え、

その理想を追いつづけている三機工業は、

いま、地球環境という視点にたって、すばらしい未来にむけての新しい環境のかたちを提案しています。



三機工業株式会社

〒100 東京都千代田区有楽町1-4-1 TEL03 (3502) 6111

「アンドロジナスはメディチ家の夢をみるか」

第1回フィレンツェ・ビエンナーレ'96 Il Tempo e la Mode / 「時代とモード」が9月21日から12月15日まで開催された。お馴染みのヴェネチア・ビエンナーレやミラノ・トリエンナーレと趣を異にしてテーマがファッションであり、また今回が初回ということもあって、現地に足を運ぶまでその全貌が見えにくかった。

この企画全体のアート・ディレクションは、主催団体の代表者でもあるルイジ・セッテンブリーニ(元ニューヨークの辣腕広告代理店経営者)はじめジェルマーノ・チェラント(グッゲンハイム美術館キュレーター)そしてイングリット・シー(元インタビュー誌編集長)が手がけている。招待参加者は、第一線で活躍する総勢75人のコンテンポラリー・アーティスト、ファッション・デザイナー、フォトグラファー、ミュージシャン。幾人かの哲学者、社会学者、映画監督、俳優(言説でのマニフェステーション)、そしてイソザキ、ナタリーニ、ガエ・アウレンティら建築家である。舞台は皆が目を潤めうっとりと言音する古都「フィレンツェ」(一部会場はプラト)。中世からの活発な交易そしてルネッサンス発祥を筆頭に歴史と文化遺産をそのまま封じ込めた丸ごと博物館のような美しく停滞した街。その器の中に現代をヴィヴィッドに生き体現するクリエイター達のエネルギーを注入し、ジャンルを超えて広がる彼らの内宇宙を接近遭遇させて起爆・融合を図ったものだ。

クリエイター達に用意されたのは大きく7つの展覧会とプラトでのワークショップを含むイベントであり、そのうち以下の3つ(4つのワンマンショー以外)が各々共通のコンセプトで括られている。フィレンツェ中に散りばめられたこれら全ての展覧会を訪れるには最低2週間は必要な規模だ。

1. Arte/Moda: アートとファッション

丘の上のペルペデー要塞では今世紀の先駆的なアーティストの系譜——未来派、ロシア構成主義、シュルレアリズム、ダダから始まり60-70年代のポップ、そしてボイスそしてヤン・ファープルまで——の多彩な表現の中からモードとの接点を軸に歴史を辿るツアー構成の館内展示。屋外の晴れやかな秋空の下、フィレンツェの街を望む巨大なテラスには、

絵はがきの定番の絶景ポイントをバックにイソザキのデザインした個々に異なる色と明快な形の殻を持つ7つのパビリオンが並ぶ。それらはアーティストとファッションデザイナーの7つの出会い(コラボレーションの組み合わせはG. Versace+R. Lichtenstein、H. Lang+J. Holzer、A. Alaia+J. Schnabel、J. Sander+M. Merz、M. Prada+D. Hirst、R. Kawakubo+O. Herring、K. Lagerfeld+T. Cragg)を内包する。時に程々の挑発、時に祝福をもって、その空間の佇まいはあくまでも傍らに静かに同時に毅然と立つTestimonie(証人)のごとく。そして来訪者もまたその場の目撃者のひとりとなるわけだ。

2. New Persona/ New Universe: 新たな人格と新宇宙観

19世紀の旧レオポルダ駅舎(巨大な倉庫の様なスペース)にはデニス・サンタキアーラによる身体内を連想させるオーガニックな形状(常時送風により呼吸するように波打つ)の膜で覆われた空間が出現し、その伸び縮みするような内腔では各分野のアーティストの手になる30ほどのインスタレーションのラビリンスが途切れなく展開される。このテーマは最近のハッブル宇宙望遠鏡による新銀河群団の発見のニュースに触発されたもので、マルチメディアの浸透により破壊的に変貌する旧知の表現の世界と重ね合わせられる。また非常にUp to dateな問題、男性性・女性性の混成と解放(ジェンダーにもつながる)というテー

Biennale di Firenze: "Time and Fashion"
期間: 1996年9月21日~12月15日

マをフィジカルに強く印象づけたのはJ&D、Chapman、A. MaQueen、C. Sherman、K. SmithあるいはD. Bowieらのアーティストであり(別会場のB. Webereも然り)、この時代の共通の視線は、既に芸術を美術館で観るというより、そのまま現実の外界へとすんなりシフトして行くものであると再確認させられる。

3. Visitors: 訪問者

こちらはウフィツィ、アカデミア、ヴェッキオ宮など主要な18の美術館・博物館と先端ファッションのインスタレーションの融合(またはミスマッチ)という趣向。観光名所を訪ねた旅行者は想いもよらない場面に立ち会わされ、デザイン関係者も異界を垣間みる仕掛けだ。

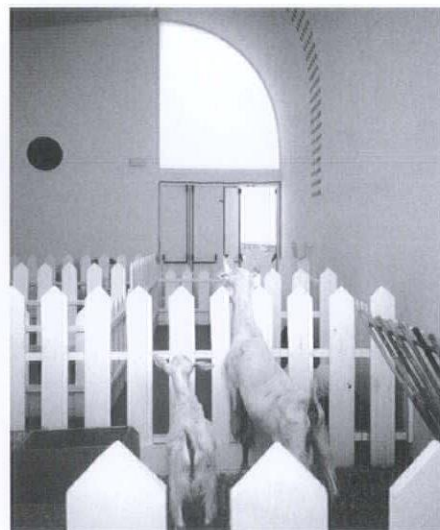
G.P. Gaultierとスパーコラ博物館(中世の解剖学/芸術的人体蠟模型で有名、ここは数年前までフィレンツェを震え上がらせた切り裂き狼奇殺人魔が通ったともいわれる)はこれ以上の組み合わせは無いほど思わず苦笑させられる。

ビエンナーレが芸術のオリンピックであり、国籍や文化の差異をことさら強調するアナクロニズムに陥っているとすれば、今回のフィレンツェでの「個」を前提とするフュージョンの手法は大上段の構えでも目新しさを狙ったものでもなく素直に等身大の時代を映して快い。

●韓 亜由美(デザイナー)



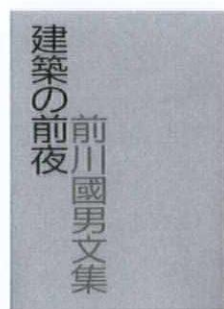
ジャン・ポール・ゴルチエの作品



ミウッチャ・プラダキデミアン・ハーストの作品

『建築の前夜——前川國男文集』

前川國男＝著
四六判 363頁
而立出版 3090円



評者＝
野沢正光

建築の今を問う書

前川國男、没後10年の秋、彼の主要な論述を編んだ待望の「文集」が刊行された。15年前の1981年、宮内嘉久により編まれた「一建築家の信条」の後半分が「前川國男文集」とし

て編まれていたし、1990年に刊行された「作品集」も2分冊のうち1冊を前川國男論、年譜、文献目録、としていることに顕著なごとく、前川はその「言辭」が特に注目される建築家の筆頭であった。今回このような形で著作の大部分がまとめられたことを喜びたい。「信条」と今回の「文集」の双方に載るいくつかの「文」はそのどれもが特に重要なものである。分けても1905年「負ければ賊軍」は、特にその重要性を知られるものであろう。東京帝室博物館コンペに落選後のコメントたるそれが、26歳の時のものであることに、今さらながら驚くが、この時、丸2年間のル・コルビュジエのアトリエでの体験がすでに終わっていることにさらに驚く。

今回の「文集」は彼がル・コルビュジエのもとより帰った直後、最初の講演の記録(1930)を巻頭に載せているが、それはそんなわけで、若干25歳の折のものである。なんという早熟さだろうか。

当時の選良たる帝大出の建築家の出自からの「任務」と、それへの覚悟は今日の想像を絶するが、前川はこうした役割の真反対の一方を25歳にして既に担っていたということであろう。「負ければ賊軍」から「中絶の建築」(1972)に至るまで、その論調の主なトーンは、不完全で、未整備なこの国の建築創作の環境——戦前においては「日本趣味」、戦後においては「技術資材の不足」、そしてその後においては「精神の欠如」——を嘆くものである。ここにある数々の彼の著作は、時代の中でその役割を選良として誠に誠実に果たそうとした彼の苦闘の声であると言えるであろう。今日、前川のその時のこうした言辭に触れることの意味は言うまでもなく大きい。仮に前川の「嘆き」が彼の「創作」とどのように関わるのかは置くとしても、前川が建築の前提たるそれら社会の状況の問いを当初から

創作の「前」に置いていることを読者はつくづくと確認することとなる。我々は今、果たして彼のように建築いや社会と向かい合っているだろうか。

嘆きのトーンがいくらか明るいものに転じたように読むことのできる戦後すぐのいくつかのものが婦人誌等の出版社から刊行された一般向けの書籍に寄稿されていることなどは、前川のこの時期の市民社会の生成への期待をにじませるし、これらの平易な文面は、文集の中で特異なトーンのものである。そしてこの時期の彼の建築が文章と同様極く平明で美しいものであることに、僕は特に注目しながら読むことができた。この時期の社会に前川は、一時の光明を見たのではないか。そしてこの時の不足——嘆きの対象であったはずの技術と材料——が彼のテクニカル・アプローチと連続するのではないか。

前川に直接話を聞いたかった創作に直接かかる内奥の思いについての数々のことは、この文集においても深い嘆きの前に語られることは少ない。わずかに「一枚のレコード」に記された自らの紀行と体験と内面に特にひかれるのはそのためだろう。また建築の現場で彼が信用する職人達と共有した数々の体験、それによる発想そしてそれが前川の建築に作用したこと。これらのことごとを、この文集の中にみとめることは少なかったように思う。

前川事務所のOB達が折に触れ話す、アトリエや建築現場での実に充実した応答の数々。前川國男の周辺には実に濃密な、その時代だけの経験があったはずである。前川自身の「文集」がこのような形で誠実にまとめられた今、多くの聞き書き証言等により、その多彩な姿が照射されることを期待したい。本書はそのための重要な第一歩である。

●のざわ・まさみつ／建築家

Metropolitan Library

1月の評者＝
橋爪紳也

世紀末は「学」が再編成される時期でもあるようだ。『建築雑誌』の特集は、「建築史学」が抱えこんだ難問群、そして現状を打破しようとするダイナミズムを総覧できて興味深い。特集は「日本建築史」と「西洋建築史」にまたがるが、特に諸家の「従来の方法論への懐疑」が並ぶ前者が刺激的だ。

山岸氏は、無理にでも建築をめぐる言説に収斂させてきた従来の「学」のありように異議を申し立て、「建築というモノを発想や分析の端緒として歴史的な社会を分析する」手段を肯定する。あくまでも建築学の補助学であった建築史学を、歴史学の一翼を担う学問領域へと、全面展開させてよいという考えだ。

逆に川本氏は、「建築学」ないしは「建築教育」という限られた領域で果たす役割の再認識こそ必然と考えているようだ。「日本の建築全体をもう一度

俎上にのせ、日本建築の空間的・意匠的特質を大胆に描いてみせる」こと、さらには「狭い専門領域の殻を破り、失敗を恐れず、もっと大きな土俵で日本建築史を論じる」ことが求められている、と問題提起している。

川本氏の結論は、歴史的建造物の保存、修復、活用への貢献を偏重してきた従前の方法論への不満に由来するとも解釈できる。民家研究の閉塞状況を語る御船氏の小文も、同様の認識にもとづくものだ。編年、復元を第一とする従来の枠組みでは、古式を残さず、あるいは質的に劣る民家群が有していた「生活の気配」「ある種の力強さ」等は、記録の対象足りえなかった。しかしこれまでの「学」が捨て去ってきたこれらの事柄について、もっと自覚的であるべき、という認識は同感するところである。

井上氏へのインタビュー記事では、なぜ氏が「定

『カメラマンからカワラマンへ』

山田脩二＝著

四六判 205頁

筑摩書房 1100円



評者＝

富田玲子

皆さん読んで下さい

お酒の海を泳いでたどりついたという様子で、やあやあと突然現れ、冗談か本気かわからない神秘的な話が果てしなく続くかと思うと、小さな花柄のシャツに身を包みまた甘辛い海にどっぷりつかりに出かけて行く人。山田脩二という人は、実はとても偉大な人なのではないかと、私はうすうす感じていたのだが、軽妙な言葉でつづられた彼の半生記を読んで、やはりそうであったと確信するに至った。

絵から写真へ、カメラマンからカワラマンへ、そして今、炭焼きマンへ。紙を焼いて、土を焼いて、木を焼いて、人も焼かれて灰になると冗談のような仕事めぐり、東京、湯布院、淡路島、岩手県を転々とする途方もない生活形態。

これは大勢の人が何となく知る山田流生き方だ。しかし、それは自由きままなどという生やさしいものではなく、22、23歳のころ立てた綿密な人生計画を、大真面目に、そして笑いとはばしながら実行しているライフスタイルなのだということが、この本の中で明かされていて、私は大いにおどろき感動した。

・20代の終わりまでは写真、デザインを中心に、広くその周辺の実務経験と修業

・30代は自分のスタイルを持った写真家

・40代は瓦や土管の産地でドカーンと大量の土を焼く

・50代は雑木林に入って炭を焼く

こまでは見事に実現していると思われる。

・60代からはもし元気で体力と気力が続けば、写真を撮って紙を焼き、土も木も焼き、スミからスミまで焼いて灰になって、ハイ、さようなら。

これも彼はきちんと果たすに違いない。

予定通りに生きるなんて尋常な人に来ることではない。だから山田脩二は偉大な人なのだ。

本書では、彼の特異な生き方の方向性を決めたいくつかの出来事について語られていて、読者をどんどんひきつける。18歳の春フラリと飛び込んだ桑沢デザイン研究所で、革新的なデザイン教育、ユニークな先生達、奇妙で明るい仲間との出会いがあり、その後のくらし方、仕事、考え方に強烈な影響を与え続けているという。

25歳の夏2ヶ月間、東京から甲子園まで、日銭を稼ぎながらブラリ歩き旅をし、都市と地方、山村と海辺、国道と山道の差を体験する。カメラもペンも持たなかったことが、旅の記憶を深いものにし、踏みつけて歩いた地べたからの足ウラ感覚がやがて『山田脩二／日本村1969～79』に集約することになる。

27歳、パレスサイドビルの上からカメラを落としたことがキッカケとなって建築写真に足を踏み入れることになった。

28歳、霞ヶ関ビルの鉄骨の骨組みの一番上まで、カメラの機材をかついで歩いて登って、東京の街を記録した実感と記憶が、その後の都市をつき合う独特のスタイルにつながった。

それからほぼ30年。カワラマンを経て炭焼きマンになるまでのわくわくするような話がつまっています、読んでのお楽しみだ。だが行間に漂う、並の人間達への痛烈な批判ごろを受けて立つ覚悟も必要だ。

それにしても、炭ブーム到来を感じるちょうど今、彼は炭焼きマンになる。これは昔計算されていたことなのか、なぜである。

●とみた・れいこ／建築家

説」の虚構性をあばくことに徹してきたのか、発想の「根っこ」にあるものが引き出されている。建築への愛が歴史を至ませる、実証を標榜した研究者も必ずしも実証的であったとはいえない等々、まっとうであるがゆえに挑発的に響く指摘が多い。

五十嵐氏、中谷氏の対談(筆談のように読める?)は、特集の編集担当者による総括である。井上氏の考えある程度引き受けつつ「物語論者」「実証論者」という「史学者の2分類」を立てているあたり、また「建築史学」という領域が解消しても「建築的思考」が遺る、という見通し等、興味深く読んだ。

特集の、いたるところに議論の種が撒かれている。「物語主義」か「実証主義」か。建築学内での「史学」か、歴史学内の「建築史学」か。ビルディングタイプ別に分化した日本建築史と、横断的な近代建築史とを繋ぐための方法についてなど。一群の、意

欲的な若手、中堅研究者によるこの手の挑発に、先学、諸先輩がいかに対応し、反駁するか。気になるところだ。

わざと世代間の論争、あるいは細分化された領域間の意見交換を呼びおこし、「学」の活性化と再編を仕掛けたい。そこに編集主査たちの深意があるとみるのは、「建築史学の偏愛者」である評者ゆえの邪推だろうか。

『有職故実から日本建築史へ』川本重雄＝著

『日本建築史の方法論』山岸常人＝著

『民家史研究：復元的調査と編年からの離陸』御船達雄＝著

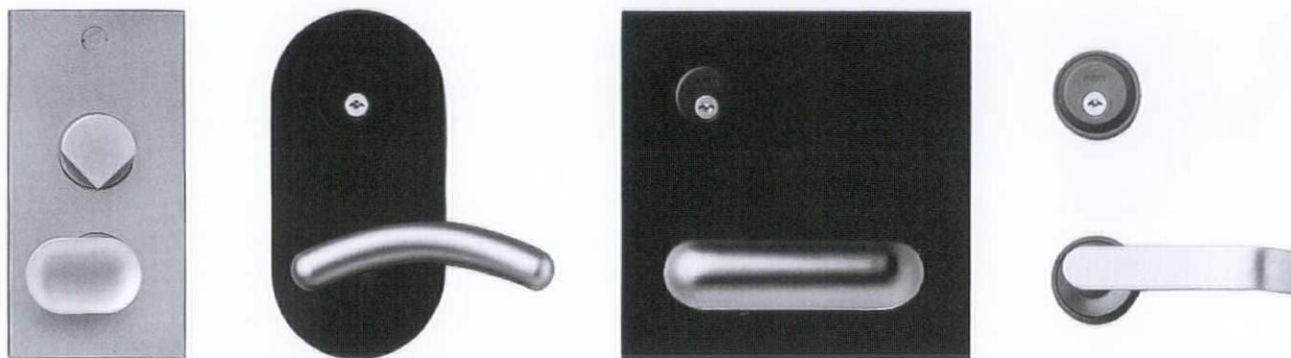
『インタビュー：建築史という刻印』井上章一＝著

『建築史学の方法論が教えてくれるもの』

五十嵐太郎、中谷礼仁＝談

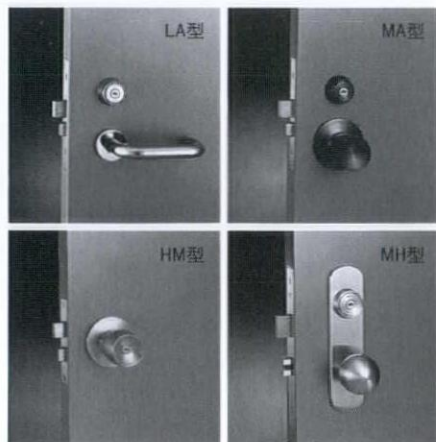
(以上、いずれも『建築雑誌』1996年10月号収載、日本建築学会、1300円)

なぜINTERFACEは



いい製品だけを心掛けてきたMIWA。

ロックには、まず破壊攻撃に対する対破壊強度、耐久性、豊富なカギ違い数という3つの基本性能が求められます。その上で、いいロックであるためには、用途に合わせた幅広い機能、使いやすさと建物との調和を考えたデザイン、さらには滑らかな作動感や音質、多彩なキーシステムなどをできる限り盛り込んだ、完成度の高いメカニズムが必要です。もちろん安心してご使用していただくための品質管理、販売、アフターサービスなどソフト面の充実も欠かせま



せん。MIWAはこのすべてを満たすことに全力を投入してきました。

時代を先取りしたロックINTERFACE。

ロックはさまざまな用途や要望によって細分化され、現在では実に多くの製品がつくられています。もちろんすべての製品は、今の社会が必要としているものばかりです。しかし決して現状に満足しているわけではありません。私たちは今の時代にふさわしいロックをあらためて考え、さらに1歩前進させるために3つのコンセプトを見つけました。それはボーダーレス時代に備え、国際的に通用するロックにすること。高級化する建物に即した機能、性能、感性を備えた本格的なロックにすること。そして利用者にとって選びやすく、取り付けやすいロックにすることです。この3つの要素を満たすには、まず国際的な規格に適合させることが必要です。しかし、残念ながらロックには世界共通の規格がありません。そこで私たちは性能基準が厳しく、システムチックに整備されているアメリカのANSI規格（米国国家規格協会）に着目しました。

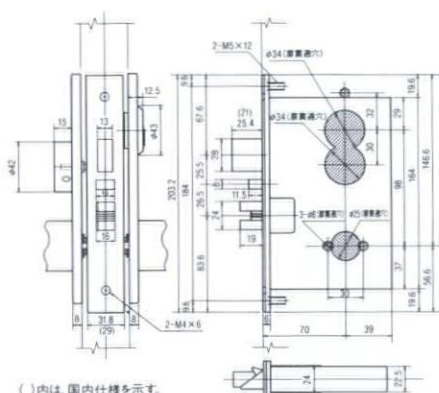
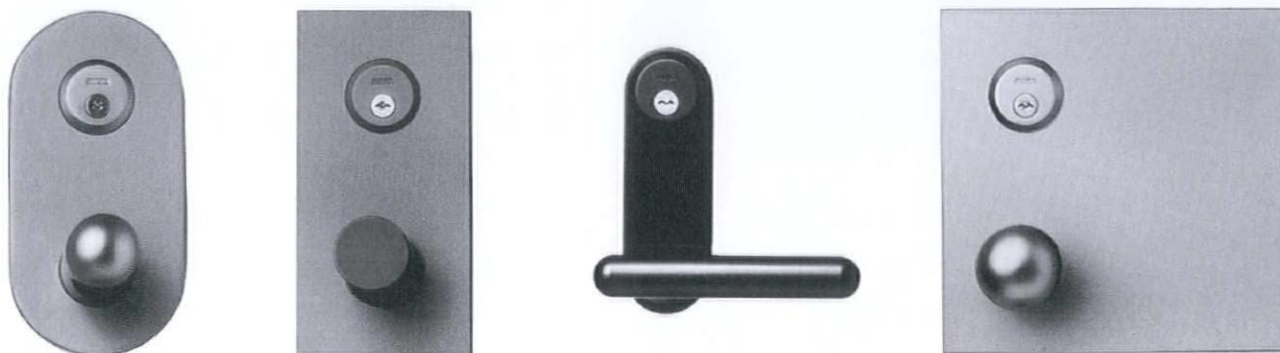
●ANSI規格は厳しい性能基準を規定。

ANSI規格はロックの実用性能試験、防犯性能試験、耐久性能試験、仕上性能試験について厳しく規定しています。その内容のレベルは非常に高いのですが、MIWAでも同じような研究を継続的に行ってきたので、努力の結果クリアすることができました。もちろんINTERFACEはこの規格のすべてに適合させて、信頼性を実証しています。

●ANSI規格は切り欠き寸法を規定。

ANSI規格には寸法基準があり、施工性を向上させています。玄関ドアから室内ドアまですべての錠ケースとストライクは、規定の切り欠き寸法に合致しなくてはなりません。ですから、扉と枠の加工が錠機能の決定前に行え、錠機能の変更もケースの交換だけで済みます。また、この規格はアメリカのものだけに、日本の一般的なドアには適さない部分があります。そこで、国内のドアの仕様に合わせたフロントの幅、デッドボルトのストロークなどを盛り込んだ、国内仕様のケースも用意しました。もちろんANSI規格のメリットはそのまま確保しています。

生まれたのか。



●ANSI規格はロックの機能を統一。

ANSI規格の最大の特長ともいえるのが、錠機能の記号化で、20数通りの機能がシステムチックに構築されています。たとえばルームドア錠は『F21』、ホテル錠なら『F15』というように、部屋の用途に合わせた機能の指定が、メーカー間共通の記号で行えます。

INTERFACEの安心を支える『U9』。

ANSI規格では特に規定されていませんが、けっして無視できないのがロックの生命ともいえるシリンダーです。INTERFACEとはほぼ同時

期に完成した主力シリンダー『U9』は、約1億5千万通りの膨大なカギ違い数を得たので、多彩なキーシステムにも対応できます。しかもキーシステムの構築によって起きる、急激なカギ違い数の減少もありません。もちろん不正解錠に強く、カギの質感もよく抜き差し感が滑らかになりました。

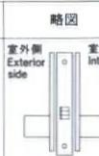
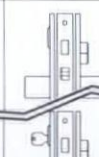
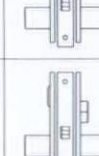
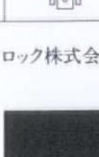
U9



格調を重視したシステムチックなデザイン。

このようにANSI規格への適合をはじめ、操作感や音質などにまで配慮してメカニズムを磨き上げましたが、もうひとつ大切な要素があります。デザインを忘れてはなりません。人の感性に訴え、高級化する建物にも対応する格調高いフォルムを用意するために、私たちは一流デザイナーに協力をお願いしました。モジュール化されたレバーハンドル、ノブ、エス

カチオンは自由な組み合わせができ、カラーを含めると660ものバリエーションが得られます。選択の幅をより広げることにより、それぞれの個性やセンスが表現でき、組み合わせること自体が楽しめるようになりました。これがMIWAの自信作INTERFACEです。今後もデザイン展開などを含めて、さらに充実したシリーズに育てていきます。

記号	用途例または一般名称	略図	機
F01	空錠	 室外側 Exterior side 室内側 Interior side	常時、内外のハンドルでラッ
F02	個室 寝室 浴室錠		ラッチボルトは内外のハンドル ムターン、外からは非常開錠 操作すると、外ノ
F21	一般居室用		ラッチボルトは内外のハンドル で、内からはサムターンで開
F22	個室 寝室 浴室用		ラッチボルトは内外のハンドル ターンの操作で施錠され、1 のハンドル操作により外ハン

※INTERFACEカタログをご希望の方は、美和ロック株式会社までご請求ください。

INTERFACE

『イギリスの窓文化』

三谷康之＝著

A5判 178頁

開文社出版 2060円

イギリスのさまざまな窓と、格子など窓の周辺の用語をまとめ、その詳細な解説を掲載。また、文学作品や映画をからめながら、「窓」から見える文化的背景も解説されており、作品の理解も深まる。改めて窓の種類の豊富さを知らされる。



『品格なくして地域なし』

関川夏央十下公人十奥本大三郎十森まゆみ十津野海太郎

四六判 285頁

晶文社 2163円

全国の町おこしの現場を訪ね歩き、鋭い批判を投げる。補助金に振り回される現状を見据えつつ、中央に頼らない地方の商業活動、豊かな自然、楽しみつつ、しかし命がけの仕事をする人々など、今後への具体的な提言を盛り込み、読みごたえのある一冊。



『関東の住まい——日本列島民家の旅⑧』

田中文男＝著

A5判 48頁

INAX出版 927円

関東の住まいは沿岸部と内陸部で寒暖の差が激しく、また階級や職業によってもさまざまである。本書では、民家、社寺の修復に長い間携わる現役棟梁である著者が、江戸時代の重要文化財指定の農家、漁家、商家や武家住宅等のみどころを解説。経験に裏打ちされた鋭い考察が成される。



SD9701
192

『木を読む——最後の江戸木挽き職人』

林 以＝著

四六判 256頁

小学館 1500円

最後の江戸木挽き職人と言われる筆者が、木挽きの伝統や技術を解説する。木挽きで重要なことは木の種類、生育条件、特徴などからどのように大鋸をかけ美しい断面を生むかにある。筆者はこの「木を読む」行為を通して、現在の社会状況、あるいは日本文化の原点までを語る。



『格子の表構え——和をさわたせる意匠』

和風建築社＝編

A4判 114頁

学芸出版 5665円

和風建築でその意匠の善し悪しを左右する格子。また米屋格子、糸屋格子、蔀格子、武家格子等、家並みに統一性と多様性を与える格子は、優れた町並みづくりの手法として、見直されるべき今日的価値を持っている。本書では、和を象徴する伝統のディテールを写真と実測図面により詳細に紹介する。



『都市の歴史とくらし』

川添 登＝著

四六判 213頁

ドメス出版 2060円

元「新建築」の編集長であった著者が縦横無尽に語る都市論。日本書紀を引用した古代都市のありかたについて、古墳時代から律令時代、近世初頭の3回、日本をめぐった国土造営の波について、あるいは現在の「都市の照明」について、幅広い知識と興味に支えられた理論を展開する。



『谷口吉生 建築作品集』

谷口吉生＝著

B4判変型 288頁

淡交社 25000円

モダニスト、谷口吉生の作品集。1978年、静岡県掛川市、資生堂アートハウスから始まり、金沢市立図書館、豊田氏美術館および茶室、そして1996年のつくば市民交流センターなど16作品を収録。近作には10頁程をあて、作品の姿をあらゆる角度から見せる。



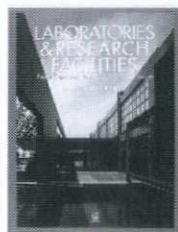
『研究所・研究施設』

戸尾任宏＝監修

A4判変型 224頁

メイセイ出版 16000円

現代建築集成シリーズの一冊。1988～1995年に竣工した時代性、個性のある研究施設として、マツダR&Dセンター、サンド薬品筑波総合研究所など26作品を研究分野別に収録。社会変化への敏感な対応と研究者のためのヒューマンな執務空間が必要とされる研究施設の新しい提案が見える。



『アメリカのショッピングセンター2』

田口泰彦十I.M. TAO＝著

A4判 200頁

商店建築社 4400円

映画館やレストランといったレジャーやサービス産業をも取り込んだショッピングセンターがアメリカで注目されている。本書では、ディスカウント傾向に対応するパワーセンターやアウトレット、エンターテインメント型ショッピングセンターを全米各地で取材し、30件を紹介、最新の情報を提供する。



■堀井義博

ガラヴァ邸の計画を初めて見たのは、私が大学生の頃で、多分OMA/Rem Koolhaasが、日本で初めてまとめて紹介された例であろう『A+U』誌1988年10月号においてだった。この記事はわずか1ページで、図版5点と簡潔なコメントだけの掲載だったが、ページの左中ほどに配置された何とも呼び難い不細工な絵が、その意味深長さを強く記憶に焼き付けた。この絵は焦点が手前にあり奥へ行くほど拡散する、いわば逆パースである。記憶の片隅にこびりついた染み。魅惑的な小片。

約3年後のある日、ロッテルダムのUdoから、パリ第6、7大学図書館コンペ案のコピーが届く。この中には、後にあちこちで「アクソノメトリック図」という呼び名で紹介された絵も含まれていた。当時まだほとんどどこにも掲載されていない「最新情報」だったため、穴があくほど見つめた。この図版に定規を当てて確認したのだが、実際には「パース」がかかっている。しかも、これも3年前に見た上述の不細工な絵と同様に、焦点が手前にある。しかも、こちらは「複眼逆パース」とでも呼べる代物である(ふたつの異なる焦点が絵の手前にある)。

海外建築情報リミックス

12Architects #1: OMA

Staff: 太田浩史(東京大学生産技術研究所助手)、小川次郎(東京工業大学坂本研究室)、西沢立衛(妹島和世建築設計事務所)、堀井義博(ユーピーエム)、丸橋浩(アーキベルク)

私の気付いている限りでは、この「逆パース」なる記述方法がOMAの仕事で採用されたのはこの2回だけだ。他の建築家で逆パースなど描く者が見当たらないことを考えると、ほとんど専売特許と言っていいこの記述方法が、アンドーのドローイングやイソザキのシルクスクリーンなどと同様に様式化されることがないのは不思議だ。確かにOMA/Rem Koolhaasは「様式」を嫌い、プレゼンテーションのスタイルはプロジェクトごとにかなり違うのだが、それでも一方では完全に様式化している彼ら特有の奇妙な「貼り絵」の存在を考えると、この逆パースも様式化してもよさそうなものだが……。

話は変わるが、私は1995年7月号のこの欄で、『デリリアス・ニューヨーク』の「浮きプール」と「ガラヴァ邸」とを絡めた一種の「クイズ」を出したことがある。まあ誰も覚えていないだろうが、実はこの「クイズ」は、まったく他愛もないもので、「浮きプール」の精神構造を考慮に入ればすぐにわかる。「浮きプール」は、主体が目的を達成するためには、できるだけそこから遠ざかるようにすることこそが最良の方法である、という態度を意味する。「浮きプール：ガラヴァ号」は「パリに到着してしまった」からには、もう泳いではならない(そうでないと遠ざかって

議だ。確かにOMA/Rem Koolhaasは「様式」を嫌い、プレゼンテーションのスタイルはプロジェクトごとにかなり違うのだが、それでも一方では完全に様式化している彼ら特有の奇妙な「貼り絵」の存在を考えると、この逆パースも様式化してもよさそうなものだが……。

12Architects #1: OMA

OMA≧RK?

奥田真也

一見視覚的インパクトを狙っただけのこのプロジェクトクレジットには、OMAという組織の本質が浮き彫りにされている。図版左側にはOMAに在籍している(あるいは通過した)人々が、対する右側には実施・計画案を含めたプロジェクトが、それぞれ時系列に沿って並置されている。人とプロジェクトの関係は両者を結ぶシンプルな線の集積によって表現され、初期の幾つかの計画を除いてほぼすべてのプロジェクトにレム・コールハース(図版左上)が関わっている様子が読み取れる。OMAは、部門ごとにリジットな組織ではないし、ましてやル・コルビュジエやF.L.ライトのようなアトリエにおける師弟関係があるわけでもない。フラットな組織こそOMAの本質であり、ヒエラルキーは、スタッフ間のみならず哲学者やアーティストといった建築外のスペシャリストや、あるいはオブ・アラップといった他の組織とさえ原則としてあり得ず、互いの領域を浸食しまわっているようである。

OMAは近年、香港にアジア・オフィスを設立したようだが、彼等のアジアに向ける眼差しを、ル・コルビュジエのそれと比較してみると、チャンディガールが端的に言うアジヤの西洋化であるのに対し、OMAのそれはアジヤを発見するという視点である。いわく、彼らは来るべきユートピアを計画しようとしているのではない。むしろ天気予報のごとく、事象の入念な観測によって、今起こりつつある変化をそのまま現実投影しているのだ。では、誰もが気象予報士になれるのかというと、事はそう単

純ではない。なぜなら徹底した調査から構築された理論を、建築として成立させるためには、理論→形態間の変換過程が決定的に重要だからだ。この誰もが明確に語りたがらないブラックボックスには、解釈による発明という錬金術が隠されている。

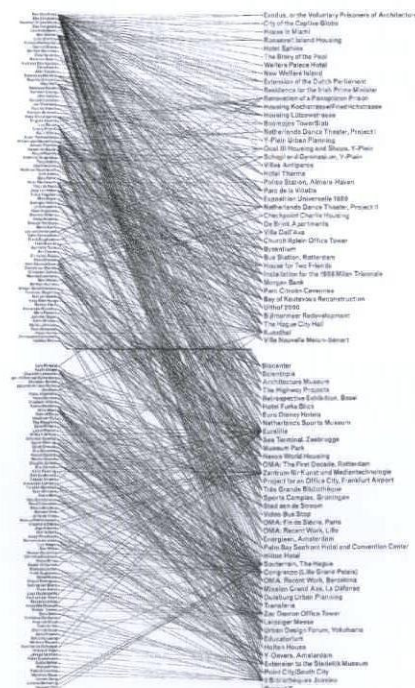
OMAではプロジェクトにおける個々の論点は、各々のスタッフによって漸進させられ、暫定的解答としていくつもの形態なりスケッチが生産されるのだが、解釈による発明という能力に決定的に長けたコールハースは、つくった本人さえも意識していなかったそのスケッチの意図を、発明してしまうのである。コールハースが精鋭の建築家集団であるOMAの中で、結果として意志決定権を握ってしまうのは、この能力によるところが大きいのではなかろうか。

気になるのは、次プロジェクトとして示されたProject X(図版右下)の存在である。Project Xとコールハースは、このダイアグラムの中で唯一無条件なリジットな関係として結ばれている。OMAは、不安定で変化の激しい現状に則したフラットな組織であるが、もしOMAという運動体が現状に対し機能しなくなる時が来るとすれば、それはOMAの反射神経であり、かつ唯一の無条件な存在であるコールハースと、Project Xのリジットな関係に疑問符が打たれなくなる時なのかも知れない。(建築家)

協力: 杉山弘樹/KAJIMA DESIGN、元OMA所属

図版出典: "S.M.L.X.L", O.M.A., Rem Koolhaas and Bruce Mau,

010 Publishers



Project Credits

しまう)。つまりは、OMA/Rem Koolhaasにとっての目的地は、ヨーロッパであり、フランスであり、パリなのだ。Rem Koolhaasがアメリカやアジア諸国についての関心を語れば語るほど、その確信は強まる一方だ(目的を達成するためには……)。また〈ガラヴァ邸〉の照準が、ヨーロッパの、フランスの、パリの、象徴的な意味での中心としてのエッフェル塔(=欲望の対象)からほんの少しズレているのは、目的に到着するのが予定より「早すぎた」ために、自らをそこに繋ぎ留め、欲望を持続させるための自己防衛手段なのだ(欲望するために欲望し続ける。リビドー経済はリビドーそれ自身の備給によって持続される)。Rem Koolhaasが「こんなチンケな住宅一戸つくっただけでパリを離れられるかっ!」と言ったかどうかは知らないが、一連の仕事の中でも、特にパリあるいはフランスに関するものほど派手なパフォーマンスを見せるのは偶然ではあるまい。「プール物語」は、そういう意味で「自伝的」なのだ。

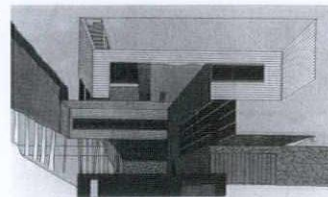
そこでもう一度、逆パースについて考えてみよう。パースという記述、作図方法は、眼差しを表象する形式のひとつのはずだが、その習慣がひっくり返されたこれらの図は、一体何のために描かれたのだろうか? また、一体誰に向けられているのか? あるいは、こう問うてもいいかもしれない……「これらのパースは、建物をどこから見た場合に描かれるのか?」と。この、焦点と眼差しの向きとの位置関係が逆転した構図は、まぎれもなく「建築が」あなたを見つめていることを示している。視線の行き着く先、眼差しの焦点は、それを見ているつもりのあなたに向けられているのだ。

我々の視線を誘うことを拒絶し、逆に、視線そのものの病理的な性質(視線はそのまま主体の欲望を暴露する)をむき出しにするこの「逆パース」は、ややナルシスティックな印象を与えることを免れられないあの肖像写真——彼が手に持った中折れの鏡越しに写る——と同じだ。彼が、ないしは彼の建築が「見られる」ことはない。この肖像で、彼は「カメラ」を見ることなく、逆に「カメラを通して」我々を見つめるのだ。

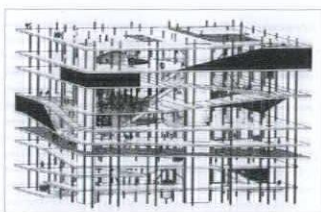
OMA/Rem Koolhaasのゼスチュアのひとつひとは、あらゆる意味での「メディア」を、「メディアそのもの」を変質させる。

(CXP11276@niftyserve.or.jp)

図版出典: 『a+u』1988年10月号、"El Croquis 79"



ヴィラ・タラヴァ



ジュシュー図書館



ポートレート

12Architects #1: OMA

OMA図書館

福屋粧子

「これは建築だね。立つし。」という言葉がジョークにならないほど、『S,M,L,XL』は建築物である。誰もがそう言うときのように、こうやって立てても(図1)確かに道路際に立つ薄っぺらいテナントビルより厚みがありそうだが、『S,M,L,XL』が真に建築物であるのは、横に寝かせたときだ(図2)。ほら、床スラブに挟まれた横長の窓から、中のアクティビティが見えるだろう?

以下、『S,M,L,XL』を「横から読む」。

そんなこと言われたって……と思うあなたは、きっと読書好きなんですね。本好きにもいろいろあって、手のひらサイズの再生紙に縦組みの明朝体の日本語が並んだものの内容を読むのが好きな人もいれば、定期的に刊行される雑誌という形態をとったA4版のビニール袋にはいったゴミを嬉々として買う人もいる。『S,M,L,XL』も大抵の人の机の上にどんと横になっていて、あなたも、そのページを開いている時間より、バーコードもよくな、その脇に積層しているジャンプと同じ法面を眺めている時間のほうが長いはずだ。よって、以下『S,M,L,XL』を「横から読む」。

しかし、一般的に、いわゆる好事本が本という形式をいかに破壊するかによってアイデンティティを保っているのに対して、同じく好事本として評価されている、『S,M,L,XL』はそのような身振りに全く欠けている。本であることに悪びれず、逆に本という形式を徹底的に利用することで、別のものになってしまっている所がとてとても建築的だ。

横に寝かせたときの「本という形式」、それは「積層」という単純な構造である。

"Accumulation of Slabs"という言葉が表すように、ほとんどの建築物も床スラブの積層として表現され得るし、スラブという平面で他の階と区分されているからこそ、互いに全く無関係な空間がひとつの建築物の中に垂直に共存するschism(分断)が可能となっている。だから、「本」=「建築」の『S,M,L,XL』についても次のように言えるだろう、「n階のフロアでカラーコピーの光溢れるお花畑の中を散歩する——これが425番目の階(ストーリー)の「プロット」である」と。どうですか? プレーンな世界の積層する、横たわった『S,M,L,XL』の方が魅力的でしょう?

さて最後に、「それでも所詮、本は本。読むためには「開か」ないとね」とおっしゃる方のために、いい方法をお教えしましょう。中に閲覧室をつくらばいいんですよ。私もあなたもよく知ってる方法で。「この大図書館は立方体の情報ブロックと見なされる。あらゆる記憶媒体——書物、CD ROM(中略)——の保管庫である。このブロックの内部にある主要公共スペースは「建築の不在」として規定される。すなわち、情報ブロックの中に穿たれるヴォイドとなるのである」(図3)。

斯くして、我々は完璧な『S,M,L,XL』、または「OMA図書館」を手に入れた。(東京大学横山研究室、fukuya@mpf.t.u-tokyo.ac.jp)

図版提供: 著者



図1



図2

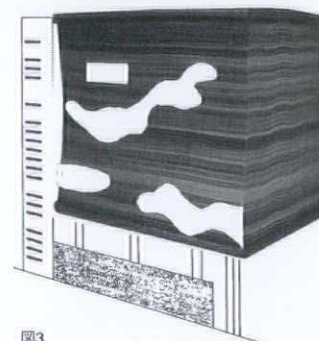


図3

「日影図」というものがある。法的には作図する必要がないにも関わらず、現在工事中の住宅の隣家の主婦に、私たちが設計する住宅が隣家にどんな影を落とすか説明せよと強く迫られて、それを作成することになってしまった。しかし、これは実は大変な作業である。建築を専門としていない人にこの「日影図」を見せると、はっきり言ってどの線が何を意味するものなのか全く理解してもらえないのである。私たちはどうすればその人が図を読むことができるのかという、厳しい議論に突入した。しかし実際にはその図をいくら簡略化しても、それがいわゆる「日影図」としての書き方に則って書かれる限りは、そう簡単にはこの他者的な断絶を乗り越えることはできない。というのも、その「日影」とは第一種低層住宅地域の場合、平均G.L.という現実には存在しない水平面から、1.5mの高さに仮想された水平面に映し出される「日影」なので、それは決して隣家のリビングの床面に描かれることはないし、隣家の外壁やガラス面に描かれる実物の影とも、形が全然異なるのである。第一、それが例えば9時の「日影」であれば、正確には9時1分ではなく8時59分の「日影」でもないという意味で、その影は9時0分0秒にのみ現れるという、つまり現実には0秒だけ存在する「日影」である。要するに「日影」は、もはや人間が知覚したり経験したりできるような対象ではない。それは現実というよりはフィクションであり、実体というよりは形式である。現実の日影から自

律することで初めて「日影」足りうるそれは、経験や知覚によってではなく、いわば抽象力によってのみ出現するものなのである。いずれにしてもこの「図」が、そういった経験なり知覚なりを還元した結果得られるものであることがよく理解できたので、その意味でだけは他者に感謝しなければならない。おかげで私は「図」というものが、それがたとえ平面図のような平易な図であっても、決して現実を再現したり記述したりするような類のものでないことを再確認することになった。この「日影」(それは建物の影に非常に似ている)は、北緯36度であり、G.L.+1.5mであり、冬至であり、午前9時であり、描画精度が、というような大量の情報を入力した結果、仮説的に出現する複雑な関数のようなものである。この場合、「日影」それ自体は、現実の中ではすでに意味を持たないのだ。ただ私には、これは影の形というより、あえて言えば単に形式なのですと言って主婦が納得するとは、到底思えないのであった。

ところで私はこの騒ぎを通して、OMAによるフランス国立図書館のコンペの、あの異様なドローイングを思い出していた。一体、主婦はその後どうなったんだという問いは次回に回すとして、私が学生の頃、現在勤めている事務所の所長が、外国雑誌を片手に何か興奮しながら部屋に飛び込んできたことがある。なぜ所長が興奮したかという、その図面の内容を十分理解したからではない。というよりも、それが全く理解できなかったからで、かくいう私も、その「図」が一体何の「図」であり何を記述するものなのか、ほとんど理解できなかった。今

12Architects #1: OMA

存在と存在の経路について

梶原 徹

誰だってスラヴォイ・ジジエクの『快楽の転移』を読めば、デヴィッド・リンチの『ツイーンピークス』の冒頭の「もやもやした白い原形質のような物体が、原始の状態できらきらと光を放っているかのような極端なアップでとらえられたTVの画面の映像」に関する分析が、あのグロテスクに輝く金属板で覆われた〈コングレスポ〉のエントランスからホール2を結ぶ経路に対してそっくりそのまま適用できるのではないかと考え、さらには不自由な身体のための視線の経路である〈ボルドーの住宅〉のコンクリートボックスの穴は、エレファントマンの頭巾に開いた穴に由来するのだろうかとか想像し、最後に建築全体の中でも「ひどく心をかき乱す不気味な突出したディティール」として存在するそれら経路空間が、ラカンという「現実界」であることを認識するだろう。そこで耳を澄ますとリンチの映画において、「現実界」が露呈するシーンにつきものであるブーンであるとかカサカサだとかいった不思議な音が聞こえてはこないのだろうか。

近代都市計画は、コルビュジェやヒルベルザイマーのように都市と建築を明快に区別するがOMAは両者を積極的に混同する。それはある意味で、街路と室内の中間物であるW.ベンヤミン、J.ボードレールのパッサージュの復権である。そして、前者が経路を長さで通過する情報の量に還元し、単なる合理化の対象とみなすのに対し、後者はそれを映画のシーケンスとして組織する。OMAが作り出した経路の建築言語、シームレスネスについて、コールハースは以下のように解説する。「境界の不在によ

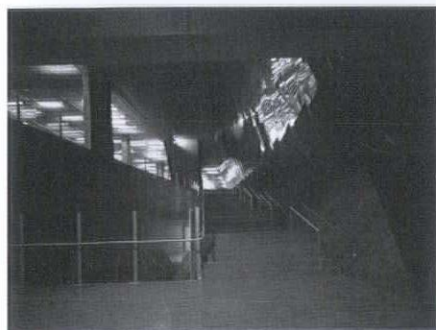
りひとつの状態から別の状態への移行が可能になる。そこには壁もなく天井もなかった。その軌道とは歪曲したブルーヴァールであり、ここを訪れる人々はボードレールのフォーナールとなり都市のシナリオの虜になるのだ」。シナリオという言葉が示唆するのは、主体の空間体験を向こうとこちらに分割するスクリーンの存在であり、ベンヤミンが路上のふたつの存在、夢見る群衆とその観察者としての覚醒者フォーナールを区別するように、そこに映る空間の虜としての微分的な意識(「僕らは立ったまま夢を見る」というゴダールの主人公のモノローグを思い出して欲しい)と、客席でそれを見る積分的な自意識の分離を強調する。

夢という無意識の構成物(象徴界)に開けられた裂孔の向こう側、すなわち夢から覚醒へと至る遷移状態とは、私流のたまためなラカン解釈を披露すれ

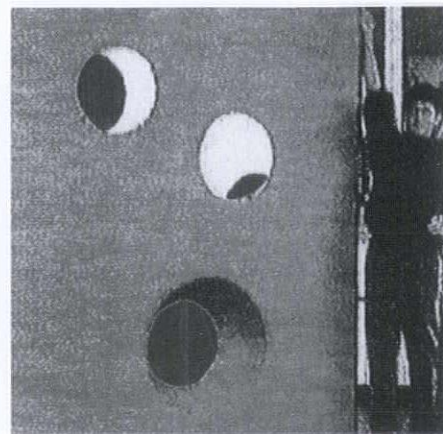
ば「現実界」という経路を経る「象徴化」の過程である。つまり、OMA(もちろんムサヴィ&ボロを含む)は主体が都市の中で存在と存在(夢と覚醒、群衆とフォーナール、窃視症と露出狂、エイリアンと内地人等々)の間を往来する経路を、夢の中で自律的に行動する私から覚醒状態の自意識へ移行する目覚めの短い一瞬、あるいは不快なまでに対象をアップでとらえた厚みのないスクリーン、これら現実界の(一連の空間としての)「引き伸ばし」という手法を用いて切り拓こうとしているのである。

(東京大学生産技術研究所曲淵研究室)

図版出典: "S,M,L,XL", O.M.A., Rem Koolhaas and Bruce Mau, 010 Publishers



Congrexpo / view of staircase, from entrance Hall 2



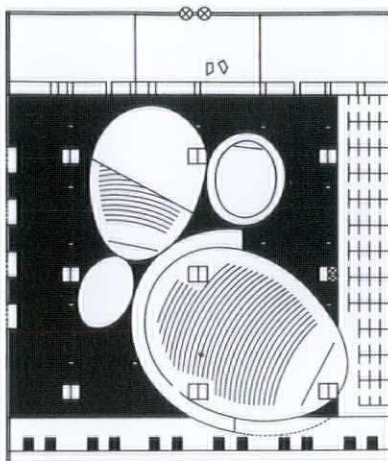
Maison à Bordeaux

さらその「図」について説明するまでもないが、それはいわゆる平面図と呼ばれるものに相当する矩形が、本棚ピースに満たされつつグリッド状に反復配列されてゆくという美しいドローイングであった。問題は、何かその中で白い宇宙船のような物体が、ジリジリ移動してゆくのである。しかし、その宇宙船が実は物体ではないとわかった時点で、私は、新しい「図」が発明されつつあるような事態に自分が出会ったことを、遅まきながら悟った。矩形は移動する白い宇宙船と共に無限に反復されてゆき、レイヤー群を形成し始める。反復でもレイヤーでもよいが、そういう言葉は別に何も新しくはない筈なのに、私はまるで今まで見たことも聞いたこともないような新しい形式に初めて遭遇した気になってしまったのである。多分、私が図なり記号なりといった表象のための装置をめぐって意味でなく形式に直面したのは、建築の分野では、OMAによるこの計画案が初めてだったと思う。

一般的には、図は建築の内容(意味)を代理的に再現するもので、建築/空間という主題に従属するものであり、その意味では、図は常にその下位に位置すると考えるのが普通である。しかしそういった内容(意味)を還元することで成立する「図」が発明された途端に始まる転倒は、壮絶である。「図」は、もはや表象のための記号であることをやめ、建築/空間といった主題は、「図」の前では、もう主題ではなくなるのだ。記号とその指示内容とが、どちらが上位でどちらが下位なのか全く決定できないような、この超越的な事態を生み出したOMAのコンペ応募案は、落選しつつも発明されたことによって、ほとんど建

つこと以上の「現実」を引き寄せてしまったというふうに、当時私は思ったのであった。

図版出典: "S,M,L,XL", O.M.A., Rem Koolhaas and Bruce Mau, 010 Publishers



フランス国立図書館コンペ案

次回予告

#2: Peter Zumthor

12Architects #1: OMA

メタ・コラージュ

梶橋 修

「ミシンと洋傘との手術台の上の不意の出会いのように美しい!」

20世紀を通じて幾度となく繰り返されている「マルドロールの歌」の一節をもう一度想像してみよう。「ミシン」と「洋傘」が偶然に出会う現場となる「手術台(=タブロー)」は「出会い」を生産した後もそこにあり続けるだろうか。「不意の出会い」が美しいのはほんの一瞬であり、次の瞬間には「手術台」はミシンと洋傘もとも記憶の深淵に葬られなければならないはずである。継起する「不連続なもの相互の衝突」による美を形式化したのはエイゼン・シュテインであるが、衝突によって生み出された美自体が、タブローを破壊し再構築する過程こそが両者に通じる「コラージュの弁証法的機構メカニズム」である。すなわち、コラージュは立ち止まってはならない。静的スタティックになった次の瞬間、コラージュされた全体はすでに、部分あるいは断片フラグメントとして、「美しき出会い」を待ちながら世界を漂うのである。このようなメカニズム(ミシン+洋傘+手術台)→(ミシン2)となるような形式(タブローなきコラージュ)を、さしあたり「メタ・コラージュ」とでも呼ぶことにしよう。建築における、20年来の退屈なコラージュを淘汰するための、不安定な形式フォルムとして。

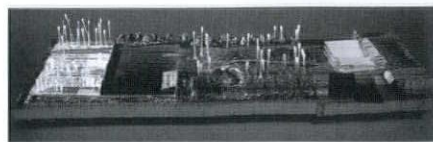
当然メタ・コラージュが開く地平はアナーキズムに近い側面を持っており、「メタ・コラージュとは何か」という問いは静的であるが故に、即座にトートロジーに回収されてしまうだろう。メタ・コラージュとは、言い換れば想起されるタブローから絶えず

「逃げ続ける」ことに他ならない。そして、忘れてはならないのは「形式主義フォルマリズムの臨界」としてのメタ・コラージュによる逃走に、戦略ストラテジーは成立しない。残されるのは、その都度繰り出される戦術タクティクスのみである。コールハースについて言うなら、彼は確信犯的に「巨大都市メトロポリス」の定義不可能性に逃げ道を見出し、形式としてのメタ・コラージュの平面を構築した初めての建築家である。彼にとって形式主義フォルマリズムの段階は「錯乱のニューヨーク」の時点で終了してしまっている。そして「底なしの建築家」が繰り出す、手を変え品を変えの戦術をバックアップする組織こそ、OMAに他ならないのである。

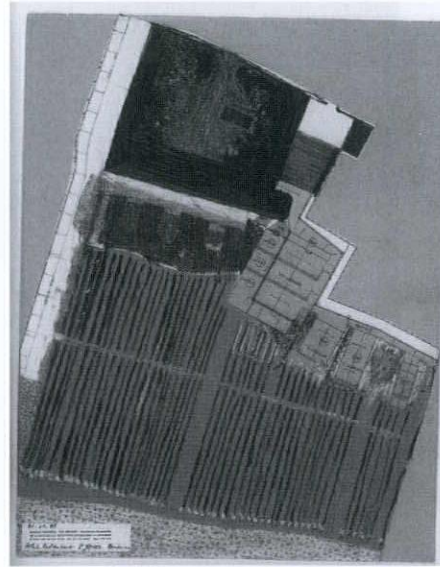
筆者の知る限り、OMAの中でコールハースのもつ形式、すなわちメタ・コラージュに最も直結していた存在はランドスケープ・アーキテクトのイヴ・ブルニエであろう。とは言っても、ブルニエがOMAに所属していたのは1986年から1987年のわずか1年余である。その後1年間ジャン・ヌーヴェルのアシスタントを経て、1988年から彼の師であるイザベル・オウリコストと共に独立し、1991年エイズに侵され他界するまで、脅威的な密度でプロジェクトをこなしている。コールハース、ヌーヴェルと関わった仕事をざっと見ても、〈ムラン・セナール〉、〈ムゼウムパーク〉、〈ヴィラ・ダラヴァ〉、〈ユーラリール〉、〈聖ジェイムズ・ホテル&レストラン〉、〈日仏友好記念碑〉、〈カルチエ財団本部〉、〈トゥールの会議場〉など数えきれず、コンセプト段階からブルニエとの

ディスカッションが行われていたことを両者共に証言している。ブルニエの設計手法は造園言語のデベイズマンにある。すなわちコラージュはドローイングのみに留まらないのだ。専門的な諸条件はプログラムとしてクリアされているのに違いないのだが、諸要素の切断と衝突の論理に従えば、彼がつくった庭園は構成として見るべきではなく、むしろ、ばらまかれた要素間に生じた裂目の配列として捉えるべきであろう。コールハースのメタ・コラージュにとっては強力な戦術であったブルニエだが、解読されざるテキストだけを残し、彼自身の形式を宙づりにしたまま逝去してしまったことは非常に残念である。(東京大学生産技術研究所原研究室)

図版出典: "Yves Brunier" BIRKHAUSER



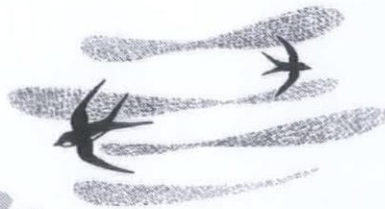
Museum park



Saint-James Hotel & Restaurant

空気の歳時記

ツバメが渡ってきたか確かめたくて
入り江に近い河原を歩く。
頬に当たる風は冷たいが、
水面の眩さはもう紛れもなく春だ。



春

目をこらすと
何の稚魚だろうか
スイスイと元気である。
何万年も繰り返されてきた
自然の鼓動を体の奥に
感じる瞬間。
ビューイ、ビューイ。
澄みわたった空気に、
待望の囁りを聞いた。

林道を逸れて、森へ深く入る。
額に汗をにじませながら、
一步一步標高を稼ぐ。

セミの合唱に負けじと
梢で声を

張り上げているのは

クロツグミだろうか。

樹齢は数百年に

及ぶだろう、

ブナの巨木を見上げると、



夏

突然、時間の感覚が薄れていく。
鬱蒼とした空気のなかで
息もつまるような濃緑の季節。

尾根を越えてくる風の冷たさで
季節の深まりを知る。

山の秋は短い。

頂から麓へ向かって

早くも赤や黄に色づきはじめた

林の中を歩くと、

よく南へ旅する渡り鳥に出会う。



秋

例えば、エゾビタキ。
ヒラリヒラリと木の葉のように
舞いながら
フライ&キャッチを繰り返す
この鳥が姿を消す頃、
あたりは冬の長い眠りに入るのだ。

休日。ちよつと早起きして
近くの山に足を運んでみた。

枯れ落ちた木の葉を

踏むたびに

ガサッガサッという音が

林全体に響き渡る。

見上げると

餌を探しているのだろうか、

シジュウカラの仲間の群れが

盛んに鳴き交わしながら

枝から枝へ飛び回っている。



冬

凍てついた空気のなかで
精一杯生きている小さな命。

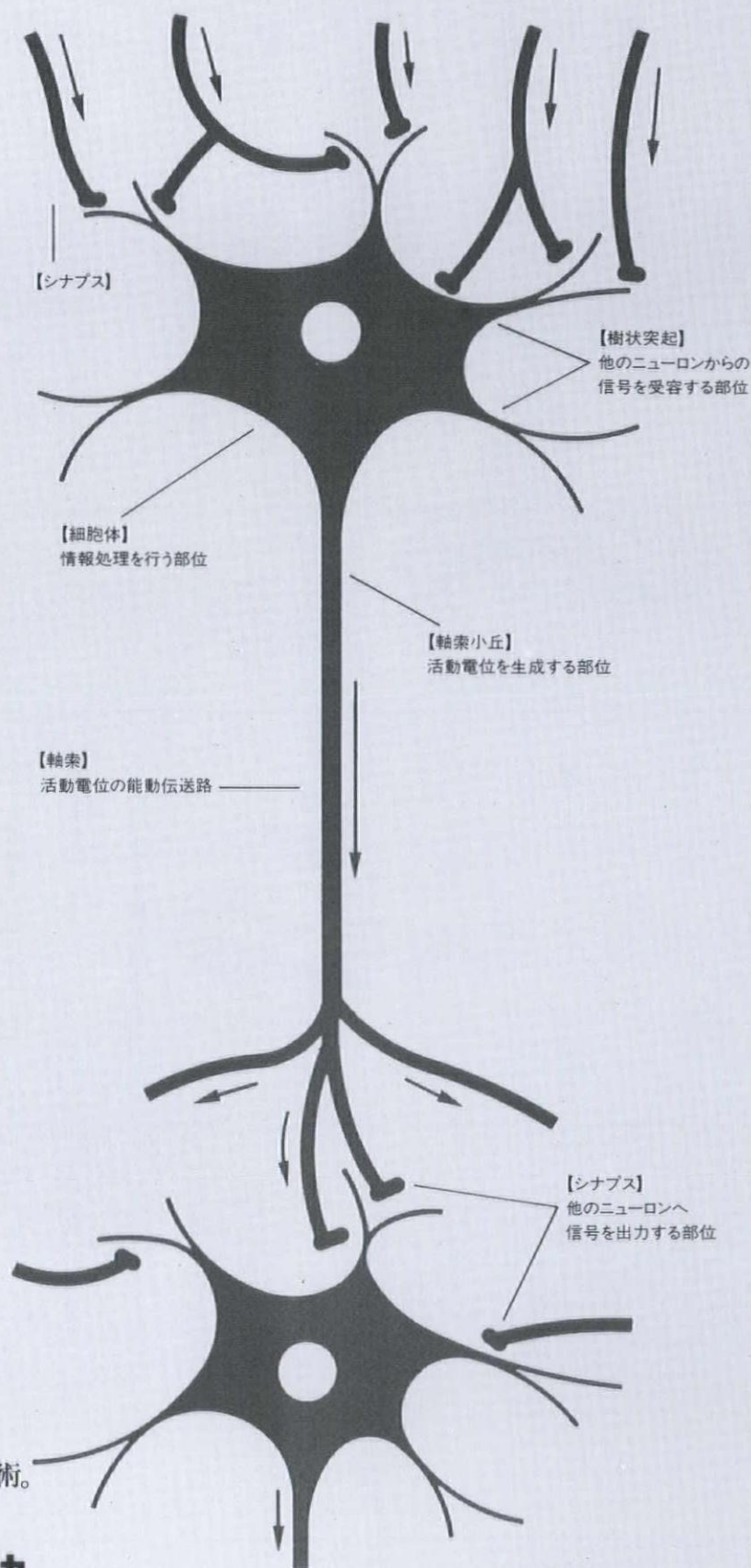
日本の四季の空気を、ずっと考えてきています。

◆新菱冷熱

SHINRYO CORPORATION

本社：〒160 東京都新宿区四谷2-4 ☎03-3357-2151 代 支社：札幌・仙台・千葉・横浜・名古屋・富山・大阪・広島・福岡

21世紀の空調は、人間の脳神経がお手本になる。



私たちは「ニューラルネットワーク」理論を応用した、次世代の空調システムの開発に取り組んでいます。誰もが心地よい空気を作り出すことは、本来、極めて微妙なコントロールを必要とします。もともと簡単かつ鋭敏に、人が求める快適さを感じできないだろうか。そのテーマに応えるべく、私たちは生体の脳回路に着目。脳の神経細胞が行う高度な学習機能や適応能力を応用することで、エア・デザインング技術の新たな主流となるシステム研究を始めています。

東洋熱工業株式会社 〒104 東京都中央区京橋2-5-12 TEL 03-3562-1351

時代の呼吸に応える技術。



東熱

IAA国際会議パネル展示会 「INNOVATIVE ARCHITECTURE IN ASIA」

日時：1月7日(火)～1月16日(木) 9:00～17:30
会場：建築会館 展示コーナー
東京都港区芝5-26-20
出展者：アン・ジンワ(シンガポール)、ミン・キ
ュンスク(韓国)、チャン・ヨンフー(中国)、チー・
ティナン(台湾)、ツイー・カイ(中国)、ジェラ
ール・ダ・クンハ(インド)、マイケル・チャン(香港)、
ゲリー・チャン(香港)、フランク・リン・リー・
ユアット(マレーシア)、ウルピアーノ・イグナシオ
(フィリピン)、アナスタシア・スリスチャワディ(イ
ンドネシア)、リー・ズーユワン(台湾)、グエン・チ
ュック・ルーエン(ベトナム)、ブラバット・ニョ
ム(タイ)、ソリ・オードン(モンゴル)、チラコー
ン・ブラソンキット(タイ)、スン・ヒョサン(韓国)、
R. スンダラム(インド)、タン・ケイニー(シンガポ
ール)、高橋龍一(日本)、シン・トンフー(中国)、ケ
ン・ヤング(マレーシア)、ロッコ・センキー・イム
(香港)
問い合わせ：建築会館 Tel.03-3456-2051

「A.ラボ」研究生募集

A.ラボは建築、都市、アートを対象とした研究を行
う場です。デザイン研究を軸とし、プロジェクトへ
の参加などの活動のサポートも行っています。
期間：1997年4月より1年間
講師：吉松秀樹、山家京子ほか
募集対象：大学4年生以上でデザイン研究にある程
度時間がかけられる方
募集人数：6～8名
参加費：5000円/1ヶ月
申込み方法：研究したいテーマとプロフィールを
A4判にまとめ「アーキプロラボ 156東京都世田谷
区桜丘2-8-12アパルトマン岡庭302」迄 2月19日
(水)必着
問い合わせ：アーキプロラボ
Tel.03-3439-7104 Fax.03-3439-5697

KAWAMATA + PH STUDIO, MUSEUM CONSTRUCTION

KAWAMATAとPH STUDIOが四国の松山市に共同
でプランしている美術館に関して、美術館とは何か、
どのようなものであればよいのか、ということをも
美術作品の作り手の立場で考え、具体的に形にしてい
く。
会期：1月23日(木)～2月23日(日) 11:00～18:00
会場：ヒルサイド・ギャラリー
東京都渋谷区猿楽町29-18ヒルサイドテラスA棟
問い合わせ：ヒルサイド・ギャラリー
Tel.03-3476-4795 Fax.03-3476-1765

第6回ヴェニス・ビエンナーレ建築展報 告会

日時：1月17日(金) 18:00～20:30
会場：建築会館ホール
東京都港区芝5-26-20
パネラー：磯崎新(日本館コミッショナー)、
石山修武(建築家)、宮本隆司(写真家)、
宮本佳明(建築家)、三宅理一(建築評論家)、
中村敬治(美術評論家)、飯島洋一(建築評論家)
定員：150名(先着順) 無料
問い合わせ：国際交流基金 芸術交流部展示課
Tel.03-5562-3529 Fax.03-5562-3500 担当/岡部

日本人とすまい第2回企画展 「畳 TATAMI—なぜ、あなたは畳に 暮らすのですか？」

住宅や生活スタイルは大きく変化してきたが、畳だ
けは変わらずに、日本人の生活の歴史を足元から見
つめてきた。不思議な存在である畳、その無言のメッ
セージを読み解いてみる。
会期：1月9日(木)～1月28日(火) 10:30～18:30
水曜休館 無料
会場：リビングデザインセンターOZONE
東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー
企画：柏木博(デザイン評論家、武蔵野美術大学教
授)、大竹誠(東京造形大学教授)
問い合わせ：リビングデザインセンター
Tel.03-5322-6500

PLEA'97 釧路国際会議

PLEAとは、地域風土の特性を生かし、自然エネル
ギーを活用しながら自然環境を享受し、省エネルギ
ーにすぐれた建築の推進を目的とした国際研究交流
ネットワーク。基調講演、研究発表、市民参加ワー
クショップ、洋上スクール等が開かれる。
会期：1月8日(水)～1月10日(金)
会場：釧路市観光国際交流センター
参加人数：800名
問い合わせ：PLEA'97 釧路国際会議事務局
東京都港区芝5-26-20 建築会館内3F
Tel.03-3798-5122 Fax.03-3798-5130

「迎春楽座」展

会期：1月18日(土)～2月15日(土) 11:00～19:00
月曜休館
会場：ギャラリー燐 東京都渋谷区東4-11-8
出展作家：宮原隆岳(漆)、沈甫翰(台湾茶プロデューサー)、
藤原郁三(陶器)、古田悠々子(篆刻書家)、
問い合わせ：ギャラリー燐
Tel.03-3797-9864 Fax.03-3797-9865



自然を征服しようとは思いません・自然と調和させるだけです

空気調和の 三建設備工業株式会社

本社 東京都中央区日本橋横町1丁目35番8号
☎(03)3667-3431(大代)
支店 北海道・東北・横浜・名古屋・大阪・中国・
九州

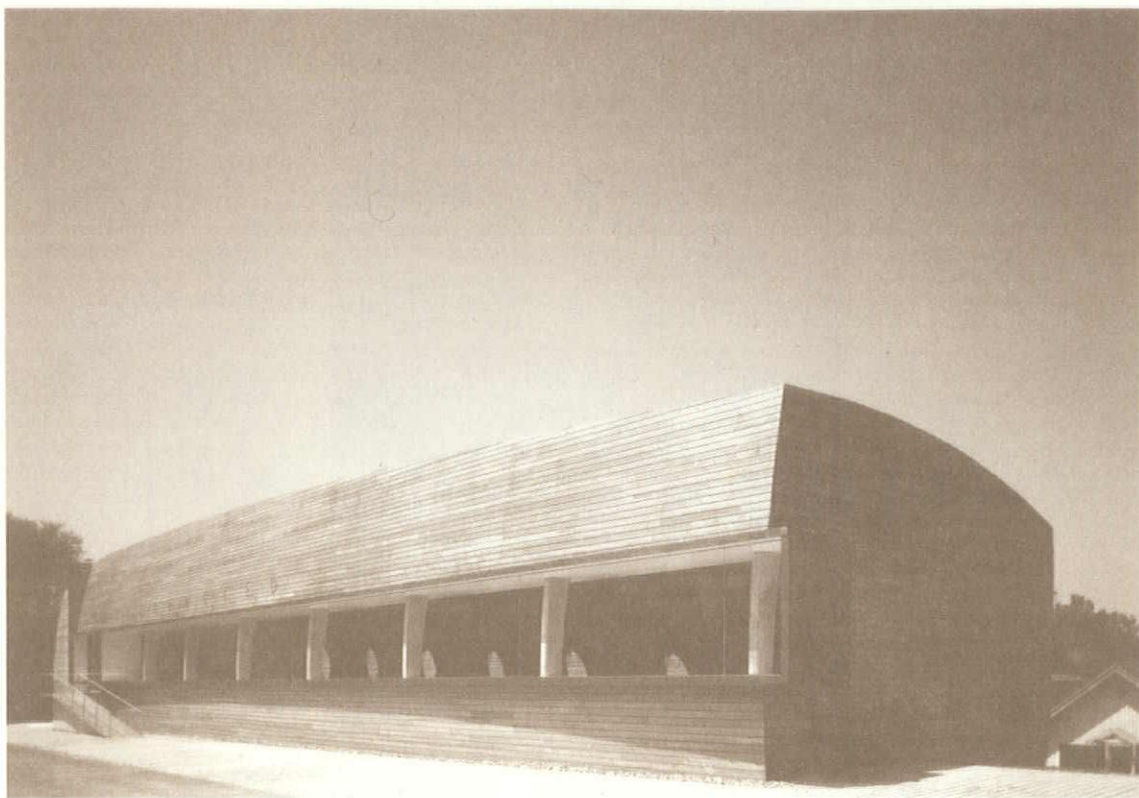
うれしい。



旭硝子は、現在、ガラス・化学技術を中心とする
複合的多角化企業をめざし、
明日のお役に立つ製品をいろいろと開発しています。
誰もがうれしいと感じるものをつくる「価値創造企業」へ。
わたしたちは、技術革新と品質向上に挑戦しています。

旭硝子

旭硝子株式会社 〒100 東京都千代田区丸の内2-1-2 TEL.03(3218)5258



Industrial building / Baumschlager & Eberle © Arch Photo

9702

特集1

木を生かした架構と空間

近年、建築家達の木構造への挑戦は数多く見ることができる。しかし、本来木が持つ特徴を生かした木構造デザインは少なく、スチールやコンクリートの代材として使用した架構が目立っている。本特集では、「木の特徴」を整理しながら、木の性質を活かすことを試みた事例を紹介しつつ、構造デザインの視点から今後の可能性を探る。

[作品]

金山の火葬場／益子義弘、宮城慶長使節船ミュージアム／石井和紘、からくり記念館／内井昭蔵、照明幼稚園／高崎正治、長野市オリンピック記念アリーナ／久米・鹿島他JV、大館地区多目的ドーム／伊東豊雄、ヘルスピア白根／柴田知彦、モルジのホール／ユリウス・ナッター、ユトレヒト、経済経営学部／メカノ、他。

[文]

川口 衛、今川憲英、播 繁、中田捷夫、リンク・ビッツ

特集2

IAA(イノベティブ・アーキテクチャ・アジア) 国際シンポジウムより

10月22日～24日まで大阪で開かれた日本建築学会主催の国際シンポジウム。アジア地域の22人の参加建築家達のディスカッションとその活動取材紹介し、アジアの都市と建築の現在と未来を問う。

[文]

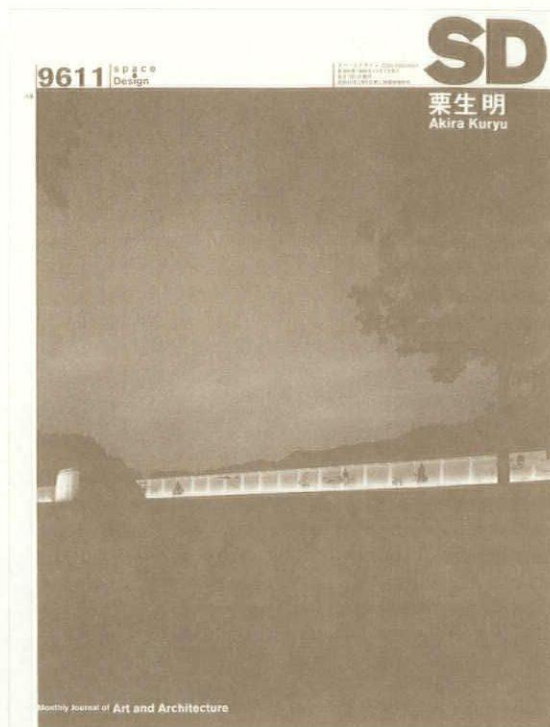
川口 衛、村松 伸、渡辺真理、アン・ジン・ワー、季 鐵男、古谷誠章、古市徹雄

連載：トムの時空形象学17／戸村 浩

連載：照明探偵団・連続実践講座レポート12／LPA

連載：サイバートーク：電子メディアのフロンティア 2.メタ東京／田島則行

海外建築情報リミックス：12 Architects 「Peter Zumthor」



9611

特集

栗生明

建築家自らがすべてをコントロールするのではなく、施主はもちろんのこと都市プランナー、ランドスケープ・アーキテクト、家具デザイナーなどとのコラボレーションを続けている栗生明。1995年度建築学会作品賞を受賞した「植村直己冒険館」もコラボレーションの結晶である。本特集では、栗生明の全主要作品を紹介する。

【作品】

岡崎市美術館、コア山国、チューリップ四季彩館、パトリ+清里フォトアートミュージアム、植村直己冒険館、新湊市営本江住宅、神慈秀明会黄鳥神殿、カーニバル・ショーケース、他全23作品。

【文】

飯島洋一、養原 敬、南條道昌、宮城俊作、藤江和子、栗生明

【インタビュー】

横 文彦

田窪恭治のサン・ヴィゴール・ド・ミュー 礼拝堂プロジェクト 3

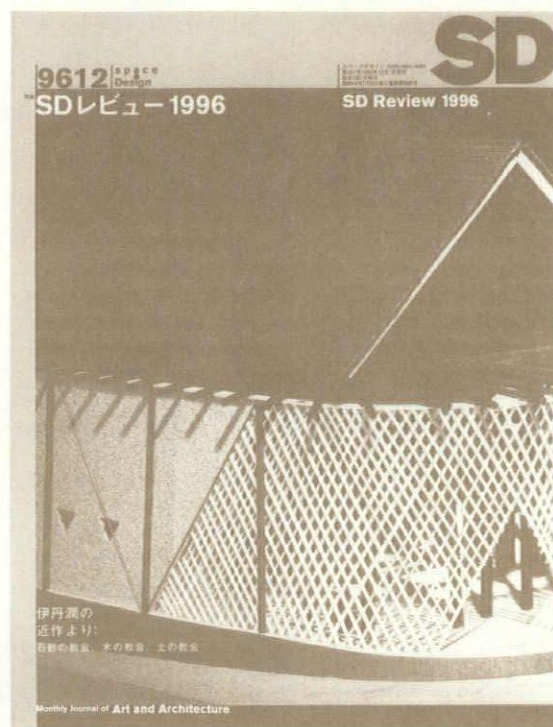
日仏文化交流のもと、フランス・ノルマンディの村落にある礼拝堂の修復再生作業が約10年の歳月をかけ、ようやく完成した。SD93年11月号、94年12月号でその経過を報告してきたが、今回はその3回目。アーティスト田窪恭治のプロジェクトを紹介する。

【文】 ジャン・マルク・ユイトレル

連載：トムの時空形象学 14／戸村 浩

連載：照明探偵団・連続実践講座レポート9／LPA

特別定価＝2,500円／本体2427円



9612

特集

SDレビュー1996

今年で15回目を迎えたSDレビュー。今年からあらたに開催された大阪芸術大学での大阪展の様子も含め、SDレビュー1996入選展の結果を審査員のコメントと共に誌上発表する。

【入選者】

RE[]/Responsive Environment、城戸崎和佐建築設計事務所、黒木正郎+横田千晶(日本設計)、佐藤光彦+横溝 真、三分一博志+西尾通哲+塚田哲也+土井一秀、高橋昌巳(シティ環境建築設計)、長田直之+筏 真司+清水裕二(I.C.U.)、西沢大良、宮沢 透、宮脇 勝、安田光男+杉山陽子、ユストス・ビザール+ペーター・ルーゲ(Pysall Ruge Architekten)、由田 徹+岡本美樹、吉松秀樹(アーキプロ)、渡辺真理+木下庸子(設計組織ADH)+三谷 徹+長谷川 浩己(S.E.D.O.)

【審査員】

香山壽夫 渡辺邦夫 内藤 廣、妹島和世

伊丹潤の近作より：石彩の教会、木の教会、土の教会

「軽さ」「透明性」を主張する建築とは対極の「もの派」とも呼べる建築家・伊丹潤。石・木・土といった自然素材を大胆に使用し完成したふたつの教会と、進行中のプロジェクトを紹介する。

【作品】 石彩の教会、木の教会、土の教会

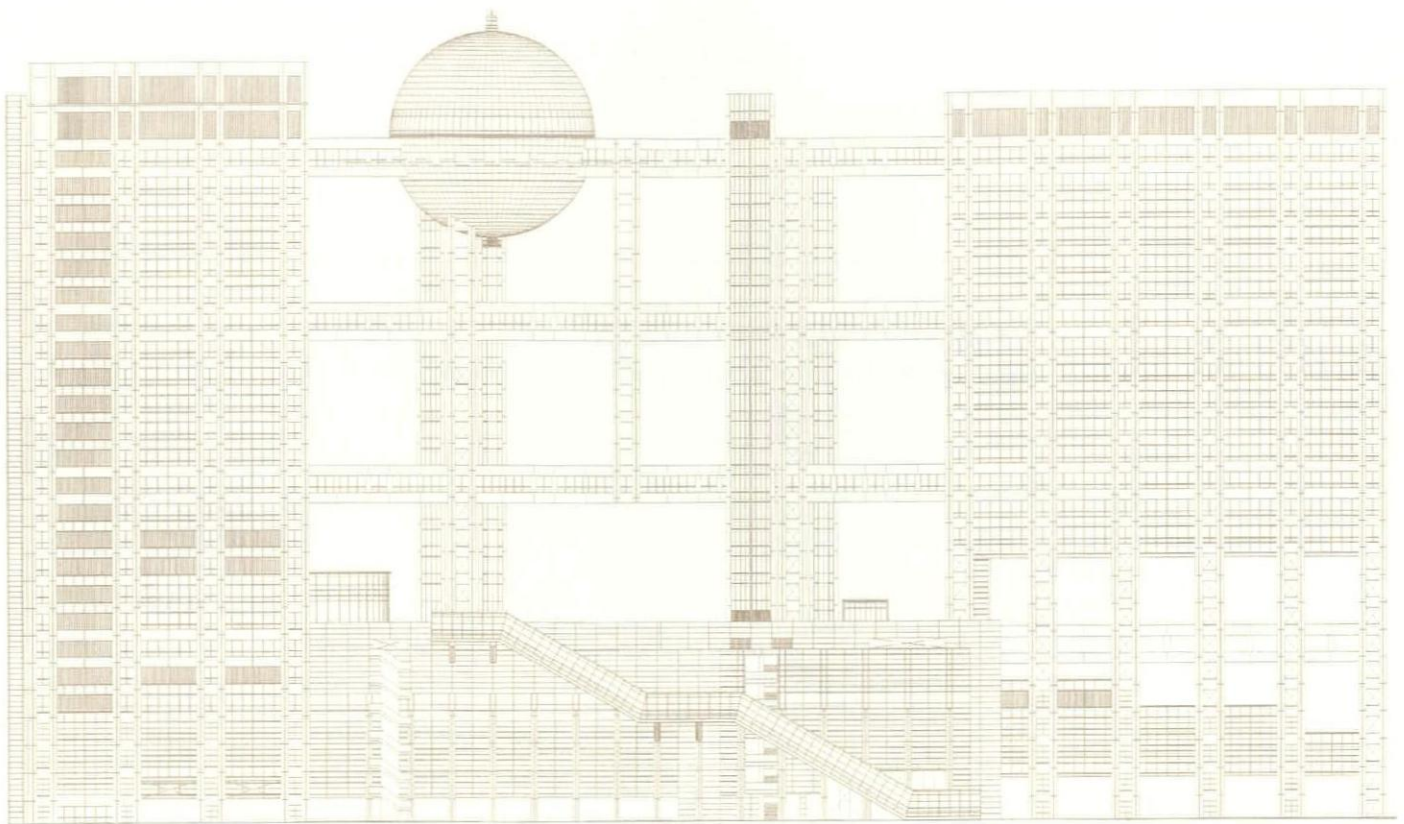
【文】 林 芳史

連載：トムの時空形象学 15／戸村 浩

連載：照明探偵団・連続実践講座レポート10／LPA

SD1996年総目次

定価＝1,950円／本体1,893円



SD別冊29

フジテレビ本社ビルの記録

「高度情報化社会の大規模複合建築の原点を求めて」

判型・体裁：A4判変形・並製

総頁：168頁

定価：3500円

好評発売中

臨海副都心台場地区に建設されたフジテレビ本社ビル（設計：丹下健三・都市・建築設計研究所）は、豊かな人間性と文化性を取り込んだ創造的な空間を、都心部地域では得られない恵まれた環境の中で実現している。それはまた次世代のオフィスビルとしての最新の機能と、躍動感溢れる美しさを備えている一方で、放送を中核としたさまざまなメディアの受信・発信基地として高度な安全性と最先端の通信技術を有する。

本別冊では、さまざまな角度からフジテレビ本社ビルを紹介するが、その中には、全体構成の詳細な検討過程、新しい構造システム、最新のスタジオの詳細、直径32mの球体のリフトアップ工法などが含まれる。

建築の設計、施工に携わる人はもちろん、新しい建築技術に興味を持つ人、都市の将来像、放送施設やオフィスビルの未来像に関心のある人などにとっても興味のある内容。

目次抜粋

〔プロセス編〕

臨海副都心事業とプロジェクトの始まり
基本設計から実施設計までのスタディ

〔コンセプト編〕

オフィス計画
スタジオ計画
構造計画
設備計画
防災計画
外構計画

〔デザイン編〕

基準階外装
球体外装
シースルーエスカレーター
1階シアター
展望室
大会議室
V4スタジオ
V9報道スタジオ・オフィス
DAVスタジオ
試写室
ラジオ・スタジオ

〔施工編〕

SD



都市景観と造形の未来

樋口正一郎著
A5判 210頁 定価2,987円

21世紀を彩る環境彫刻家69人の新作を紹介

都市の新しいシーンを開拓し、リードする建築家・造形家・環境彫刻家69人の作品を中心に人の考え方と方向を探る。1.未来都市の展望、2.情報と歴史、3.創造と情念、4.地球と自然環境。写真約240枚、カラー写真8頁。

[主要目次]未来都市の展望／リカルド・レゴレッタ／リチャード・ロジャース／レンゾ・ピアノ／磯崎新／ドミニク・ペロー／アーキテクチュア・スタジオ／ラルフ・アースキン／クリスト他 情報と歴史／ジェニー・ホルツァー／荒川修作／ダニ・カラヴァン／フィリップ・ジョンソン／リカルド・ボフィール／アンドリュ・レイスター／I.M.ペイ他 創造と情念／フランク・ゲーリー／ダニエル・ビュラン／フィリップ・スタルク／高橋士郎／エンリク・ミラーレス／北川原温／ピーター・アイゼンマン／高崎正治他 地球と自然環境／マヤ・リン／エリン・ジーマー／ピエール・バラ／ジャン・ヌーベル／キース・ソニア／エド・レビン／イサム・ノグチ／レイモンド・モレッティ／中谷芙二子他

デザインのモダニズム

ポール・グリーンハルジュ編 中山修一他訳
A5判 272頁 定価4,326円

21世紀を迎える今「モダニズム」を再検証する

本書は今世紀のデザインにとって支配的イデオロギーとなっていた「モダニズム」の実相をいまいちど検証しようとするものである。わが国におけるモダニズム論争に新たな視座を提示するものであり、必読の書といえよう。

[主要目次]序章／ポール・グリーンハルジュ 第1章／19世紀の遺産 第2章／機能という神話 第3章／1900—30年のフランス家具界の抗争 第4章／ドイツのモダニズム・インテリアの文化政治学 第5章／ユートピアの建設—アメリカ西海岸の先駆的モダニズム 第6章／「日用品のデザイン」—1912—44年の英国におけるモダニズムの振興 第7章／アンリ・ヴァン・ド・ヴェルドと両大戦間のベルギー・モダニズムの抗争 第8章／スウェーデン・グレイス…それはモダニズム受容の姿なのか 第9章／「万人に住宅を」は有効か—1945—72年のイタリアの住宅におけるデザイン、イデオロギー、そして文化 第10章／スペインにおける現代デザインのラディカル・モダニズム

SD選書 226

ウィリアム・モリス

—近代デザインの原点—

藤田治彦著 四六判 224頁 定価1,854円

今年で没後100年を迎える近代デザイナーの先駆者ウィリアム・モリスはデザイナー・工芸家のみならず、ヴィクトリア朝を代表する詩人であり、環境保護の思想家であった。本書は彼の生涯と多彩な活動を紹介する。

SD選書 227

エーロ・サーリネン

穂積信夫著 四六判 234頁 定価1,854円

常に天才的な発想で名作を発表し続けたエーロ・サーリネンは、若くして急逝したために寡作であり、その素顔も知られていない。本書は、サーリネンの事務所に在籍した経験のある著者が、彼の建築作品と生涯をつづる。

SD選書 228

都市デザインの系譜

相田武文・土屋和男共著 四六判 200頁 定価1,854円

アーバンデザインに重要な功績を残したペリクレス、カエサルからハワード、ガルニエ、ル・コルビュジエらを経て、現代のロウ、チュミに至る15人を取り上げ通史的にダイアグラムの現れ方を考察する。初学者の入門書。

鹿島出版会 建築図書案内



見立ての手法—日本的空間の読解

磯崎 新著 A5・¥3,502

イメージゲーム—異文化との遭遇

磯崎 新著 A5・¥3,502

造物主義論—デミウルゴモルフィスム

磯崎 新著 A5・¥3,914

始源のもどき—ジャパネスキゼーション

磯崎 新著 A5・¥3,914

建築の世界—意味と場所

C. ノルベルグ=シュルツ 前川道郎, 前田忠直共訳 B4変・¥8,961

建築の形態言語—デザイン・計算・認知について

W. ミッチェル 長倉威彦訳 B5・¥6,386

建築理論の創造—環境デザインにおける行動科学の役割

J. ラング 高橋鷹志監訳, 今井ゆかり訳 A5・¥6,489

白い机①: 若い時—アルヴァ・アアルトの青年時代と芸術思想

G. シルツ 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・¥9,785

白い机②: モダン・タイムス—アルヴァ・アアルトと機能主義の出会い

G. シルツ 田中雅美, 田中智子共訳 A4変・¥14,729

評伝ミース・ファン・デル・ローエ

F. シュルツ 澤村 明訳 B5・¥9,167

ガウディ—芸術的・宗教的ヴィジョン

R. デシャルヌ 池原義郎他共訳 B4変・¥15,244

ル・コルビュジエの建築—その形態分析

ジェフリー・ペイカー 中田節子訳 B5・¥6,695

ル・コルビュジエ—理念と形態

W. J. R. カーティス 中村研一訳 B5・¥8,446

知られざるフランク・ロイド・ライト

E. ターフェル 谷川正己, 谷川睦子共訳 B5・¥5,871

ルイス・カーン研究—建築へのオデュッセイア

前田忠直著 A5・¥3,502

ルイス・カーン 光と空間

ウルス・ビュッティカー 富岡義人, 熊谷逸子共訳 B5・¥4,326

世界の高齢者住宅—プライバシーと自立の実現

J. D. ホグランド 湯川利和, 延藤安弘共訳 A5・¥3,502

仕組まれた意匠—京都空間の研究

川崎 清他共著 A5・¥4,326

ハウジング・デザイン—理論と実践

I. コフーン他 湯川利和監訳 B5・¥12,051

驚異の工匠たち—知られざる建築の博物誌

B. ルドフスキー 渡辺武信訳 A5・¥3,914

人工楽園—19世紀の温室とウインターガーデン

S. コッペルカム 堀内正昭訳 A4変・¥18,334

建築美論の歩み

井上充夫著 A5・¥4,532

アメリカの機械時代—1918~1941年

R. G. ウィルソン他 永田 喬訳 A4・¥13,390

城下町の近代都市づくり

佐藤 滋著 A5・¥4,326

新世紀末都市—The 100 Mile City

D. スジック 植野 糾訳 A5・¥5,871

都市の文化

L. マンフォード 生田 勉訳 A5・¥6,489

楽園のデザイン—イスラムの庭園文化

J. ブルックス 神谷武夫訳 A5・¥5,665

庭園の詩学

C. W. ムーア他 有岡 孝訳 A5・¥4,841

庭の意味論

M. フランシス他 佐々木葉二, 吉田鐵也共訳 A5・¥4,738

記憶に残る場所

ドンリン・リンドン他 有岡 孝訳 A5・¥4,532

アースワークの地平—環境芸術から都市空間まで

J. パーズレイ 三谷 徹訳 B5・¥7,828

移ろいの風景論—五感・ことば・天気

小林 享著 A5・¥3,914

劇場—舞台芸術のための建築計画と設計

ロデリック・ハム 劇場技術研究会訳 B5・¥6,386

スウェーデンの住環境計画

スヴェン・ティーベイ 外山 義訳 A5・¥4,635

SD別冊

既刊 好評発売中

SD別冊は、ひとつのテーマを深く、丁寧に掘り下げ、ユニークで役に立つ情報を提供します。



SD別冊26号

アパートメントのインテリア

ロンドン、パリ、ミラノ、ニューヨーク、ウィーン、東京。

世界の主要都市の、建築家が設計したアパートメントのインテリアを精選。全44例。予想外の素材を用いたり、アートを積極的に取り入れるなど、厳しい制約のもとでも、新鮮な技法、柔軟な発想によって快適な住まいが得られることが良くわかる。

家具やアートの選択例としても、本格的なリフォームのアイデア集としても役立つ。

定価=4,300円



SD別冊27号

パブリック・アートの現在形

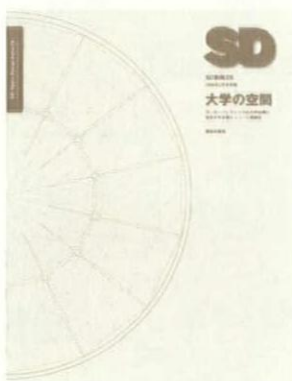
超高層ビルを中心とした複合建築群「新宿アイランド」のアート計画。

リキテンシュタイン、ピュラン、インディアナ、ルウィット、長沢英俊など、

建築群の足元の公共空間を舞台に現代抽象美術を代表する10人のアーティストが競演。

計画から製作、設置までを詳細に記録しているの、本格的なパブリックアート計画の実務を知るにも絶好の書。文=南條史生、六鹿正治、柏木博、松葉一清、他。

定価=4,050円



SD別冊28号

大学の空間

ヨーロッパとアメリカの大学23例と東京大学本郷キャンパス再開発計画。

ケンブリッジ、ローマ、ハーバード、ベルリン自由、リヨンなど、

既存の施設や環境を生かしつつ、段階的なリニューアルを図っている先進的な事例を、実地調査に基づき、豊富な写真と資料を駆使して詳細に紹介している。

キャンパス移転のみならず、一般的な街区の保存・再生の手引きとしても有用。

定価=3,900円



SD別冊29号

フジテレビ本社ビルの記録

丹下健三・都市・建築設計研究所の設計になるフジテレビ本社ビル。

当ビルは次世代オフィスビルとしての最新機能と躍動感溢れる美しさを備える一方、高度な安全性と最先端技術を擁するマルチメディアの受信・発信基地でもある。

本書では全体構成の詳細な検討過程、新しい構造システム、大小のスタジオの詳細など、多数のディテール図面と写真、解説により、その全貌を伝える。

定価=3,500円



9509 Kenzo Tange: Kenzo Tange Associates: Focus on UOB (United Overseas Bank) PlazaTange's last skyscraper, and on the Shinjuku Park Tower which transforms the Shinjuku skyline. Introduces Makuhari Prince Hotel, Bay Square Yokosuka, Hiroshima Peace Center Complex, FCG (Fuji-Sankei Communications) Building, Gran Ecran (Place d'Italie), etc. ¥3,800



9510 Architecture of Response: Recent Works of Cesar Pelli: Introduces recent works by Pelli built around the world, especially in Asia: NTT Shinjuku Headquarters Building, Sea Hawk Hotel & Resort, Kuala Lumpur City Center, etc. **Tower Art in Tsutenkaku:** Introduces an art and architecture exhibition held at the Tsutenkaku Tower in Osaka. ¥1,950



9511 Itsuko Hasegawa: 1985-1995: Introduces 30 works by Hasegawa for 10 years. Works: Museum of Fruit, Yamanashi, Sumida Culture Factory, Ohshima-Machi Picture Book Museum, Footwork Computer Center, House in Kumamoto, Leaf House, Niigata-City Performing Arts Center, etc. Text: Peter Cook, etc. Conversation: Koji Taki and Itsuko Hasegawa ¥3,000



9512 SD Review 1995: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants: Toru Yoshida and Miki Okamoto, Ti-Nan Chi, Tom Heneghan and The Architecture Factory **Villa Romana:** introduce the villa and the gardens in Rome. **Transportation Design by Elji Mito'oka:** Design of express train and ship ¥1,950



9601 The Architects' Record in the Pursuit of Urban Design: Introduces government's urban projects which are coordinated by architects in Japan: Kumamoto Artpolis by Arata Isozaki, Creative Town Okayama by Shin'ichi Ogawa, Nagasaki Urban Renaissance and Shiroishi Media Polis by Hideto Horiike. Text: Riichi Miyake, Naoyuki Kuniyoshi, etc. ¥2,800



9602 Italian Rationalism: The contemporary meaning of Italian Rationalism. Introduce six Italian architects: Franco Stella, Uberto Siola, Antonio Monestiroli, Arduino Cantafora, Marino Narpozzi, Nicola Di Battista. Works: House in Thiene, Hotel in Via S.Allende, Design for Spreeinsel, Polyptych of Ravenna, The New Cemetery in Fiesco D'Artico, etc.. ¥1,950



9603 Contemporary Asia Series 2: A Panorama of Architecture in Vietnam: Architecture and Vietnamese City: Hanoi, Hue, Hoi An, The Champa Ruins in South-Central Vietnam, Ho Chi Minh. Themes: Dwellings of Vietnam's Minority Peoples, Vietnam's Industrial Parks, Contemporary Architecture Today. Text: Y.Shigeeada, S.Nakazawa, S.Muramatsu, etc.. ¥2,500



9604 Transformation of Ground and Light: Australian Architecture 1788-: Shows how Australian architecture has changed since the arrival of first settlers in 1788. Texts and photos: Tokyo Metropolitan University, Kobayashi Lab. **Next Generation in New York: Smith-Miller + Howkinson and Joel Sanders:** Latest works by New York architects. ¥1,950



9605 Architecture of Diversity and Harmony: Recent Works of von Gerkan, Marg and Partner: They are known for the winning of competition many times. Introducing their '90's works including competition designs. Texts: Masahiko Yamashita, Klaus-Dieter Weiss **The Sea and Architecture: Suzuki Ryoji's Latest Work:** Sagishima Project 'Ring', House in Sagishima. ¥1,950



9606 111Chairs Designed by Architects: Reinroducing 111 chairs designed by overseas architects from 19 century to now. Architects: Adolf Loos, Charles Rennie Mackintosh, Antonio Gaudi, Otto Wagner, Eliel Saarinen, Walter Gropius, El Lissitzky, Erik Gunnar Asplund, Le Corbusier, Mies van Der Rohe, Bruno Taut, Charles Eames, Carlo Scarpa, Aldo Rossi, etc. ¥3,000



9607 The Architecture of Kameki Tsuchiura: A Reappreciation: Reinroduce Kameki Tsuchiura's works before and after world war II. Works: Tsuchiura House I and II, Tokuda Building, Hosaka Clinic, etc. **Multi-unit Housing by the Kenchiku Design Studio:** Introduce the idea of housing which Kenchiku Design Studio have kept showing new FH HOYA-II project. ¥1,950



9508 Michael Hopkins and Partners: Introduce the important works by M. Hopkins and Partners. Hopkins House, The Inland Revenue Centre, Bracken House, Schlumberger Cambridge Research Centre, David Mellor Offices and Showroom, New Parliamentary Building, etc. **Visiting Dreams of Light and Space: Donald Judd's and Walter De Maria:** Text: Fumio Nanjo ¥2,400



9609 The Heyday of the Modern House in Denmark: Introduces Danish modern houses of the '50s and '60s: Summer Residence of Niels Bohr, Vilhelm Wohlert; Soholm I, Arne Jacobsen; Kingo Houses, Jorn Utzon; etc. text: L.B.Jorgensen, Riichi Miyake, etc. **Yemen: Mountaintop Villages and Tower Houses:** Photo+Text: Ashikawa Research Institute ¥1,950



9610 Light and Space in the Middle Ages: Romanesque Architecture of Central and Southern France: Introduces Romanesque church and monastery. Abbaye du Thoronet, Abbaye St-Martin de Canigou, etc. Photo: Koji Horiuchi, text: Shuji Hanyu, etc. **Studies of Two Cities:** text: Yoichi Iijima, Minoru Tanokura **Ninety-seven Chairs:** text and photo: The Poor Boys Enterprise ¥1,950



9611 Akira Kuryu: Introduces the works crystalizing the fine collaboration supported by his outstanding direction. Okazaki Art and Historical Museum, Core Yamakuni, Patrie+Kiyosato Museum of Photographic Art, Uemura Naomi Memorial Museum, Carnival Showcase, etc. text: Yoichi Iijima, etc. **Project pour La Chapelle de St. Vigor de Mieux Par Takubo-3** ¥2,500



9612 SD Review 1996: Publishing the result of SD Review contest with comments from the screening committee. Participants : Justus Pysall and Peter Ruge, Masami Takahashi, Nagisa Kidosaki & Associates. **From the Recent Works of Jun Itami:** Chapel of Stone, Chapel of Wood and Chapel of Earth. ¥1,950



Space Design
Hardcover Edition
and Order Form

Space Design published its first issue in 1965 as a monthly journal for a general readership introducing noteworthy achievements and leading works in the fields of architecture, urban problems, design, and the fine arts. The journal has established a solid reputation over the years in the fields of architecture and design. It enjoys the support of a broad readership in an age when up-to-date information on contemporary design, urban planning, and architecture is in heavy demand. SD endeavors to make its features and articles ever richer in content, focusing attention on the methodological, and aesthetic themes of modern architecture, the city, design, and the arts. The text of SD is mainly in Japanese, but in certain cases English translations or summaries are provided for feature articles.

Send your order for subscriptions to Space Design and/or for back issues or hardcover editions by:

Filling in the order card below and faxing it to:
Space Design: 81-3-5561-2560

Or mail the card to:
Subscriptions Department
Kajima Institute Publishing Co., Ltd.
6-5-13 Akasaka, Minato-ku,
Tokyo 107, Japan
tel: 81-3-5561-2550

An invoice will be sent immediately. Upon receipt of the invoice, you may pay by check or international money order or bank check.

Order Card

Name (in block letters please):

Address:

Fax number (if available):

Occupation:

Please check one of the options below:

☐ Please enter my SUBSCRIPTION to
Space Design,
starting in

	sea mail	air mail
12 issues	¥30,000	¥55,000
24 issues	¥50,000	¥80,000

Price includes postage and bank charges.

☐ Please process my order for the following BACK ISSUES and/or HARDCOVER EDITIONS of SD:

The invoice includes:

1. Price of the publication
2. Bank charges(¥1,500 per order)
3. Postage(determined upon receipt of order)

Alvar Aalto

A special comprehensive collection of celebrated architect Alvar Aalto's major works. Aalto's Design Vocabulary, by Akira Mutoh / Chronological Review of A. Aalto's Life : 1898-1976 / Worldwide Distribution of Alvar Aalto's Works ¥3,090

Tadao Ando 2

His 21 works since 1981 including Church with the Light are classified into five categories and introduced at once here. The 10-meter long drawing of Nakanoshima Project lets the readers feel his vigorous approach to architecture. ¥4,800

Arata Isozaki 2

Introduces whole of Isozaki's major works, 1976-1984, especially his shocking work : Tsukuba Center Building. Ministry of Foreign Affairs of Saudi Arabia, MOCA, Blick of Flats, Berlin, Okanoyama Graphic Art Museum, ¥4,944

Kiyonori Kikutake

Collection of Metabolist Kiyonori Kikutake's works from the early years to 1980 : Architecture of The Third Generation, On the Notion of Replaceability, Phase of Methodological Search, Data, Location of Works ¥3,090

Kisho Kurokawa 2

13 major works for these 10 years, including Hiroshima City Museum of Contemporary Art which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan, and 2 other Museums are introduced. ¥4,300

Seiichi Shirai

Introduces a collection of the gem-like works by Seiichi Shirai, an architect of proud loneliness. Kaisetsu-kan, Noa Building, Sei-Akira-kan, Sasetsuken, Kohakuan, etc. Essays by Arata Isozaki, Ichiro Haryuu, Ikuma Shirai ¥ 3,605

Atelier Zo

Presents the first collection of the works by Atelier Zo who has continuously brought forth fresh works by their original formative ideas. Nago City Hall, Shinsyukan Community Center, etc. Essay by Hiroshi Aramata ¥4,000

Kenzo Tange 3

29 projects are introduced at a stroke so that his footwork in 1980's can be seen. Also, the noticeable new Tokyo City Hall is introduced through many drawings and photographs of new model. Full English text. ¥4,100

Fumihiko Maki 2

Presents the second collection of Maki's works which show his activities in 1980s. Spiral, Keio University Hiyoshi Library, Fujisawa Municipal Gymnasium, Hillside Plaza, Tokyo Metropolitan Gymnasium, etc. ¥4,326

Toyo Ito

9 projects of his semi-permeable architectures such as restaurant NOMAD and Silver Hut and 11 projects of Transformations by Light are introduced. The Shinorama Space by Kishin Shinoyama shows White U. ¥3,900

Shin Takamatsu

All of his major works including Kirin Plaza Osaka which won 1988 The Prize of the Architectural Institute of Japan are introduced. His working field in which he has continuously been creating his sharp works can be observed. ¥3,800

Kunihiro Hayakawa

His original pastel-colored works such as ATRIUM and STEPS give the architectures allegro rhythm and feast one's eyes. His works and projects for 10 years since 1978 show his world. ¥4,300

Kazuhiro Ishii

His Sukiya-village which won 1990 The Prize of the Architectural Institute of Japan and 51 other works introduce his method of composition. ¥4,300

The Expressionist Architecture of Germany

Meaning of the Expressionism which is the mother of the modern architectures and has influence on the contemporary ones is introduced by 12 architects' works. ¥3,300

Wooden Architecture Today 1989

Introduces works of Europe, mainly German, Swiss, and French, as well as of the United States, Australia, and Japan. Works in Japan include those by Shoji Yoh, TAKE-9, Hideaki Katsura and others. ¥3,708

Bruno Taut

Introduces his activities mostly while staying in Japan 1933-36. Features in memory of Taut in 40th year of his death. Architect's Own House Istanbul, Housing on Erich-Weinert Strasse, etc. Taut's Handicraft and Books ¥2,575

Ecole des Beaux-Arts and its Glorious Tradition

Updated: Essays: History and Credo, Thought Backbone/ On the Grand Prix : List of Recipients and their Presentations/ Genealogy of its Ateliers/ Collections : Notre-Dame at Lorette, Opera Theater, Paris, etc. ¥2,575

Details by Maki & Associates

Shows detail at Forum TEPIA, a showcase of high technology using a variety of new materials. The work features studies in surface, point, and line and develops numerous types of detail. ¥6,800

Kim, Swoo Geun

Introduces his 30 projects, mainly in Korea. Masan Cathedral, Korean Overseas Development Corporation Building, Art center of Korean Cultural and Arts Foundation, Seoul Sports Complex, Nam Dae Mun Market Redevelopment Plan, etc. ¥3,090

Architects Own Houses of the World

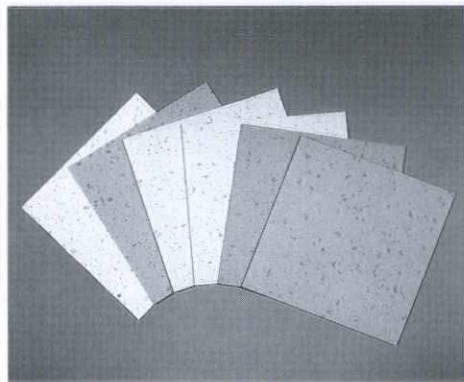
Introduces famous architects' own houses of the World. Architects: Richard Foster, Frank Gehry, Don Hisaka, Wilhelm Holzbauer, Michael Hopkins, Barton Myers, Christopher Owen, Arthur Erickson, Ulrick Franzen, Paul Gray, etc. ¥4,944

●

張床

ビタミンカラー

株式会社タジマ



株式会社タジマから、新しい色の世界の提案として、ビタミンカラーを新発売した。ホモジニアスビニル床タイプの新しい製造技術による新製品である。ビタミンカラーは、デザイナーに世界の一線で活躍されている「牛建 務」氏を起用した同社からの新しい色のメッセージである。商品名には、21世紀へ向かってのトレンドである「健康美」に思いを託した。用途は、デパート、ショッピングセンターなどのコンコース、通路、売り場、その他の商業施設、レジャー施設など、色数：19色、

寸法：3.0mm（厚さ）×457.2mm×457.2mm

価格：4,900円/㎡

●

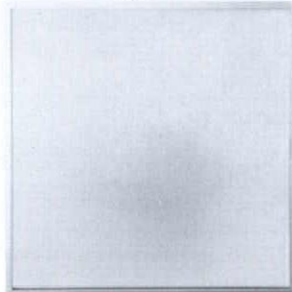
瞬間調光硝子

ウム

日本板硝子株式会社



電源ON



電源OFF

日本板硝子株式会社では、従来の瞬間調光ガラスに比べて、低電圧でかつほとんど電力を消費しない、ニュータイプの瞬間調光ガラス、ウムを新発売した。同製品は、2枚のガラスの間に液晶シートをはさんだ合わせガラスで、電源のON・OFFによって、透明・不透明が瞬時に切り替わる瞬間調光ガラスである。同社では、同製品を10年前から建築市場を中心に販売し、平成6年には液晶フィルムから合わせガラスまでの一貫生産体制により、品質の安定・向上とコストダウンを実現してきた。今般、新しい液晶フィルムの開発により、市場ニーズの高い低電圧タイプの商品化を実現した。ニュータイプのウムの特長としては、従来の交流100Vに比べて交流24Vと低電圧であり、消費電力も1/10以下と極めて少なくて済むため、省電力に加えて安全性が高まることから、建築用途においては可動部や水回りにも広く使用が可能になる。

●

オーニングシェルター

サイクルランドR

新日軽株式会社



新日軽株式会社では、マンションやスーパー・病院など大型施設には欠かせない設備である自転車置場の屋根として、サイクルランドRを新発売した。同製品は、低価格帯・省施工化そして幅広い設置対応力を実現する豊富で便利なオプション設定をコンセプトに開発した。

特長

- ①単体6スパンで199,500円という低価格設定。
- ②手前に柱がないので、自転車の出し入れがスムーズにでき、効率よく、自転車を止めることができる。
- ③2段式駐輪ラックも納まる省スペースタイプ。
- ④サイドパネルを付けても、広々とゆったり利用できる。雨風の侵入を防ぐサイドパネルを2サイズ用意。
- ⑤車輪止めバー取付けで突き当て事故の発生を防止。
- ⑥不燃材仕様のアルミ屋根を用意しているため、防火地域での設置が可能である。
- ⑦人気のある、ゆるやかなアール形状の屋根が自慢のシンプルなデザイン。
- ⑧施工の手間を軽減するだけでなく、仕上がりにも関心。

価格（写真タイプ）

サイクルランドRと2段式駐輪ラックとの組み合わせ例
267,300円

株式会社タジマ

東京都千代田区岩本町3丁目11番13号

〒101 Tel 03-5821-7731

日本板硝子株式会社 マーケティンググループ

東京都港区芝1丁目11番11号

〒105 Tel 03-5443-0127

新日軽株式会社 エクステリア事業本部

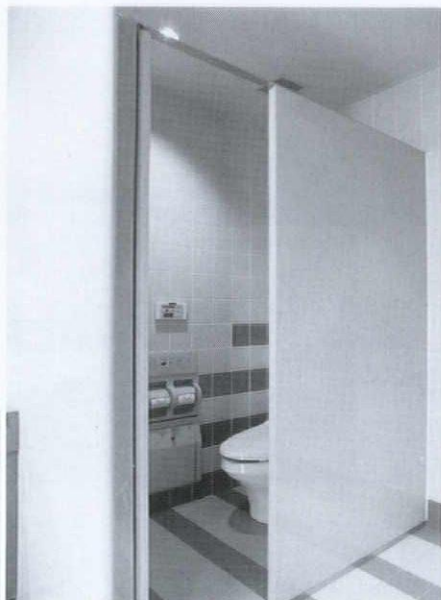
東京都江東区本場2丁目7番23号

〒135 03-3820-2552

トイレブース

マーブライトブース

豊前東陶株式会社



豊前東陶では、人工大理石を表面仕上げとしたトイレブース、マーブライトブースを新発売した。人工大理石のもつ独特の質感と光沢、その豪華さでこれからのトイレ空間を創造する魅力の新素材である。

特長

- ①ペーパーコアフラッシュパネルに厚さ2mmのポリエステル系人工大理石を表面仕上げした複合パネルである。
- ②1㎡当たり約15kgの軽量化を実現し、施工性も良好。
- ③裏面には硬質のゲルコート層を施しているため、キズがつきにくく、耐水性、耐薬品性、耐洗剤性にも優れ、メンテナンスも極めて手軽である。
- ④衛生面の向上を配慮した抗菌仕様である。表面のゲルコート層に抗菌剤粒子（銀系担体セラミック）を混入、粒子が菌の繁殖を抑制し、清潔さを保つ。
- ⑤意匠性を重視しパネルコーナー、エッジ部分は一体仕上げとなっている。また、パネルサイズは最大2.0m×2.7mまで1枚もので成型できるため、奥行きのある場合でもパネルを継ぎ合わせることなくすっきりした美しいブースが仕上がる。
- ⑥カラーバリエーションは、石目調のグラニットシリーズ、単色のプレーンシリーズともに全7色。

豊前東陶株式会社
福岡県豊前市大字八屋322番43号
〒828 Tel 0979-82-3111

換気空清機

クリーンロスナイ

三菱電機株式会社



三菱電機では、新鮮外気導入により室内空気汚染を抑制しつつ省エネ換気を実現する換気空清機、ロスナイの給気用フィルター高性能タイプを開発して、外気清浄能力を大幅に向上させた新製品3機種（6彩名）を新発売した。同製品は、新開発のNO₂（二酸化窒素）除去効率約50%の「NO_x吸収フィルター」と、花粉・ホコリなどをほぼ100%取り除く「高性能除塵フィルター」を給気側に二重に設けて外気中の有害なガス成分や粒子を除去し、新鮮な外気による室内空気清浄化を図った省エネ性に優れた熱交換形換気扇である。これにより、冷暖房効果を損なうことなく自然のもつ空気清浄能力を活用した、居室換気の快適さを広く提案し、目に見えず体感しにくい空気状態の改善により居室換気意識の向上に貢献している。

三菱電機株式会社 広報部
東京都千代田区丸の内2丁目2番3号
〒100 Tel 03-3218-2359

タイルカーペット

パネルカーペット

東リ株式会社



東リでは、住宅用タイルカーペット2品種を新発売した。これは、現在の住宅用のカーペットの特長とオフィス用のタイルカーペットの特長をあわせもち、一般の方でも敷き込み（施工）が可能であり、各々の家庭の状況に応じた様々な使い方が考えられる。並べて、はずせて、洗えるカーペット。総称は、パネルカーペット。品名は、アタック1000とアタック2000である。

特長

- ①防炎性・制電性に優れる。
- ②ダニの増殖を防ぐ、防ダニ加工を施している。
- ③優れた床衝撃音遮断性により、音問題の軽減・解消が図れる。
- ④手洗いおよびドライマーク衣料が洗えるコース付の洗濯機（容量6kg以上）で洗濯が可能である。
- ⑤フェルトグリップ工法の場合のロールカーペットと同程度の衝撃吸収性を実現。
- ⑥デザイン貼りにより、好みのフロア表現が可能。
- ⑦コンパクト収納により、夏はフローリング、冬はカーペットの使い分けが可能である。
- ⑧高層マンションへの搬入も容易である。
- ⑨全面接着工法およびAKシールによる接着工法。

東リ株式会社 営業企画部
兵庫県伊丹市東有岡5番125号
〒664 Tel 06-494-6605

窓の表情、もっと豊かに。 タチカワブラインド。



風や光を自在にとりいれ、快適さを運ぶのは、窓。住んでいる人の個性を輝かせるのも、窓。タチカワブラインドは、窓辺を生活の主役にする多彩なインテリア・エクステリア製品を提案しています。

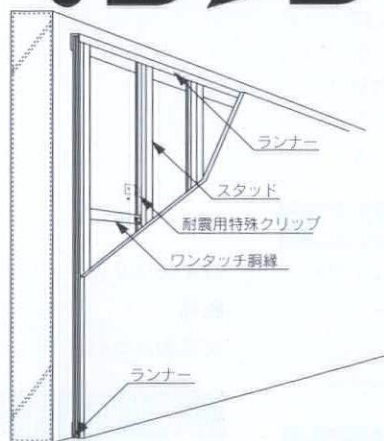
●各種ブラインド ●ファブリック製品 ●可動式間仕切り ●ブラインドサッシ ●ブラインドシャッター ●カーテンレール ●パーキング

日立川ブラインド工業株式会社

本社：〒105 東京都港区海岸1-11-1 ニューピア竹芝ノースタワー……………TEL.03-5404-4500(大代表)
タチカワ銀座ショールーム 〒104 東京都中央区銀座8-8-15……………TEL.03-3571-1373
タチカワ新宿ショールーム 〒163-10 東京都新宿区西新宿3-7-1 新宿パークタワー6F……………TEL.03-5322-6546

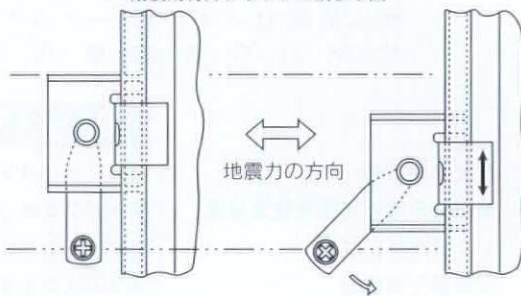
タチカワ大阪ショールーム 〒530 大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー2F……………TEL.06-881-1781
タチカワ新潟ショールーム 〒951 新潟市下大川筋通ニノ町2230-33……………TEL.025-223-5120
タチカワ金沢ショールーム 〒921 金沢市東力4-181……………TEL.0762-91-7880

地震に強い!! 層間変位1/60に対応 マンテン® ジシンサク30 地震策 PAT.P 耐震用鋼製仕上材



耐震用特殊クリップを採用

耐震用特殊クリップの納まり図



通常の状態

地震力が加わった状態

耐震用特殊クリップはスタッドを(レール代わりにして)上下運動する

避難通路(階段室、エレベーターホール、廊下)には耐震壁が必要です。

【特長】

1. 壁厚の仕上り寸法が小さいので(30mm)、室内空間を有効に活用できます。
2. 外壁からの振動に左右されない「耐震用特殊クリップ」採用により、地震の振動による内壁面の損傷を防ぎます。
3. 壁の高さは3,500mmまで可能です。

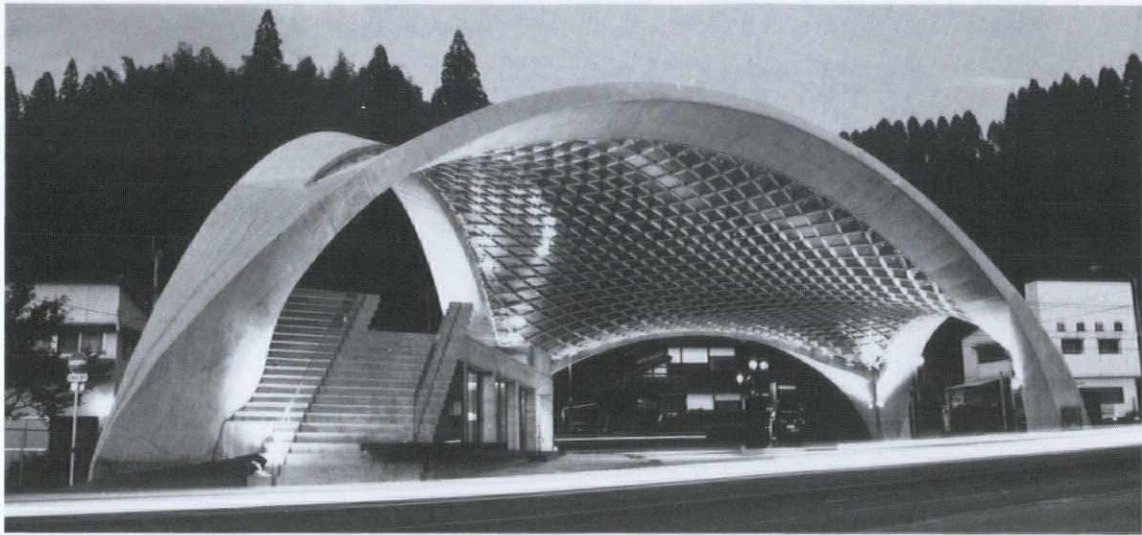
®
考

誠意・熱意・創意で生きる

株式会社 マンテン®

本社 〒556 大阪市浪速区日本橋東1-10-6 TEL(06) 644-2151
東京支店 〒136 東京都江東区亀戸2-3-17 TEL(03) 3683-6151
札幌 TEL(011) 783-8661 横浜 TEL(045) 451-6245
名古屋 TEL(052) 661-9511 高岡 TEL(0766) 24-5506
福岡 TEL(092) 611-2180 台湾 TEL(001886) 2-719-9526

小国町 “光と風の門”



ΓΛΑΣΣ ΣΤΑΤΙΟΝ

GLASS STATION HARADA KOHSAN-CO'LTD

Gギャラリーにて
葉 祥栄作品展開催中

株式会社 原田興産 ☎ 0967 (46) 4088

熊本県阿蘇郡小国町大字宮原2312の2

原田コンクリート ☎ 0967 (46) 2488

N 日章工業株式会社

- 本 社 〒101 東京都千代田区内神田 3-11-7 (日立神田別館) ☎ 03-3254-3000
- 大 阪 支 店 〒541 大阪市中央区高麗橋 2-4-6 (大正不動産ビル 6 階) ☎ 06-201-5704
- 仙台営業所 〒980 仙台市青葉区中央 3-2-27 (日産生命ビル) ☎ 0222-21-6989

日立製作所エレベーター・機電特約店
日立製作所OAシステム特約店
日立金属フリーアクセス、ハイベース特約店
旭化成建材パイル・ヘーベル代理店
大和ハウス工業代理店

施 設 商 品

エレベーター・エスカレーター
立体駐車場設備(新明和工業)
バスユニット(日立化成工業)
住宅機器類
集中浄化槽
受水槽
ソーラー
受変電設備

自家発電設備
無停電定電圧定周波電源装置
ビル監視制御装置
冷暖房空調設備
通信設備
ターボ冷凍機・吸収式冷凍機
各種ポンプ設備・換気設備

OAシステム機器

パーソナルコンピューター
ワードプロセッサー
ファクシミリ
オフィスコンピューター

建 材 商 品

AHSパイル
ヘーベル
フリーアクセスフロア

ハイスプリット・ハイベース
鉄骨
大昭和ユニボード

建 設 商 品

クロラクレーン
ショベル
軽量鉄骨プレハブ規格建築物
軽量鉄骨系プレハブ住宅

夢の数だけ

感動がある

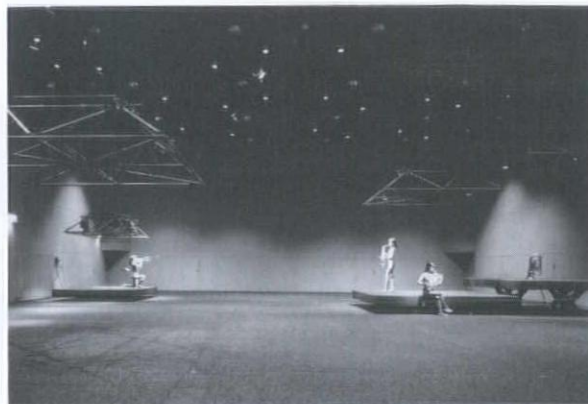
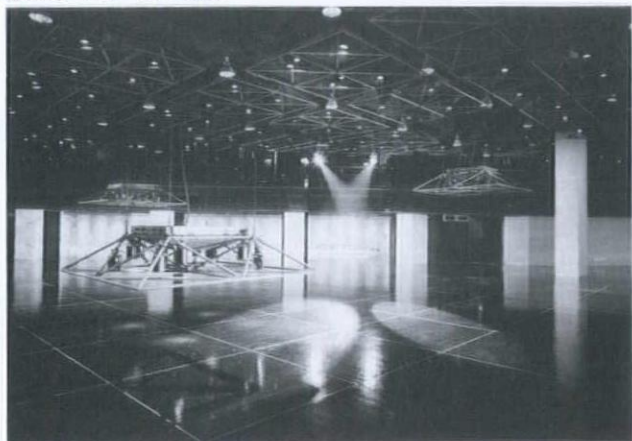
開演のベルが鳴るまでにも、多くのドラマがあります。

数々の空間プロデュースを手掛けた

サンケン・エンジニアリング。

これからも、人々により優れた文化・芸術を通しての感動をお届けするため、さまざまな空間演出にチャレンジいたします。

■ラフォーレミュージアム赤坂



舞台設備 設計・製作・施工

- ◆舞台機構設備
- ◆残響可変装置
- ◆可動天井・床昇降設備
- ◆劇場用映写設備
- ◆ホール音響設備
- ◆舞台照明設備
- ◆A・Vシステム

株式会社 **サンケン・エンジニアリング**

東京本店：東京都千代田区岩本町3丁目8番16号

TEL: 03-3865-2910 FAX: 03-3865-3521

本社：福岡市南区大楠2丁目13番7号

TEL: 092-522-6811 FAX: 092-531-5645

事業所／大阪・名古屋・仙台・札幌・沖縄

夢×技=無限大

YUME  TRONICS

安らぎと喜びがある。
生み出すための第一歩は
夢からもらった。
形を築くための第一歩は
技からもらった。
ふたつの可能性が出会う時
私たちのフィールドは
無限大です。

何時もあなたの街で
お会いしている
クリアハラ。
私達の生活環境に必要な
電気設備・エネルギー
情報通信・環境の分野で
企画、設計、施工、保守に
わたる一貫したシステムで
事業を展開しています。



創業1919 あなたの街でお会いしています

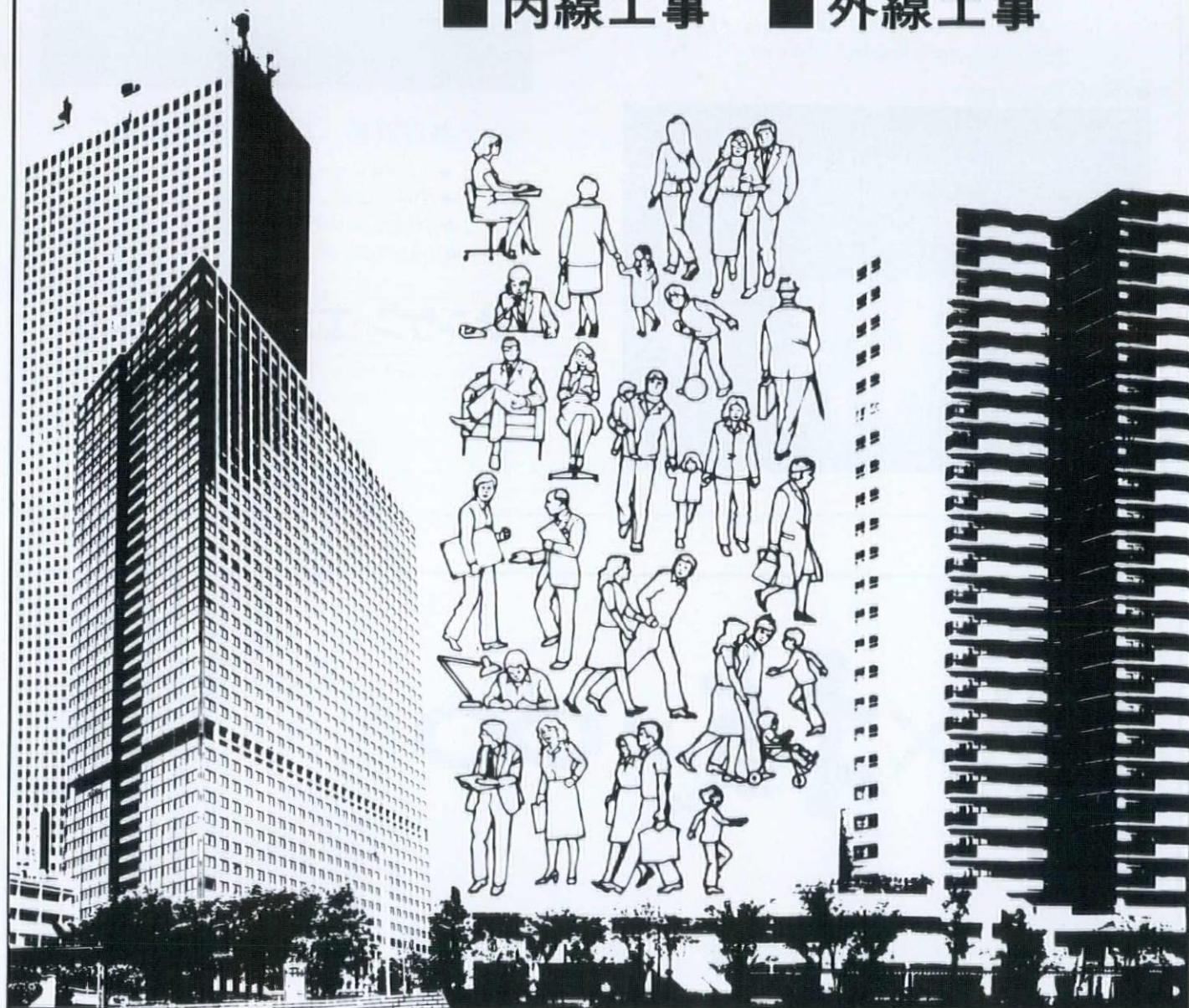
K 栗原工業株式会社

本社／〒530 大阪市北区角田町1-1 (東阪急ビル) TEL.06(313)1101

東京本店／〒105 東京都港区芝大門1-4-8 (浜松町清和ビル) TEL.03(3432)1901

技術と伝統の…

■ 内線工事 ■ 外線工事



 **東光電気工事株式会社**

取締役社長 江 原 景

東京都千代田区西神田 1 - 4 - 5 〒101 電話／東京 3292-2111

支社所在地／札幌・仙台・大宮・千葉・丸の内(東京)・新宿(東京)・横浜・名古屋・大阪・福岡

広告目次

SD誌に広告をお申込みの際は下記広告代理店にご
用命下さい(五十音順)

●共栄通信社

東京——東京都中央区銀座8-2-1
新田ビル (3572) 3381
FAX (3572) 3590
大阪——大阪市北区西天満3-6-8
笹屋ビル06 (362) 6515
FAX06 (365) 6052

●建報社

東京——東京都文京区湯島2-30-8
(3818) 1961
FAX03(3818)1968
大阪——大阪市中央区淡路町1-4-9
昭栄ビル06 (231) 4548
FAX06 (227) 0268

●新建社

東京都中央区八丁堀2-1-10
ハヤシビル (3552) 8247代
FAX (3552) 8249

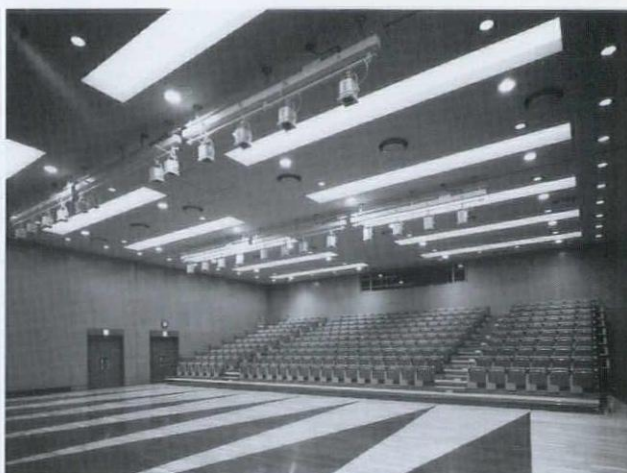
●中外

大阪——大阪市北区浪花町14-25
日本生命天六ビル06 (379) 1791
東京——東京都千代田区神田須田町2-5-2
須田町佐志田ビル (3255) 8411
名古屋——名古屋市中区錦2-2-13
名古屋センター052 (221) 7641代

ア	旭硝子株	200
エ	(株)エアーズ	A11
カ	(株)関電工	A1
	鹿島	A4・A5
	軽井沢ホテル鹿島ノ森	A6
キ	(株)きんでん	A12
ク	栗原工業株	A17
コ	小泉産業株	173
サ	三機工業株	186
	三建設備工業株	199
	(株)サンケンエンジニアリング	A17
シ	新日軽株	表4
	新菱冷熱工業株	197
タ	大興物産株	A8
	大栄電気株	A10
	タイタン株	A11
	(株)ダイクレ	176
	立川ブラインド工業株	A15
ト	トステム株	表3
	東洋熱工業株	198
	東光電気工事株	A18
ナ	中立電気株	A9
ニ	日新工業株	A3
	日本板硝子株	A10
	日章工業株	A16
ハ	(株)原田興産株	A16
ヒ	(株)日立製作所	表2
フ	(株)藤島ガラスハウス	A11
ホ	ホテルイースト21東京	A7
マ	松下電器産業株	A2
	(株)マンテン	A15
ミ	美和ロック株	190・191
ヤ	山田照明株	A20
ロ	ロンシール工業株	180

表情多彩

照明は空間づくりの重要なポイント。
人々に、常に気持ちよく空間を利用してもらいたい……。
山田照明ではさまざまな条件やニーズを満たすために、
多種多様な照明器具を用意。ベストなあかりで、
ひとつひとつの空間を、個性的・機能的に演出し、
表情多彩な空間創造を力強くバックアップしています。



みやぎ産業交流センター (宮城)



山田照明株式会社

本 社 / ショールーム 〒101 東京都千代田区外神田 3-16-12	TEL 03-3253-5161	横浜支社 / ショールーム 〒220 横浜市西区南幸 2-20-1	TEL 045-311-1731
仙台支社 / ショールーム 〒980 仙台市青葉区二日町 11-11 (ANDOビル)	TEL 022-267-1630	大阪支社 / ショールーム 〒542 大阪市中央区日本橋 1-21-23	TEL 06-643-3421
福岡支社 〒810 福岡市博多区店屋町 8-30	TEL 092-282-7635	名古屋支社 〒460 名古屋市中区 5-16-14	TEL 052-252-5161
北関東営業所 〒370 高崎市上中居町 51-1	TEL 0273-26-4111	静岡営業所 〒420 静岡市西草薙 23-9	TEL 054-247-0811
鹿児島営業所 〒890 鹿児島市上之園町 4-14	TEL 0992-58-0031	宇都宮出張所 〒1802 宇都宮市海道町 818-2-1002	TEL 0286-60-1381
		札幌営業所 〒003 札幌市白石区菊水七条 2-61	TEL 011-811-2215
		広島営業所 〒730 広島市中区十日市町 2-2-34	TEL 082-293-6119
		長野出張所 〒380 長野市三輪 2-9-27	TEL 0262-43-8420